高知県香美郡

深渕遺跡発掘調査報告書

(FUKABUCHI)

(野市町埋蔵文化財調査報告書第１集)

野市町教育委員会　１９８９

深渕遺跡発掘調査報告書

(FUKABUCHI)

(野市町埋蔵文化財
調査報告書第1集)

E区　ST3

F区　壺棺1

鉈尾

二彩陶器及び緑釉陶器

序

野市町深渕地区は，高知市から東へ16キロメートルの高知県三大河川の一つ物部川の左岸に位置し，温暖な気候と水利に恵まれ早くから加温園芸の盛んな土地です。この地区は，農業の近代化，合理化を目的として昭和62年度，63年度に深渕地区再編農業構造改善事業が実施されることになり，埋蔵文化財への影響を受ける深渕遺跡の範囲について第一次（昭和62年度）・第二次（昭和63年度）に分けて緊急発掘調査を行ないました。

発掘調査の結果，縄文時代晩期から中・近世にかけての複合遺跡であることが明らかになりました。なかでも弥生時代～平安時代の集落跡や可能性としての瓦窯跡の発見，帯金具や二彩陶器等の貴重な遺物の発見がなされ，野市町はもちろん土佐の古代史解明のうえでも貴重な発見であり，極めて意義あるものと確信致します。

この報告書は，昭和62年度，63年度に実施した発掘調査の成果をまとめたものです。今後広く一般に活用され，文化財保護及び学術研究等に大いに役立てられるものと期待しております。

今回の調査にあたって御指導を載きました高知県教育委員会なかんづく高橋啓明，出原恵三，吉原達生の各先生方並びに調査に御協力を頂いた地権者，地元関係者の皆様方に心から感謝とお礼を申し上げる次第です。

平成元年3月

野市町教育長　村山　正夫

例　　言

1．本書は，野市町小規模排水対策特別事業及び深渕地区再編農業構造改善事業にかかわる深渕遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡は，高知県香美郡野市町深渕に所在する。

3．調査対象面積は，第１次調査が25,500㎡，第２次調査が840㎡，合計26,340㎡である。調査面積は，第１次調査が1,000㎡，第２次調査が460㎡，合計1,460㎡である。

4．調査は，野市町教育委員会の依頼により，高知県教育委員会が行った。

調査顧問　岡本　健児　（高知県文化財保護審議会会長）

第１次調査

調査員　高橋　啓明　（高知県教育委員会・文化振興課社会教育主事）

〃　出原　恵三　（高知県教育委員会・文化振興課主事）

〃　吉原　達生　（高知県教育委員会・文化振興課主事）

第２次調査

調査員　高橋　啓明　（高知県教育委員会・文化振興課社会教育主事）

〃　吉原　達生　（高知県教育委員会・文化振興課主事）

事務担当　田中　彰裕　（野市町教育委員会・社会教育課主事）

5．本書の執筆は，第Ⅰ・Ⅵ章を吉原，第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ章を高橋，第Ⅶ章を出原，第Ⅷについては，３．(2)~(3)を吉原，他を高橋，第Ⅸ章は，高橋，出原，吉原が分担した。

6．遺構については，ＳＴ（竪穴住居），ＳＢ（掘立柱建物），ＳＫ（土坑），ＳＤ（溝），ＳＡ（柵列・塀），ＳＸ（性格不明），Ｐ（柱穴）で標示した。

7．検出遺構全体図については，Ｄ区はトレンチが長いため1/200に，他は1/100の縮尺とした。

8．執筆にあたっては，二彩陶器及び緑釉陶器の鑑定は京都市埋蔵文化財研究所平尾政幸氏，瓦窯については東京大学遺跡調査室助教授寺島孝一氏，鉈尾については大分県歴史資料館佐藤興治氏に御教示を得た。記して深く謝意を表したい。

9．調査にあたっては，地元土地改良区，野市町産業振興課等の全面的な協力を得た。また，測量では小松幹典氏の協力を得た。記して深く謝意を表したい。

10．遺物は野市町教育委員会で保管している。

本 文 目 次

第Ⅰ章　発掘調査に至る経過 …… 1
第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　調査区の概要と調査の方法 …… 8
　1．調査区の概要 …… 8
　2．調査の方法 …… 8
第Ⅳ章　A・B区の調査 …… 13
　1．基本層序 …… 13
　2．遺　　構 …… 13
　3．遺　　物 …… 13
第Ⅴ章　C－a区の調査 …… 14
　1．基本層序 …… 14
　2．包含層出土の遺物 …… 14
　3．遺　　構 …… 15
　　(1) 弥生時代 …… 15
　　(2) 古墳時代 …… 16
　　(3) 奈良時代末～平安時代 …… 18
　4．遺　　物 …… 19
　　(1) 弥生時代 …… 19
　　(2) 古墳時代 …… 20
　　(3) 奈良時代末～平安時代 …… 22
第Ⅵ章　C－b，C－c区の調査 …… 39
　1．基本層序 …… 39
　2．包含層出土の遺物 …… 39
　3．遺　　構 …… 41
　　(1) 古墳時代 …… 41
　　(2) 奈良時代末～平安時代 …… 42
　4．遺　　物 …… 43
　　(1) 古墳時代 …… 43
　　(2) 奈良時代末～平安時代 …… 44
第Ⅶ章　D区の調査 …… 58
　1．基本層序 …… 58
　2．包含層出土の遺物 …… 58

3．遺　　構 …… 58
(1) 弥生時代 …… 58
(2) 古代～中世 …… 61
4．遺　　物 …… 63
(1) 弥生時代 …… 63
(2) 古代～中世 …… 64
第Ⅲ章　E・F区の調査 …… 74
1．基本層序 …… 74
2．包含層出土の遺物 …… 74
3．遺　　構 …… 80
(1) 弥生時代 …… 80
(2) 古墳時代 …… 81
(3) 奈良時代～中世 …… 84
4．遺　　物 …… 86
(1) 弥生時代 …… 86
(2) 古墳時代 …… 89
(3) 奈良時代～中世 …… 90
第Ⅸ章　総　　括 …… 116
第1節　弥生時代 …… 116
1．遺　　物 …… 116
(1) ＳＴ３出土の土器 …… 116
(2) ＳＫ５・７・８，ＳＤ３・４出土の土器 …… 117
2．遺　　構 …… 119
第2節　古墳時代 …… 120
1．遺　　物 …… 120
2．遺　　構 …… 120
第3節　奈良時代～平安時代 …… 122
1．遺　　物 …… 122
2．遺　　構 …… 122
3．ま　と　め …… 123

図 版 目 次

Fig 1　周辺の遺跡分布図 …… 2
Fig 2　発掘調査Ａ～Ｆ区位置図 …… 5
Fig 3　発掘調査Ｃ～Ｆ区位置図 …… 6
Fig 4　トレンチセクション位置図 …… 7
Fig 5　Ｂ～Ｃ区基本層序 …… 9～10
Fig 6　Ｄ～Ｆ区基本層序 …… 11～12
Fig 7　Ｂ区ＳＤ１出土遺物実測図 …… 13
Fig 8　Ｃ－ａ区検出遺構全体図 …… 23～24
Fig 9　Ｃ－ａ区ＳＴ６炭化物，焼土検出状態実測図 …… 25
Fig 10　Ｃ－ａ区ＳＴ６実測図 …… 26
Fig 11　Ｃ－ａ区ＳＴ５実測図 …… 27
Fig 12　Ｃ－ａ区ＳＢ３～４実測図 …… 28
Fig 13　Ｂ区ＳＤ１，Ｃ－ａ区ＳＢ１，ＳＸ１，ＳＤ１～４実測図 …… 29
Fig 14　Ｃ－ａ区ＳＫ１～５，ＳＫ７～８実測図 …… 30
Fig 15　Ｃ－ａ区包含層出土遺物実測図 …… 31
Fig 16　Ｃ－ａ区ＳＴ６出土遺物実測図 …… 32
Fig 17　Ｃ－ａ区ＳＫ５・７～８出土遺物実測図 …… 33
Fig 18　Ｃ－ａ区ＳＴ５出土遺物実測図 …… 34
Fig 19　Ｃ－ａ区ＳＴ５，ＳＫ２～４出土遺物実測図 …… 35
Fig 20　Ｃ－ａ区ＳＢ１，Ｐ18，Ｐ19，ＳＸ１，ＳＤ１・３出土遺物実測図 …… 36
Fig 21　Ｃ－ｂ，Ｃ－ｃ区検出遺構全体図 …… 37～38
Fig 22　Ｃ－ｂ区ＳＢ２実測図 …… 45
Fig 23　Ｃ－ｂ，Ｃ－ｃ区ＳＡ１，ＳＫ６，ＳＤ６，ＳＤ６～ＳＤ９実測図 …… 46
Fig 24　Ｃ－ｂ，Ｃ－ｃ区包含層出土軒平瓦実測図 …… 47
Fig 25　Ｃ－ｂ，Ｃ－ｃ区包含層出土平瓦(1)実測図 …… 48
Fig 26　Ｃ－ｂ，Ｃ－ｃ区包含層出土平瓦(2)実測図 …… 49
Fig 27　Ｃ－ｂ区包含層出土平瓦(3)実測図 …… 50
Fig 28　Ｃ－ｂ区包含層出土平瓦(4)実測図 …… 51
Fig 29　Ｃ－ｃ区包含層出土丸瓦(1)実測図 …… 52
Fig 30　Ｃ－ｂ区包含層出土丸瓦(2)実測図 …… 53
Fig 31　Ｃ－ｂ区包含層出土丸瓦(3)ヘラ記号入り瓦実測図 …… 54
Fig 32　Ｃ－ｂ，Ｃ－ｃ区包含層出土遺物実測図 …… 55

Fig 33　C－b区ＳＢ２，ＳＫ６，ＳＡ１，Ｐ37，Ｐ40，ＳＤ７ …… 56
Fig 34　Ｄ区検出遺構全体図 …… 59～60
Fig 35　Ｄ区ＳＢ１実測図 …… 66
Fig 36　Ｄ区ＳＫ１～８，ＳＤ１実測図 …… 67
Fig 37　Ｄ区　ＳＫ９～12実測図 …… 68
Fig 38　Ｄ区ＳＫ13・14，ＳＤ２～４実測図 …… 69
Fig 39　Ｄ区包含層及び遺構出土遺物実測図 …… 70
Fig 40　Ｄ区ＳＤ３・４出土遺物実測図 …… 71
Fig 41　Ｄ区ＳＤ３・４出土遺物実測図 …… 72
Fig 42　Ｄ区ＳＤ３・４出土遺物実測図 …… 73
Fig 43　Ｅ区上層検出遺構全体図 …… 75～76
Fig 44　Ｆ区検出遺構全体図 …… 75～76
Fig 45　Ｅ区下層検出遺構全体図 …… 77～78
Fig 46　Ｅ区ＳＴ３炭化物焼土検出状態実測図 …… 92
Fig 47　Ｅ区ＳＴ３遺物出土位置図（縮尺不定） …… 93～94
Fig 48　Ｅ区ＳＴ３実測図 …… 95
Fig 49　Ｆ区壺棺１～２実測図 …… 96
Fig 50　Ｆ区ＳＴ１実測図 …… 97
Fig 51　Ｆ区ＳＴ２実測図 …… 98
Fig 52　Ｅ区ＳＴ４実測図 …… 99
Fig 53　Ｅ区ＳＢ１実測図 …… 100
Fig 54　Ｅ区ＳＢ２実測図 …… 101
Fig 55　Ｅ区ＳＢ３実測図 …… 102
Fig 56　Ｅ区ＳＢ４実測図 …… 103
Fig 57　Ｅ・Ｆ区ＳＡ１～５実測図 …… 104
Fig 58　Ｅ・Ｆ区ＳＫ１～７実測図 …… 105
Fig 59　Ｅ・Ｆ区ＳＤ１～４実測図 …… 106
Fig 60　Ｅ区ＳＸ１～３実測図 …… 107
Fig 61　Ｅ・Ｆ区包含層出土遺物実測図 …… 108
Fig 62　Ｅ区包含層出土遺物実測図 …… 109
Fig 63　Ｅ区包含層出土遺物実測図 …… 110
Fig 64　Ｅ区ＳＴ３出土遺物実測図 …… 111
Fig 65　Ｅ区ＳＴ３出土遺物実測図 …… 112
Fig 66　Ｆ区壺棺１・２，ＳＴ１出土遺物実測図 …… 113

Fig 67　F区ＳＴ２，Ｅ区ＳＴ４出土遺物実測図 …… 114
Fig 68　Ｅ・Ｆ区ＳＢ１・２・４，ＳＡ４，Ｐ231，Ｐ73，ＳＫ４～６，ＳＸ１，ＳＤ３出土遺物実測図 …… 115

表　目　次

表１　周辺の遺跡分布表 …… 1
表２　Ｃ－ｂ区・Ｃ－ｃ区出土軒平瓦観察表 …… 55
表３　Ｃ－ｂ区・Ｃ－ｃ区・Ｅ区出土平瓦，丸瓦観察表 …… 57
表４　Ｃ－ｂ区・Ｃ－ｃ区出土軒丸瓦観察表 …… 58

写 真 目 次

PL 1　調査前全景 …… 129
PL 2　C－a，C－b区セクション …… 130
PL 3　C－a区遺構検出状態，C－c区完掘状態 …… 131
PL 4　C－a区ST 6炭化物出土状態，ST 6完掘状態 …… 132
PL 5　C－a区ST 6遺構出土状態 …… 133
PL 6　C－a区ST 5遺物出土状態，ST 5完掘状態 …… 134
PL 7　C－a区SK 5完掘状態，C－b区SB 2完掘状態 …… 135
PL 8　C－a区SK 4，完掘状態及びセクション …… 136
PL 9　C－b区完掘状態 …… 137
PL10　C－b区瓦出土状態 …… 138
PL11　C－b区SD 7完掘状態 …… 139
PL12　D区拡張区完掘状態，D区SB 1－P 5セクション …… 140
PL13　D区SK12礫検出状態，D区SK 9礫検出状態 …… 141
PL14　D区SK 9・10・12検出状態 …… 142
PL15　D区SD 3・4検出状態，D区SD 4土器出土状態 …… 143
PL16　E区ST 3炭化物，遺物出土状態及び完掘状態 …… 144
PL17　E区ST 3中央ピット（左）及びST 3－SK 1完掘状態ST 3－SK 1セクション …… 145
PL18　E区ST 3遺物出土状態 …… 146
PL19　E区ST 3遺物出土状態 …… 147
PL20　F－1区完掘状態及びST 1完掘状態 …… 148
　　F－2区完掘状態及びSK 6完掘状態 …… 148
PL21　F区ST 2完掘状態及びカマド完掘状態 …… 149
PL22　E区拡張区ST 4完掘状態及びカマド完掘状態 …… 150
PL23　E区完掘状態 …… 151
PL24　包含層及びC－a区SK 4，C－b拡張区SK 6，E拡張区ST 4，F区SK 6遺物出土状態 …… 152
PL25　弥生土器 …… 153
PL26　弥生土器 …… 154
PL27　弥生土器 …… 155
PL28　弥生土器 …… 156
PL29　弥生土器 …… 157

PL30　弥生土器 …… 158
PL31　壺棺・弥生土器 …… 159
PL32　弥生土器 …… 160
PL33　弥生土器・土師器 …… 161
PL34　弥生土器・土師器・須恵器 …… 162
PL35　弥生土器・手捏土器・羽口・須恵器 …… 163
PL36　弥生土器・土師器・青磁 …… 164
PL37　土師器・須恵器 …… 165
PL38　土師器・須恵器 …… 166
PL39　須恵器 …… 167
PL40　弥生土器・羽口・石製紡錘車・鉈尾・墨書土器・刻書土器 …… 168
PL41　須恵器・瓦質土器・青磁・土錘 …… 169
PL42　鉄器・窯壁片 …… 170
PL43　瓦質土器・円面硯及び風字硯 …… 171
PL44　二彩陶器及び緑釉陶器 …… 172
PL45　軒平瓦 …… 173
PL46　軒平瓦・ヘラ記号入り瓦・平瓦 …… 174
PL47　平瓦及び丸瓦 …… 175
PL48　平瓦及び丸瓦 …… 176

第Ⅰ章　発掘調査に至る経過

野市町小規模排水対策特別事業及び深渕地区再編農業改善事業は，農地の区画整理と道水路の系統的整備によって農地の集団化と効率利用を図り，農業生産力の増大と経営の合理化に寄与することを目的として計画された。すなわち同地区は，耕作道及び排水路を有しない水田が多く，この旧態依然の農業経営から脱却し，近代的農業へと転換させようとするものである。

一方，当事業対象地区内には，原始時代以来，今日の野市町を築き上げた祖先の営みの足跡ともいうべき埋蔵文化財が確認されており，特に深渕地区においては，弥生時代から中・近世までの遺物の散布が見られるところである。当事業が施行せられれば，現状は大きく変更され，地下の埋蔵文化財も極めて甚大な影響を受けることは必定である。かかる意味において，以下の如き試掘調査を実施することになった。

遺跡の性格，範囲，遺物，遺構の深度や残存の状況を把握する目的で，昭和62年７月20日から８月28日まで試掘調査を実施した。調査は，２×２ｍのグリットを77カ所設定し，遺構及び遺物の確認を行った。その結果，遺構として数個の柱穴，土坑２基が検出され，また遺物として弥生土器，土師器，須恵器，瓦，青磁等が出土した。このことにより同遺跡は，弥生時代から中・近世の集落跡所在の可能性があることが確認された。

こうして，工事によって影響を受ける範囲について，野市町教育委員会が調査主体となって，緊急発掘調査が実施されることになった。調査は，工事の進行状況から第１次（昭和62年９月28日～11月30日），第２次（昭和63年６月22日～８月13日）の２回に分けて行われた。

★　深渕遺跡

No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	龍河洞遺跡	弥生	19	前行古墳群	古墳	37	大湧関町田遺跡	弥生
2	十万遺跡	縄文～近世	20	原遺跡	弥生～古墳	38	大篠遺跡	弥生
3	下分遠崎遺跡	弥生	21	大領遺跡	奈良～平安	39	五軒屋敷遺跡	弥生～古墳
4	曽我遺跡	縄文～中世	22	亀山窯跡	平安	40	土佐国分寺跡	弥生～近世
5	須留田城跡	中世	23	父養寺古墳	古墳	41	土佐国府跡	〃
6	香宗城跡	〃	24	竹ノ内古墳	〃	42	比江廃寺跡	古墳
7	大崎山古墳	古墳	25	大谷城跡	中世	43	植村城跡	中世
8	笹ヶ峰遺跡	弥生	26	下井遺跡	平安	44	タンガン窯跡	古墳
9	白岩の窯跡	平安	27	北地遺跡	弥生	45	田村氏西北方古墳	〃
10	小山谷古墳	古墳	28	深渕城跡	中世	46	新改古墳	〃
11	烏ヶ森城跡	中世	29	岩村土居城跡	〃	47	久次西久保古墳	〃
12	林田遺跡	弥生～古墳	30	立田土居城跡	〃	48	植田古墳	〃
13	影山城跡	中世	31	徳弘土居城跡	〃	49	高松古墳	〃
14	雪ヶ峰城跡	中世	32	平杭遺跡	弥生	50	中山田古墳	〃
15	糯目遺跡	弥生～平安	33	上細工瀬遺跡		51	久札田古墳	〃
16	大塚古墳	古墳	34	田村土居城跡	中世	52	三島遺跡	弥生
17	ひびのき遺跡	弥生～古墳	35	田村遺跡群	縄文～近世	53	高知農業高校校庭遺跡	弥生～古墳
18	山田城跡	中世	36	片山土居城跡	中世			

表１　周辺の遺跡分布表

Fig 1　周辺の遺跡分布図

第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境

1　地理的環境

深渕遺跡は，野市町の西端，県下三大河川の１つであり，剣山系の白髪山に源を発し，流路延長70.5kmの物部川の河口から約３kmほど上流にのぼった東岸に位置し，現地表は，海抜16.1m前後を測る。深渕遺跡の所在する野市町は，東西に弧状の長い海岸線を有する高知県のほぼ中央部にあり，県下最大の平野である高知平野の東部に位置する。高知平野の中でも南国市，土佐山田町，野市町及びその周辺の平野部は，香美郡と長岡郡に属していたことから香長平野とも呼ばれており，本県最大の穀倉地帯を誇っている。

香長平野は，物部川によってその大部分を形成されており，物部川に沿って沖積扇状地が，その両側に開析扇状地が発達する。開析扇状地は，土佐山田町，野市町方面に発達し，沖積扇状地は，土佐山田町岩積付近以南の現河道西側に広く分布している。

物部川と香長平野が今日のような景観を呈するようになったのは，中・近世以降のことである。それ以前は，岩積付近が自然の吐流口となって，幾筋もの派流をなしていたが，中世になるとそれまで多数存在していた小流路の幾つかが堆積作用によって埋まり，大きな自然堤防が形成され，物部川の流路の定着化が始まったと考えられる。さらに近世になると，堤防強化や流路の変更工事がなされ，周辺に点在する自然堤防の削平や窪地の埋め立て等が行なわれ，現河道の西側の低湿地は，しだいに水田化され，反対に深渕遺跡の所在する東側は削平され，今日とほとんど変わりない景観を呈するようになった。

2　歴史的環境

野市町では，その上限を深渕遺跡の遺物から縄文時代晩期末に求めることができる。晩期の周辺の遺跡は，東部の香我美町にある下分遠崎遺跡(1)(2)，十万遺跡(3)等がある。

弥生時代前期前半～後半の環濠集落である西見当遺跡，前期末になると，大篠式土器の標準遺跡である大篠遺跡，多量の木器が出土した下分遠崎遺跡，田村遺跡群(4)などが営まれるようになり，中期は，田村遺跡群及びその周辺に遺跡が多数存在する。弥生後期になると弥生後期の土器型式，ひびのきⅠ式，同Ⅱ式の標準遺跡であるひびのき遺跡(5)，墓壙墓がみられる五軒屋敷遺跡(6)がみられるようになる。

古墳時代前期の状況は不明であるが，中期，後期になると，当深渕遺跡が営まれるようになり，併せて周辺に竹内山古墳，小山古墳等が築造される。

律令体制下においては『和名類聚鈔』(7)に香美郡深渕郷の記載があり，南国市立田に西深渕の字があることから広い範囲が深渕郷に包含されていたことが窺われる。本遺跡の西，現物部川河道にあったとされる式内社深渕神社は『古事記』(8)に記載のある深渕水夜礼花命（フカブチミズヤレハナのミコト）を祭神としており古くから存していたことを窺わせる。なお，周辺にこの時代の遺跡として十万遺跡，曽我遺跡(9)，楠目遺跡，下井遺跡，大領遺跡(10)等

が分布し，土佐における古代中心地の周辺として活気がみられる。また佐古亀山(かめやま)窯の瓦が平安京大極殿，法勝寺等に使用されたことも確認されており(11)，中央とのつながりを窺わせる。

鎌倉時代には，建久4年（1193）中原秋家が香美郡の宗我，深渕両郷の地頭職となり，やがて中原秋家の養子秋通が香宗我部氏を名のり，徐々に勢力を侵透させていった。

南北朝時代から室町時代にかけては，細川氏の支配が及ぶようになり，香宗我部氏，長宗我部氏等の地頭や土豪を被官としたが，守護代細川勝益が京都へ引きあげたあとは，土佐も戦国時代に入っていく。当遺跡の周辺に深渕城跡，大谷城跡，烏ケ森城跡等幾多の山城が存在する。長宗我部元親は天正3年（1575）土佐を統一し，当深渕地域も長宗我部氏の領国経営下に組み込まれていった。天正16年（1588）の『長宗我部地検帳』によれば，現河道の川床より検地を始めており，当地域が西に水田の広がりをもっていたことが知られる。

なお，周辺の中世以前の遺跡は，表1に示す通りである。

(註)

(1) 高橋啓明，出原恵三『下分遠崎遺跡発掘調査概報』香我美町教育委員会　1987年

(2) 高橋啓明，出原恵三『下分遠崎遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会　1989年

(3) 高橋啓明，出原恵三，吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会　1988年

(4) 出原恵三他『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』「田村遺跡群　第3分冊」1986年

(5) 岡本健児，広田典夫『高知県ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会　1977年

(6) 下村公彦，角谷和男『五軒屋敷遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会　1984年

(7) 『和名類聚鈔』によれば土佐国には7郡43郷があり，さらに香美郡には安須，大忍，宗我，物部，深渕，山田，石村，田村の8郷があったことが記載されている。

(8) 『古事記』須賀の宮の段に「此神娶淤迦美神之女，名日河比売生子，深淵之水夜礼花神（夜礼二字以音）。とあり全国で「深淵水夜礼花命」を祭った神社は深渕神社のみである。現在は河岸段丘上に移し鎮座する。

(9) 高橋啓明，吉原達生『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年

(10) 香美郡衙推定地である。

(11) 大石良材，龍谷寺，谷口俊治，鈴木忠司『平安宮推定大極殿跡発掘調査報告書』財団法人古代學協會　1983年

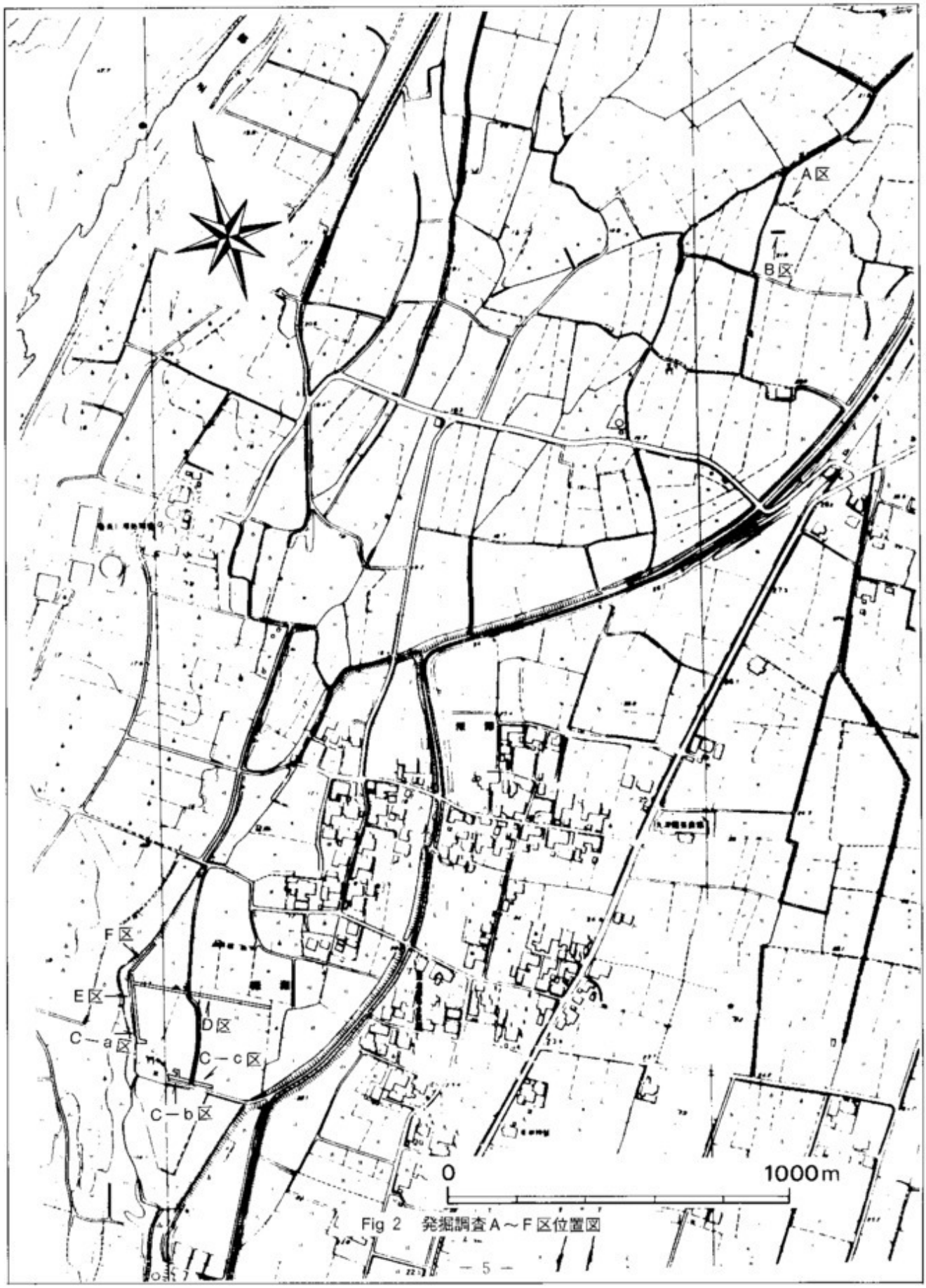


Fig 2　発掘調査A～F区位置図

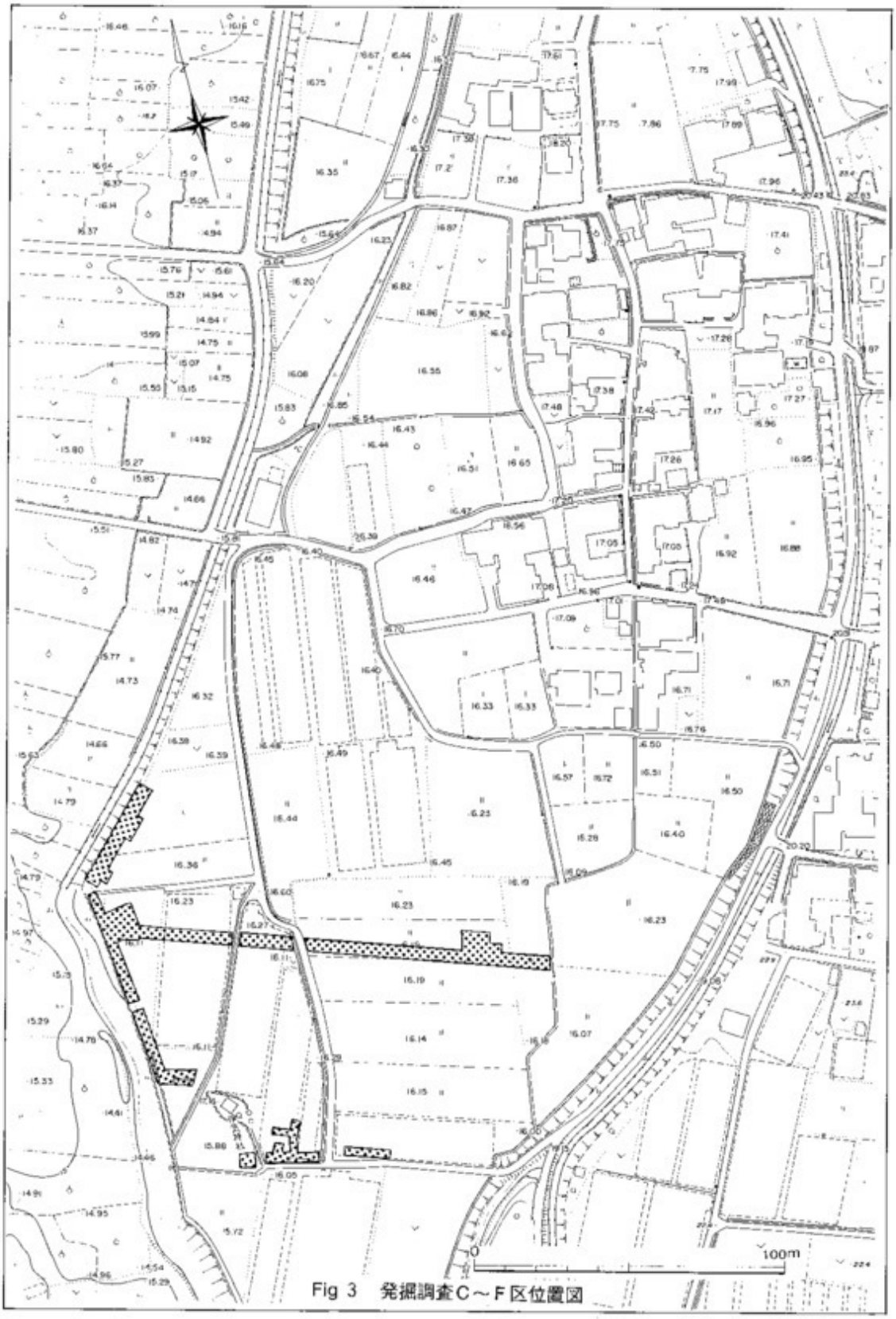


Fig 3　発掘調査C～F区位置図

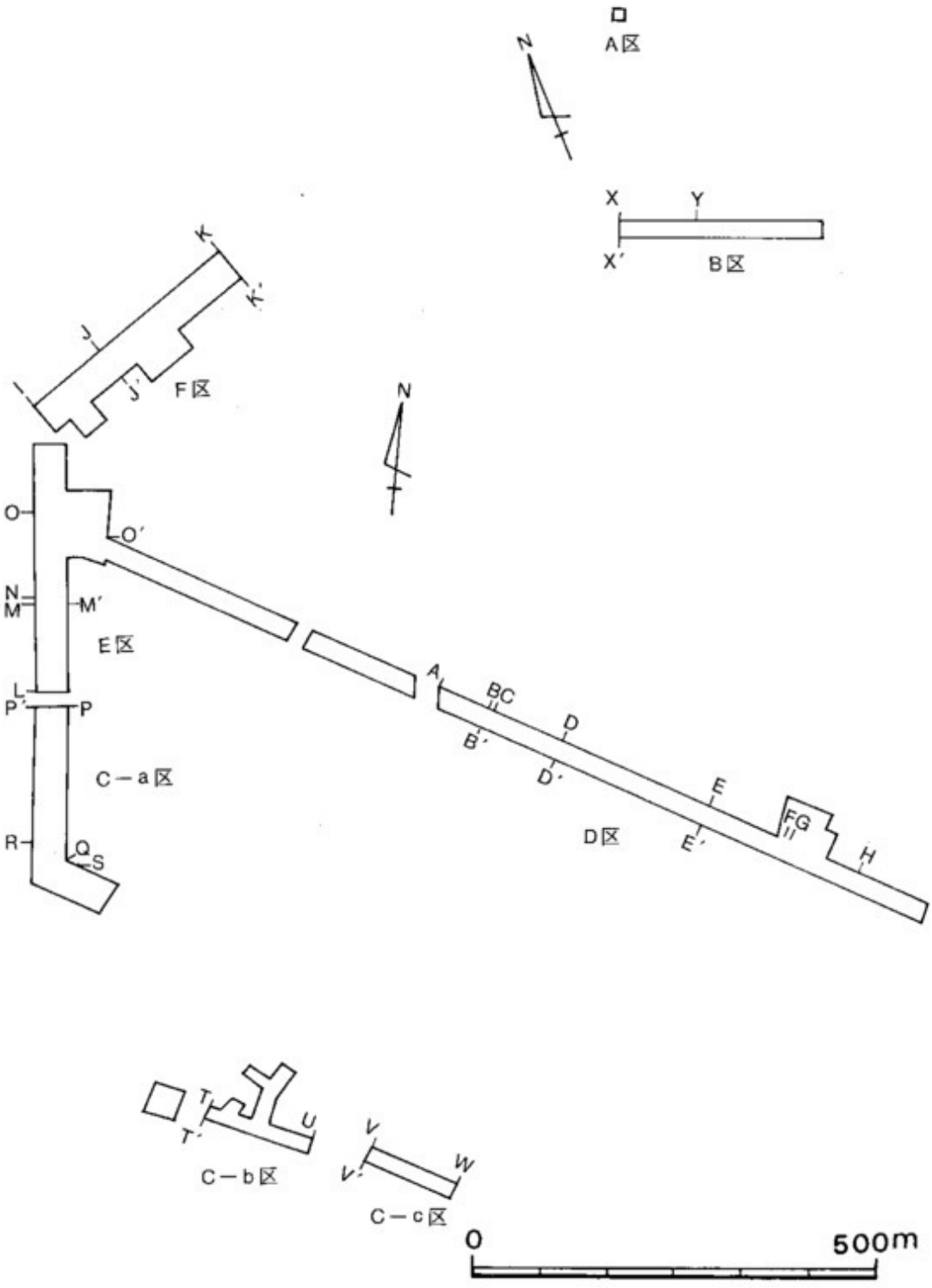


Fig 4　トレンチセクション位置図

第Ⅲ章　調査区の概要と調査の方法

1　調査区の概要

調査区は小規模排水対策特別事業（A・B区）及び深渕地区再編農業構造改善事業（C～F区）に伴う工事によって影響を受ける農業用道路及び用水路工事予定地である。

A・B区は，本遺跡の北端部に位置する。A区は削平工事予定地であり，2m×2mの試掘であり，面積は4㎡を測る。遺物は若干検出したが，地山層はなく下層は礫層で遺構は所在しなかった。B区は，用水路工事予定地であり，幅2.5m，延長30mの東西に長いトレンチ状の調査区で，面積は約75㎡を測る。検出遺構は，平安時代の溝1条のみである。

C－a区は，A・B区から約3.6km南のE区の南側に隣接する。C－a～c，E・F区は農業用道路工事予定地であり，幅5.5m，延長約30mの南北に長いトレンチ状の調査区で，面積は165㎡を測る。検出遺構は，竪穴住居，掘立柱建物，土坑，溝，ピット等で弥生時代後期から中世に至るものである。

C－b，C－c区は，C－a区の東側に位置する農業用道路工事予定地であり，幅約3.0m，延長53mの東西に長いトレンチ状の調査区で，面積は約159㎡を測る。C－b区の東部において掘立柱建物の一部が検出されたので，その部分について一部拡張した（40㎡）。検出遺構は，掘立柱建物，溝，ピット等で古墳時代後期から平安時代に至るものである。

D区は，E区に直行する形で東側に位置する用水路工事予定地であり，幅3.00m，延長80mの東西に長いトレンチ状の調査区で面積は，約290㎡を測る。調査区東端部において掘立柱建物の一部及び集石が検出されたので，その部分について一部拡張した（44㎡）。検出遺構は，掘立柱建物，土坑，溝，ピット等で弥生時代後期から中世に至るものである。

E・F区は，C－a区の北側の延長上に位置する農業用道路工事予定地であり，幅5m，延長60mの南北に長いトレンチ状の調査区で面積は300㎡を測る。E・F区西端部において竪穴住居の一部及び壺棺墓が検出されたのでその部分について一部拡張した（114㎡）。検出遺構は，竪穴住居，壺棺墓，掘立柱建物，土坑，溝，ピット等で弥生時代後期から中世に至るものである。

2　調査の方法

昭和62年度の第1次調査でA，B，D～F区について順次調査を行った。又昭和63年度の第2次調査でC－a，C－b，C－c区について順次調査を行なった。発掘調査の実施にあたっては，表土である耕作土及び旧耕作土はユンボで除去した後，手掘りで遺構検出を行なった。包含層の遺物の取りあげや遺構の検出は，各調査区で4mの長さを最小単位として記録をとった。

なお，方位については磁北方向を基準線とした。

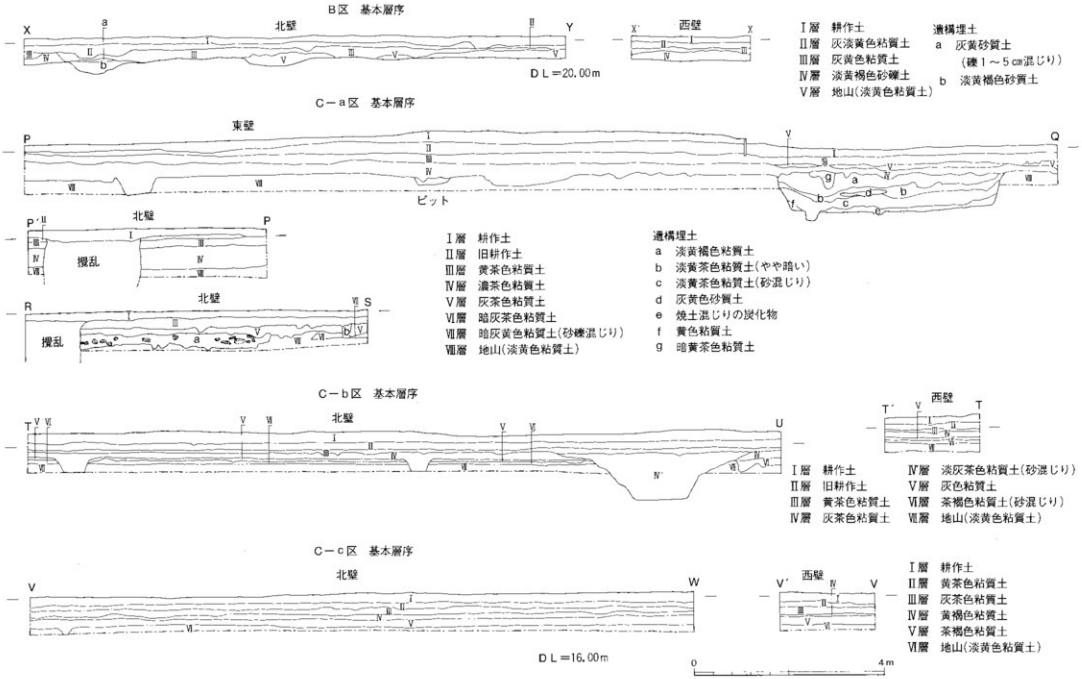


Fig 5 B～C区 基本層序

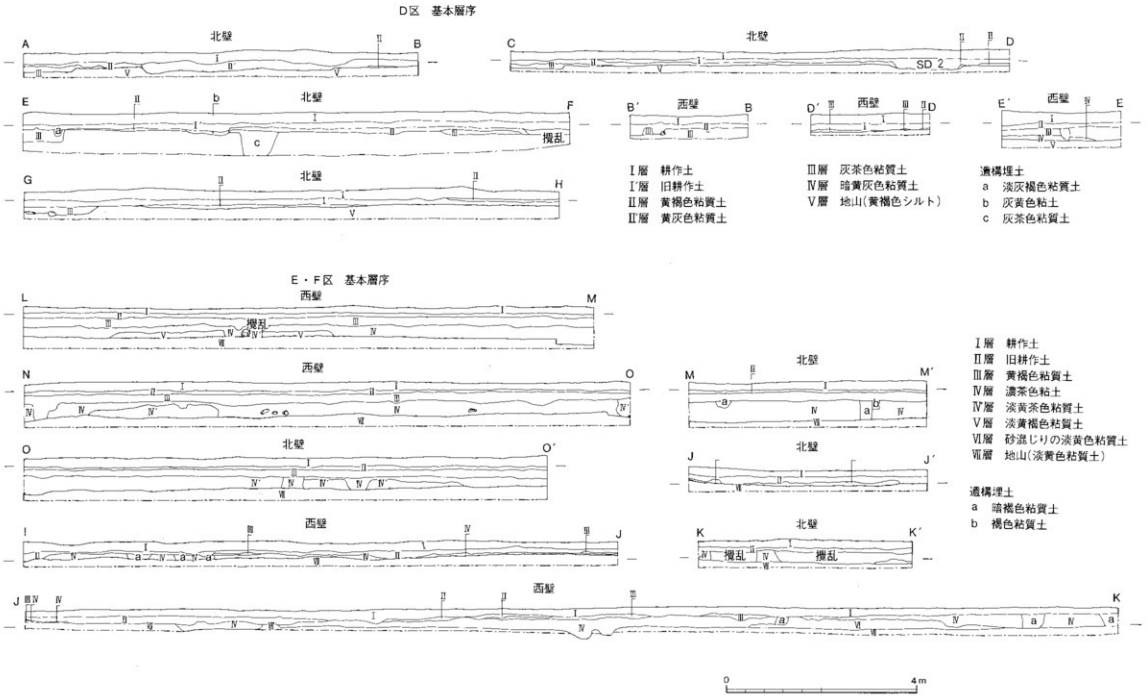


Fig 6 D～F区 基本層序

第Ⅳ章　A・B区の調査

1　基本層序（Fig 5）

A・B区の基本層序は，Ⅰ層：耕作土，Ⅱ層：灰淡黄色粘質土，Ⅲ層：灰黄色粘質土，Ⅳ層：淡黄褐色砂礫土，Ⅴ層：地山層（淡黄色粘質土）である。Ⅱ層の下は古代の遺物包含層であるⅢ層となっているが，A区のⅢ層は，若干の遺物細片も出土しているが純粋な包含層ではない。B区のⅢ層は，西部で次第に薄くなりⅣ層となるが，Ⅳ層は無遺物層であり，人頭大の礫が混じる。遺構検出面はⅤ層上面であったが，A区には確認できず，B区でも，東から西へ行くに従って下行傾斜することからⅤ層の載っているB区は自然堤防を形成する部分と考えられ，他は氾濫原であったことを示している。

2　遺　　構

SDⅠ（Fig 13）

SD1は，B区の調査区の中央よりやや西をN－0.5°－Wで，南北に直走する溝である。南・北端は調査区外に出ている。溝幅は100～120cm，深さ16～25cmを測り，断面は舟底形をなしている。南端と北端の比高差は2cm前後で僅かに南が下がっているがほとんど勾配は見られない。埋土は，Ⅰ層：灰黄砂質土（礫1～5cm混じり），Ⅱ層：淡黄褐色砂質土で砂礫の堆積が見られるが，これは物部川の氾濫による流れこみと考えられる。出土遺物から10世紀代に廃絶されたと考えられる。

出土遺物は，少なく図示できたのは緑釉陶器（1），土師器（2，3），須恵器（4）にすぎない。

3　遺　　物

SD1（Fig 7）

1は緑釉陶器椀である。直線的に立ち上がり，口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸くおさめる。精選された胎土で釉は黄緑色に発色し，内・外面共に施釉する。2は土師器杯で体部は緩やかに外反し，体部の器表面はロクロ目が顕著であり，口唇部は丸くおさめる。底部はヘラ切り。3は土師器皿である。立ち上がりはほとんどなく，極めて浅い皿である。口縁部は外反し，口唇部は丸くおさめる。4は須恵器椀である。外方にやや踏んばった高台を底部外端に貼け，斜上外方に直線的に立ち上がる。底部と体部との境は認められない。

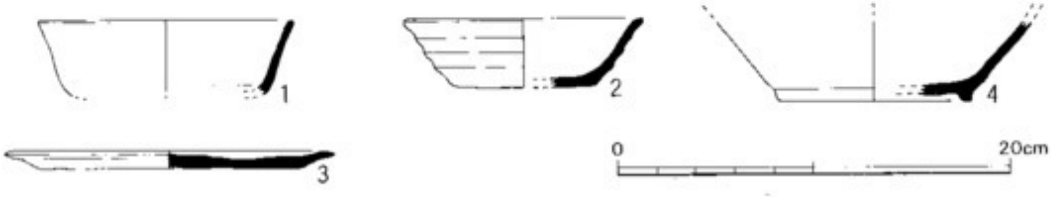


Fig 7　B区　SD 1　出土遺物実測図（SD 1～4）

第Ⅴ章　C－a区の調査（Fig 8）

1　基本層序（Fig 5）

C－a区の基本層序は，Ⅰ層：耕作土，Ⅱ層：旧耕作土，Ⅲ層：黄茶色粘質土，Ⅳ層：濃茶色粘質土，Ⅴ層：灰茶色粘質土，Ⅵ層：暗灰茶色粘質土，Ⅶ層：暗灰黄色粘質土（砂礫混じり），Ⅷ層：地山（淡黄色粘質土）である。C－a区の中央より南で1段低い地表を現況では呈しているが，旧地形は，南部の耕作土と北部の旧耕作土と同一面と考えられる。Ⅴ層は部分的にしかみられないが，C－b，C－c区では一貫してみられる。Ⅵ層・Ⅶ層は南東端で部分的にみられ氾濫原となっていることを示す。Ⅷ層は地山であるが，ＳＫ７・ＳＫ８の埋土はⅧ層と識別出来なかったため，遺物は遺構を確認できるまでのものを便宜上Ⅷ層として図示した。弥生及び古代の遺物包含層であるⅣ層は，平安時代～中世の遺構面であり，C～F区の全体にみられる層位である。南西部では，Ⅳ層はみられないがＳＸ１の埋土に残ることから削平された結果と考えられ，旧地形は南西部（現物部川河道方向）の標高が高かったと考えられる。弥生時代～奈良時代の遺構面はⅧ層である。

2　包含層出土の遺物

ここではⅢ～Ⅳ層及びⅧ層の遺物についてのみ説明する。

(1)　Ⅲ層出土の遺物（Fig 15－5～18）

5～7は土師器杯である。上げ底気味の底部から5・6は内湾気味に，7は直線的に立ちあがる。5・6は底部外面に糸切り痕を認める。8は土師器貼付高台付杯である。高さ9㎜の高台の底部外面に糸切り痕を認める。9・10は須恵器貼付高台付杯である。底部外周端部に外方へ踏んばった断面逆台形の高台がつき上外方に立ちあがる。11は土師器杯である。平底の底部から内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反する。底部外面に糸切り痕を認める。12は緑釉陶器である。内湾気味に立ちあがり端部は丸くおさめる。内面には弱い凹線が一条巡る。薄緑色の釉がかかる。13～15は須恵器杯蓋である。13は口縁部はＳ字状に屈曲し端部は面をなす。14は平坦な頂部から口縁部で緩やかに屈曲し口唇部は丸くおさめる。15は扁平で中心が僅かに高いつまみを有す。頂部中央は僅かに凹む。16は土師器羽釜の脚である。他に土錘17・18がある。

(2)　Ⅳ層出土の遺物（Fig 15－19～34）

19は須恵器高杯脚である。「ハ」の字状に開き，端部は肥厚して面をなす。脚外面に2段の稜を有す。20～25は須恵器蓋である。20は内面のかえりは細く上位に着いている。21は内面にヘラによる「大」の字が刻まれている。22は口縁端部内面は僅かに凹む，口唇部は面をなす。23は水平な頂部から稜をもち直線的に斜下方に下り口縁端部は面をなす。24は頂部にボタン状のつまみを有す。頂部内面なで調整を施し，青海波文を残す。25は扁平なつまみを有す。26は須恵器杯である。内湾気味に立ちあがり，受け端部は丸くおさめる。立ちあがりは僅かに外反

して内傾する。27－29は須恵器貼付高台付杯である。27は底部外周端部高台が付く底部外面に「ニ」のヘラ記号を認める。28は体部外面に火襷を認める。29は底部外面に左り回りのヘラ削りを残す。30・31は土師器杯である。30は体部下端で僅かなふくらみをもって直線的に外方に立ちあがる。底部外面に回転糸切り痕を認める。31は底部内面に煤が付着する。底部外面ヘラ削りを残す。32・33は土師器羽口と考えられる。33は底部は凹む。中央に径1.2cmの1孔を穿つ。34は鉄鏃である。全長5.8cm，全幅2.3cm，全厚0.9cm，重量15.1ｇを測る。他に布目瓦の細片が出土している。

(3) Ⅶ層出土の遺物（Fig 15－35～40）

35～37は弥生土器甕で口縁部は「く」の字状に外反する叩き出し口縁である。口唇部は下方に肥厚し外傾して面をもつ。胴部外面叩き調整を施す。口縁部外面は叩きの後なで調整を施す。36は口縁部から胴部にかけて外面に大きな黒斑を認める。38は壺底部である。平底から内湾気味に立ちあがる。外面は全面叩き調整の後縦方向のハケ調整を施す。内面に指頭圧痕顕著。39・40は弥生土器壺である。口頸部は漏斗状に強く外反する。口唇部は外傾する幅広い面をなし上下に拡張する。口唇部の粘土帯貼付においては擬口縁を荒いハケ調整でととのえている。39は口唇部外面に双線の原体を用い波状文を3条施す。口縁部内面にも波状文を施す。40は口唇部外面に竹管文を施した円形浮文と1箇所より8方へ放射状に派出する8本の短線のヘラ描文を交互に配すものと考えられる。

3 遺　　構

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構は，竪穴住居1棟，土坑4基を検出した。遺構の組合せやその変遷については次章に詳述する。

竪穴住居

ＳＴ6（Fig 10）

Ｃ－ａ区の中央よりやや南に位置し，南西端部の一部は攪乱を受けている。また東部は調査区外に出ている。平面プランは隅丸方形を呈す。住居址は長径4.75ｍ，短径3.90ｍまで確認できる。深さ40～70cm，面積は18.5㎡以上を測る。壁は，ほぼ平坦な床面から急角度で斜に立ちあがる。埋土はⅠ～Ⅶ層である。Ⅰ層：淡黄褐色粘質土，Ⅱ層：淡黄茶色粘質土（やや暗い），Ⅲ層：淡黄茶色粘質土（砂混じり），Ⅳ層：灰黄色砂質土，Ⅴ層：焼土混じりの炭化物，Ⅵ層：黄色粘質土，Ⅶ層：暗黄茶色粘質土である。主柱穴はＰ1～Ｐ5の5本からなっている。主柱穴間の距離は2.1～2.4ｍである。主柱穴の大きさは14～43cm，深さ13～33cmを計る。図示できたのは弥生土器（41～62）である。出土遺物の中にはＳＫ5出土の鉢（66）と接合できほぼ一時期の遺物として把握することができる。竪穴住居は焼失家屋とみられ炭化した部材が検出された。壁は焼けていないが，炭化物，焼土は床面にも広がっている。住居の北の床面に炭化材の組物が検出されたが「木内」はみられない。屋根材と考えられる。ＳＴ5に上面が切られる。

土　　坑

ＳＫ１（Fig 14）

ＳＫ３の北側に位置し，半分程が調査区外に出ている。楕円形の平面プランを有し，長軸は0.65ｍまで確認でき，短軸は0.8ｍ，深さ18㎝を測り，長軸方向はＮ－62.2°－Ｗである。埋土は濃茶色粘質土であり，弥生土器細片が多く出土しているが図示できるものはない。

ＳＫ５（Fig 14）

ＳＫ４の北に位置し，半分以上が攪乱を受けている。隅丸長方形の平面プランを有すと考えられ，長軸3.35ｍ，短軸1.02ｍまで確認できる。深さ22～40㎝を測り，長軸方向はＮ－31.5°－Ｗで断面は逆台形を呈す。埋土はⅠ～Ⅲ層からなる。Ⅰ層：黒黄色粘質土，Ⅱ層：灰茶色粘質土，Ⅲ層：淡黄茶色砂質土で，遺物は多量の弥生土器のみが出土したが，図示できたのは弥生土器（63～67）である。なお（66）はＳＴ６出土の鉢と接合でき，ほぼ一時期の遺物として把握することができる。

ＳＫ７（Fig 14）

ＳＫ８の北に位置し，不整形の平面プランを有す。Ⅶ層上面から土器の集中を認めたが，Ｆ区の壺棺墓同様平面プランを精査したが，確認できず，Ⅶ層上面から約20㎝下で，ようやくプランを確認することができた。長軸1.3ｍ，短軸1.07ｍ，深さ55㎝を測る。床面は段状をなし，長軸方向はＮ－64.5°－Ｗである。埋土は暗灰黄色粘質土である。出土遺物は多量で図示できたのは（63～76）である。

ＳＫ８（Fig 14）

ＳＫ７の南に位置し，楕円形のプランを有す。ＳＫ７同様Ⅶ層上面から土器の集中を認めたが平面プランは確認できず，Ⅶ層上面から40㎝下でプランを確認できた。長軸1.86ｍ，短軸0.85ｍ，深さ16㎝を測る。断面は逆台形を呈す。長軸方向はＮ－73.9°－Ｗである。埋土はⅠ～Ⅳ層からなり，Ⅰ層：炭化物混じりの暗灰黄色粘質土，Ⅱ層：炭化物，Ⅲ層：淡黄色粘質土（砂混じり），Ⅳ層：砂礫土である。遺物は弥生土器（77・78・79）であり，77は手捏土器である。ＳＫ７・ＳＫ８の土器は接合でき，一時期の遺物として把握することができ，Ⅶ層の土器の集中した状態から，Ⅶ層の土器はこれらの土坑に伴うと同時にＳＫ７・ＳＫ８は本来一つの土坑と考えてよかろう。

(2) 古墳時代

古墳時代の遺構は竪穴住居１棟，掘立柱建物１棟，土坑３基，構４条，不明遺構１基を検出した。遺構の組合せやその変遷については，次章に詳述する。

竪穴住居

ＳＴ５（Fig 11）

ＳＸ１とＳＫ４との間に位置し，北西部は攪乱を，南西部は削平を受けている。平面プランは北西端部が突出気味に湾曲した不整隅丸長方形を呈している。長径5.62ｍまで確認できる。

短径4.6m，深さ10～17cm，推定面積約23㎡を測る。壁は，ほぼ平坦な床面から急角度で斜に立ちあがる。長軸方向はN－39.2°－Wである。埋土はⅠ・Ⅱ層である。Ⅰ層には多量の大小の河原石が入っているが，床面に接しているものは少ない。Ⅰ層：灰黒色粘質土（礫混じり），Ⅱ層：灰黄色粘質土（砂混じり）である。主柱穴はP1～P5の5本からなっているが，P4に近接して同規模の柱穴があり建替えの可能性も考えられる。主柱穴間の距離は1.4～2.4mであるが，P2とP3の間の攪乱部に柱穴の存在も考えられ6本の主柱穴の可能性も考えられる。主柱穴の大きさは径20～40cm，深さ4～39cmを計る。遺物は多量で土師器（93～100・106～108），須恵器（80～92・101～105）が出土している。なおST6を切る。

掘立柱建物

SB1（Fig 13）

調査区の東北端に位置し，半分以上は調査区外である。建物は桁行2間以上（1.7m以上）×梁間2間以上（1.4m以上）の南北棟で棟方向はN－47.2°－Wである。柱穴のプランは，不整形を呈し，径は43～70cmを測る。これらの柱穴の検出面からの深さは7～45cmである。柱間距離は，桁行0.7～1.0m，梁間0.75m等間となっている。埋土は濃茶色粘質土で大小の河原石が混じる。遺物は土師器，須恵器の細片が出土しているが図示できたのは，須恵器（120）のみである。

土　　坑

SK2（Fig 14）

調査区の西北端に位置し，半分以上が調査区外に出ており，一部は攪乱を受けている。規模は不明で，深さ20cmを測り，断面は舟底状を呈す。埋土は，Ⅰ・Ⅱ層からなる。Ⅰ層：灰茶色粘質土，Ⅱ層：灰黄色粘質土である。遺物は須恵器，土師器片が少量出土している。図示できたのは土師器把手（109）のみである。

SK3（Fig 14）

SK1の南に位置し，半分程が調査区外に出ている。瓢箪形の平面プランを有し，長軸1.95m，短軸0.47mまで確認できる。深さ16～21cmを測り，主軸方向はN－4.0°－Wで断面は舟底状を呈す。埋土は濃茶色粘質土で，遺物は土師器が少量出土している。図示できたのは土師器（110）のみである。

SK4（Fig 14）

SK5の南に位置し，半分以上が攪乱を受けている。平面プランは不整形を呈す。長軸1.95m，短軸0.47mまで確認できる。床面は段状をなし，深さ17～25cmを測り，長軸方向は，N－8.5°－Wである。埋土は濃茶色粘質土で，遺物は，土師器，須恵器片等が出土しているが，図示できたのは，土師器（111・112），滑石製紡錘車（113）である。

SX1（Fig 13）

ST5の南に位置し，不整形の平面プランを有し，長軸3.05m，短軸2.5m，深さ15～26cm

を測る。長軸方向はＮ－66.2°－Ｗである。床面は段状を呈す。埋土は濃茶色粘質土で大小の河原石が混じる。短軸方向直線上に径16～25㎝の柱穴が４個並ぶ。遺物は，少量出土したが，実測できたのは土師器（114・115）須恵器（116）である。

溝

ＳＤ１～４は同一の溝と考えられるが，便宜上ＳＤ１～４に分けた。

ＳＤ１（Fig 13）

調査区の北端に位置し東西に斜に調査区を横切る。長さ6.65ｍまで確認できる。幅35～112㎝，深さ８～17㎝を測り，方向はＮ－21.2°－Ｅである。断面は逆台形を呈すが一部段状を呈す。埋土は濃茶色粘質土で北部に大小の河原石が混じる。遺物は少量で図示できたのは土師器（118），須恵器（117）のみである。ＳＫ５を切る。

ＳＤ２（Fig 13）

ＳＤ１に直交する形で位置する。西北端は攪乱されている。長さ2.40ｍまで確認できる。幅48～65㎝，深さ13～14㎝を測り，方向はＮ－48.1°－Ｗである。断面は逆台形を呈す。埋土は濃茶色粘質土で大小の河原石が混じる。遺物は細片で図示できない。

ＳＤ３（Fig 13）

ＳＤ１に直交する形でＳＤ２の北にほぼ平行に位置する。西北端は攪乱されている。長さ2.43ｍまで確認できる。幅48～85㎝，深さ13～14㎝を測り，方向はＮ－46.5°－Ｗである。断面は段状を呈す。埋土は濃茶色粘質土で大小の河原石が混じる。断面は段状を呈す。遺物は細片で図示できたのは須恵器（119）のみである。

ＳＤ４（Fig 13）

ＳＤ１に直交する形でＳＤ３の北にほぼ平行に位置する。西北端は攪乱されている。長さ3.18ｍまで確認できる。幅30～62㎝，深さ5～7㎝を測り，方向はＮ－41.8°－Ｗである。断面は段状を呈す。埋土は濃茶色粘質土で大小の河原石が混じる。遺物は細片で図示できない。

(3) 奈良時代末～平安時代

奈良時代末～平安時代初頭の遺構は，掘立柱建物２棟を検出した。

掘立柱建物

ＳＢ３（Fig 12）

調査区の北部に位置する。建物は，桁行１間（3.75ｍ）×梁間１間（2.25ｍ）の南北棟で，棟方向は，Ｎ－19.2°－Ｅであり，面積は8.44㎡を測る。柱穴の径は20－25㎝である。これらの柱穴の検出面からの深さは20～28㎝である。Ｐ3はＰ19に切られている。ＳＢ４と重複関係にあるが先後関係は不明である。埋土は濃茶色粘質土で出土遺物は少量で図示できたのは，Ｐ3から出土した土師器（122）のみである。

ＳＢ４（Fig 12）

調査区の北東部に位置し，½は調査区外に出ている。建物は桁行２間（2.16～2.20ｍ）×梁

間1間（2.2m）の南北棟で，棟方向はN－13.6°－Wであり，面積は9.57㎡を測る。柱穴の径は26～38cmである。これらの柱穴の検出面からの深さは10～27cmである。P3は建替えが考えられる。ＳＢ３と重複関係にあるが先後関係は不明である。埋土は濃茶色粘質土で出土遺物は細片で図示できない。

4 遺　　物

(1) 弥生時代

今回の調査で出土した弥生時代の遺物には，土器がある。以下，各遺構から出土した遺物の概要を述べることにする。

竪穴住居

ＳＴ６（Fig16－41～62）

41～47は鉢である。41は突出した底部から内湾して立ちあがり，口唇部は面をなす。42は平底状の底部から内湾気味に立ちあがり胴部上端から緩やかに外反する。底部以外の外面は全面叩き調整の後なで調整を施す。胴部外面が煤ける。43は上げ底気味の底部から内湾して立ちあがる。外面叩き調整の上なで調整を施すが口縁部外面付近に叩きが残る。44は突出した平底気味の底部から上外方に立ちあがり，口唇部は外傾して僅かに凹状を呈す。体部外面に指頭圧痕が顕著，体部内面ヘラ磨きを施す。45は平底風丸底から内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。外面螺線状叩き調整の後，体部大半は右下りのハケ調整を部分的に施す。体部内面は不定方向のハケ調整を施す。46は上げ底気味の平底から内湾気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。外面は底部以外左まわりの螺線状叩き調整を施す。内面は右下りのハケ調整を施こす。48は手捏土器である。内・外面共に指頭圧痕が顕著である。49は器台と考えられる。平坦な底部を有す。体部外面及び上面は凹み指頭圧痕を残す。上面は不定方向のなで調整を施こす。50～53は壺である。50・52は古い時期の混入と考えられる。50の口縁部は丸みをもって強く外反し口唇部は僅かに上下に拡張され擬凹線文を２条配す。外面は磨耗が著しく観察不可能。内面は頸部直下までヘラ削りを施す。51の口頸部は漏斗状に外反すると考えられる。口唇部は外傾する幅広い面をなし，上下に拡張し鋸歯文を配す。口唇部に粘土帯接合痕を認める。口縁部内面はハケ調整を施す。52の口縁部は「く」の字状に屈曲して外反する。口唇部は強いなで調整で上方に肥厚して凹む。頸部外面は右下りのハケ調整を認める。内面頸部直下に横方向のヘラ削りを施す。53の口縁部は直線的に外方に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。胴部内面上半に粘土帯の接合痕を残す。胴部外面は叩き調整，口縁部及び胴部上端部は縦方向のハケ調整を施す。54～58は甕である。口縁部は「く」の字状に外反し，頸部内面に稜を有す。口縁部はいずれも叩き出しであるが53の外面は完全にハケで消している。54～56の口唇部は肥厚して面をなす。57の口唇部は面をなし，端部が僅かに下方に垂れる。外面叩き調整，内面ハケ調整を施す。59～61は甕底部である。59は突出した平底状の底部から上外方に立ちあがる。胴部下端外面は叩き調整の後荒いハケ調整を施す。内面は不定方向のハケ調整を施す。60は僅かに残る平底状

の底部から内湾気味に立ちあがる。底部以外の外面は叩き調整を施す。内面に指頭圧痕を残す。61は平底状の底部から内湾気味に外反して立ちあがる。胴部外面は叩き調整の後，丁寧にハケ調整を施す。内面はハケ調整を施し，指頭圧痕を残す。62は鉢である。直線的に立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は肥厚し，外傾して面をもつ。外面叩き調整の後右下りのハケ調整を施す。内面はヨコ及び右下りのハケ調整を施す。

土　　坑

ＳＫ５（Fig 17－63～67）

63～65は甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し，口唇部は肥厚して外傾し面をなす。頸部内面は稜をなす。口縁部はいわゆる叩き出し口縁である。64は胴部上半部に粘土接合帯が顕著である。外面叩き調整，内面ハケ調整を施す。66・67は鉢である。66は平底から内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。外面叩き調整の後体部外面はなで調整を施す。内面はハケ調整を施す。67は内湾して立ちあがり口縁部で僅かに外反し口唇部は内傾して面をもつ。

ＳＫ７（Fig 17－68～76）

68～72は甕である。口縁部は「く」の字状に屈曲し，口唇部は外傾して面をなす。頸部内面は稜をなす。口縁部はいわゆる叩き出し口縁である。外面叩き調整を施す。口縁部及び胴部内面ハケ調整を施す。71，72は外面は煤ける。71は二次的な火を受けて紅く変色する。69は甕底部である。平底の底部から内湾気味に立ちあがる。胴部外面は叩き調整の後放射状に丁寧にハケ調整を施す。74は鉢である口縁部に上外方に立ちあがり屈曲して垂直気味に立ちあがり，口唇部は内傾する面をなし，端部を外方につまみ出してなで調整を施す。口縁部に粘土帯接合痕を認める。外面叩き調整，内面横方向のハケ調整を施す。75，76は壺である。口頸部はラッパ状に強く外反する。口唇部は外傾する幅広い面をなし，上下に拡張し波状文を施す。条線は75は２条，76は４条。口唇部の粘土帯貼付において擬口縁を荒いハケ調整で整える。76は口縁部内面にも波状文を施す。器表面調整の基本は木理の荒いハケ原体によるハケ調整を施す。球形の胴部外面には下地の叩き調整が見られ，上胴部外面の１部にはヘラ磨き，胴部内面はなで調整を施す。

ＳＫ８（Fig 17－77～79）

77は手捏土器である。外方に張り出す高台付の高杯と考えられる。脚部と杯部の境に指頭圧痕が顕著である。底部外面中央部は凹む。78・79は壺である。78は口頸部はラッパ状に強く外反する。口唇部は外傾する幅広い面をなし，上下に拡張しヨコなで調整の後波状文を施す。条線は１条。口唇部の粘土帯貼付においては擬口縁を荒いハケ調整で整える。器表面調整の基本は木理の荒い原体によるハケ調整を施す。なお，ＳＫ７の土器と接合する。79は口縁端部を下向に折り曲げ口唇部には弱い凹線が走る。磨耗が著しく観察不可能。

(2) 古墳時代

今回の調査で出土した古墳時代の遺物には，土師器，須恵器，石製品がある。以下，各遺構

から出土した遺物の概要を述べることにする。

竪穴住居

ＳＴ５（Fig 18・19－80～118）

80～87は須恵器杯身である。立ちあがりが外反気味に内傾する80～84・86，立ちあがりが直線気味に内傾する85・87がある。82の受端部はヨコなで調整により三角状におさめる。他は丸くおさめ，底部外面ヘラ切り痕を残す。85・86の杯部外面はヘラ削りを施す。他は内・外面共なで調整を施す。88～91は須恵器杯蓋である。88は内湾気味に立ちあがり僅かに稜をなして頂部に移行する。頂部は平坦面をなす。口唇部は丸くおさめる。頂部外面は丁寧なヘラ削りを施し，他は丁寧なヨコなで調整を施す。頂部外面にヘラ記号を認める。89は内湾気味に立ちあがり頂部に移行する。口唇部は丸くおさめる。頂部外面は右方向のヘラ削りを施す。頂部外面にヘラ記号を認める。全体的に雑なつくりである。90・91は頂部外面ヘラ削りを施す。口縁部はヨコなで調整を施し，91は僅かに外反し，口唇部は丸くおさめる。90の口縁部内面は僅かに段が残る。92は須恵器高杯である。脚上端部から内湾しながら上外方に立ちあがる。立ちあがりは直線的に内傾し，口唇部は丸くおさめる。受部外面端部にヘラ削りを施す。脚は２孔の縦方向に長い長方形のヘラ切りによる透しが穿たれる。脚下端に２条の沈線を巡らす。杯部は内・外面共になで調整を施す。脚部は自然釉がかかる。93～95・96～98は土師器甕である。93は胴部上端部から外反し，口唇部は丸くおさめる。胴部内面縦方向のヘラ削りを施す。94は胴部上端から屈曲して弧状を描いて外反し，口縁端部で僅かに外方に折り曲げ，僅かに肥厚する。胴上端部で粘土帯接合部を観察することができる。95は内湾気味に立ちあがり「く」の字状に外反し，口唇部は肥厚する。胴部に２カ所粘土帯接合部を観察することができる。胴部内面はハケ調整を施し，他はヨコなで調整を施す。外面は磨耗が著しく観察不可能。97は胴部上端から緩やかに外反して立ちあがり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。胴部内面下半はヘラ削りを施すが上半はなで消している。外面は磨耗が著しく観察不可能。98は口縁部は「く」の字状に外反し，口唇部は丸くおさめる。96は甑である。直立気味に立ちあがり緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。胴部上半に粘土帯接合部を観察することができる。外面縦方向の荒い木理のハケ調整の後ヨコなで調整を施す。内面ヨコなで調整を施す。99・100は鉢である。内湾気味に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。外面は全面叩き調整を施す。内面不定方向のハケ調整，口縁端部はヨコなで調整を施す。100は内湾気味に立ちあがり，口唇部は内傾して面をなす。内・外面共荒い木理の原体でハケ調整の後ヨコなで調整を施す。101～105は須恵器壺である。頸部は胴部上端から上外方に大きく屈曲して外反する。口縁端部は下方に肥厚する。口唇部は101は水平な面をもち，102・103は稜をもって面をなし，104は外傾して面をなす。105の口唇部は丸くおさめる。103～105は胴部内面に青海波文を認める。106は単孔の甑である。内湾気味に立ちあがり中位より上の貼付把手に至る。その後外反気味に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。胴部外面下半端部は右下りのハケ調整，他は不定方向のハケ調整を施す。胴部内

面不定方向の荒い木理の原体でハケ調整を強く施す。他に107・108の土師器把手がある。

掘立柱建物

ＳＢ１（Fig 20－120）

120は須恵器壺である。内面にロクロ目が顕著である。底部内面に緑色の自然釉を認める。

土　　坑

ＳＫ２（Fig 19－109）

109は土師器把手である。

ＳＫ３（Fig 19－109）

110は土師器鉢である。内湾気味に立ちあがり口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸くおさめる。内面は荒い木理の原体でヨコ方向のハケ調整を施す。

ＳＫ４（Fig 19－111）

111は土師器鉢である。内湾気味に立ちあがり，口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。体部外面上半は木理の荒い原体による縦方向，下半は不定方向のハケ調整を施す。口縁部はなで調整を施す。体部内面はハケ調整を施す。112は土師器甕である。張った胴部上端から一担直立気味に立ちあがった後外反する。口唇部は丸くおさめる。胴部内・外面共に不定方向のハケ調整を施す。113は滑石製紡錘車である。断面は台形状を呈するが，稜は磨耗して丸味をおびている。下底4.0cm，上底2.0cm，全長3.8cm，重量38.0ｇを測る。上・下面は無であるが，側面には８個の鋸歯文を配す。

不明遺構

ＳＸ１（Fig 20－114・115）

114・115は土師器甕である。口縁部は緩やかに上外方に屈曲し，口唇部は丸くおさめる。114は内・外面共にヨコなで調整を施す。115は磨耗が著しく観察不可能。116は須恵器壺底部である。底部から丸みをもって立ちあがる。底部外面に植物繊維の圧痕が多く付着する。

溝

ＳＤ１（Fig 20－117・118）

117は須恵器壺である。口縁部は胴部上端部から直立気味に短く立ちあがり外反する。口唇部は内面して面をもつ。胴部上端部はカキ目調整を施す。内面はすべてヨコなで調整を施す。他に118の土師器把手がある。

ＳＤ３（Fig 20－119）

119は須恵器壺である。やや偏球状の胴部の肩に胴部最大径があり，１条の凹線が巡る。胴部下半から底部までの外面はヘラ削りを施し無調整である。内面は不定方向のなで調整を施す。

(3)　奈良時代末～平安時代

柱　　穴

Ｐ18（Fig 20－121）

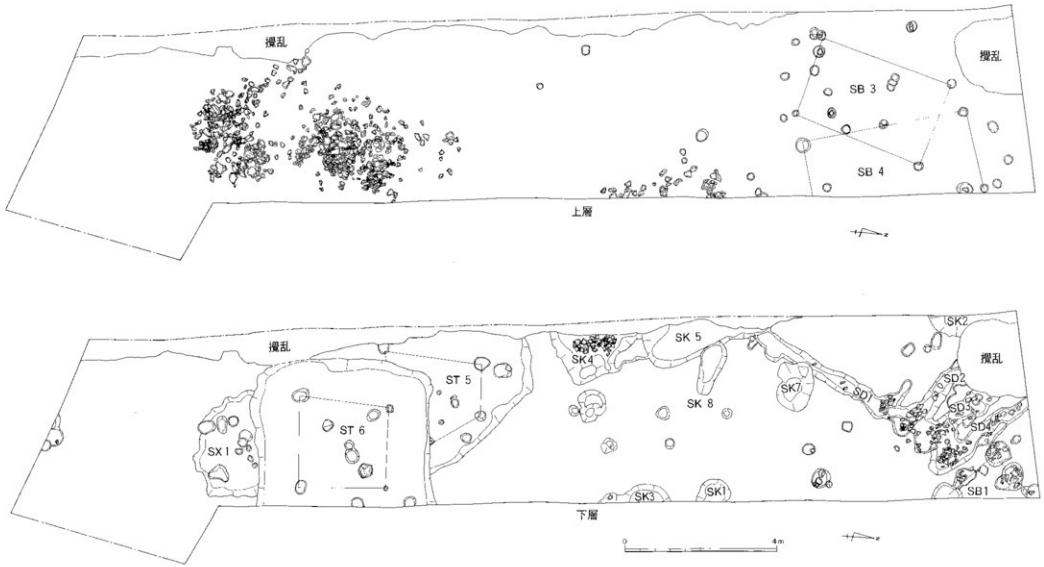


Fig 8　C－a区　検出遺構全体図(1/100)

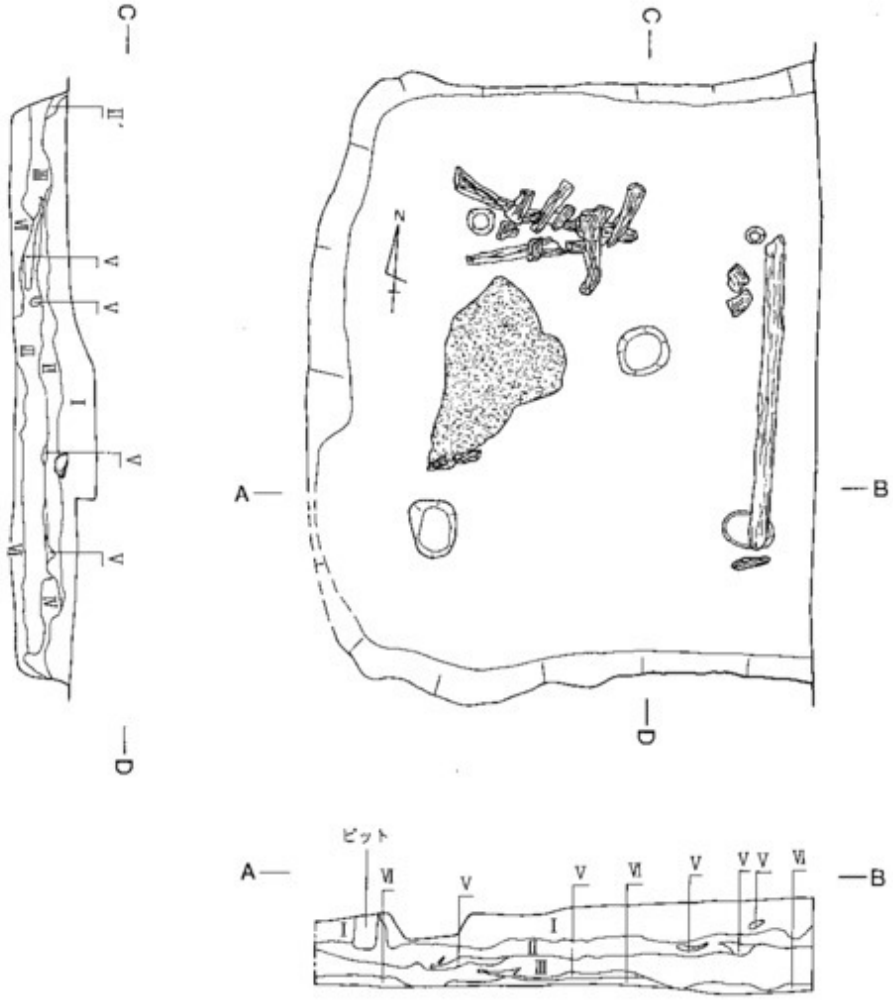
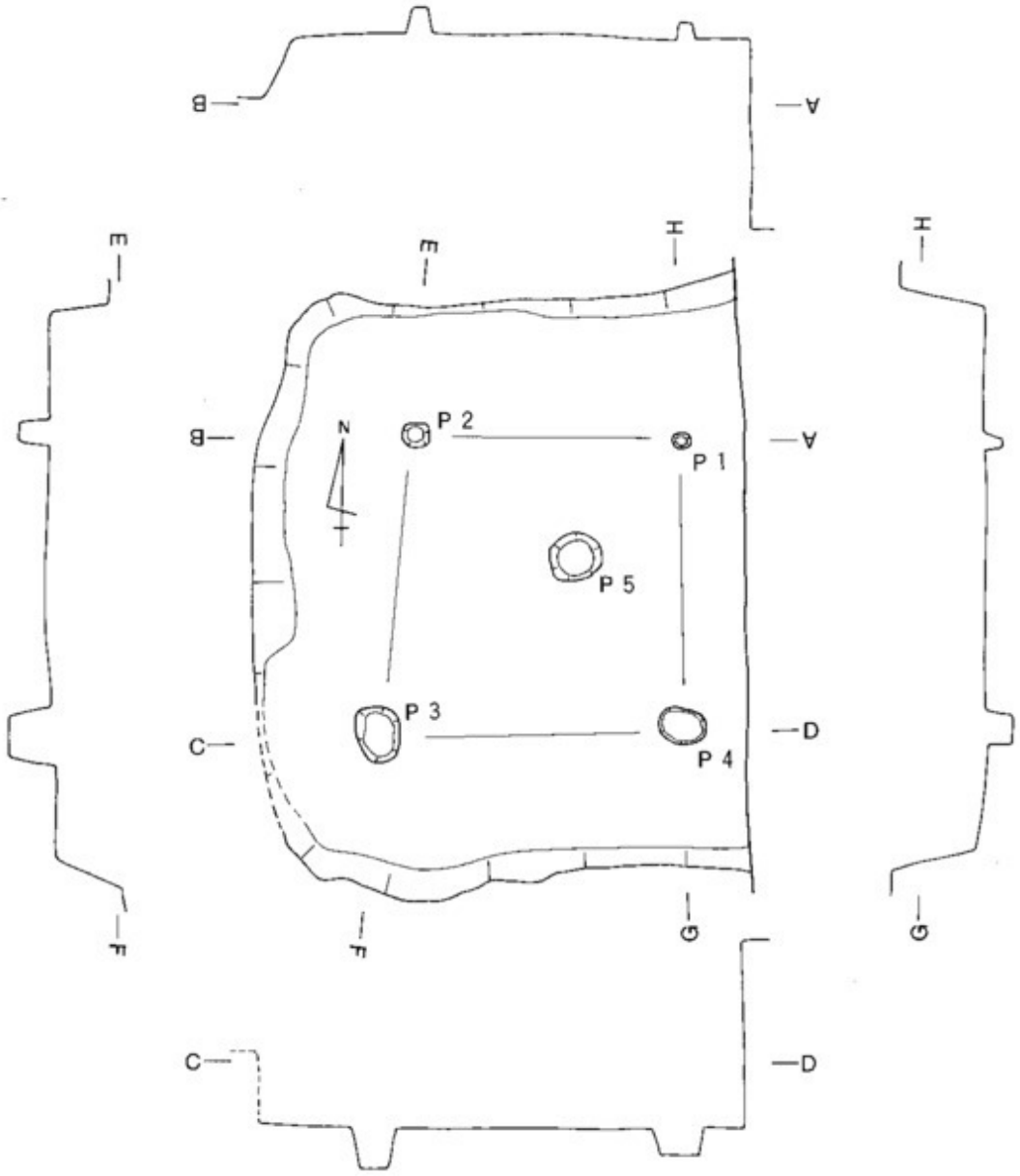


Fig 9　C－a区　ST 6　炭化物・焼土検出状態実測図

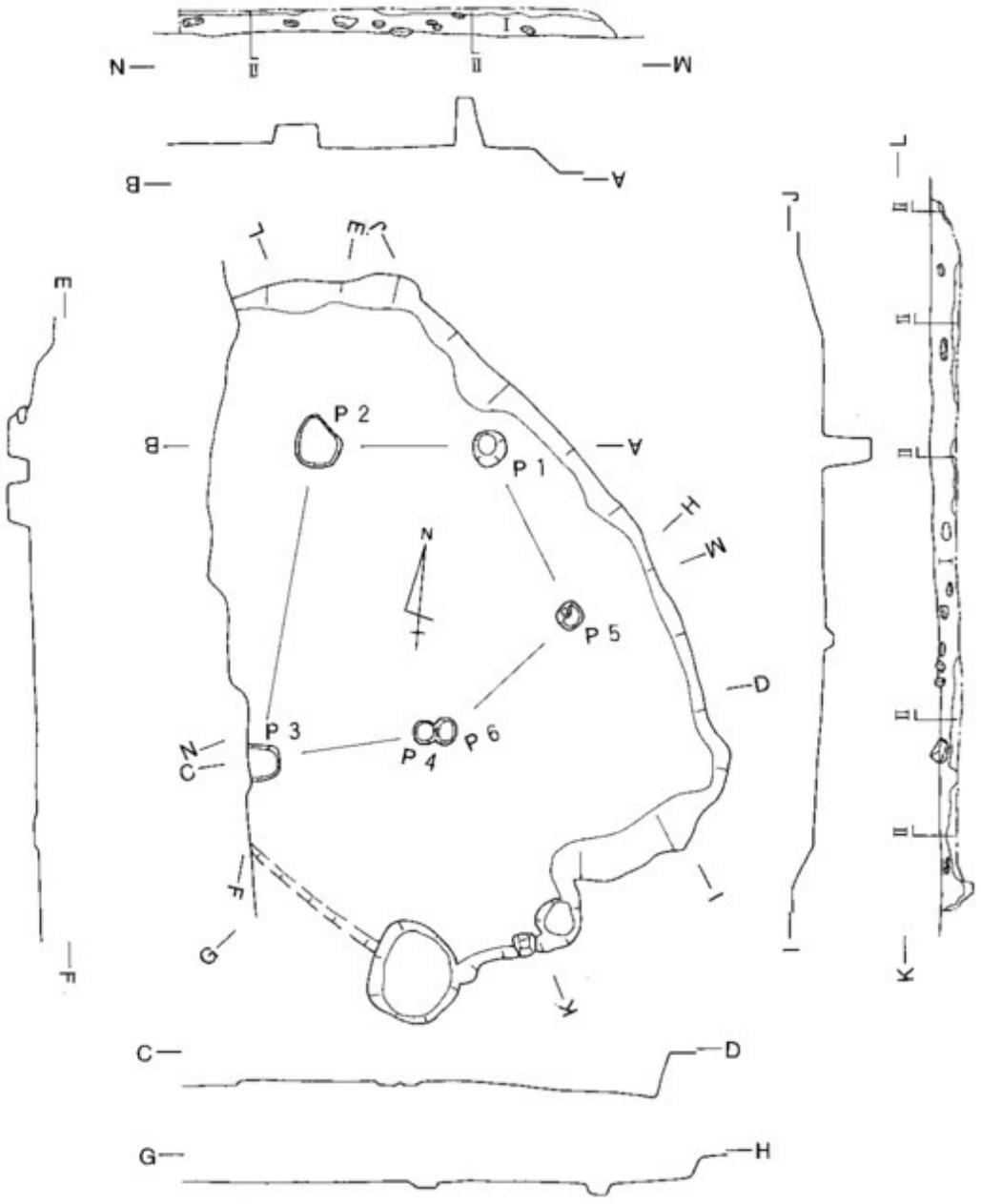


ST 6

D L =15. 20m

0 4m

Fig 10　C－a区　ST 6　実測図



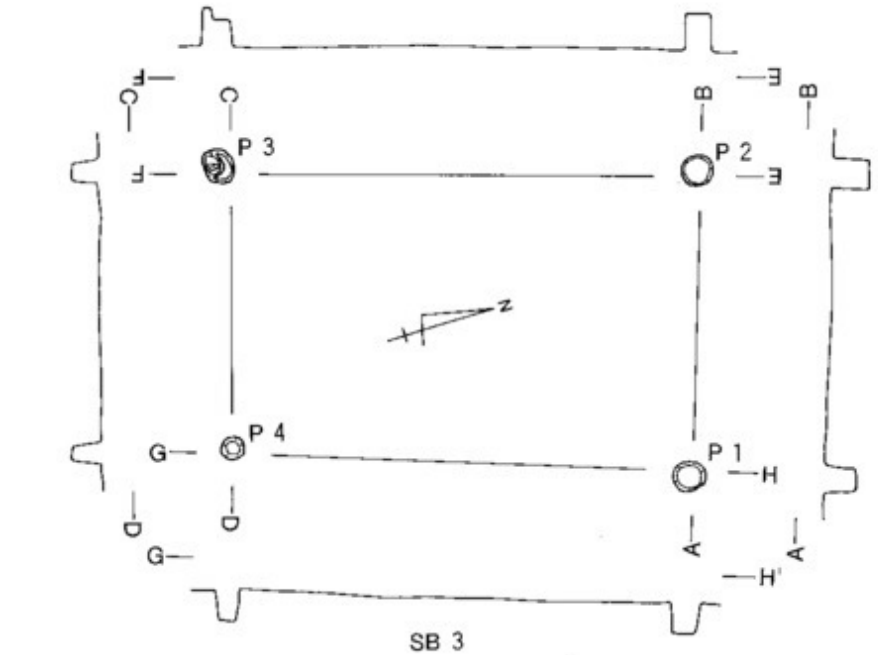
Ⅰ層　灰黒色粘土(礫混じり)
Ⅱ層　灰黄色粘質土(砂混じり)

ST 5

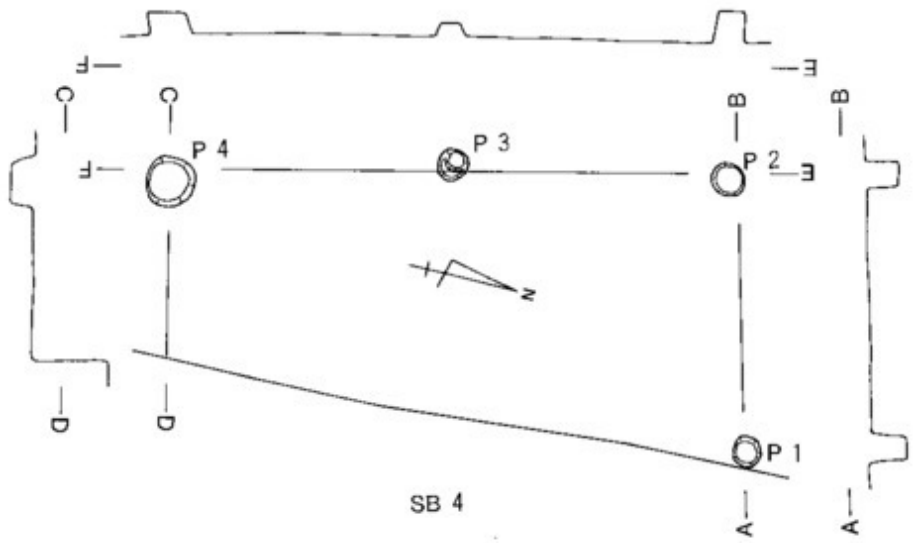
DL＝15.40m

0　4m

Fig 11　C－a区　ST 5　実測図



SB 3



SB 4

DL＝15.80m

0 4m

Fig12　C－a区　SB 3～4　実測図

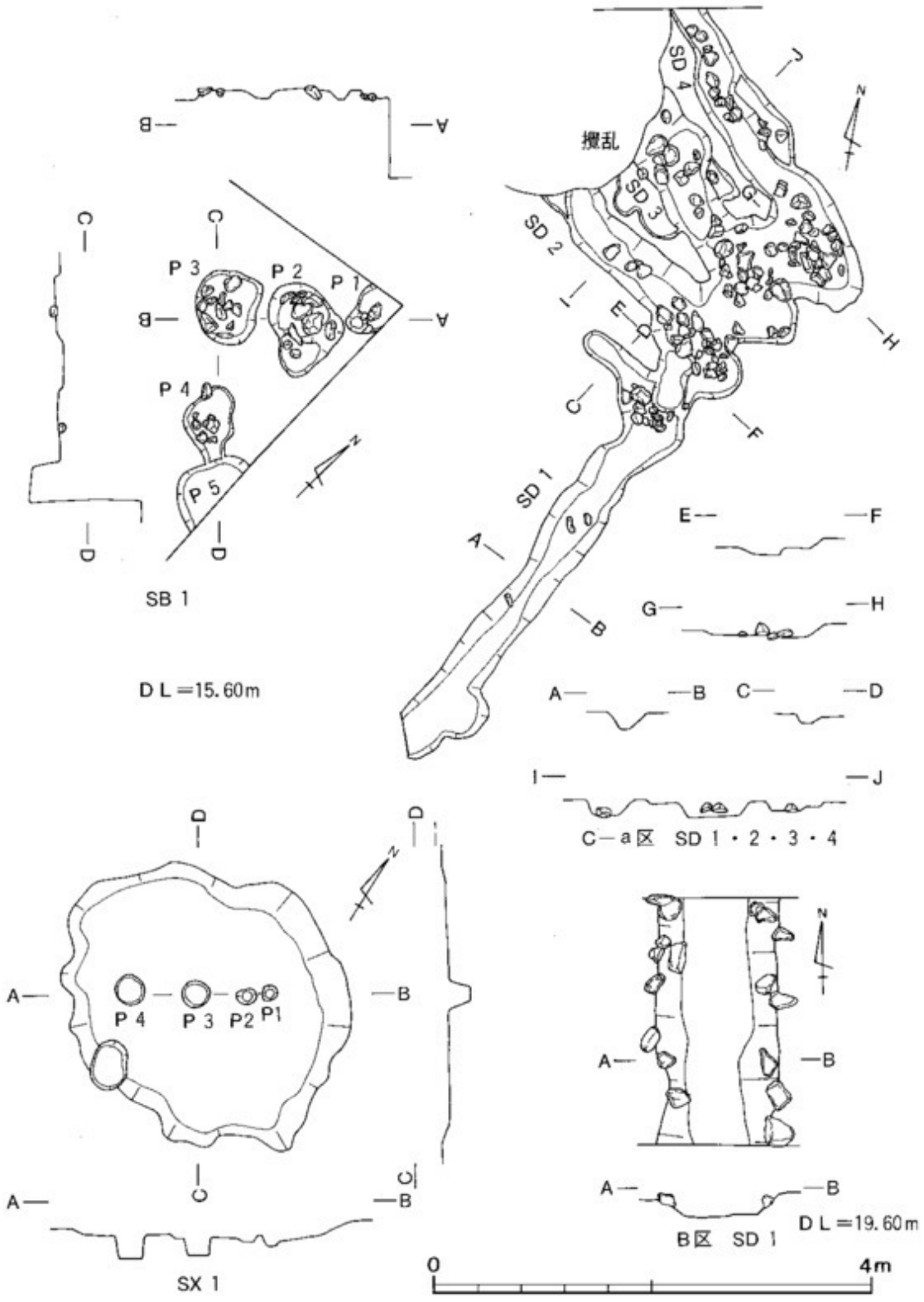


Fig13 B区 SD 1, C－a区 SB 1, SX 1, SD 1～4 実測図

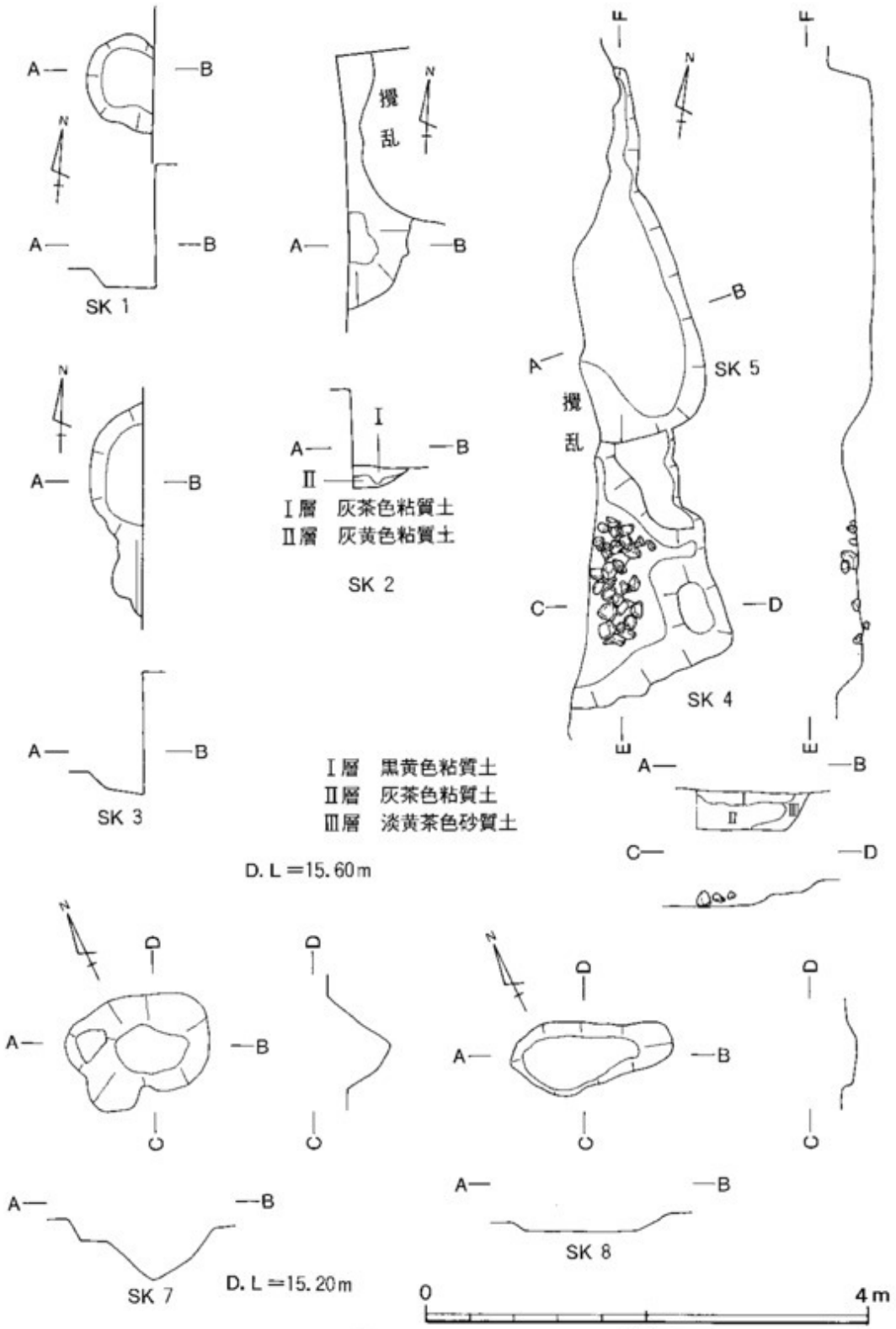


Fig 14　C－a区　SK 1～5，SK 7・8　実測図

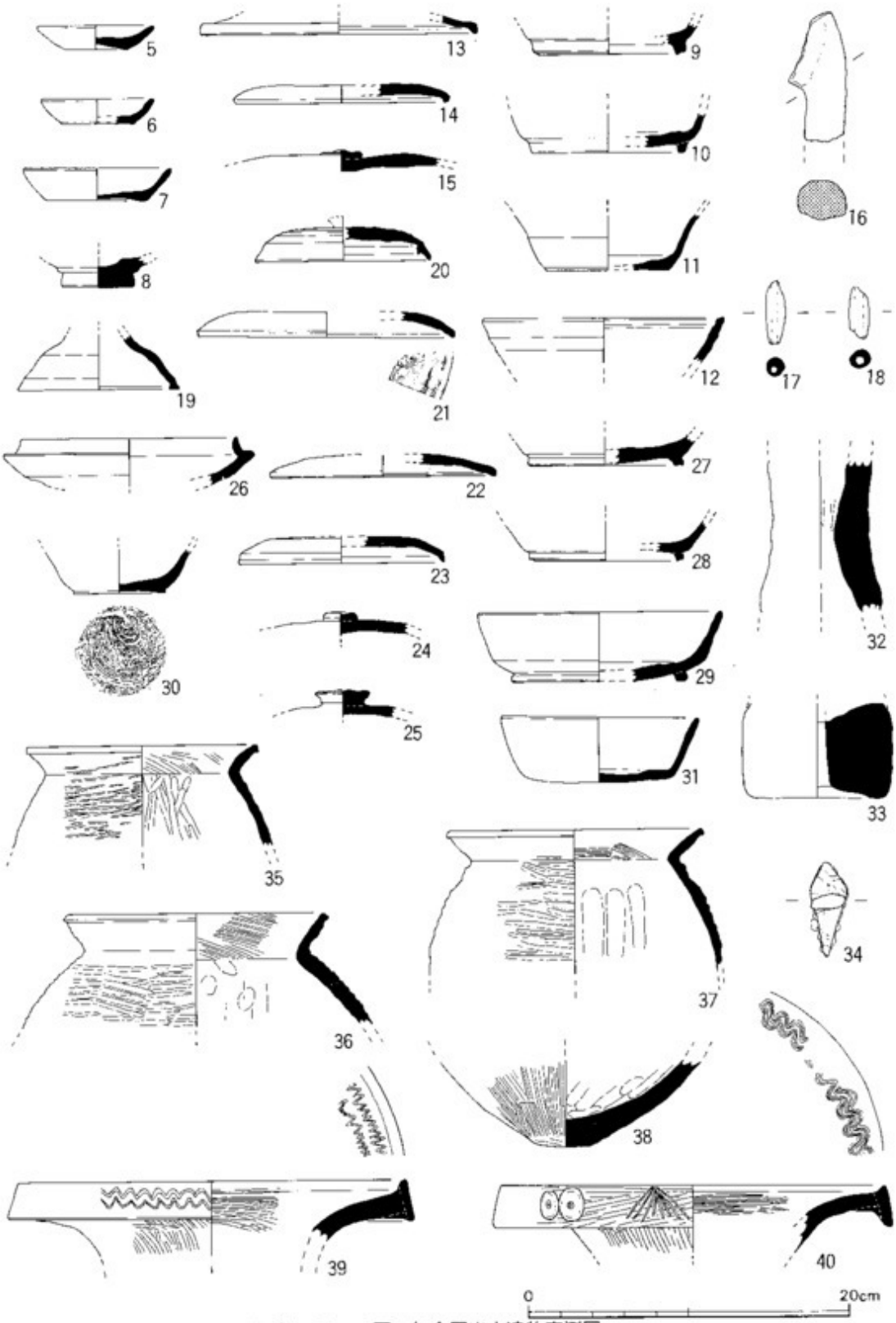


Fig 15　C－a区　包含層出土遺物実測図
（Ⅲ層：5～18，Ⅳ層：19～34，Ⅶ層：35～40）

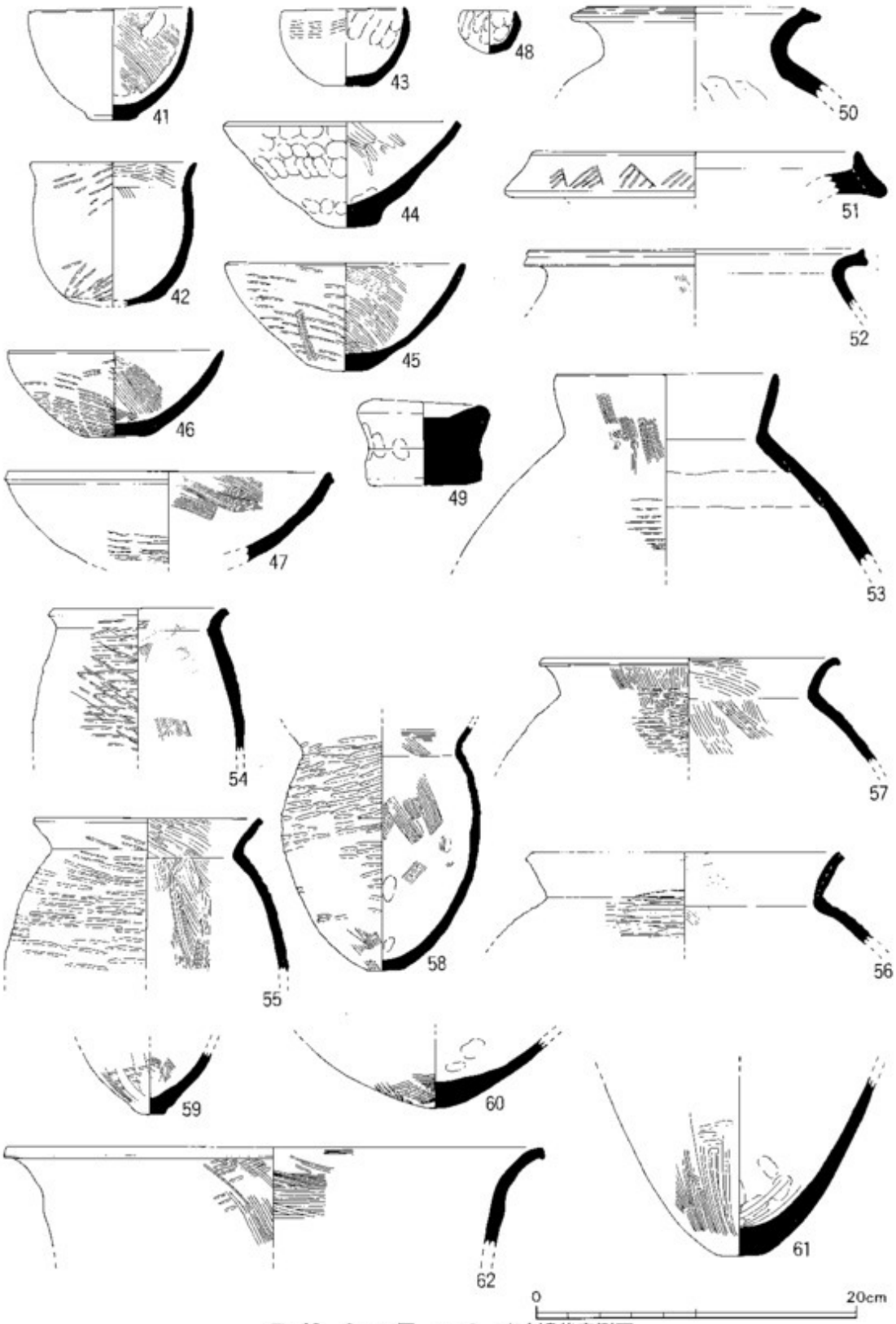


Fig 16　C－a区　ST 6　出土遺物実測図
（ST 6：41～62）

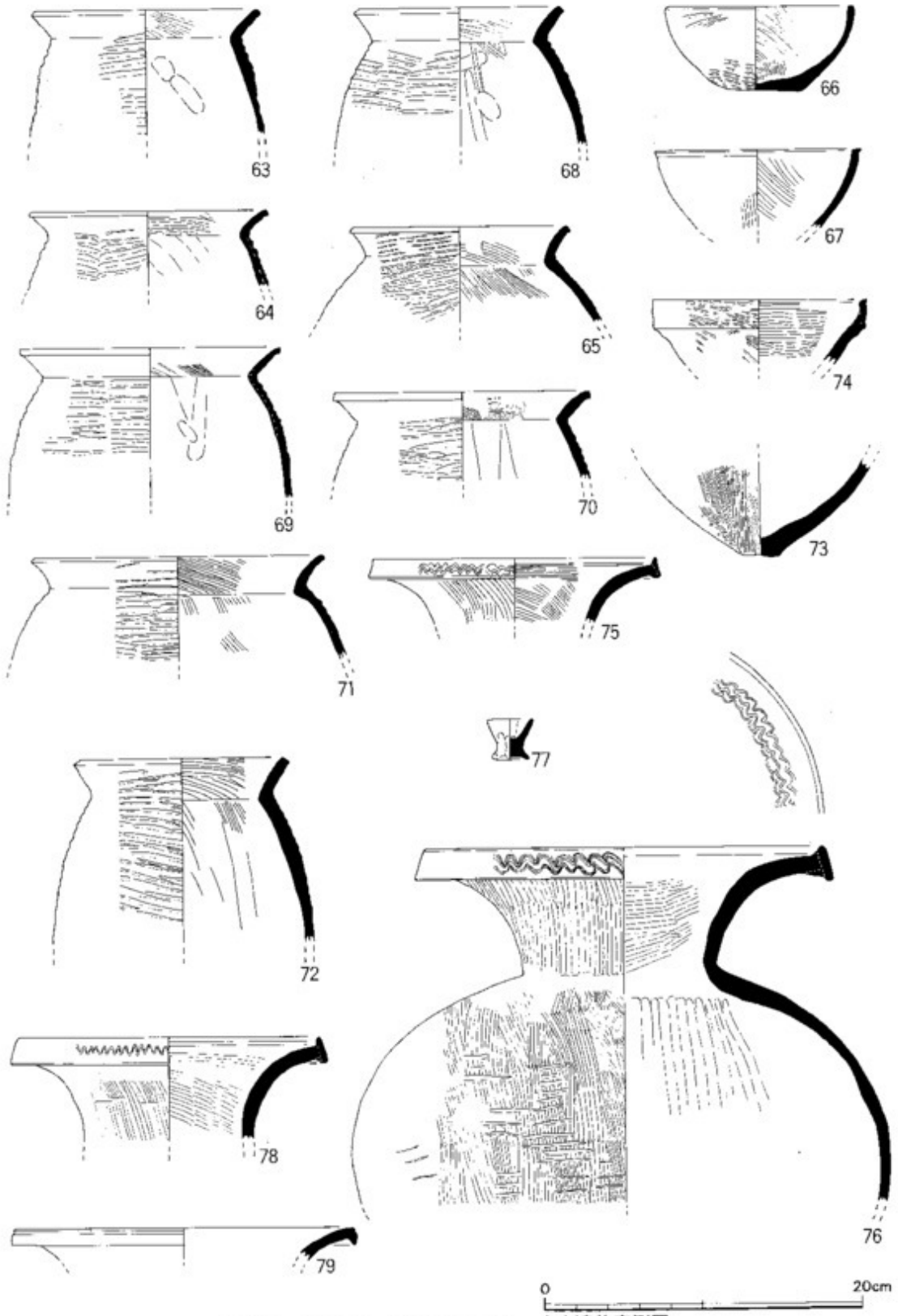


Fig 17　C－a区　SK 5・7・8　出土遺物実測図
（SK 5：63～67, SK 7：68～76, SK 8：77～79）

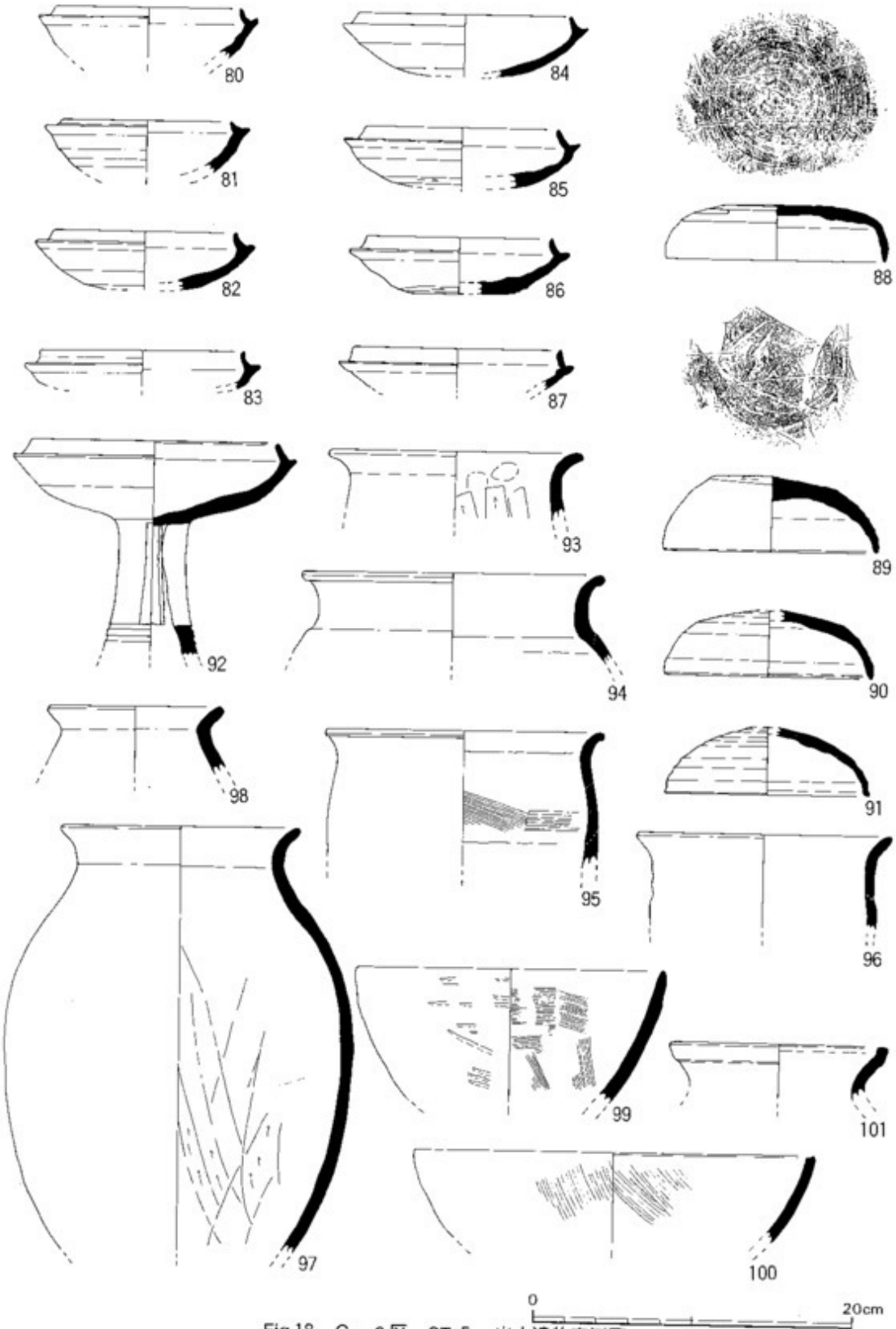


Fig 18　C－a区　ST 5　出土遺物実測図
（ST 5 ：80～101）

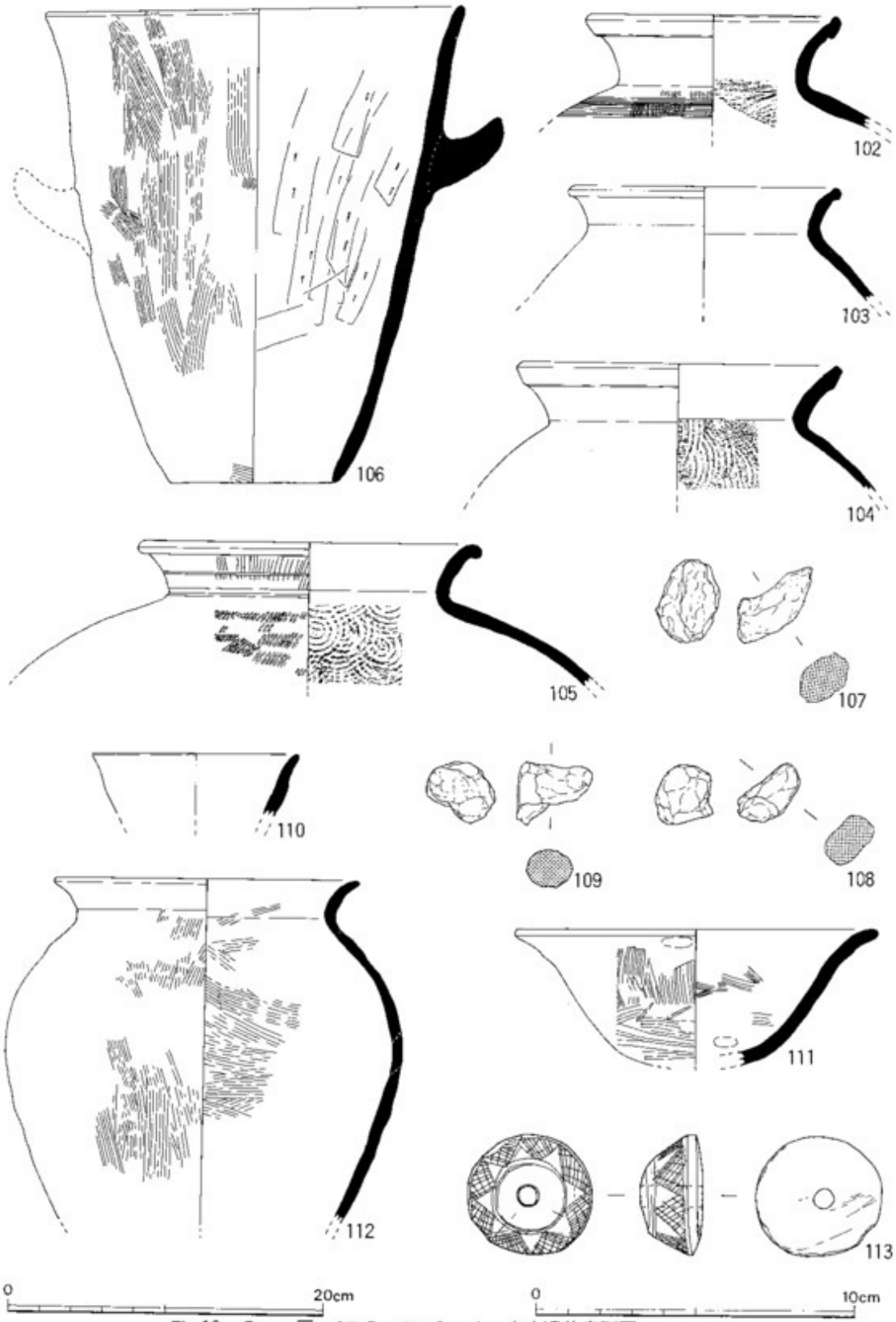


Fig 19　C－a区　ST 5，SK 2～4　出土遺物実測図
（ST 5：102～108，SK 2：109，SK 3：110，SK 4：111～113）

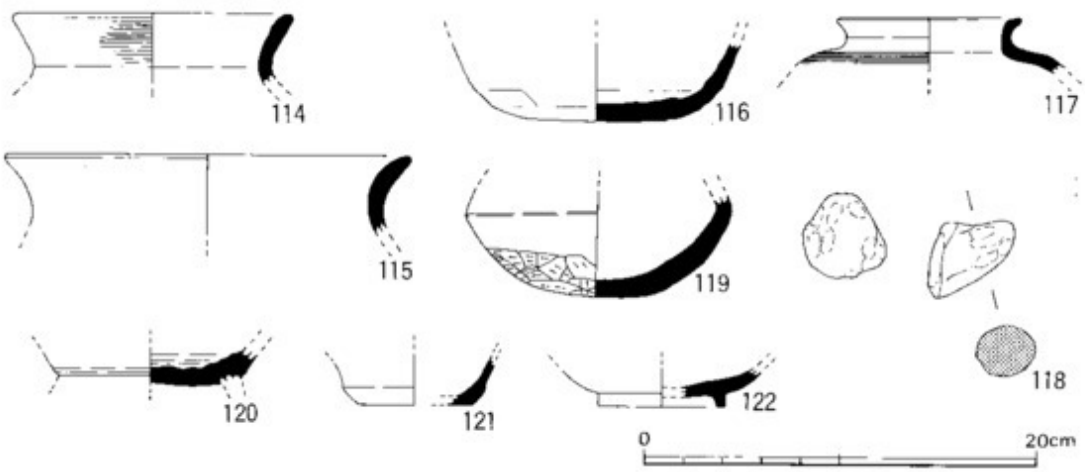


Fig 20　C－a区　SB 1，P18・19，S X 1，SD 1・3　出土遺物実測図
（SB 1：120，P18：121，P19：122，SX 1：114～116，SD 1：117・118，SD 3：119）

121は土師器杯である。体部下端外面は肥厚して斜上外方に立ちあがる。底部糸切りを認める。P19（Fig 20－122）

122は土師器貼付高台付椀である。高台は底部外周よりやや内側に僅かに外方に張り出す。高台底部は僅かに凹む。磨耗が著しく観察不可能。

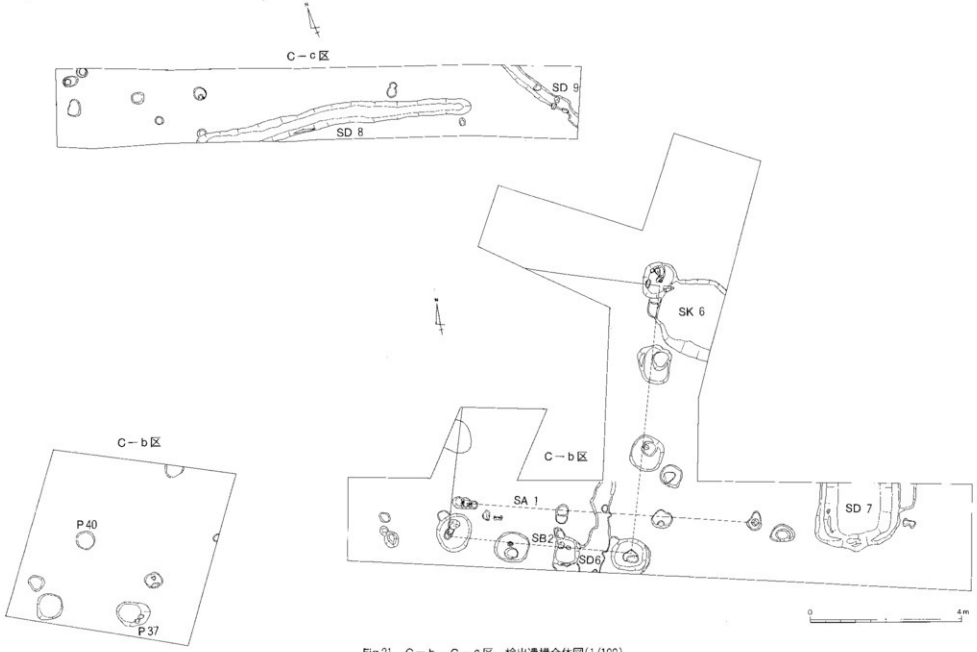


Fig 21　C－b，C－c区　検出遺構全体図(1/100)

第Ⅵ章　C－b・C－c区の調査（Fig 21）

1　基本層序（Fig 5）

C－b区における基本層序は，第Ⅰ層：耕作土，第Ⅱ層：旧耕作土，第Ⅲ層：黄茶色粘質土，第Ⅳ層：灰茶色粘質土，第Ⅳ'層：淡灰茶色粘質土（砂混じり），第Ⅴ層：灰色粘質土，第Ⅵ層：茶褐色粘質土（砂混じり），第Ⅶ層：地山（淡黄色粘質土）である。第Ⅰ層は14～28cm，第Ⅱ層は12～18cm，第Ⅲ層は4～16cmを測る。第Ⅳ層は遺物包含層である。幅56～72cmの遺構と思われる落ち込みが2カ所みられる。同層は東部へと次第に薄くなり，東端では，古代の遺構（ＳＤ７，Ⅳ'層）によって一旦消滅する。また西部の大グリットでは，礫が多くみられた。遺物は，多量の瓦を中心に，土師器，須恵器等が出土した。第Ⅴ層は，第Ⅳ層に対して若干灰色が濃くなり，東端部で消滅する。遺物は，少量ではあるが含まれていた。第Ⅵ層の東端では，自然地形と思われる落ち込みがある。第Ⅳ層と同じく遺物包含層であり，主に土師器，須恵器が出土している。

C－c区における基本層序は，第Ⅰ層：耕作土，第Ⅱ層：黄茶色粘質土，第Ⅲ層：灰茶色粘質土，第Ⅳ層：黄褐色粘質土，第Ⅴ層：茶褐色粘質土，第Ⅵ層：地山（淡黄色粘質土）である。14～24cmを測る第Ⅰ層から，旧耕作土は削平を受け，C－b区でみられた第Ⅲ層の黄茶色粘質土が第Ⅱ層に認められる。第Ⅲ層は遺物を少量含み，C－b区の第Ⅳ層にあたる。第Ⅳ及び第Ⅴ層は，それぞれほぼ同じ厚さで東へ延びている。共に遺物包含層で，瓦を主に，土師器，須恵器が出土した。なお第Ⅴ層は，東端において幅約28cmの落ち込みがみられ，何らかの遺構の可能性が強い。

2　包含層出土の遺物

包含層より出土の遺物は，大部分が瓦類で，軒平瓦・平瓦・丸瓦がある。他に土師器，須恵器，緑釉陶器，二彩陶器，風字硯などがある。以下，瓦類を中心に記述していく。なお瓦の出土位置は観察表に記載し，瓦以外の遺物の出土区は，155（C－c区・表採）を除き，すべてC－b区である。

(1)　瓦

図示し得たものは，すべて約¼個体以下の破片であるため，製作技法及び粘土素材は明らかでない。ここでは，凸面叩きの各部整形技法の違いによって，次のような型式分類を行う。

A類：凸面の叩きが縄目のもの。A_1類―縄目で幅0.2cmを測るもの。A_2類―縄目で0.4cmを測るもの。

B類：凸面の叩きが格子のもの。

C類：凸面に縄目の叩きが一部に残り，その後の調整は，なでであるいはヘラ整形によるもの。

D類：凸面になでを施すもの。

E類：凸面にヘラ整形を施すもの。

①　軒平瓦（Fig 24－123～126）

123の瓦当面は，細い凸帯を3段にわたって剛らし，端部には，この弧文を繋ぐ縦凸帯が見

られる。凸帯により瓦当面は，２つに区画されており，いわゆる「重廓文」と思われる。124は均正唐草文軒平瓦で，唐草文はシャープさがなく，笵の磨滅が認められる。125と126は均正唐草文軒平瓦で，焼成，胎土及び色調などから同一個体と思われる。

② 平瓦（Fig 25～28－127～135）

平瓦は上記の分類に従い，その特徴を有する代表的なもののみ図示した。

A_1類（Fig 25・26－128・130）—28は，焼成が不良である。凸面は端部にヘラ整形を施す。凹面には糸切り痕，指頭圧痕が若干認められる。130は，凸面に縄目の叩き目が明瞭にみられる。端部にはヘラ整形を施す。A_2類（Fig 27－132）—132は，凸面に太い縄目の叩き目が施され，指頭圧痕を残す。凹面には模骨痕が顕著である。B類（Fig 28－133～135）—133は，凸面全体に格子叩きが施され，粘土の接合痕がみられる。端部にはヘラ整形を施す。凹面においても粘土の接合痕が認められるが，指頭によりなで消されている。134は，凸面に格子叩きを施し，凹面には粗いヘラ整形が認められる。135は，凸面には格子叩きが顕著に遺存している。凹面は細い布目を有し，その上に右下りのハケ調整を施している。格子叩きの単位は，いずれも0.5×0.5cmである。C類（Fig 26・27－129・131）—凸面に縄目の叩きを施した後，129は，左下りのヘラ整形が施され，131は，なで調整がみられる。E類（Fig 25－127）—127は，凸面に縦方向のヘラ削りを施し，端部から側面にかけて窯壁片が付着している。凹面には粘土の接合痕，糸切り痕が顕著である。端部にはヘラ整形を施す。その他に142がある。凹面には「書」の草書文字とも取られるヘラ記号が残されている。

③ 丸瓦（Fig 29～31－136～142）

凸面の整形は２種類認められている。なお叩きの分類は，平瓦の分類を用いる。丸瓦は粘土紐を素材として，桶巻き作りによる製作技法を用いたと考えられる。

C類（Fig 29～31－136・138・141）—136は，凸面に一部縄目が認められ，全体になでを施す。凹面は粘土の接合痕が顕著に認められ，一部なでを施す。全体に焼成が極めて不良である。側面はヘラによる調整が二面とも認められる。138は，玉縁付きの丸瓦である。凸面は一部縄目の叩きが認められる。全体になでを施し，粘土の接合痕が認められる。厚さは2.6～3cmを測り，他の丸瓦よりやや厚い。141は，玉縁付きの丸瓦である。凸面に一部縄目を残し，全体的になでを施す。凹面にも一部なでを施す。側面はヘラ削りを施す。焼成はやや良好である。D類（Fig 30－139）—139は玉縁付きの瓦である。凸面は全体になでを施し，一部ヘラによる調整が認められる。凹面には，斜めに粘土の接合痕が顕著に認められる。焼成は良好である。

その他，分類できないものとして137・140がある。137は玉縁付きの丸瓦で，凸面は焼成不良のため観察できない。140は小破片であるが，凸面は一部なでが認められる。凹面は布目を顕著に残す。側面はヘラ削りを施す。

(2) その他の遺物（Fig 32－143～155）

143は，須恵器高杯である。Ⅱ～Ⅲ層より出土し，２段に屈曲して立ち上がり稜を有す。口

唇部は丸くおさめる。内・外面共にヨコなで調整を施す。144は，Ⅲ層出土の須恵器皿である。直線的に立ち上がり，口縁端部で肥厚して僅かに外反する。口縁端部内面は内傾して面をなす。内・外面共にヨコなで調整，底部はヘラ切りを行う。145は，Ⅲ層出土の須恵器杯蓋である。頂部は欠損し，口縁端部は強いヨコなで調整によって凹んで面をなす。内・外面共になで調整を施す。146～152は，いずれもⅣ層から出土している。146は，土師器皿である。上げ底気味の底部から緩やかに外反し，口唇部は丸くおさめる。口縁部外面及び内面は，共にヨコなで調整を施す。底部はヘラ切りを行い，外底には粘土紐の単位がみられる。147と148は土師器杯である。147は，底部と体部の間に丸味を帯びた段を有し，体部は僅かな膨らみをもって立ち上がり，短く外反する。口唇部は丸くおさめる。底部外面に重圏の圧痕状のものがある。調整の観察は不可能である。148は，上げ底気味の外方に張り出した底部から，やや直線的に立ち上がる。粘土巻き上げの後，内・外面共にヨコなで調整を施す。底部はヘラ切りを行う。149は，弥生土器甕である。口縁部は「く」の字状に外反する。口唇部は面をなし，僅かに上下に肥厚する。頸部内・外面は強いなで調整を施し，胴部外面は縦方向にハケ調整を行った後，ヨコ方向へ同じくハケ調整を施す。外面には煤が付着し，内面には僅かになで調整がみられる。150は，緑釉陶器である。内湾気味に立ち上がり，口縁部は外反し，口唇部は丸くおさめる。胎土は砂粒を含み須恵質で，全面に薄緑色の釉がかかる。151は，風字硯である。土手は斜め外方に直線的に立ち上がり，面取りを行う。断面は縦に長い長方形を呈す。陸部はよく磨滅している。152は，釘である。153は，Ⅴ層出土の土師器鉢である。2段に屈曲して立ち上がり，口唇部は丸くおさめる。胎土は砂粒を含み，粗く厚い。内・外面共に指頭圧痕がみられる以外，調整観察は不可能である。154は，Ⅵ層出土の土師器杯である。平底の底部から外反気味に立ち上がり，口唇部は丸くおさめる。外面には，やや紅色を帯びた部分がある。底部はヘラ切りを行う。155は，須恵器甕である。口縁部は一旦垂直に近く立ち上がった後，外反する。口唇部は面取りを行う。外面は叩き目を施し，屈曲部には強いなでが認められる。

3 遺　　構

(1) 古墳時代

古墳時代の遺構としては，掘立柱建物1棟，柵列1列，溝1条等を検出した。各柱穴及び溝の埋土は，茶褐色粘質土である。また遺構の組合せやその変遷については総括に譲る。

掘立柱建物

ＳＢ２（Fig 22）

ＳＢ２は，Ｃ－ｂ区及び拡張区，第Ⅶ層上面で検出した。桁行３間（7.56ｍ）×梁間３間（5.04ｍ）の南北棟掘立柱建物で，桁・梁とも調査区外へ延びている。棟方向は，Ｎ－15°40′－Ｅであり，真北よりやや東へ振っている。柱間距離は，桁行2.30～2.86ｍ間，梁間1.40～2ｍ間となっている。柱穴の掘り方は，ほぼ楕円形で，径60～98㎝を測り，柱痕径は20～40㎝である。これらの柱穴の深さは，検出面より40～53㎝である。遺物は，多量の土師器，須恵器等が

出土し，図示できたのは須恵器高杯（156），杯身（157・158），土師器甑（159）である。

柵　　列

ＳＡ１（Fig 23）

ＳＡ１は，Ｃ－ｂ区，第Ⅶ層上面で検出した東西の塀跡である。主軸方向はＮ－76°30′－Ｗと，ほぼ真北に直交している。規模は，３間（7.96ｍ）で，柱間距離は，2.48～2.80ｍである。柱穴の掘り方は，楕円形及び不整形で，径26～54cm，柱痕径は18～34cmと推定される。これらの柱穴の深さは，検出面より13～26cmである。遺物は，土師器，須恵器が数点出土し，図示できたのは土師器甕（162）である。

柱　　穴

Ｐ37（Fig 21）

Ｃ－ｂ区西端の大グリットに位置する。平面は楕円形を呈し，長径90cm，短径54cm，深さ36.8cmを測る。埋土は黄茶色粘質土で，遺物は，須恵器高台付杯（162）が出土している。

Ｐ40（Fig 21）

Ｃ－ｂ区西端の大グリットに位置する。平面は円形を呈し，長径52cm，短径42cm，深さ25.6cmを測る。埋土は黄茶色粘質土で，遺物は，須恵器杯蓋（161）が出土している。

溝

ＳＤ６（Fig 23）

ＳＤ６は，Ｃ－ｂ区中央部，第Ⅶ層上面で検出した南北に延びる溝である。南側は掘立柱建物の柱穴（Ｐ－５）を切って掘り込まれていた。溝は，幅34～70cm，深さ２～10cmを測る。主軸方向は，Ｎ－20°20′－Ｅであり，断面形は浅い逆台形を呈す。遺物は，土師器細片が数点，須恵器提瓶が１点出土した。

(2)　奈良時代末～平安時代

奈良時代末～平安時代の遺構としては，土坑１基と溝３条を検出した。

土　　坑

ＳＫ６（Fig 23）

ＳＫ６は，Ｃ－ｂ拡張区，第Ⅵ層上面で検出した。古墳期の柱穴（Ｐ１）を切って掘り込まれていた。東側は調査区外で不明であるが，平面は楕円形を呈し，長径約２ｍ，深さ20cmを測る。長軸方向はＮ－49°－Ｗである。埋土は茶褐色粘質土の単純一層である。遺物は，土師器，瓦が出土し，図示できたのは土師器杯（163～168），羽口（169）である。

溝

ＳＤ７（Fig 23）

ＳＤ７は，Ｃ－ｂ区東端，第Ⅳ層上面で検出した。北側は調査区外であるため断定はできないが，壁の緩やかな上がり具合から，溝の端部であろうと推定される。断面形は逆台形を呈し，幅1.8～2.54ｍ，深さ59～64cmを測る。主軸方向はＮ－80°－Ｗである。埋土は淡灰茶色粘質土

（砂混じり）の単純一層であった。遺物は，二彩陶器２点をはじめ，土師器，須恵器，瓦等が多量に出土したが，図示できたのは須恵器杯蓋（173），杯身（174・175），瓦（170～172），釘（176）である。

ＳＤ８（Fig 23）

ＳＤ８は，Ｃ－ｃ区，第Ⅴ層上面で検出した。溝は，東西に延び，幅40～56cm，深さ17～28cmを測る。主軸方向はＮ－79°30′－Ｗである。断面形は逆台形を呈し，壁は，急角度で上がる箇所と緩やかに上がっている箇所がある。埋土は２層に区別でき，Ⅰ層：淡黄色粘質土（濃茶色粘質土混じり），Ⅱ層：淡灰黄色粘質土（暗灰黄色粘質土混じり）である。遺物は，土師器，須恵器，瓦が数点，白磁１点が出土した。

ＳＤ９（Fig 23）

ＳＤ９は，Ｃ－ｃ区東端，第Ⅴ層上面で検出した。溝は，幅18－34cm，深さ５－８cmを測る。主軸方向はＮ－33°－Ｗである。断面形は逆台形を呈し，壁は緩やかに上がっている。埋土は淡灰黄色粘質土の単純一層である。遺物は，主に瓦の破片で，土師器，須恵器が数点出土した。

４　遺　　物

(1) 古墳時代

今回の調査で出土した古墳時代の遺物には，土師器を中心に須恵器等がある。いずれも破片であるため，比較的底部及び口縁部の残りの良いものを選んで図示した。以下，各遺構から出土した遺物の概要を述べることにする。

掘立柱建物

ＳＢ２（Fig 33－156～159）

156は，須恵器高杯脚部である。屈曲して脚端部に至る。脚端部は面をなす。内・外面共にヨコなで調整を施す。157・158は，須恵器杯身である。157は，立ち上がりが直線的に内傾し，口唇部は丸くおさめる。受部外面の下に，なで調整の時できた凹みがある。158は，直線的に立ち上がり，受部はつまんでヨコなで調整を施す。立ち上がりは外反気味に内傾する。内・外面共にヨコなで調整を施す。159は，土師器甑である。口縁部は直線的に外反し，口唇部は丸くおさめる。内・外面共にヨコ方向のハケ調整を施す。

柵　　列

ＳＡ１（Fig 33－160）

160は，土師器甕である。緩やかに弧状を描いて外反し，口唇部は丸くおさめる。調整は観察不可能である。

柱　　穴

Ｐ37（Fig 33－162）

162は須恵器高台付杯である。高台は外方に強く踏んばる。高台はつまんで強くヨコなでを施す。

P40（Fig 33－161）

161は，須恵器杯蓋である。口唇部は丸くおさまり，直線的に立ち上がって稜をなし頂部に移行する。外面はなで調整を施し，頂部中央にヘラ削りがみられる。

(2) 奈良時代末～平安時代

奈良時代末～平安時代の遺物は，底部にヘラ切りのあるほぼ完形に近い状態の土師器杯が出土した。その他に須恵器，瓦，羽口等がある。以下，各遺構から出土したこれらの遺物の概要を述べることにする。

土　　坑

ＳＫ６（Fig 33－163～169）

163～168は土師器杯である。163は，底部から丸味をもって立ち上がり，口縁部は外反する。口唇部は尖り気味である。底部はヘラ切りを行い，体部内・外面共にヨコなで調整を施す。内面には煤が付着する。164は，底部から丸味を帯びて立ち上がり，口縁部は小さく外反し，口唇部は丸くおさめるが，強いヨコなでによって僅かに肥厚する。外底には粘土紐の単位がみられる。内面には煤が付着する。165は，内湾気味に立ち上がり，口縁部は緩やかに外反する。口唇部は丸くおさめる。底部はヘラ切りを行い，内・外面共にヨコなで調整を施す。内・外面共に煤が付着する。166は，平底の底部から丸味を帯びて立ち上がり口縁部は外反する。口唇部は丸くおさめる。底部はヘラ切りを行い，外底には粘土紐の単位がみられる。167は，平底の底部を有し，胴部は丸味を帯びて立ち上がる。底部はヘラ切りを行い，外底には粘土紐の単位がみられる。168は，平底の底部から内湾気味に立ち上がり，調整は観察不可能であるが，底部外面に僅かにヘラ切りがみられる。他に169，羽口がある。

溝

ＳＤ７（Fig 33－170～176）

170～172は，瓦である。170は，素縁蓮弁文軒丸瓦である。遺存度は約¼で同縁径16.3cm，内区径12.1cmを測る。二次焼成を受けており，整形は不明であるが，一部ヘラ削り，周縁に指頭圧痕を認める。花弁はやや小形で，肉厚に表現されて，花弁中央に沈線を施していると思われる。花弁は八葉と推定される。中房は欠損しているため不明である。全体的に磨耗が著しい。なお，時期的には白鳳期のものと思われ，混入した可能性が強い。171は，平瓦でA_1類に属する。凸面は0.2cmの縄目の叩きがみられ，一部粘土紐痕を残す。172は，軒平瓦の瓦当面が欠損したものである。顎は段顎をなし，厚さ6.5cmを測る。凸面は格子の叩きがみられ，端部はヘラ削りを施す。凹面はヘラ削りの後，なで調整を施す。一部接合痕が認められる。173は，須恵器杯蓋である。口縁部は「Ｓ」字状に屈曲し，端部は凹む。口唇部は丸くおさめる。内・外面共にヨコなで調整を施す。174・175は，須恵器杯身である。174は，平底の底部から外反気味に立ち上がり，口唇部は平坦な面をもつ。内・外面共にヨコなで調整を施す。175は，台形状の高台を有し，内面中央部は器厚が薄くなる。内・外面共にロクロによるヨコなで調整を施す。他に176，釘がある。

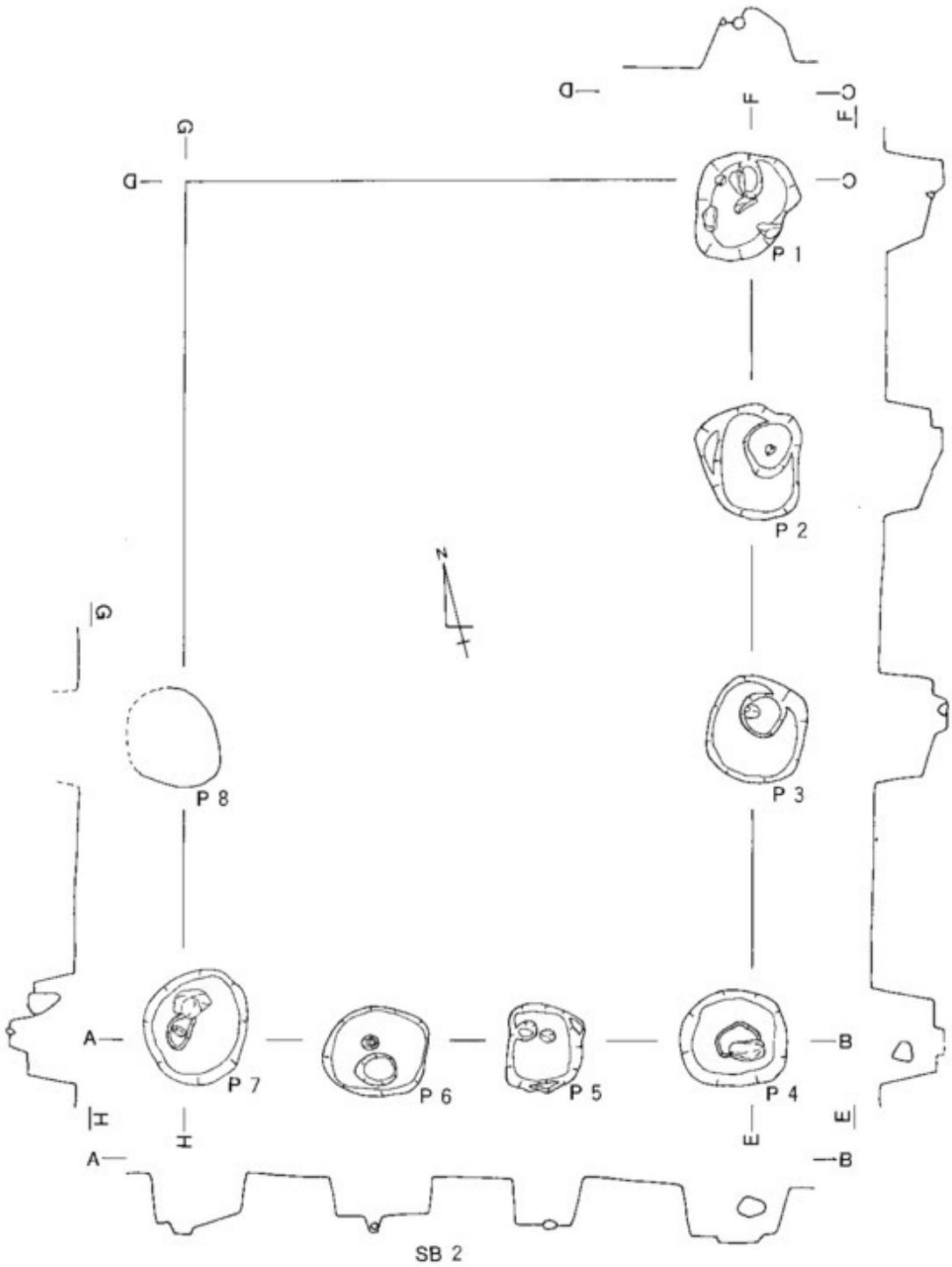


Fig 22　C－b区　SB 2　実測図

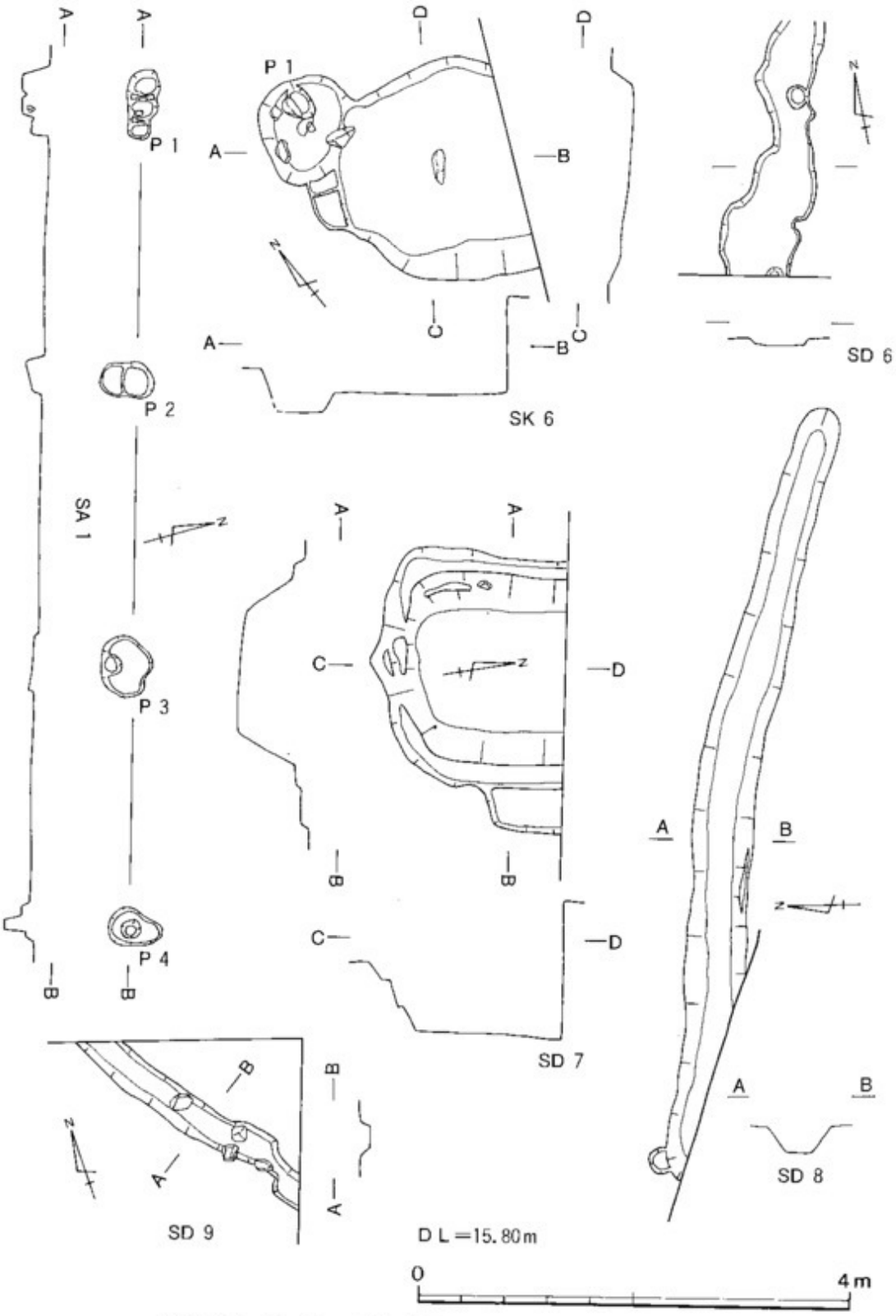
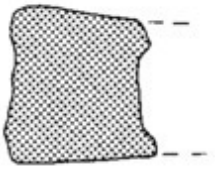
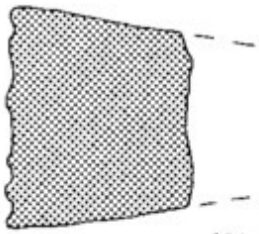


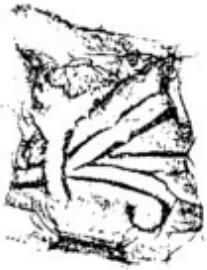
Fig 23　C－b，C－c区　SA 1，SK 6，SD 6～9　実測図

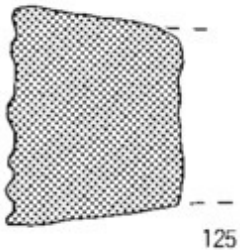


123

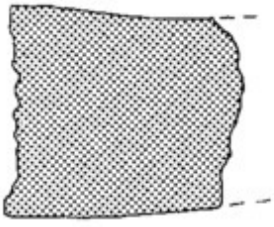


124





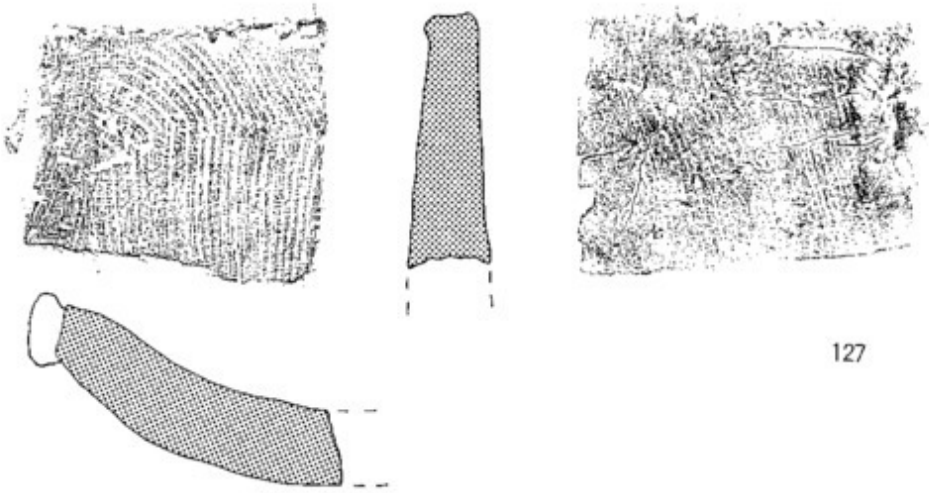
125



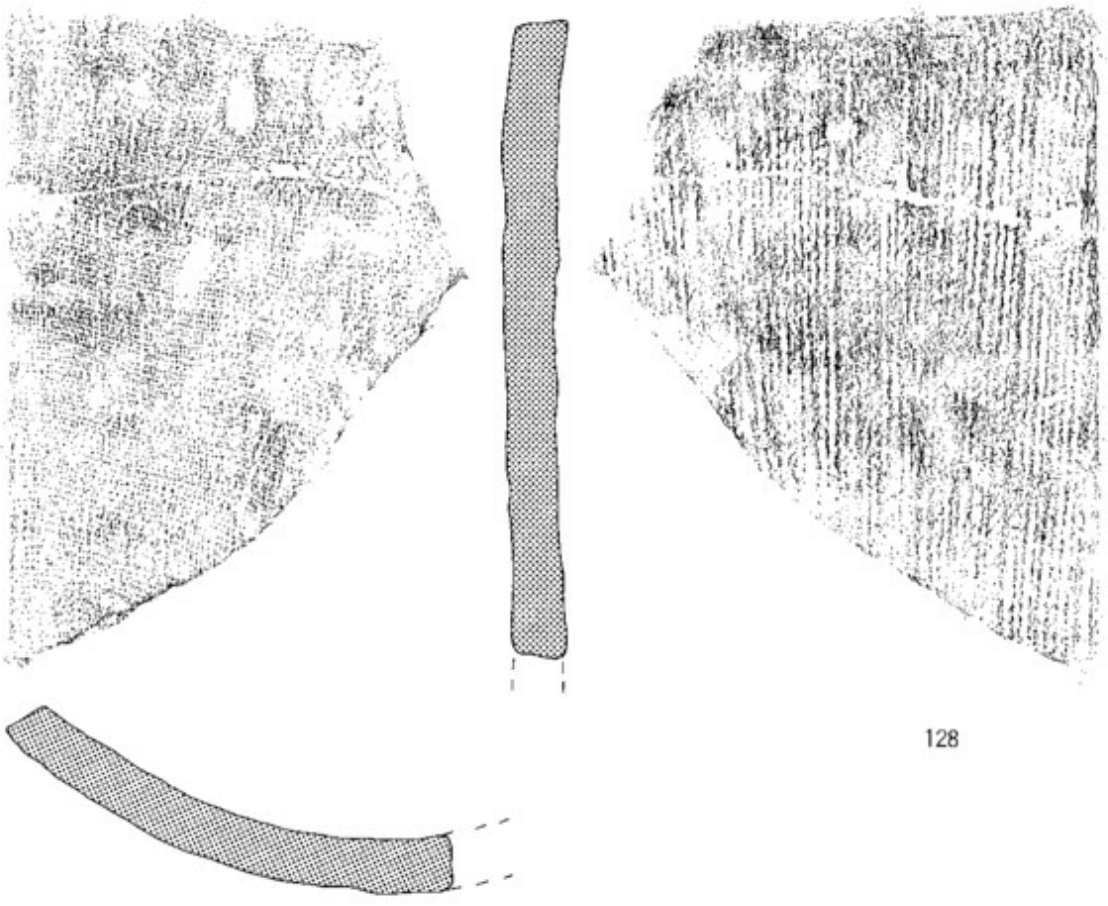
126

0 20cm

Fig 24　C－b，C－c区　包含層出土軒平瓦実測図
（Ⅲ層125，Ⅳ層123・126，Ⅴ層124）



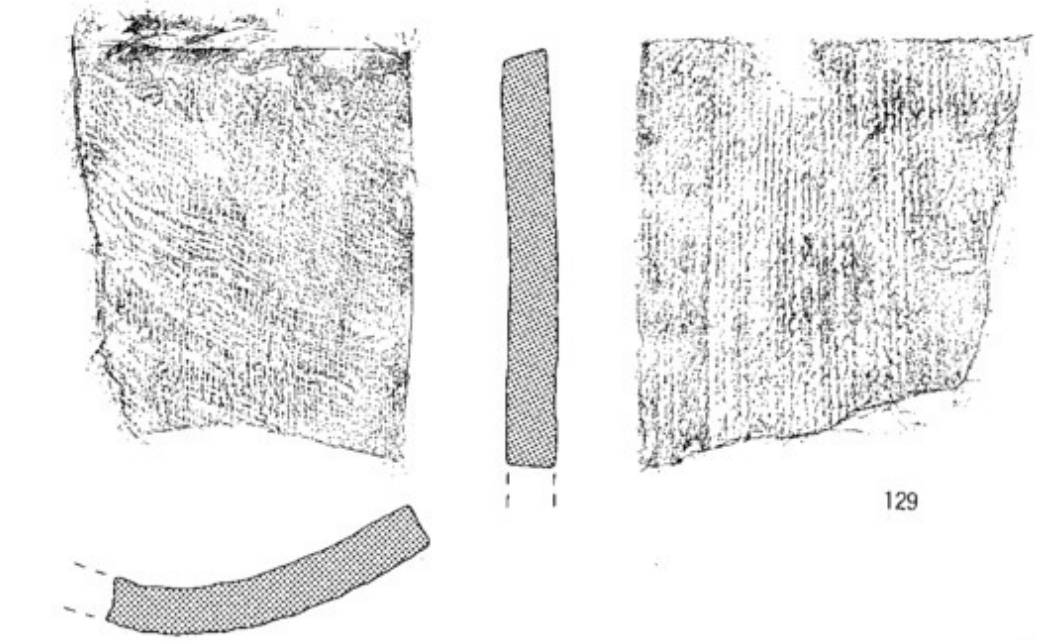
127

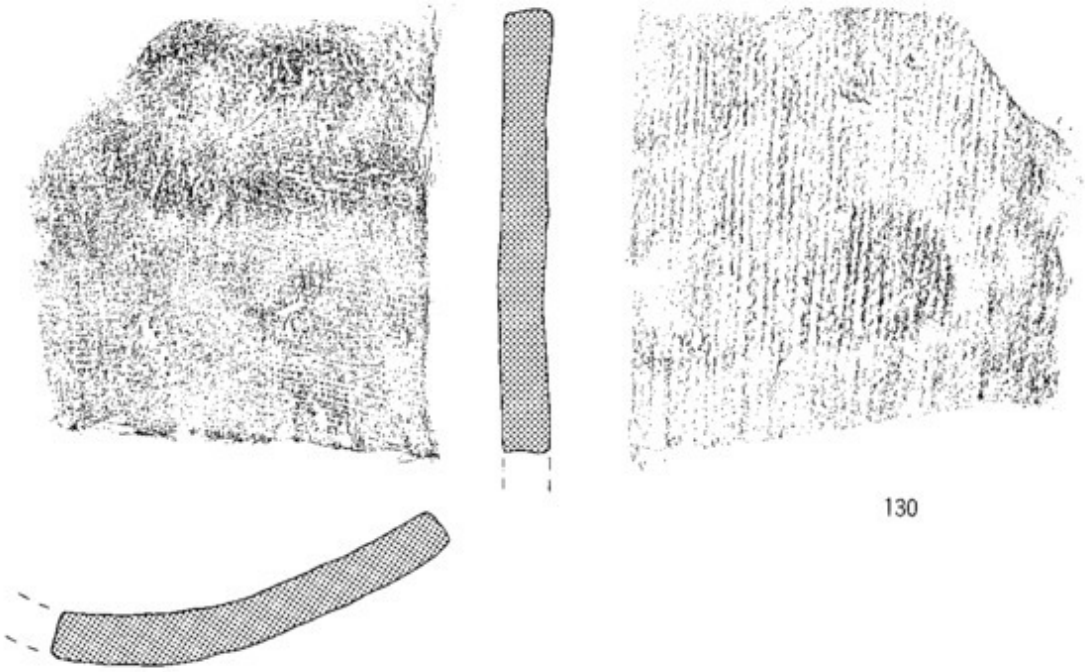


128

0 20cm

Fig 25　C－b，C－c区　包含層出土平瓦(1)実測図
（Ⅳ層127，Ⅵ層128）





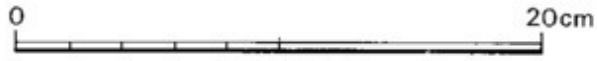


Fig 26　C－b，C－c区　包含層出土平瓦(2)実測図
(Ⅳ層130，Ⅵ層129)

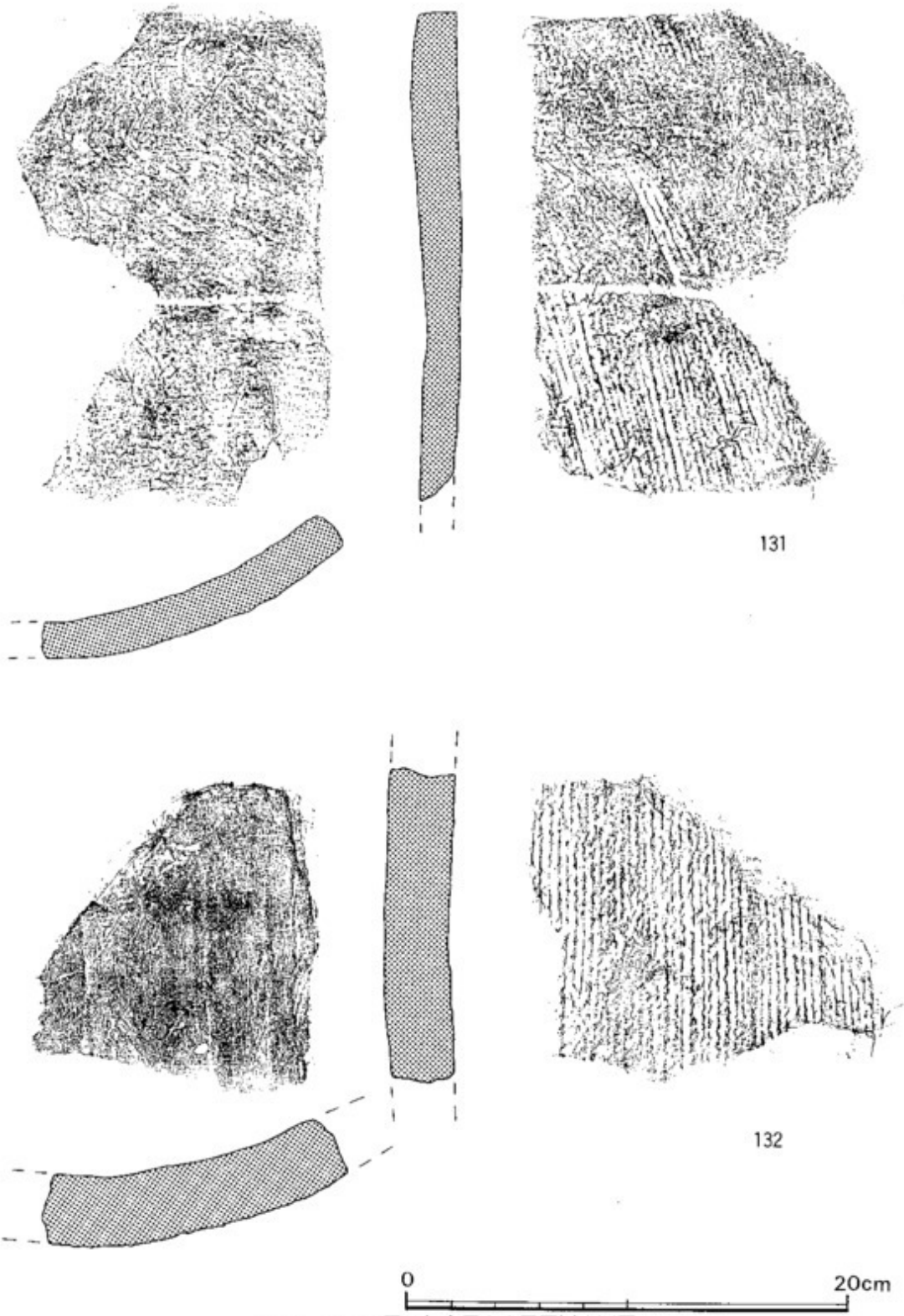


Fig 27　C－b区　包含層出土平瓦(3)実測図
(Ⅲ層132，Ⅳ層131)

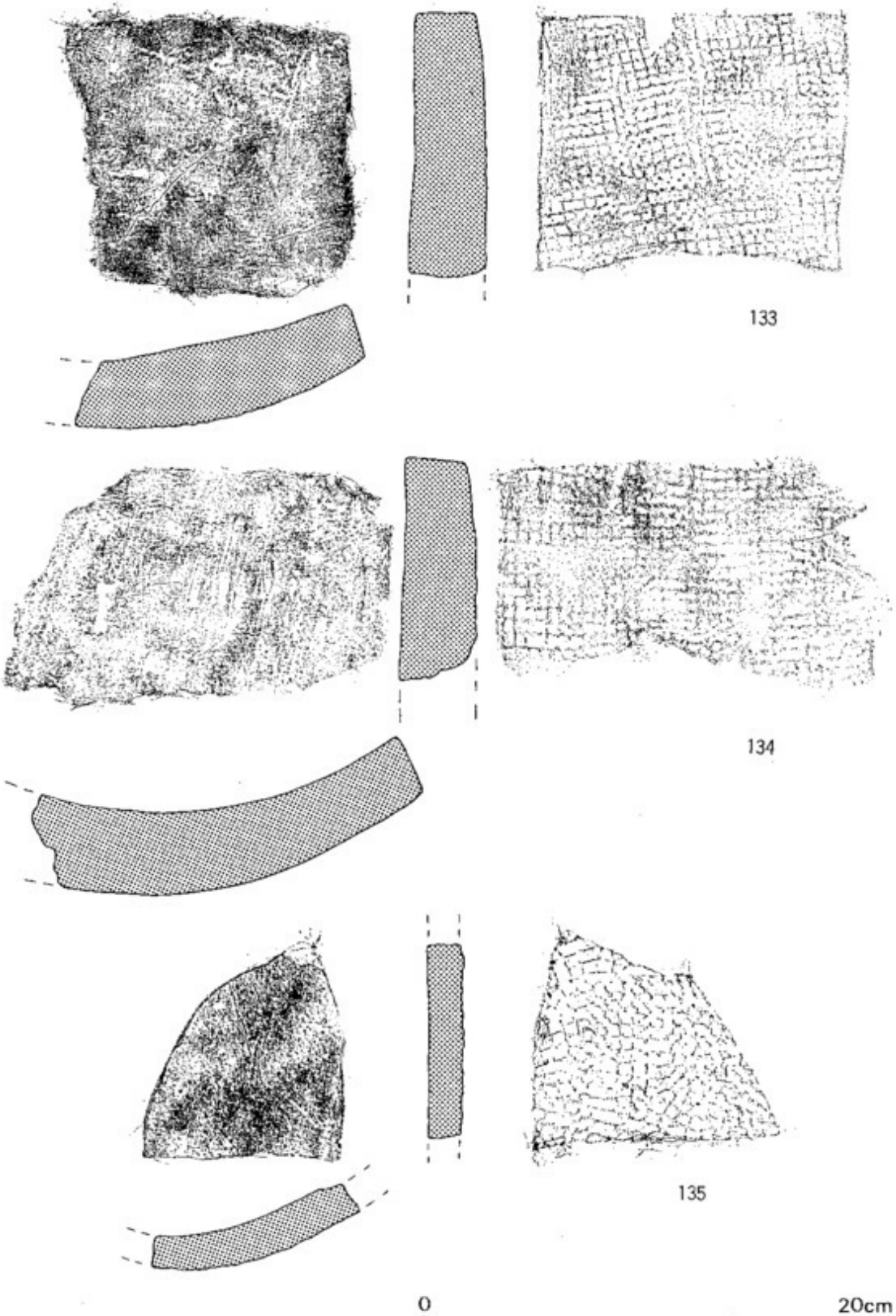


Fig 28　C－b区　包含層出土平瓦(4)実測図
(Ⅳ層133～135)

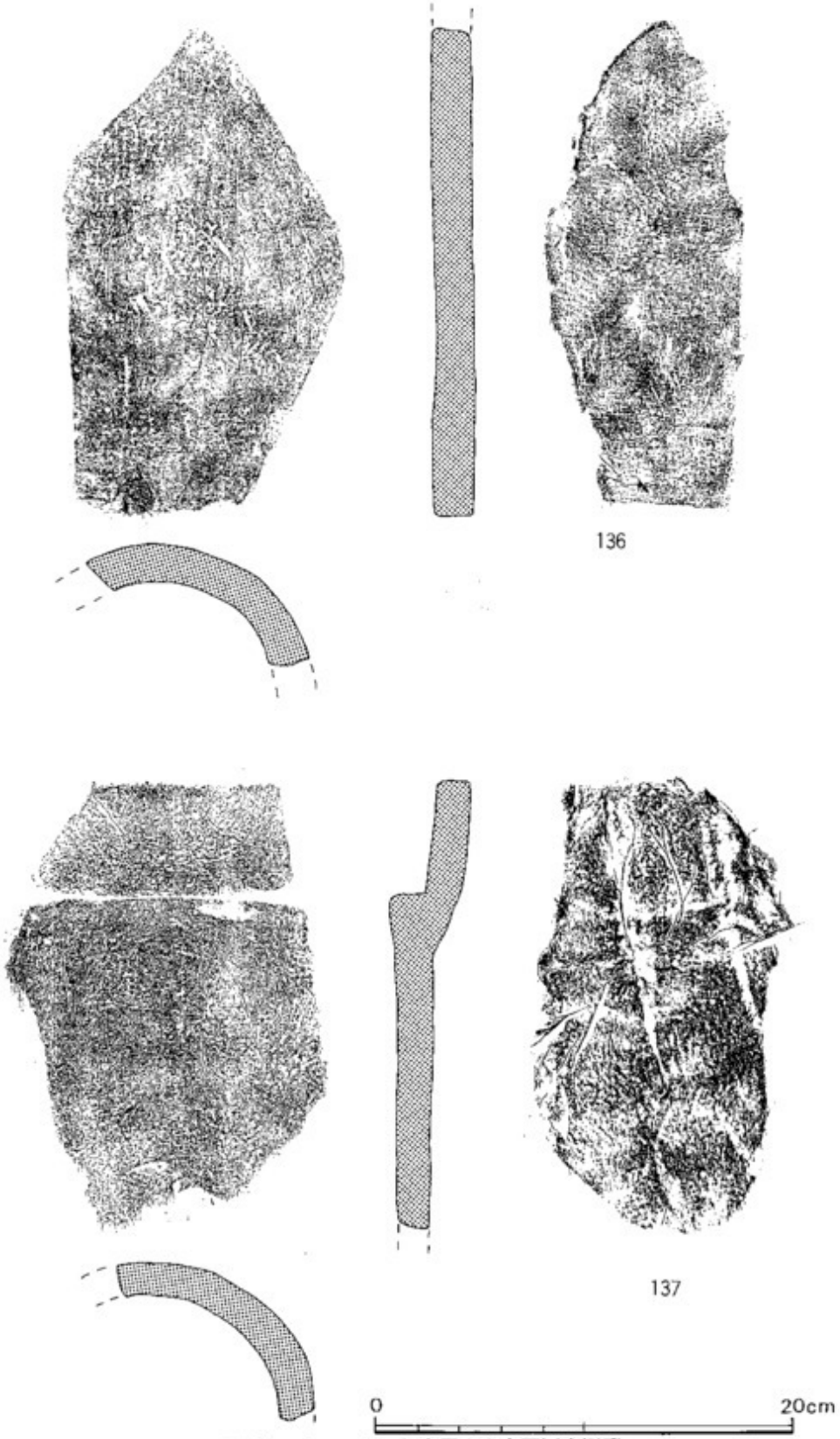


Fig 29　C－c区　包含層出土丸瓦(1)実測図
(Ⅳ層136・137)

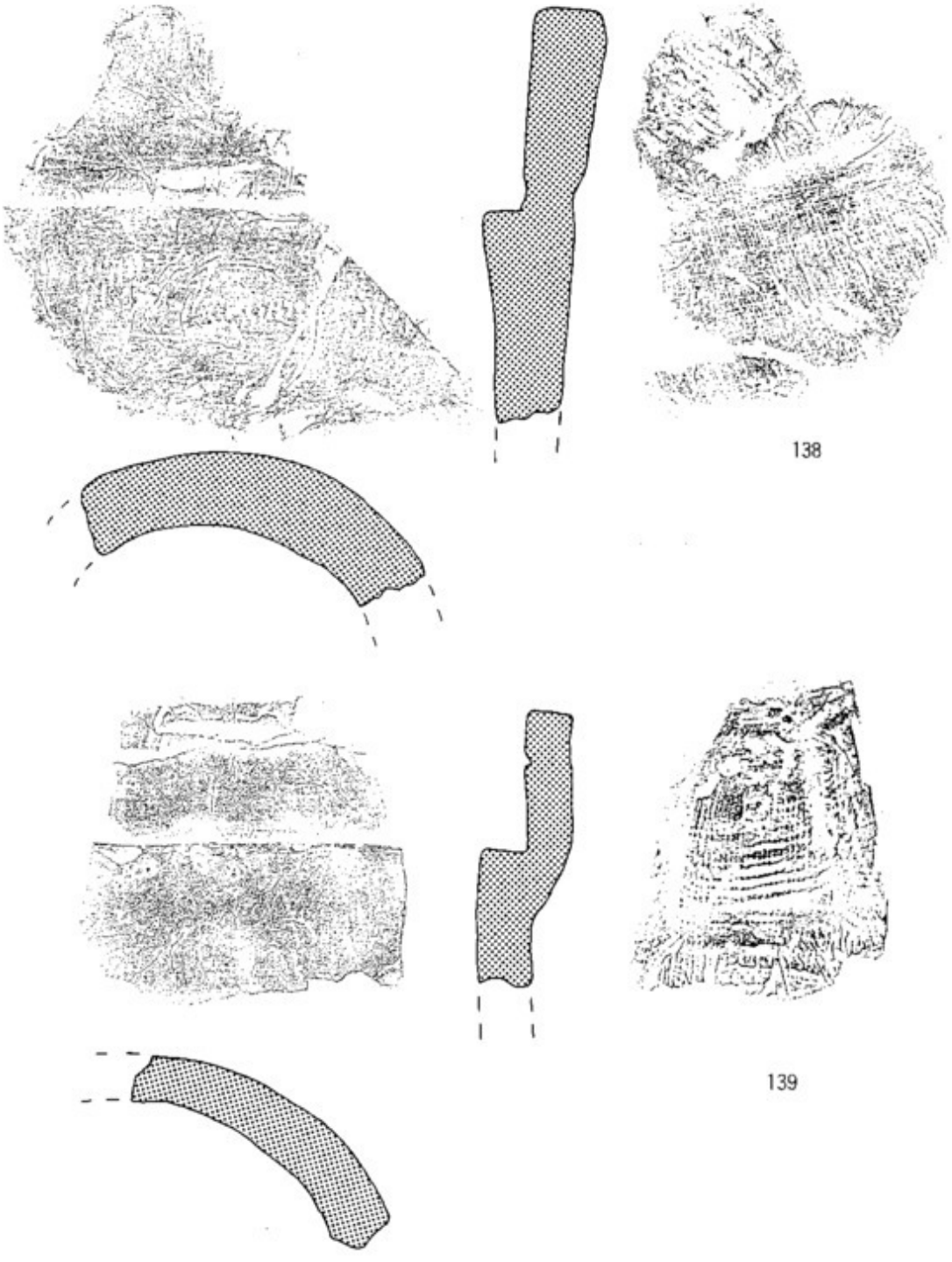


Fig 30　C－b区　包含層出土丸瓦(2)実測図
(Ⅲ層138, Ⅳ層139)

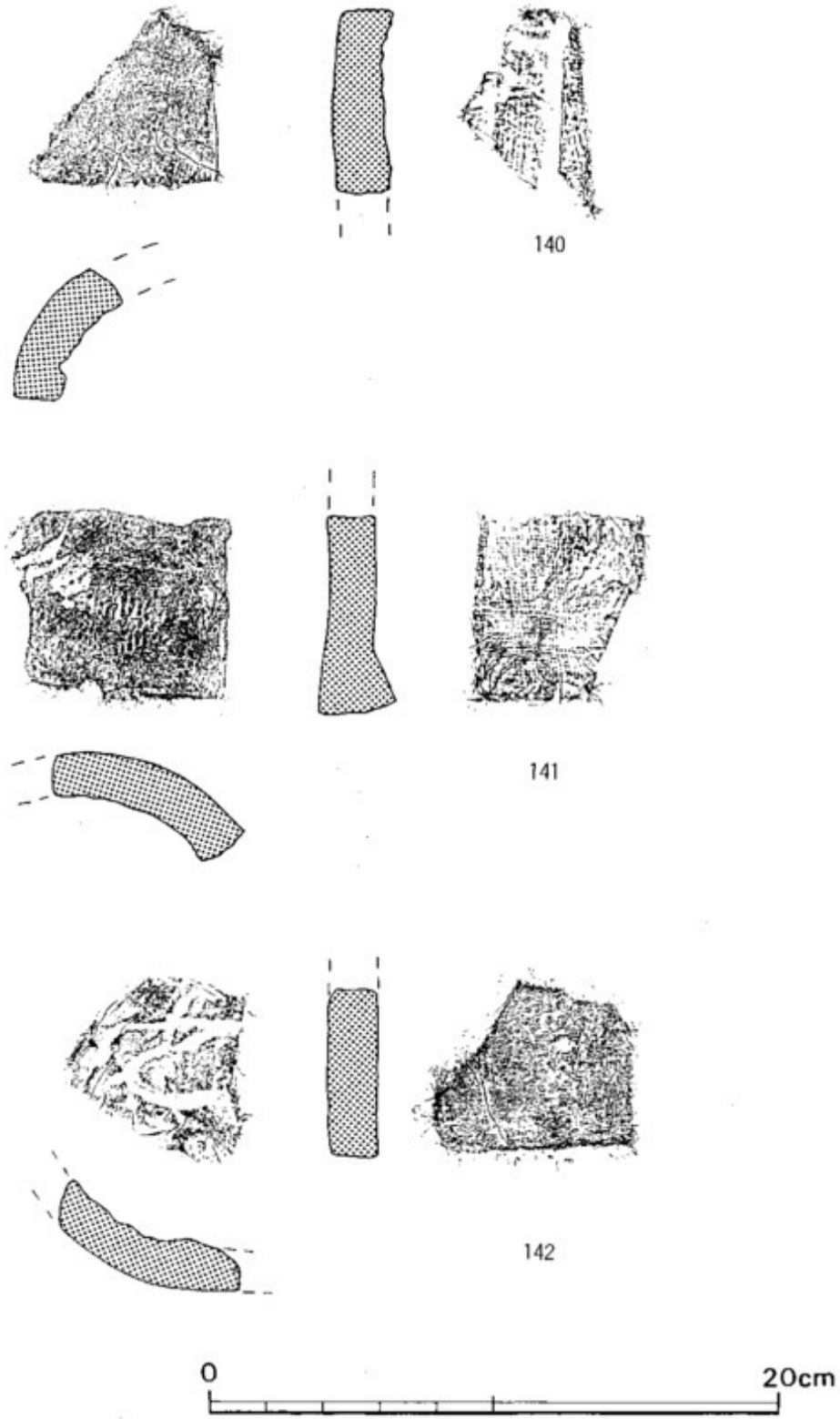


Fig 31　C－b区　包含層出土丸瓦(3)・ヘラ記号入りの瓦実測図
（Ⅱ～Ⅲ層141，Ⅲ層142，Ⅳ層140）

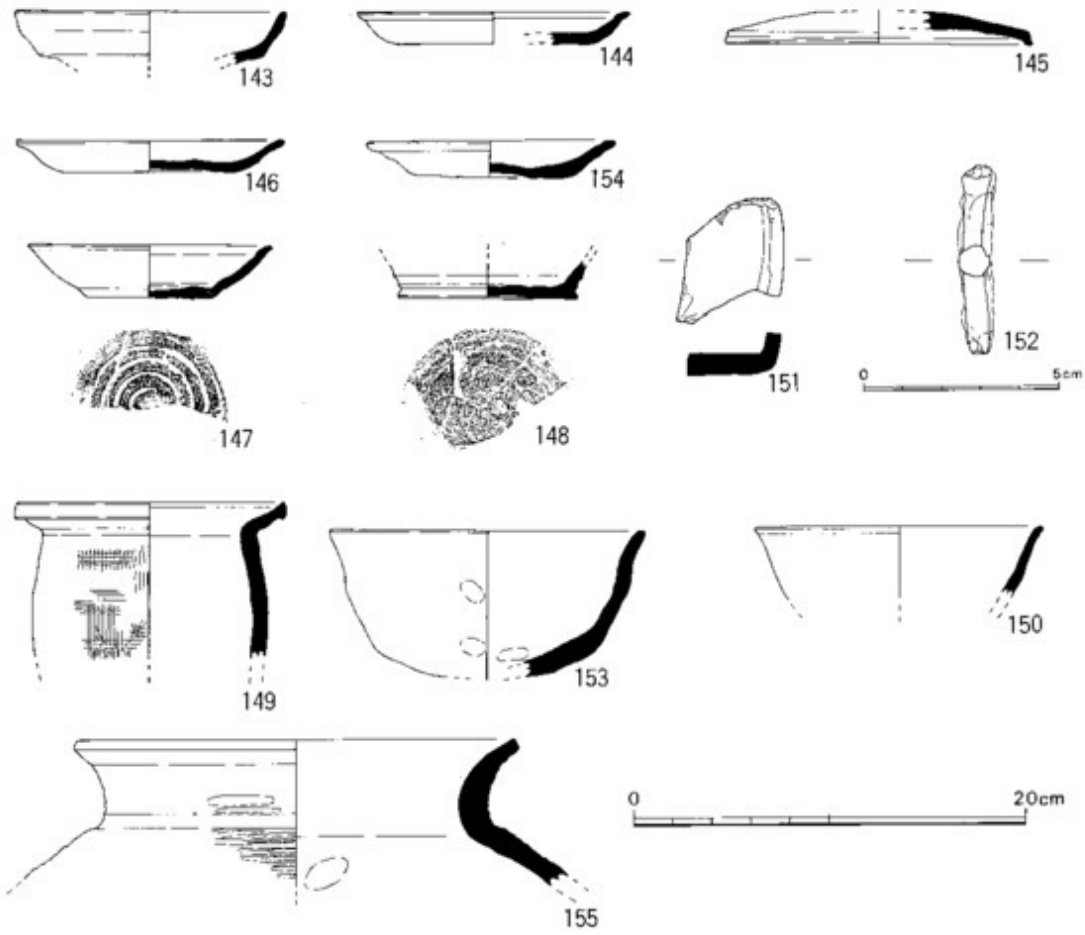


Fig 32　C－b，C－c区　包含層出遺物実測図
（Ⅱ～Ⅲ層143，Ⅲ層144・145，Ⅳ層146～152，Ⅴ層153，Ⅵ層154，表採155）

表2　C－b区・C－c区出土軒平瓦観察表

Fig番号	胎土	焼成	色調	法量 上弦弧幅(実長)	法量 下弦弧幅(実長)	法量 厚さ	内区 厚さ	内区 文様	外区 上 厚さ	外区 上 文様	外区 下 厚さ	外区 下 文様	脇区 幅	脇区 文様	文様深さ	成・整形の特徴 瓦当面	成・整形の特徴 周辺部	出土位置
123	ごく微量の細砂粒混入	不良軟質	淡黄色を基調とし，われ口は橙色	(11.5)	(13.9)	5.1										摩滅が顕著	一部ヘラ整形	C－b区Ⅳ層
124	0.1～0.3cmの砂粒細砂粒多量	良好堅緻	灰色	(8.3)	(12.3)	7.2	3.6	唐草文	0.6		0.6		0.4		0.2	笵の摩滅が認められる 指頭圧痕を残す	ヘラ整形 一部指頭調整のあとヘラ削り	C－c区Ⅴ層
125	0.1～0.3cmの砂粒細砂粒多量	良好堅緻	灰白色	(4.9)	(5.9)	7.0	5.1	唐草文			1.1				0.2	ナデ調整を施す	ヘラ整形 ヨコ方向なで	C－b区重層
126	1cm大の小石。0.1～0.2cmの砂粒多量	不良	灰白色	(9.2)	(5.8)	6.8	5.1	唐草文	0.9		0.8				0.3	摩滅が顕著	整形不明であるが一部ヘラ整形	C－b区拡張Ⅳ層
172	0.1～0.3cmの砂粒細砂粒多量	良好	灰白色			4.5										0.5×0.5cmの叩きを単位とする	ヘラ整形	C－b区SD7

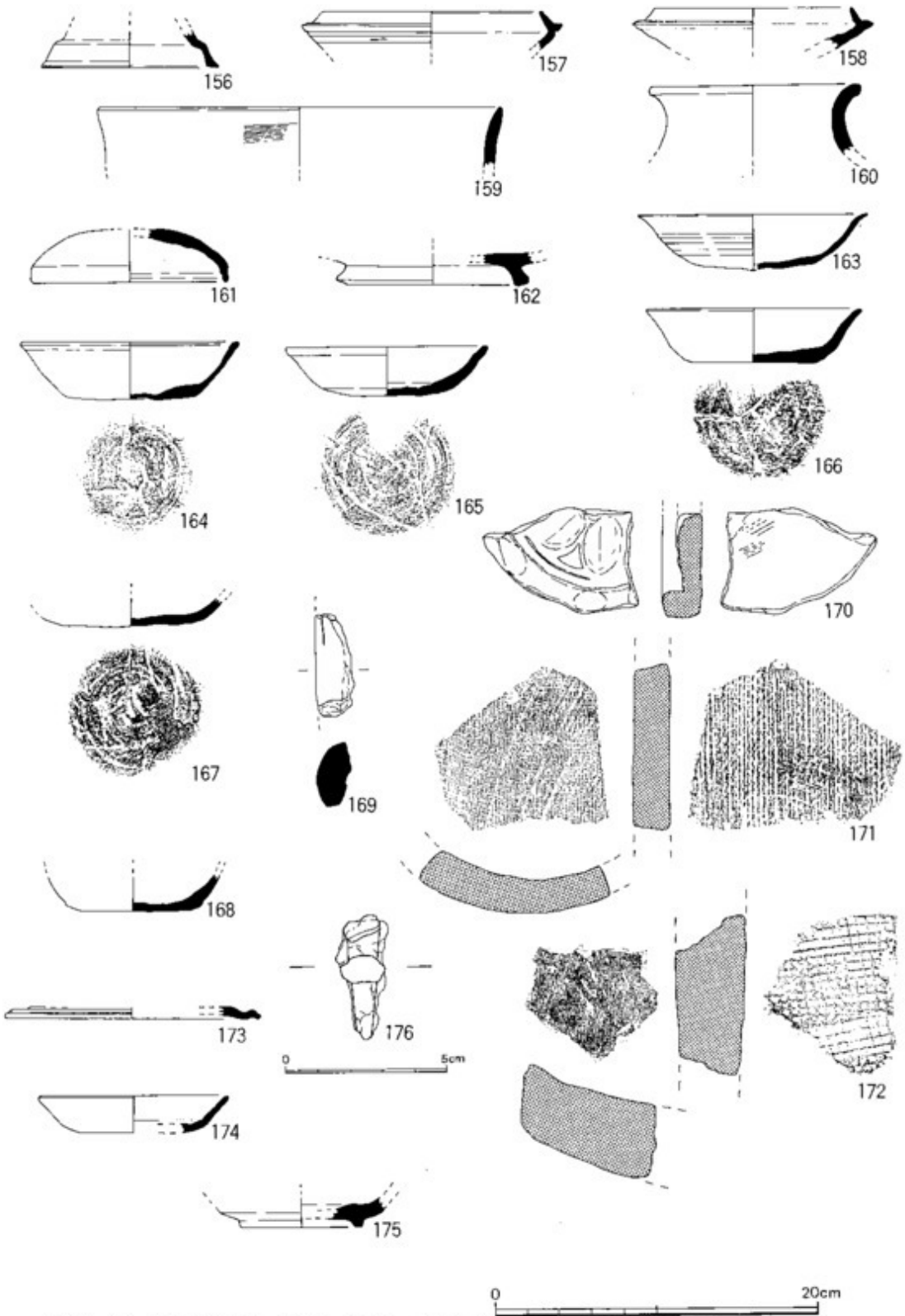


Fig 33　C－b区　SB 2，SK 6，SA 1，P37・40，SD 7　出土遺物実測図
（SB 2：156～159，SK 6：163～169，SA 1：160，P40：161，P37：162，SD 7：170～176）

表3　C－b区・C－c区・E区出土平瓦，丸瓦観察表（127～135・254・255・279・280平瓦 136～142A瓦）

Fig 番号	胎土	焼成	色調	法量(cm) 全長	法量(cm) 厚さ	素材	成・整形の特徴 凹面 特徴	成・整形の特徴 凸面 叩き	成・整形の特徴 凸面 特徴	出土位置
127	0.1～0.3cmの砂粒微量。細砂粒多量	良好	灰色	10.0	3.0	粘土紐	糸切り痕が顕著である		縦方向のヘラ削りを施す。端部に瓦壁片が付着している	C－b区 Ⅳ層
128	0.1～0.2cmの砂粒微量。細砂粒多量	不良 軟質	にぶい黄橙色	25.5	2.1	粘土紐	粗い布目で指頭圧痕を残す	縄目	縄目幅0.2cm	C－c区 Ⅴ層
129	0.1～0.3cmの砂粒細砂粒多量	良好	灰色 褐灰色	16.5	1.9		粗い布目で縦方向のなで調整　端部にはヘラ削りが施されている	縄目	縄目の叩きの後　端部には左下りのヘラ整形が施されている	C－c区 Ⅴ層
130	0.1～0.3cmの砂粒を多く含む	良好	橙色	16.8	1.9		粗い布目がわずかに残る	縄目	縄目幅0.2cm	C－b区 Ⅳ層
131	0.5cmの砂粒 細砂粒多量	良好	にぶい橙色	14.0	3.1	粘土紐	布目は摩滅が激しい	縄目	縄目の叩きの後　なで調整を施す	C－b区 Ⅳ層
132	細砂粒多量	不良 軟質	にぶい橙色	14.0	3.1	粘土紐	細い布目で模骨痕を残す	縄目	太い縄目（0.4cm）の叩きを施す 指頭圧痕を残す	C－b区 拡張 Ⅲ層
133	0.1～0.3cmの砂粒多量。細砂粒	良好	淡黄色	13.0	3.9	粘土紐	接合痕を指頭によりなで消している	正格子	0.5×0.5cmの叩きを単位とする　端部及び端面にはヘラ整形が施されている	C－b区 Ⅳ層
134	0.1～0.6cmの砂粒 細砂粒多量	不良 軟質	淡黄色	11.3	3.8		粗いヘラ整形が認められる	正格子	0.5×0.5cmの叩きを単位とする	C－b区 Ⅳ層
135	0.1～0.3cmの砂粒多量 細砂粒	良好	灰白色	11.5	1.7		細い布目の上を右下りのハケ調整を部分的に施す	正格子	0.5×0.5cmの叩きを単位とする	C－b区 Ⅳ層
136	0.1～0.3cmの砂粒 細砂粒	不良 軟質	明黄褐色	23.3	2.0	粘土紐	細い布目で粘土の接合痕が顕著である	縄目	縄目の叩きの後　全体になで調整を施す	C－c区 Ⅳ層
137	0.1～0.3cmの砂粒微量 細砂粒多量	不良 軟質	黄橙色	21.7	2.7 2.9	粘土紐	模骨痕が残り左下りのハケ調整を施す		摩滅が激しく不明	C－c区 Ⅳ層
138	0.1～0.3cmの砂粒多量。0.7,0.9,1.1cmの小石	良好	灰黒色を基調とし，われ口は灰白色	15.5	2.6 3.0	粘土紐	布目は粗い	縄目	縄目の叩きの後　ヨコ方向のなで調整を施す	C－b区 Ⅲ層
139	0.1～0.2cmの砂粒	良好	灰色を基調とし，われ口は褐灰色	11.5	2.0 2.1	粘土紐	布目はかなり粗い		なで調整を施す 指頭圧痕を残す	C－b区 拡張 Ⅳ層
140	細砂粒多量	良好	橙色	7.5	1.8		布目は粗く端部にはヘラ削りを施す		一部なでが認められるが摩滅が顕著	C－b区 Ⅳ層
141	細砂粒多量	やや良好	灰色	7.0	1.8 2.7	粘土紐	粗い布目がみられる	縄目	なで調整を施す　縄目叩きが一部残る	C－b区 Ⅱ－Ⅲ層
142	細砂粒多量	不良 軟質	明オリーブ灰色を基調としわれ口は明黄褐色	6.0	1.8		「書」の草書文字とも取れるヘラ記号が残されている		摩滅が顕著	C－b区 拡張 Ⅲ層
171	0.1～0.2cmの砂粒微量 細砂粒多量	良好	灰白色	10.0	2.3	粘土紐	粗い布目で糸切り痕が顕著である	縄目	縄目幅0.2cm	C－b区 SD7
254	0.1～0.2cmの砂粒若干 細砂粒多量	良好	オリーブ灰色を基調とし一部にぶい橙色	14.8	2.1	粘土紐	粗い布目で端部には指頭圧痕が認められる	縄目	縄目幅0.2cm 指頭圧痕を残す	E区 Ⅲ層
255	0.1～0.3cmの砂粒若干 細砂粒多量	良好	灰白色	14.0	2.0	粘土紐	細い布目で模骨痕が顕著	正格子	0.5×0.5cmの叩きを単位とする	E区 Ⅲ層
279	0.6，1.1cmの小石。0.1cmの砂粒を含む	良好	灰白色	17.3	4.3		細い布目を残し粗い木理の右下りのハケ調整を施す 模骨痕を認む	正格子	0.5×0.5cmの叩きを単位とする	E区 Ⅳ層
280	0.2～0.7cmの砂粒若干 細砂粒多量	良好	淡黄色	20.3	2.2	粘土紐	細い布目で模骨痕が顕著。幅2cmの粘土紐の接合痕が認められる	正格子	0.5×0.5cmの叩きを単位とする　一部表面が剝離する	E区 Ⅳ層

表4　C－b区・C－c区出土軒丸瓦観察表

Fig番号	胎土	焼成	色調	周縁 直径	周縁 幅	周縁 高	内区 直径	内区 弁区径	内区 中房径	内区 蓮子径	内区 弁幅	内区 弁数	成・整形の特徴 瓦当面	瓦当裏面	周辺部	出土位置
170	ごく微量の細粒砂入	不良	橙色	(16.3)	1.7	2.9	12.1		3.8		2.5	単弁八葉	花弁は肉厚である　周縁に指頭圧痕を残す	ハケ調整を施すが摩滅が激しく明確でない	整形不明であるが一部ヘラ整形	C－b区SD7

第Ⅶ章　D区の調査（Fig 34）

1　基本層序（Fig 6）

基本層序は，Fig 34に示すとおりである。Ⅰ層：耕作土　Ⅰ'層：旧耕作土　Ⅱ層：黄褐色粘質土　Ⅱ'層：黄灰色粘質土　Ⅲ層：灰褐色粘質土　Ⅳ層：暗黄灰色粘質土　Ⅴ層：地山（黄褐色シルト）が堆積している。各層の時間的な推移を見れば，Ⅱ層が中世古代の遺物包含層で，Ⅲ層がその検出面である。Ⅲ層及び古代Ⅳ層が弥生時代の遺物包含層を形成している。そしてⅣ層下層及びⅤ層が弥生時代の遺構検出面である。Ⅳ・Ⅴ層は，調査区の東半分に存在しており，特にⅤ層は拡張区付近にのみ堆積が見られる。西半分からE・Fまでの間は，Ⅲ層以下が砂礫層となっており物部川の氾濫原であったことを示している。Ⅴ層の載っている拡張区付近は，E・F区などと共に自然堤防を形成する部分と考えられる。

2　包含層出土の遺物（Fig 39－180～179）

Ⅱ層及び拡張区の遺構検出面から弥生土器～中世の土器が出土している。

(1)　弥生土器（180～186）

181・182は，甕形土器口縁部で前者は，口縁部内面に一条の弱いヘラ描沈線が巡る。183～186は甕形土器底部ですべて平底である。すべて後期末に属する。180は，高杯脚部である。

(2)　中世土器（177～179）

177は，瓦質三足鍋の脚部である。178は，白磁碗で，逆台形状のしっかりした高台が付く，外面露胎部には左→右のヘラ削りが見られる。179は，土師器杯で，底部糸切り，外面にはロクロ目が見られる。

3　遺　　構

(1)　弥生時代

ＳＫ６（Fig 36）

調査区の東部に位置する。遺構の半分近くが調査区外に出ており正確な規模を把握することはできないが，確認面での長軸1.8m，短軸0.8mを測る。断面形は段状をなし西壁は３段，東

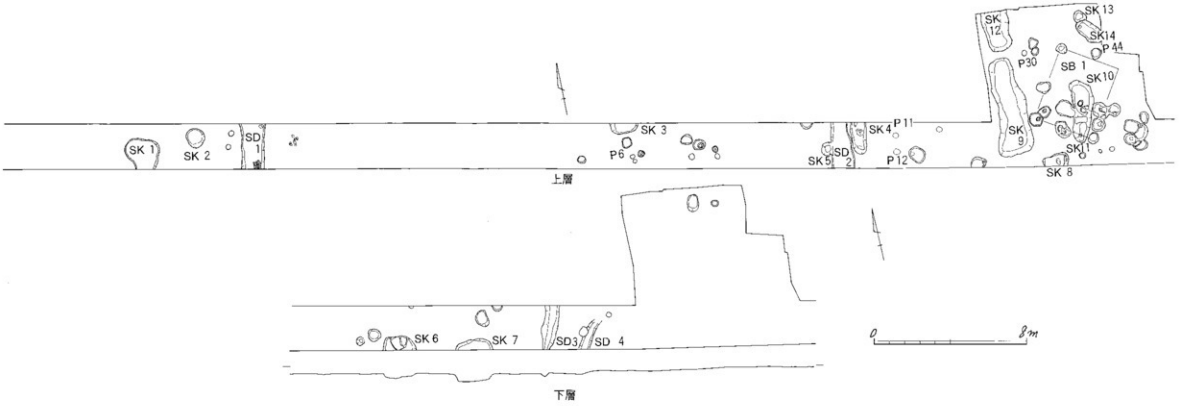


Fig 34　D区　検出遺構全体図(S＝$\frac{1}{200}$)

壁は2段に掘り込まれており，深さは最も深いところで50cmを測る。埋土は黒褐色粘質土単純一層で遺物は認められない。

ＳＫ７（Fig 36）

ＳＫ６の東に位置する。遺構の半分以上が調査区外に出ているが，隅丸長方形のプランを呈するものと考えられる。確認面での長軸2.0m，短軸0.66m，深さ30cmを測り，壁は斜に立ち上がる。埋土は黒褐色粘質単純一層で，出土遺物は高杯脚部189，甕194，装飾壺形土器196・197が埋土中より出土している。後期の土坑である。

ＳＤ３・４（Fig 38）

ＳＤ３は，調査区を南北に横切る確認延長2.2m，幅0.5～0.7m，深さ10cm前後を測る。ＳＤ４は，ＳＤ３の1.4m東に位置する。北端は調査区内で消滅しており確認延長1.5m，幅0.5～0.6m，深さは僅か５cm前後を測るにすぎない。またＰ24と切り合っているが先後関係は不明である。埋土は両者共黒褐色粘質で，溝埋土中及び両者に狭まれた範囲から多量の土器198～329が出土した。両者は，多量の土器が投棄せられたために埋没したものである。出土土器よりその時期を後期末に求めることができる。

(2) **古代～中世**

ＳＢ１（Fig 35）

調査区東端の拡張区で検出した２間×２間の南北棟である。長軸方向はＮ－37°－Ｅを示す。西・南面では掘り方を検出できたが，北・東面では対応する掘り方の一部しか確認できなかった。掘り方の平面形は，不整形をなしているが柱抜きとりなどによる損傷と考えられ，本来は一辺40～50cmの方形を基調とするものであろう。Ｐ４は，切り合いが見られ建て替えが考えられる。またＰ１には床面より４cm浮いて30cm大の扁平な河原石を礎板として用いている。Ｐ３には径20cmの柱根跡が残っている。各掘り方の埋土は黒褐色粘質土で，須恵器・土師器・弥生土器の細片が出土しているが図示できるものはない。

ＳＫ１（Fig 36）

不整形のプランを呈する土坑で，一部が調査区外出ており，規模は長軸1.8m，短軸1.5m，深さ８cmを測る。埋土は黄灰色粘質土単純一層で，埋土中より弥生土器・土師器・備前焼の細片が数点出土している。

ＳＫ２（Fig 36）

ＳＫ１の東隣に位置する。平面形は楕円形，断面は船底状を呈し長軸1.0m，短軸0.9m，深さは８～12cmを測る。埋土は茶灰色粘質土単純一層で，埋土中より土師器・須恵器・青磁の細片が出土しているが，図示できるものはない。

ＳＫ３（Fig 36）

調査区のほぼ中央部に位置し，遺構の半分近くが調査区外に出ている。確認できた範囲で長軸1.5m，短軸0.6m，深さ10cmを測る。床面は平坦で立ち上りは緩やかである。埋土は茶灰色

粘質土で土師器の細片が少量出土している。

ＳＫ４（Fig 36）

長い溝状の平面形を呈し，一端が調査区外に出ている。確認できた範囲で長軸1.64ｍ，短軸0.84ｍ，深さ40㎝を測る。短軸断面は逆台形を呈し，床面は僅かに船底状を呈す。埋土は茶灰色粘質土で，検出面に30㎝大の礫が３個見られた。遺物は土師質杯底部（188）が埋土中より出土している。

ＳＫ５（Fig 36）

ＳＤ２に切られているが，平面形は楕円形を呈し，長軸0.8ｍ，短軸0.7ｍ，深さ20㎝を測る小規模な土坑である。埋土は茶灰色粘質土単純一層で，埋土中より小杯（191）が出土している。

ＳＫ８（Fig 36）

一部が調査区外に出ているが，平面形は不整形を呈するものと考えられる。床面は平坦で斜めに立ち上がるが，東壁は一部段状をなす。埋土は暗茶褐色粘質土単純一層で，埋土中より弥生土器・土師器・須恵器細片が少量出土している。また床面より25㎝大の礫が出土している。

ＳＫ９（Fig 37）

調査地東端の拡張区にまたがって検出した。平面形は不整形を呈し，長軸5.08ｍ，短軸1.6ｍ，深さ12～28㎝を測る。長軸はＮ－７°－Ｗである。検出面には図示したように一面に大小の河原石が敷き詰められており，床面にまで達している。南半部の石は大きく，北半部の石は小さいものに使い分けている。河原石の隙間より多量の弥生土器細片と土師器・須恵器片が各１点出土している。弥生土器は，ＳＫ９掘削と河原石敷設の際に周辺の包含層より混入したものである。

ＳＫ10（Fig 37）

ＳＫ11の一部を切っている。ＳＫ10もＳＫ９と同様に検出面に楕円形の平面形を呈する河原石の集石を確認し，集石除去後に土坑を検出した。長軸2.1ｍ，短軸1.08ｍ，深さ20㎝を測る。床面は僅かに船底状を呈し中央部に径30㎝，深さ４㎝の落ち込みが見られる。埋土は濃茶色粘質土で遺物は認められない。

ＳＫ11（Fig 37）

不整楕円形の平面形を呈し，長軸1.2ｍ，短軸0.8ｍ，深さ８㎝を測る。床面は平坦面で，径10㎝，深さ10㎝のピットが存在する。埋土は濃茶色粘質土単純一層で遺物は出土していない。

ＳＫ12（Fig 37）

一部が調査区外に出ており全体の形状は不明であるが，ＳＫ９と同類の遺構である。第Ⅱ層下で帯状に敷詰められた河原石が出土し，河原石除去後土坑の平面形を検出した。確認範囲の長軸2.08ｍ，短軸0.54ｍ，深さ20㎝を測る。床面は逆台形を呈し河原石は床面にまで達している。埋土は濃茶色粘質土で，埋土及び河原石の隙間から多量の弥生土器片が出土している。ＳＫ９と同様の原因による混入と考えられる。

ＳＫ13（Fig 38）

ＳＫ14に切られている。平面形は，不整形を呈し長軸0.64ｍ，短軸0.54ｍ，深さ20㎝を測る。埋土は濃茶色粘質土単純一層で，弥生土器細片が出土している。

ＳＫ14（Fig 38）

遺構の一端が調整区外に出ているが，ほぼ全体を知ることができる。ＳＫ14も第Ⅱ層下で長楕円形の広がりをもって敷き詰められた河原石が出土し，上部の河原石を除去した後に長楕円形の平面形を確認した。長軸2.0ｍ，短軸0.8ｍ，深さ８㎝を測る。床面は船底状を呈し床端部に径15㎝，深さ15㎝の小ピットを有す。埋土は灰茶色粘質土単純一層で，遺物は見られない。

ＳＤ１（Fig 36）

調査区と直交して走る溝である。幅0.8～1.2ｍ，深さ５～10㎝を測る。床面の南端に拳大の河原石が数点集中して見られた。埋土は灰茶色粘質土で，弥生土器細片が少量出土しているが，混入と考えられる。

４　遺　　物

(1) 弥生時代

土　　坑

ＳＫ７（Fig 39－189・194・196・197）

189は，高杯脚部である。「ハ」の字状に直線的に開き端部は凹状をなす。外面はハケ調整の下地の上を縦方向にヘラ磨きを施す。194は，甕で，口縁部は丸味をもって「く」の字状に外反，口唇部は凹状を呈し僅かに上下に肥厚する。胴部外面はハケ調整，内面には指頭圧痕が見られる。196・197は壺細片と考えられる。前者は外面に「タガ」状突帯をめぐらし，突帯上面には爪形圧痕を施している。また突帯の上下には鋸歯状の文様をヘラで描いている。後者は断面三角突帯に刺突文をめぐらし，突帯下にヘラ描き鋸歯文を配す。

溝

ＳＤ３・４（Fig 40・41－198～238）

壺は４点（198～201）出土している。201は，小さな底部から内湾して立ち上がり胴部中位に最大径を有す。半球形状の上胴部から外反する頸部が立ち上がり，口縁部は水平に屈曲する。198と201は同様のタイプの口縁部と底部である。200は，直線的に立ち上がる口縁部で外面に叩きを施す。

甕は，口頸部と胴部を同一個体で図示できるものが19点(202～230)出土している。202－212・215・217・219・220は口縁部が内面に稜をなして「く」の字状に外反するタイプで，これらのうち335・336は胴部の上に粘土帯を接合して口縁部を成形しているが(Ⅰ-A)，他のものは口縁部を胴部から叩き出している(Ⅱ-A)。後者は，口縁部外面の叩きをハケやなでで消すもの(Ⅱ-A-①)（207・210・215・217・219）と叩きを残すもの(Ⅱ-A-②)（208・209・212・211・220）がある。213・214・216・218は，丸味をもって外反する口縁部を有し，214以外はすべて口縁部

叩き出しによるものである。口縁部外面は，ハケ・なで調整によって叩きを消している。内面の調整は，総じて口縁部が横方向，胴部は縦方向のハケ調整と指頭によるなで調整で仕上げている。外面は，叩きのうえを縦方向のハケ調整を施すものが多いが，219・216のようにハケ調整を施さないものもある。

221～230は，胴～底部である。底部の形態は，平底（221・223・224・225・227），尖底（222）丸底風平底（226・230）である。外面は，すべて叩きを施した後，ハケ調整で仕上げている。叩きの方向は，胴部中位で右下りのもの（230）もあるが多くは水平方向であり，下胴部は右上りのもの（221・222・227）が見られる。内面は指頭によるなで調整，ハケ調整，両者併用のものが見られる。222・225・229は，底部と下胴部外面に大きな黒斑があり，311は外面上面が煤けており，下半は二次的な火を受けて紅く変色している。

231は高杯杯部であるが口縁端部を欠いている。立ち上がり部外面は，鋭い稜をなし口縁部は大きく外反する。内面はヨコ方向，外面縦方向のハケ調整の下地のうえにヘラ磨きを施す。

鉢は，口径14～17cmの比較的小型のもの（233～236・239）と口径25cm以上の大型のもの（237）に分けることができる。前者は，大きな平底（233），小さな平底（234～236・239），尖底（232）があり，体部及び口縁部の形態は，内湾して立ち上がりそのまま終わるもの（234～236・239），直線的に立ち上がるもの（233），内湾して立ち上がり口縁部が外反するもの（232）がある。外面は235・347以外は叩き，内面はすべてハケ調整を施す。大型鉢（237）は，内湾して立ち上がり口縁部は外反，端部は僅かにつまみ上げてヨコ方向になでている。外面はハケ調整，内面はなで調整で仕上げる。238は，甑底部である。尖底風丸底の底部に0.6cmの円孔を焼成前に穿っている。内面には指頭による強いなでが見られる。

(2) 古代～中世

土　　坑

ＳＫ４（Fig 39－188）

188は，土師器杯底部である。糸切りの底部から直線的に外方に立ち上がる。

ＳＫ５（Fig 39－191）

191は，土師器小杯である。底部から直線的に外方に立ち上がり，口縁端部は丸くおさめる。底部内面には，凹凸が見られる。砂粒を含まない精選された胎土である。

柱　　穴

Ｐ６（Fig 39－190）

190は，瓦質三足鍋脚部である。基部・端部を共に欠くが最大径1.4cmを測る。

Ｐ11（Fig 39－192）

192は，土師器杯底部である。糸切り底の底部から直線的に外方に立ち上がる。底部内面には凹凸が見られる。

Ｐ30（Fig 39－193）

193は，土師器杯底部である。糸切り底の底部から僅に丸味をもって立ち上がり直線的に外方に伸びる。端部は丸くおさめる。内・外面共にロクロ目が見られる。

P12（Fig 39－195）

195は，須恵器短頸壺である。肩が強く張り出した上胴部に，僅かに内湾して立ち上がる口縁部が付く，端部は丸くおさめる。外面には自然釉がかかる。

P44（Fig 39－187）

187は，土師器杯である。僅かに残る高台脇から内湾して立ち上がる。内・外面共丁寧なヨコなで調整。外底はヘラ切りである。

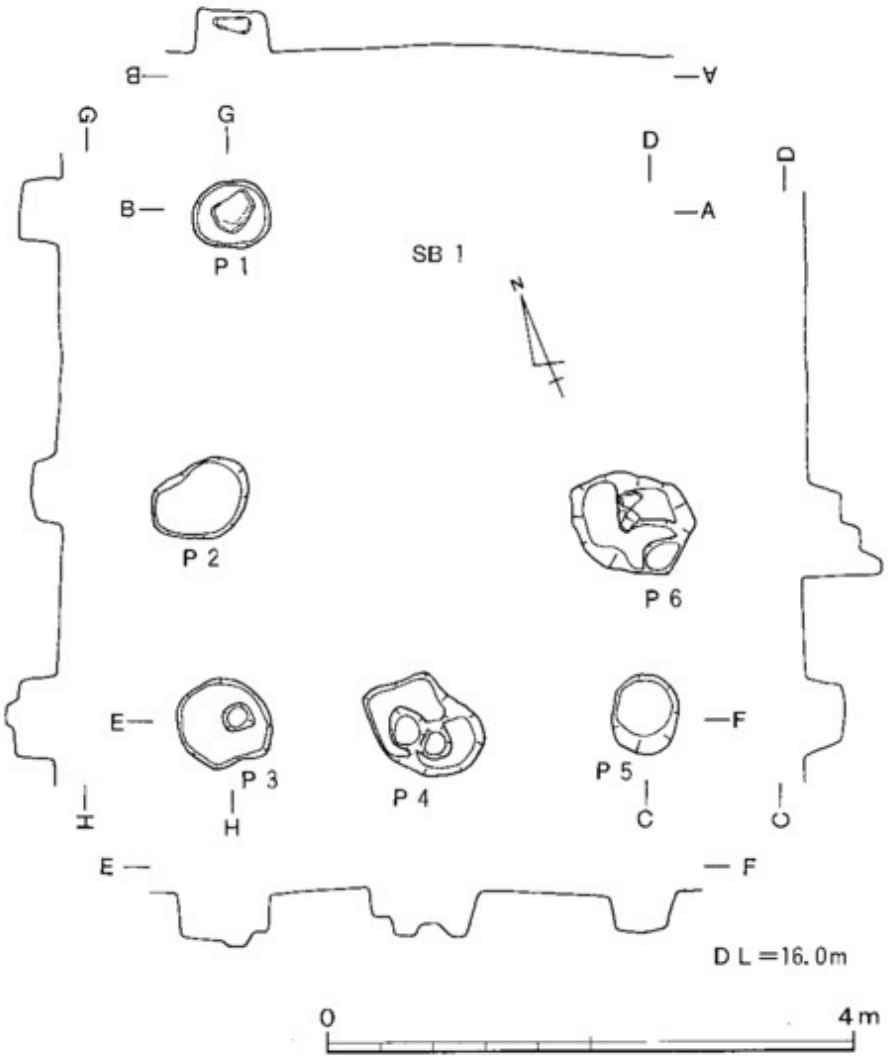


Fig 35　D区　SB 1　実測図

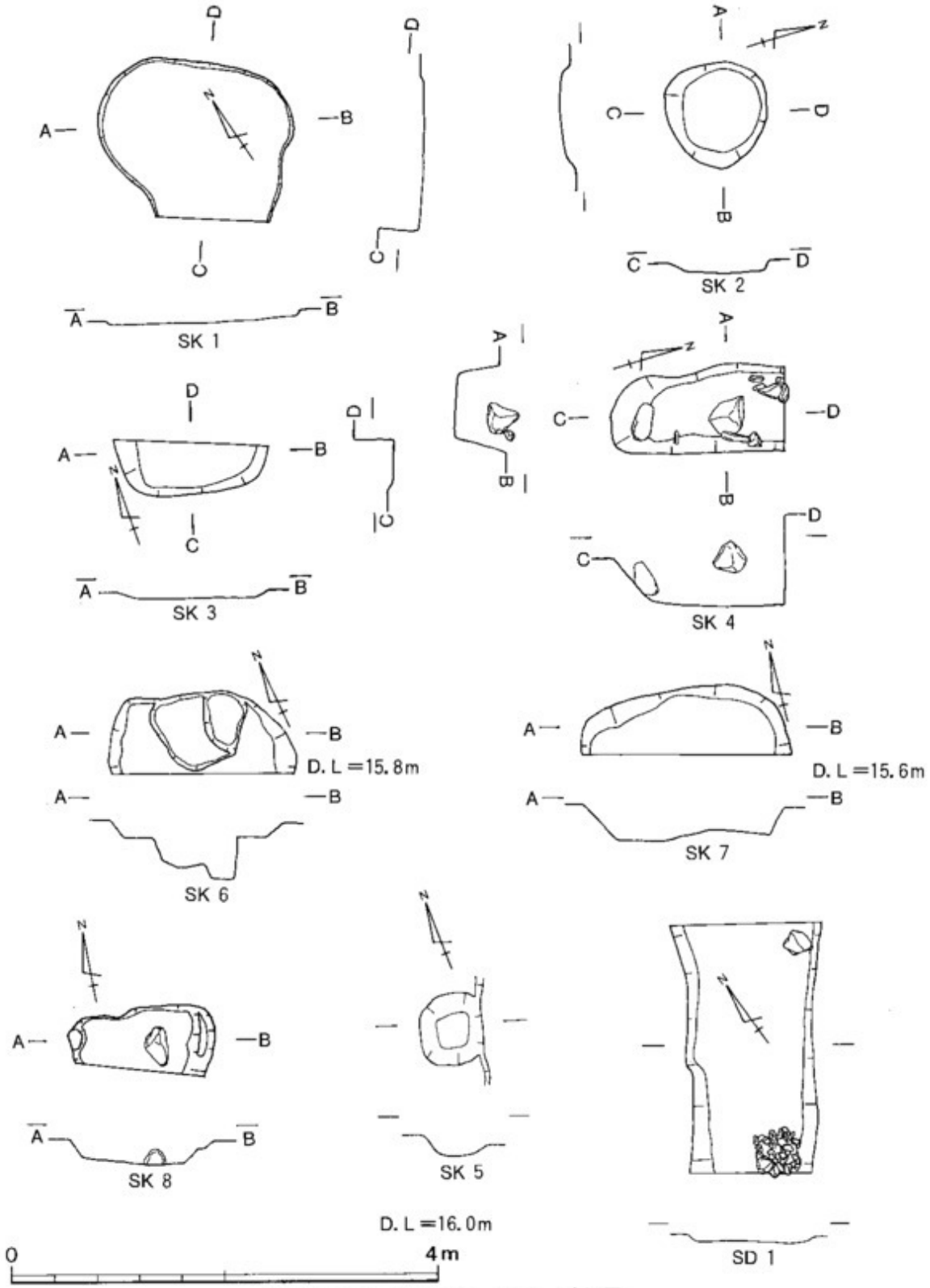
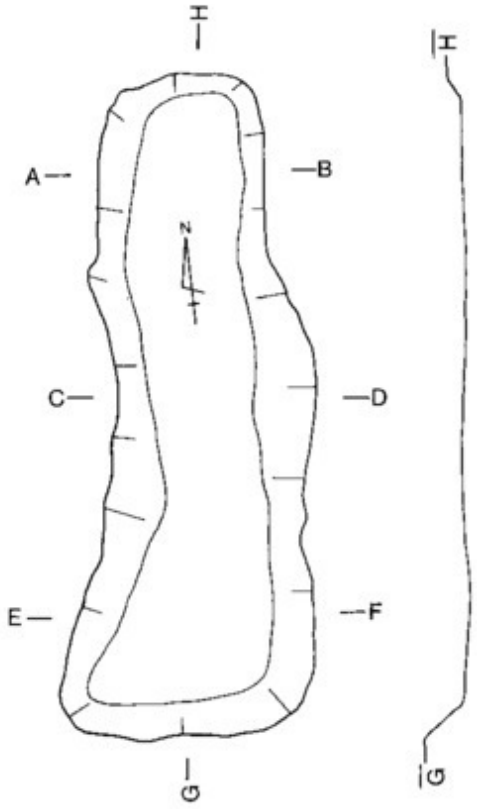


Fig 36　D区　SK 1～8，SD 1　実測図

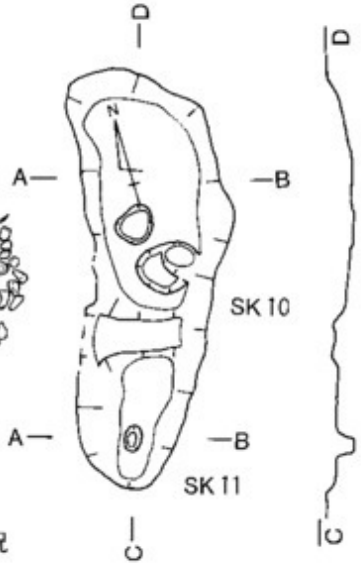
SK 9　集石検出状況



D. L ＝15.8m

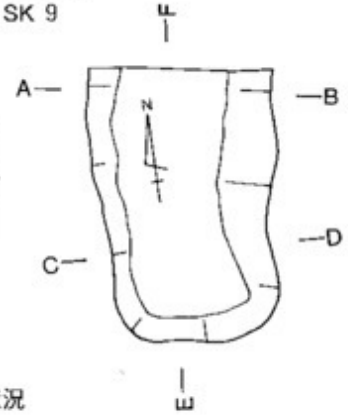
SK 9

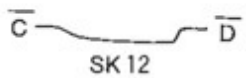
SK 10・11
集石検出状況



D. L ＝15.8m

SK 12　集石検出状況





SK 12

D. L ＝16.0m

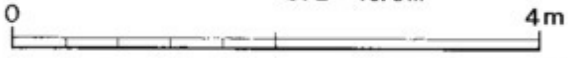


Fig 37　D区　SK 9～12　実測図

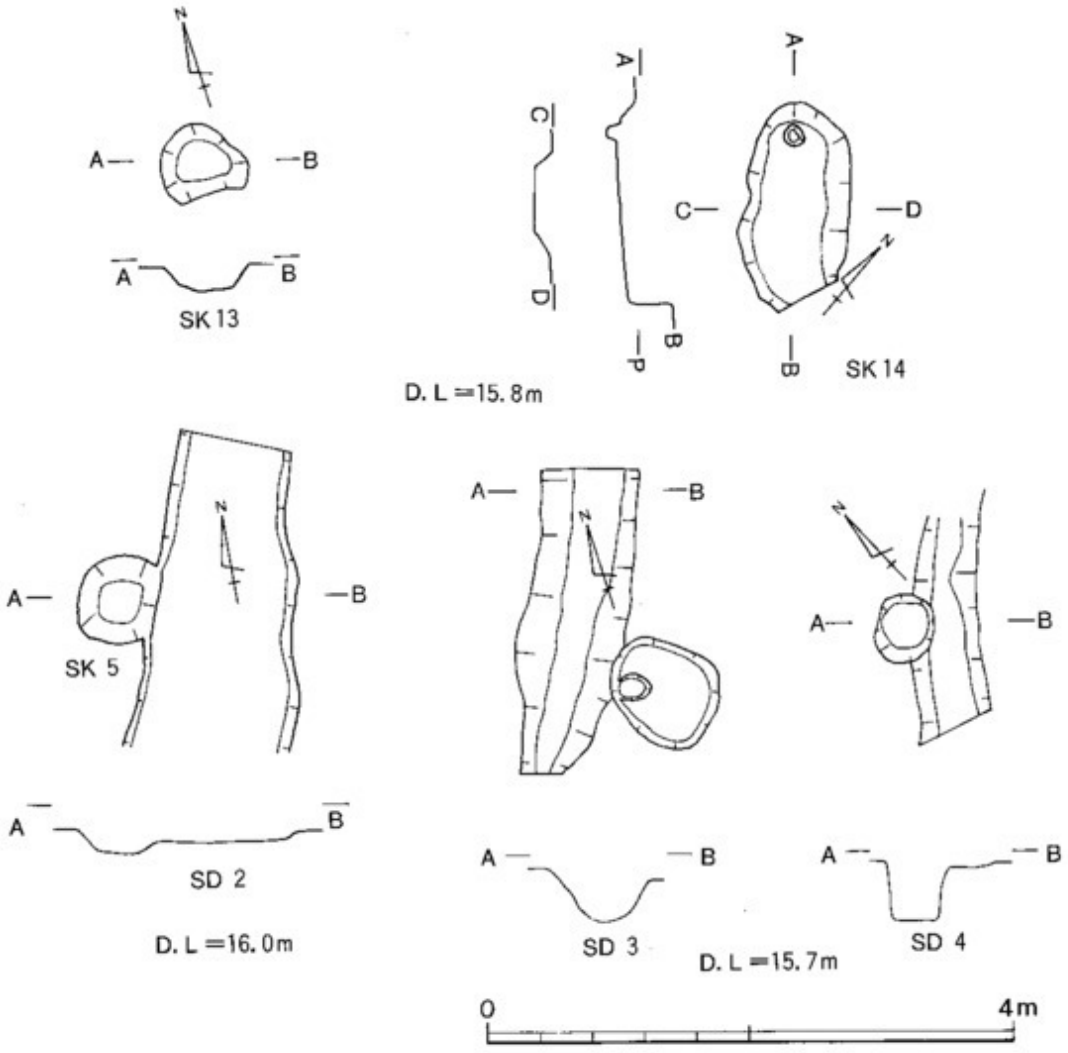


Fig 38　D区　SK 13・14, SD 2～4　実測図

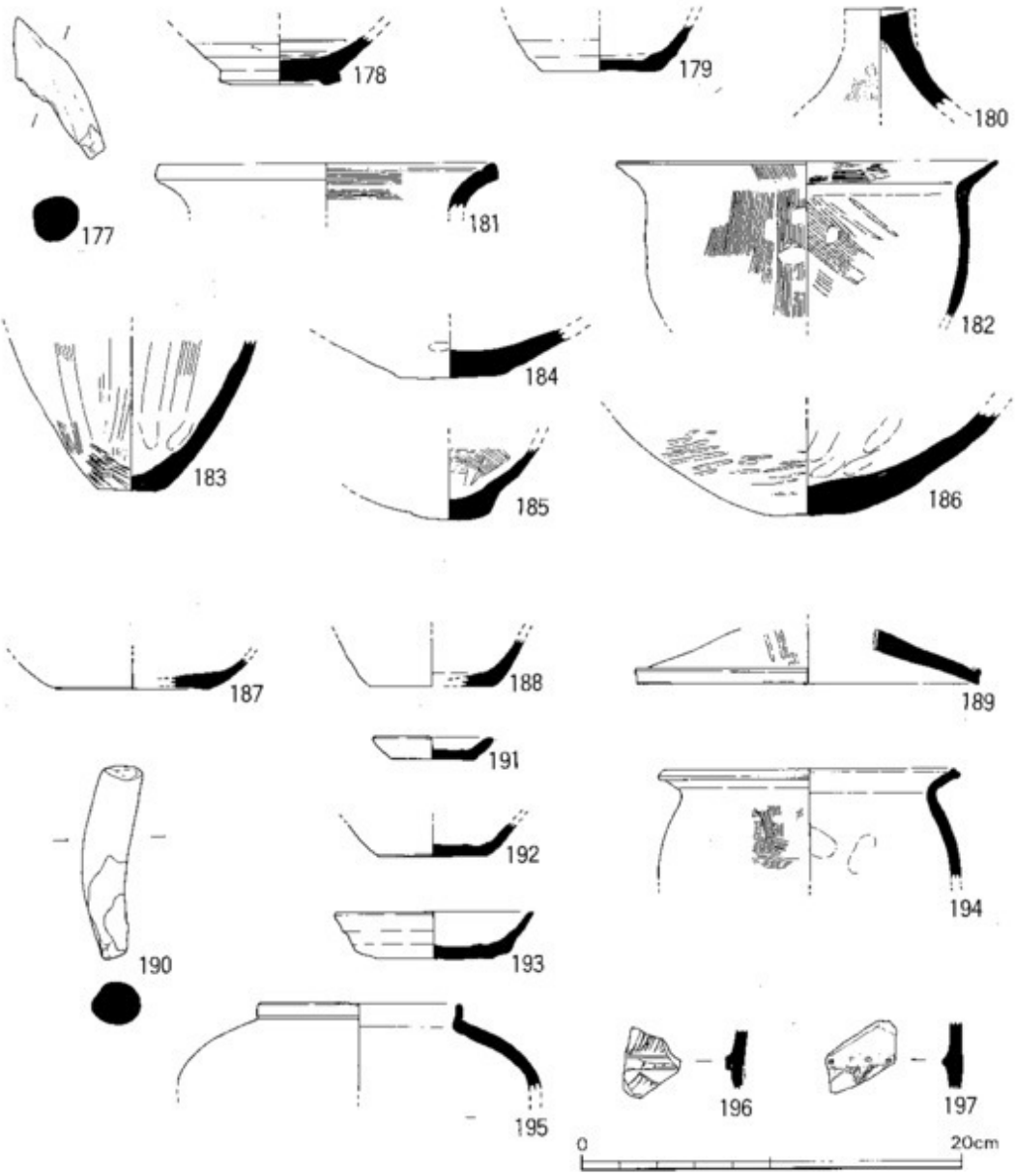


Fig 39　D区　包含層及び遺構出土遺物実測図
（包含層：177～186，SK 4 ：188，SK 5 ：191，SK 7 ：189・194・196・197，P12：195，
P 6 ：190，P30：193，P44：187）

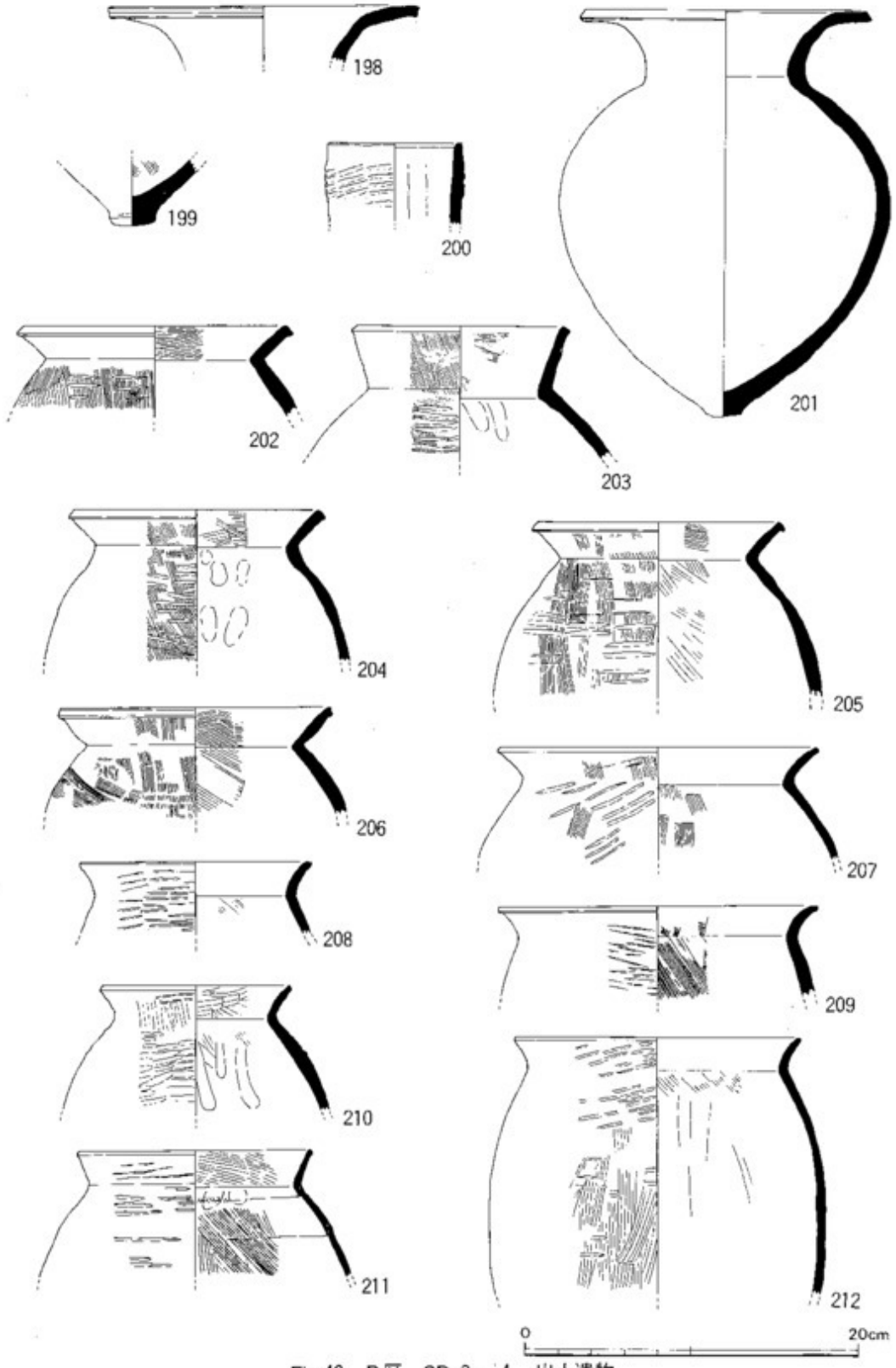


Fig 40　D区　SD 3・4　出土遺物
（SD 3：200，他は SD 4）

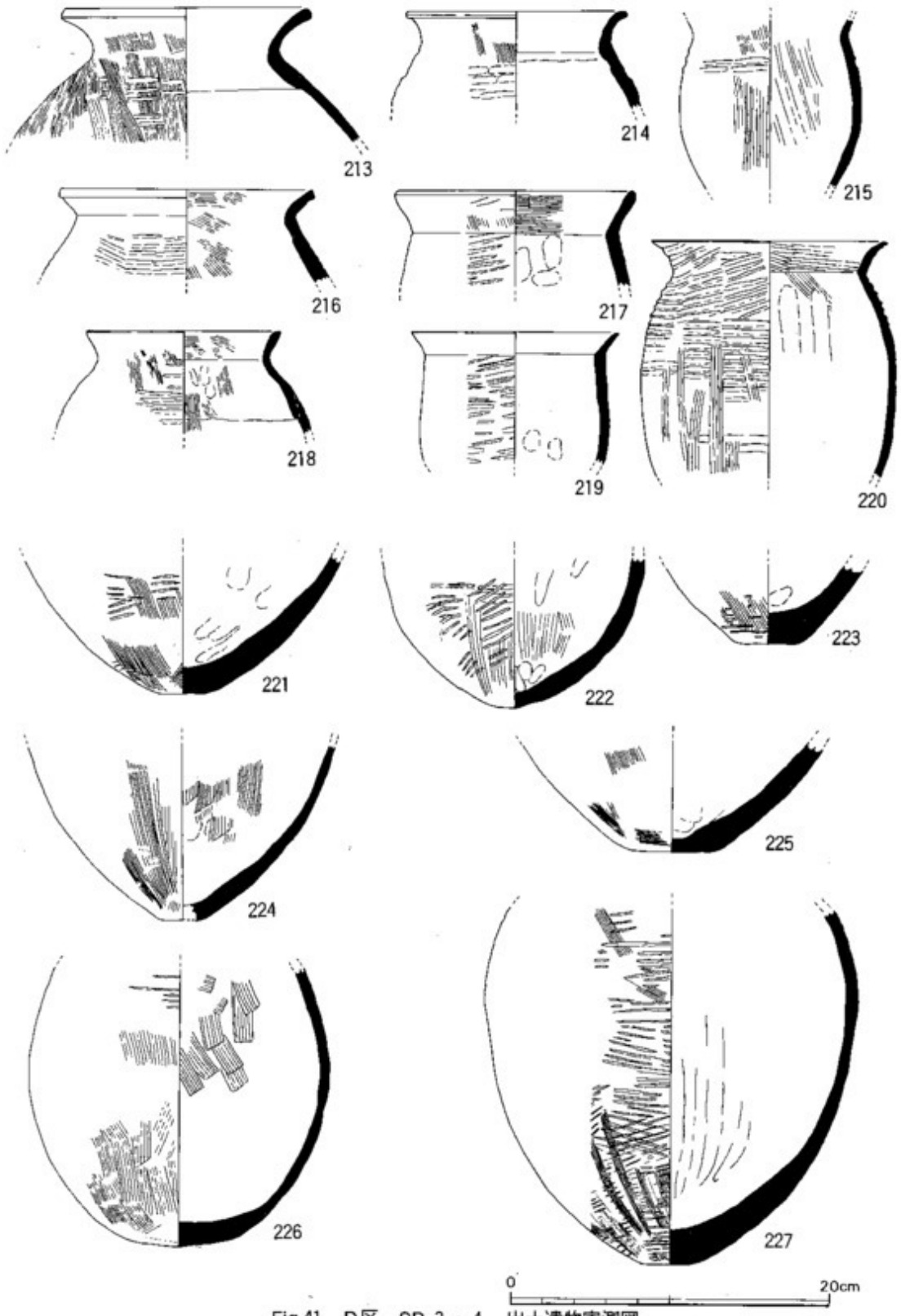


Fig 41　D区　SD 3・4　出土遺物実測図
(213のみ SD 3，他は SD 4)

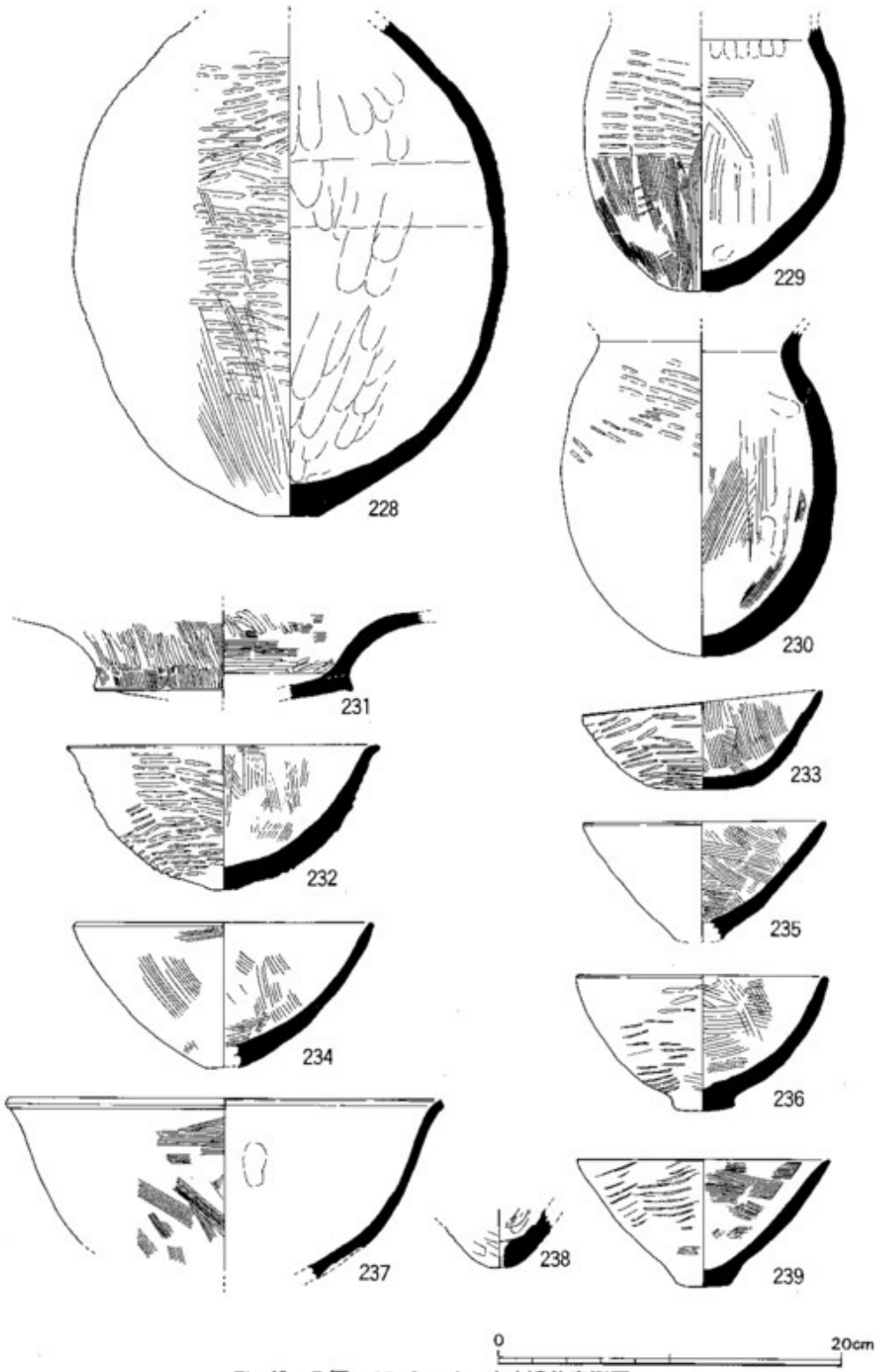


Fig 42　D区　SD 3・4　出土遺物実測図
（228. 238が SD 3 出土遺物，他は SD 4 ）

第Ⅷ章　E・F区の調査（Fig 43～45）

1　基本層序（Fig 6）

E・F区の基本層序は，Ⅰ層：耕作土，Ⅱ層：旧耕作土，Ⅱ'層：床土，Ⅲ層：黄褐色粘質土，Ⅳ層：濃茶色粘質土（砂混じり），Ⅳ'層：淡黄茶色粘質土，Ⅴ層：淡黄褐色粘質土，Ⅵ層：淡黄色粘質土（砂混じり），Ⅶ層：地山（淡黄色粘質土）である。旧耕作土の下は，中世の遺物包含層であるⅢ層となっているがF区では，Ⅲ層は部分的にみられるものであり，Ⅱ層の下部は，古代の遺物包含層であるⅥ層となるのが大半を占める。Ⅴ・Ⅵ層は部分的にみられるものであり，多くはⅣ層の下はⅦ層の地山となっている。E区では，中世の遺構検出面はⅣ層，弥生～古代はⅦ層であるが，F区では弥生～中世までの遺構検出面がⅦ層の同一面であるところから削平が行なわれた結果と考えられる。又E区とF区との地山層の標高差は約40cmを測ることからF区は自然堤防を形成する部分と考えられる。

2　包含層出土の遺物

ここではⅢ～Ⅴ層の遺物についてのみ説明する。

(1)　Ⅲ層出土の遺物（Fig 61・62）

240・241は，土師器小杯である。平底の底部から直線的に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。底部は糸切りを残す。242は，白磁皿である。底部外面では凹状をなす。僅かなふくらみをもって立ち上がり，口縁部は外反し端部は丸くおさめる。底部外面及び口縁端部は露胎。釉は白く濁り施釉にムラがある。243は，土師器杯である。底部から直線的に立ち上がり，口唇部は丸くおさめる。外面にハケ原体の条痕が残る。内面はなで調整を施し，底部糸切りを残す。244は，弥生後期の手捏土器である。平底で口縁部は直立し，口唇部は丸くおさめる。245は，須恵器高杯である。脚部欠損，底部から直線的に立ちあがり口唇部は丸くおさめる。外面に上・下2条の沈線を配し，その間に列点文を配す。底部外面にはヘラ削りを施した後ヨコなで調整を施す。246は，須恵器蓋で環状のつまみを有す。247・248は，須恵器杯身である。立ち上がり部は内傾し，口唇部は丸くおさめる。248の受け部は凸状を呈す。249は，須恵器杯である。丸みを帯びた高台を底部端に貼付け，体部は高台から僅かに内湾気味に外上方に伸び口唇部は丸くおさめる。底部と体部との境は僅かに認められる。250は，土師器小杯である。底部から直線的に立ちあがり，口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸くおさめる。底部は糸切りである。251は，円面硯である。海部は「V」字形の断面をなす。周縁部は外上方に延び，上端面は強いヨコなで調整により中央が僅かに凹む。脚部は20m程離れた同じ層位から出土したが，焼成及び自然釉の状態から同一個体と考えられる。脚部は外反して，底端部外面に凹線が1条巡り，平らな下端面で接地する。脚体部には推定18孔の縦方向に長い長方形のヘラ切りによる透しが穿たれている。252は，土師器土錘である。253は，帯金具（鉈尾）である。長さ2.05cm，幅2.00cm，厚さ2mmを測る。3本の鋲足を有するが，裏金の腐触が著しく，断面中央の鋲足を出すことが

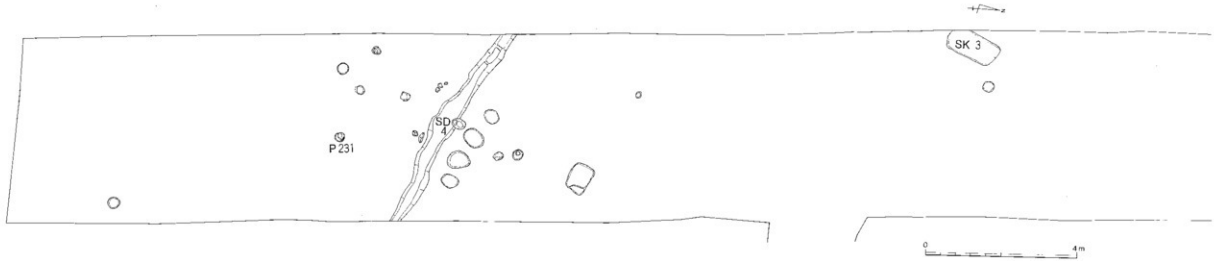


Fig 43　E区　上層　検出遺構全体図(1/100)

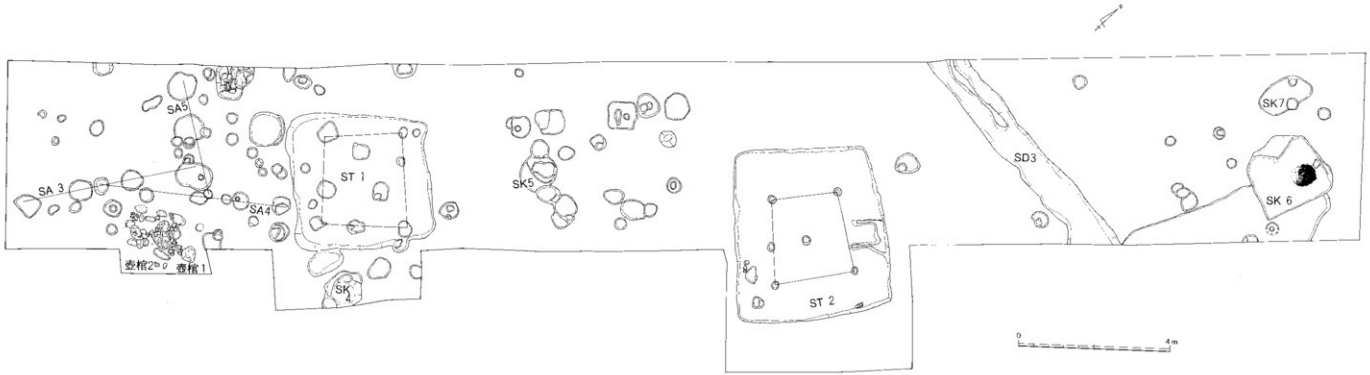


Fig 44　F区　検出遺構全体図(1/100)

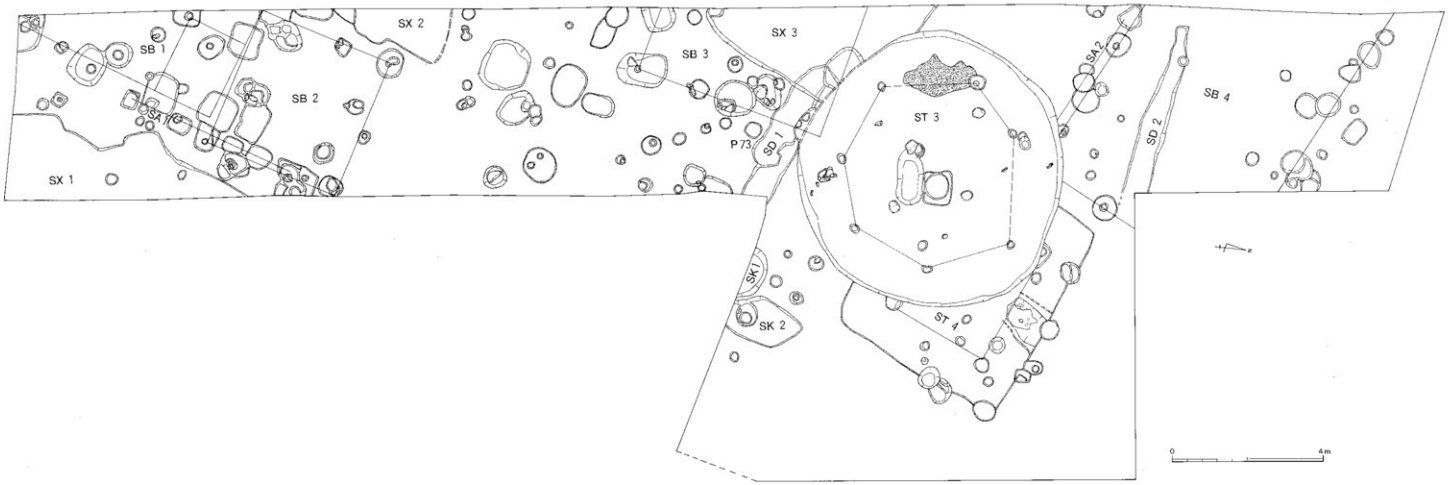


Fig 45　E区　下層　検出遺構全体図(1/100)

できなかった。254・255は，平瓦破片である。254は，凸面は縄目叩きを施し指頭圧痕を残す。凹面は粗い布目を残す。焼成は硬質で凸面は灰色を呈し，凹面は赤変する。255は，凸面は格子目叩きを施す。凹面に模骨痕及び細い布目を残す。焼成は軟質で単黄色を呈す。

(2) Ⅳ層出土の遺物（Fig 61・63）

257～259は須恵器蓋である。257は，擬宝珠のつまみを有す。頂部外面に幅2.5cmの左回りのヘラ削りを施す。口唇部は丸味を帯びた面をなす。258は，頂部欠損。内面に断面三角形のかえりを有す。口唇部は丸くおさめる。全面ヨコなで調整を施す。259は，頂部欠損。内面のかえりは断面三角形でシャープなつくりである。口唇部は丸くおさめる。260，261は須恵器杯身である。260は平底，261は平底状を呈す。内湾気味に立ちあがり，受け部は凹状を呈す。262～264は須恵器杯蓋である。頂部外面ヘラ削り，口唇部は丸くおさめる。262は，内湾気味に立ちあがり僅かに稜をなして頂部に移行する。263は，頂部外面平坦面をなす。264は，外面頂部と立ちあがりの境に僅かに段が見られる。口縁部内面にも僅かに段部が見られる。265は，須恵器杯である。内面にロクロ目が顕著である。266は，土師器鉢である。丸底の底部から内湾気味に立ちあがり口縁部に至る。口唇部は丸くおさめる。内面には下から上方向のヘラ削りがみられる。267は，須恵器高台付杯である。断面台形状を呈する高台が外方へ張り出す。体部は高台脇から丸味を持って立ちあがる。全面なで調整であるが，底部外面に下地のヘラ削りが僅かにみられる。268は，底部から直線的に立ちあがり，口唇部は丸くおさめる。底部外面には重圏が付く。269は，須恵器高杯脚である。「ハ」の字状に下降し，段部をへて端部に至る。端部は水平な面をなす。調整の観察は不可能である。270～273は土師器甕である。270の口縁部はゆるやかに外反し口唇部は尖り気味である。屈曲部内面は弱い稜をなす。胴部内面にヘラ削り，上端はヨコ方向，中位以下は右上り。271は，強く張った肩部から口縁部が丸く外反する。口唇部は丸くおさめる。272は，最大径を胴部中位に有し，口縁部は「く」の字に外反する。口唇部は僅かに凹状をなす。口縁部内・外面共ヨコ方向のなで調整を施す。胴部外面は，叩きの下地の上を右下りのハケ調整を施す。内面はヘラ削り。273は，口縁部は緩やかに外反し，口唇部は丸くおさめる。胴部外面不定方向のハケ調整を施す。口縁部外面に指頭圧痕を認める。外面は全面煤ける。274は，須恵器甕である。焼成は不良で内・外面共淡黄色を呈す。内傾して立ちあがる上胴部は僅かに外反する口縁部がつく。口唇部上面は凹状を呈す。胴部外面は，木理の粗いハケ調整を施した上に櫛描直線文を2帯配す。胴部内面に青海波文を認める。275は，須恵器鉄鉢である。平底の底部より内湾気味に立ち上がる。内面には生成時に生じた粘土紐の凹凸が見られる。276は，土師器土錘である。277は，土師器把手である。芯を堅緻な粘土で作りその上を別の粘土で包み込んでいる。278は，鉄器U字形鋤先である。木身挿入部分はV字状をなす。全長16.9cm，全幅3.8cm，全厚0.9cmを計る。279・280は平瓦の破片である。279は，凸面に格子目叩きを施す。凹面は模骨痕及び細い布目を残すが，粗い右下りのハケ調整を施す。焼成は軟質で淡黄色を呈す。280は，凸面に格子目叩きを施すが一部表面が剝離する。凹面は

模骨痕及び細い布目を残す。焼成は軟質で淡黄色で呈す。

(3) V層の遺物（Fig 61）

281は，土師器鉢である。厚手のつくりで口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸くおさめる。内面に指頭圧痕が顕著である。又外面は煤けて紅く変色している。282は，弥生手捏土器である。内面に指頭によるカキ取り痕が顕著に残る。

3 遺　　構

(1) 弥生時代

竪穴住居

ＳＴ３（Fig 46～48）

Ｅ区の中央よりやや北側に位置する住居址の検出面は，第Ⅵ層淡黄色粘質土（砂混り）層である。住居址の埋土第Ⅰ層は第Ⅵ層と全く同じであったが，紅色の焼土が円形の帯状に検出され円形住居址が認められた。住居址の西半分は古墳時代の竪穴住居址であるＳＴ４の下にあり攪乱を受けているのではないかと思われたが，壁の半分は残存していた。又南西端部はＳＸ３，ＳＤ１，Ｐ81，に切られているがほぼ全容を把握することができた。

平面形は円形を呈し，直径は7.1～7.4ｍ，検出面からの深さ20～40㎝，面積は約40㎡を測る。中央ピットの上端部は１辺が93×83㎝の隅丸方形の平面形を呈し，深さ７㎝を測る段状をなし，下端部は径約70㎝，深さ28～33㎝の円筒状をなす。床面は中央が僅かに盛り上がる。中央ピットには丸太状の炭化材が折れた状態で入っており焼失時には開口していたことが実証される。壁面は焼けていないが埋土中に炭化物の混入が見られる。ＳＴ３－ＳＫ１は楕円形の平面形を呈し，約20㎝の深さを測り，床面は舟形を呈す。壁面は焼けていないが埋土中に炭化物の混入が見られる。主柱穴は，基本的には，壁の内側から90～120㎝の位置に中央ピットを取り囲んでＰ１～Ｐ７の７本柱が想定できるが，Ｐ８・Ｐ９は規模もしっかりしており，Ｐ４と対をなしていることから主柱穴に準ずるものと考えられ，Ｐ８→Ｐ９→Ｐ４と柱の建て替えが行われたと考えられる。又Ｐ３は，他の柱穴より規模が大きく炭化した柱材が一部残存する。Ｐ６は柱穴の切り合いがみられ建て替えが考えられる。柱間距離は1.87～2.932 ｍを測り，整然と位置している。柱穴の平面は円形を呈す。柱穴は直径17～45㎝，深さは35～58㎝を測る。柱穴の埋土はいずれも灰黄粘質土である。

本住居は焼失家屋と考えられ，焼土及び炭化した部材が検出され，床面及び壁面は紅変していた。なお，焼土の下に炭化物が広がるところもみられた。炭化材は，僅かに西側に寄っているが，ほぼ全体的に広がっている。また炭化材は，板状，丸太状，茅状のものが認められ，それぞれ壁材・柱・垂木材・屋根葺き材と推定される。焼土も全般的に見られ，厚さ15㎝程に及ぶところもある。又西端付近では床面に厚さ約２㎝の堅い焼土が認められる。なお炭化材の位置については（Fig 46）に示したとおりである。出土遺物は多く図示したのは床面からの弥生土器（283～320）鉄器（321～325）である。遺物の床面からの出土位置についてはFig 47に示

したとおりである。

壺棺墓

壺棺1（Fig 49）

F区の南西部に位置する。壺棺の検出面はⅥ層：淡黄色粘質土（砂混り）であり，検出面が浅かったが残存状況は比較的良好であった。墓壙の平面形及び墓壙の立ち上がりは精査したが確認することはできなかった。断面で墓壙域を捜したが埋土はⅥ層と同じ淡黄色粘質土（砂混り）であり，掘り方は認めることができなかった。壺棺は複棺（覆口式）で上壺の底部は後世の削平によって大部分が欠損している。下壺は上部½程度を打欠いて置かれており，埋置方位はほぼ北向きで据置角度は27°傾斜を持っている。又下壺に接して礫が配されている。

壺棺2（Fig 49）

F区の南西部に位置し，壺棺1の南側に隣接する。壺棺の検出面はⅤ層：淡黄色粘質土（砂混り）である。検出面が浅かったため削平を受けており残存状況は不良であった。墓壙の平面形及び墓壙の立ち上がりは精査したが確認することができず，断面で墓壙域を捜したが埋土はⅥ層と同じ淡黄色粘質土（砂混り）であり壺棺1と同様掘り方は認められなかった。

(2) **古墳時代**

古墳時代の遺構としては，竪穴住居3棟，掘立柱建物3棟，柵列1列，溝2条等を検出した。また遺構の組合せやその変遷については，次章に譲る。

竪穴住居

ＳＴ1（Fig 50）

F区の南部に位置する。方形のプランを有す竪穴住居で，東壁の一部は，弥生のピットを切り，また中世のピットによって切られている。さらに北西側は一部撹乱を受けている。一辺約3.54m，深さ20～31cm，面積は約13.03㎡を測る。主軸方向はＮ－41°－Ｅを示す。床は，ほぼ平坦面をなし，6個のピットが認められるが，Ｐ1～4を主柱穴とする4本柱構造と推測される。各々の柱間距離は，2.15～2.43mを測る。

第Ⅰ層は黄褐色粘質土，第Ⅱ層は黄淡灰色粘質土である。遺物は，弥生土器を含む土師器，須恵器等で第Ⅰ層に多い。同層北東部からは，土師器把手（340），須恵器杯身（338），鉄鎌（341）等が出土した。また同層北西部からは，土師器甕（335・336）等が出土した。各ピットからは，弥生土器を含む土師器数点が出土し，主柱穴であるＰ2，Ｐ4からは遺物は見られなかった。

ＳＴ2（Fig 51）

F区の中央部に位置する。やや東西に長い方形のプランを有す竪穴住居である。北西側の壁面は削平を受けているが，北側の壁際のほぼ中央部にカマドが確認された。又，南東の壁際に作業用と思われる砥石が置かれている。一辺4.54m，深さ18～39cm，面積は約18.07㎡を測る。主軸方向は，ＳＴ1と同様Ｎ－41°－Ｅを示す。床は平坦面をなし，7個のピットが検出された。ピットは床面から18cm前後の深さをもつが，南東のものだけ30cm近くの深さがある。主柱穴と

考えられるＰ１～４の柱間距離は，1.76～2.3ｍを測る。

第Ⅰ層は淡黄褐色粘質土，第Ⅱ層は淡黄色粘質土（黒色土混じり），第Ⅲ層は灰黄色粘質土，第Ⅳ層は淡黄灰色粘質土（砂質土混じり），第Ⅴ層は淡黄色粘質土（砂質土混じり）である。遺物は，カマド付近から土師器甕（346・347），東側及び西側床面より須恵器杯蓋（342・343）等が出土した。なお各ピットから遺物は見られなかったが，南東部検出面から弥生土器が多量に集中して出土した。

〔カマド〕

住居の内側に構築され，非突出型を示す。左袖は長さ70.6㎝，幅14㎝，右袖は長さ90.6㎝，幅16㎝を測る。燃焼部の幅は約48㎝あり，床面はやや凹み気味に造られ，焼土が残存していた。埋土は，Ⅰ層：焼土，Ⅱ層：黄灰色粘質土（褐色の粒混じり）である。

ＳＴ４（fig 52）

Ｅ区の東寄りに位置する。方形のプランを有す大型の竪穴住居である。弥生の住居（ＳＴ３）を切り，また壁は，主に北東側を数個のピットによって切られているが，北側中央部でＳＴ２と同型のカマドが確認された。一辺5.73ｍ，深さ18～30㎝，面積28.94㎡を測る。主軸方向はＮ－27°－Ｅを示す。床は平坦面をなし，12個のピットが検出された。主柱穴と考えられるＰ１～４は掘り方がしっかりしており，深さが60㎝近くのものもあった。Ｐ４は２段になっており，配置等から建て替えのなされている可能性が高い。各々の柱間距離は，2.57～3.38ｍを測る。

第Ⅰ層は淡黄褐色粘質土，第Ⅱ層は淡黄灰色粘質土，第Ⅲ層は淡黄色粘質土（黒色土混じり）で，一部攪乱を受けた箇所もあった。遺物は，カマド付近から土師器鉢，須恵器杯身（355）が，南部床面から土師器壺（359）・須恵器杯蓋（353・354）等が出土した。上層部には弥生土器が全体的に見られ，ピットへも混入していた。また同層より須恵器提瓶（358）が出土した。

〔カマド〕

ＳＴ２と同様，非突出型を示す。左袖は長さ1.06ｍ，最大幅20.2㎝，右袖は長さ1.16ｍ，最大幅20㎝を測る。燃焼部の幅は78㎝あり，同部中央に土師器甕（357），支脚として用いられたと考えられる石製品（362）がみられた。また上層から床面にかけて炭化物及び灰を伴う焼土が多量に残存していた。埋土は，Ⅰ層：焼土，Ⅱ層：淡黄色粘質土（焼土の粒混じり），Ⅲ層：淡黄色粘質土（砂混じり）である。

掘立柱建物

ＳＢ１（Fig 53）

Ｅ区南端に位置する。建物は，桁行３間（5.64ｍ）以上×梁間１間（2.32ｍ）以上の南北棟で，棟方向はＮ－20°－Ｅである。柱穴の平面は，隅丸方形を呈し，一辺90～106㎝，柱痕径は20～30㎝を測る。これらの検出面からの深さは，42～86㎝である。柱間距離は，桁行で1.78～2.06ｍとなっている。建物の北東部は，古代の住居（ＳＢ２）によって一部切られ，南西側は

調査区外であるため未調査である。遺物は，須恵器甕（363）等が出土している。

ＳＢ３（Fig 55）

Ｅ区中央部に位置する。建物は，桁行２間（5.24ｍ）×梁間（2.06ｍ）以上の南北棟で，棟方向はＮ－16°－Ｅである。柱穴の平面は，隅丸方形を呈す。柱穴の大きさはしっかりしており，一辺約１ｍ，柱痕径は34～44㎝を測る。これらの柱穴の検出面からの深さは，28～52㎝である。柱間距離は，桁行で2.46～2.6ｍとなっている。北東部コーナーの柱穴は，ほぼ同時期の溝（ＳＤ１）を切り，西側は調査区外であるため未調査である。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

ＳＢ４（Fig 56）

Ｅ区北部に位置する。建物は，桁行４間（7.54ｍ）×梁間１間（2.16ｍ）以上のほぼ東西棟で，棟方向はＮ－59°－Ｗである。柱穴の平面は，円形及び楕円形を呈し，一辺60～68㎝，柱痕径は12～20㎝を測る。これらの柱穴の検出面からの深さは，12～56㎝である。柱間距離は，桁行で1.62～2.08ｍとなっている。南東部コーナーの柱穴は，弥生期の住居（ＳＴ３）を切っている。また北東部及び西側は，調査区外であるため未調査である。遺物は，須恵器杯身（364）・甕（365）等が出土している。

柵列

ＳＡ４（Fig 57）

Ｆ区北端に位置する。規模は，Ｎ－46°－Ｅの方向に４間分4.94ｍ伸びている。柱穴の平面は，楕円形を呈し，柱痕径は，直径12～20㎝，深さ６～16㎝を測る。柱間距離は，1.1～1.24ｍである。遺物は，須恵器杯身（367）等が出土している。

柱穴

Ｐ73（Fig 45）

Ｅ区中央部，ＳＤ１の南側に位置する。平面は円形を呈し，直径44㎝，短径40㎝，深さ15.9㎝を測る。埋土は濃茶色粘質土で，遺物は，須恵器杯身（366）が出土している。

溝

ＳＤ１（Fig 59）

Ｅ区中央部に位置する。中央部は段状をなし，北西側はピットとＳＸ３によって切られ，また北壁中央部は，ほぼ同時期の方形のピット（ＳＢ３・Ｐ１）によって切られている。規模は，長さ約3.88ｍ，幅78～98㎝，深さ４～16㎝，主軸方向はＮ－67°－Ｗを測る。断面は逆台形をなし，埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

ＳＤ２（Fig 59）

Ｅ区北部に位置する。東西方向に走る溝で，西端は細く浅くなっている。規模は，長さ約4.58ｍ，幅32～76ｍ，深さ11～23㎝，主軸方向はＮ－79°－Ｗを測る。断面は箱形を呈し，埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

(3) 奈良時代～中世

奈良～中世の遺構としては，掘立柱建物１棟，柵列２列，土坑６基，溝１条，性格不明なものも１基等を検出した。

掘立柱建物

ＳＢ２（Fig 54）

Ｅ区南部に位置する。建物は，桁行１間（3.82ｍ）×梁間３間（3.54ｍ）の南北棟で，棟方向はＮ－16°－Ｅである。柱穴の平面は，楕円形及び隅丸方形を呈し，一辺40～80㎝，柱痕径は18～30㎝を測る。これらの柱穴の検出面からの深さは，10～56㎝である。柱間距離は，梁間で1.46～2.08ｍとなっている。西側の柱穴は１ヵ所確認できなかった。遺物は，須恵器高台付椀（368）等が出土している。

柵列

ＳＡ１（Fig 57）

Ｅ区南端，ＳＢ１の東側に位置し，一部同時期の住居（ＳＢ２）を切っている。規模は，３間（4.7ｍ）のほぼ南北方向で，主軸方向はＮ－20°－Ｅを測る。柱穴の平面は，隅丸方形を呈し，一辺50～64㎝を測る。柱痕は１ヵ所で確認され，直径24㎝，深さ10㎝であり，柱間距離は1.4～1.64ｍである。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

ＳＡ３（Fig 57）

Ｆ区北端に位置する。規模は，時期不明のＳＡ５と直交する形で，Ｎ－29°－Ｅの方向に３間分4.26ｍ伸びている。柱穴の平面は，楕円形及び隅丸方形を呈し，一辺60～62㎝，深さ６～35㎝を測る。柱間距離は1.42ｍ間である。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

柱穴

Ｐ231

Ｅ区北部，ＳＤ４の南側に位置する。平面は円形を呈し，長径28㎝，短径24㎝，深さ8.6㎝を測る。埋土は黄褐色粘質土で，遺物は，墨書土器（369）が出土している。

土坑

ＳＫ６（Fig 58）

Ｆ区北端に位置する。平面は不整方形を呈し，長径2.0ｍ，短径1.93ｍ，深さ10～30㎝，長軸方向はＮ－15°－Ｅを測る。断面は舟底形で，埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。遺物は，西側床面より土師器皿（373～375）・杯（376）・椀（377），羽釜が出土した。なお374は，完形である。また北側には，床面に炭化物が円形に集中して見られ，近接して河原石があった。

ＳＫ１（Fig 58）

Ｅ区中央東寄りに位置する。平面は半円形を呈し，長径1.39ｍ，短径0.53ｍ，深さ20～29㎝，長軸方向はＮ－73°－Ｗを測る。断面はＵ字形をなし，埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で，図示できるものではなかった。

ＳＫ２（Fig 58）

Ｅ区中央東寄りに位置する。平面は菱形を呈し，長径2.0ｍ，短径0.78ｍ，深さ14～48㎝，長軸方向はＮ－４°－Ｅを測る。南側には，直径60㎝のピットが掘り込まれている。埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

ＳＫ３（Fig 58）

Ｅ区北部に位置する。平面は平行四辺形を呈し，長径1.38ｍ，短径0.67ｍ，深さ10～14㎝，長軸方向はＮ－24°－Ｅを測る。断面は逆台形をなし，底面は平坦である。埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。出土遺物は細片で，図示できるものはなかった。

ＳＫ４（Fig 58）

Ｆ区の南部，ＳＴ１の東側に位置する。平面は楕円形を呈し，長径1.26ｍ，短径0.94ｍ，深さ７～34㎝，長軸方向はＮ－４°－Ｗを測る。断面は逆台形をなし，埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。遺物は，土師器杯（370・371）が出土している。

ＳＫ５（Fig 58）

Ｆ区中央部，ＳＴ１の北側に位置する。平面は円形を呈し，長径1.1ｍ，短径0.94ｍ，深さ９～37㎝，長軸方向はＮ－10.0°－Ｗを測る。底は，ほぼ平坦面をなし，北側を階段条に掘り込んでいる。埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。遺物は，土師器皿（372），把手，青磁細片が出土している。

溝

ＳＤ４（Fig 59）

Ｅ区北部に位置する。上面で検出され，規模は，長さ約5.76ｍ，幅26～68㎝，深さ15～20㎝，主軸方向はＮ－60.0°－Ｗを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

性格不明遺構

ＳＸ１（Fig 60）

Ｅ区南端に位置する。不定形の落ち込みがみられ，深さ８～12㎝を測り，調査区の大部分を占める。床面は平坦で，自然のものか，意図的に掘られたものかは不明である。埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。遺物は，須恵器壺（378）・高杯（379）等が出土した。

(4) その他

その他の遺構としては，時期不明なもので柵列１条・溝１条，時期及び性格不明なもの１基が検出された。

柵列

ＳＡ５（Fig 57）

Ｆ区北端に位置する。規模は，３間（4.18ｍ）のほぼ東西方向で，主軸方向はＮ－62°－Ｗを測る。柱穴の平面は，楕円形及び隅丸方形を呈す。数個のピットにより切られているが，柱

穴の大きさはしっかりしており，一辺44～84cmを測る。また柱痕径は，直径16cm，深さ28cmであり，柱間距離は1.1～1.74mである。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

溝

ＳＤ３（Fig 59）

Ｆ区北部に位置する。東西に走り，西端で中央から二分される。規模は，長さ約6.25m，幅0.78～1.1m，深さ11～27cm，主軸方向はＮ－88°－Ｗを測る。断面は逆台形を呈し，埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。遺物は，須恵器壺（380）等が出土している。

性格不明遺構

ＳＸ２（Fig 60）

Ｅ区南部に位置する。壁際に不整形な落ち込みがみられ，深さ18～32cmを測る。床面は一部段状をなしているが，それらが別の掘り込みであるか，同時の掘り込みであるかはわからない。前者であるとしても，その先後関係は不明である。埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

ＳＸ３（Fig 60）

Ｅ区中央部に位置する。平面は隅丸方形を呈し，約10cmの落ち込みが確認された。床面に大小の河原石が露出しており，どのような目的で掘られたのか不明である。ＳＢ３のＰ５とＳＤ１に切られ，埋土は濃茶色粘質土の単純一層である。出土遺物は少量で，図示できるものはなかった。

4　遺　　物

(1) 弥生時代

今回の調査で出土した弥生時代の遺物には，土器，鉄器がある。以下，各遺構から出土した遺物の概要を述べることにする。

竪穴住居

ＳＴ３（Fig 47・64・65－283～325）283・284は手捏土器である。283は，底部から内湾気味に立ちあがり，口縁は短く外反する。内・外面共に指頭圧痕が残る。頸部に爪形が残る。底部は僅かに凹む。284は，底部から直線的に立ちあがる。内・外面共に指頭圧痕を残す。内面に爪形を残す。285・286は小型の鉢である。285は，鉢底部である。突出した平底を呈す。外面に指頭圧痕を残す。中央部が僅かに凹む。286・287は，上げ底気味の底部から内湾気味に外方へ立ちあがる。底部外面に指頭圧痕を残す。288は，高台状の底部から内湾気味に外方へ立ちあがり口径部は丸くおさめる。289は，突出した上げ底気味の底部で中央が凹む。底部から内湾して立ちあがり球状を呈す。290・291は，上げ底気味の外方に張り出す底部をもち，中央が凹む。胎土は精選された粘土で砂粒を含まない。292～294は，「ハ」の字状に張り出す脚部を有し，脚端部は面をなす。底部から内湾しながら立ちあがり口唇部は丸くおさめる。293は，体部内・外面共にヘラ磨き，内面は縦方向のヘラ磨きを施す。口縁部内面はヨコ方向のなで調

整が施される。295は，上げ底気味の底部から外反して立ちあがる。内面下から上の縦方向のヘラ削り，外面縦方向のハケ調整を施す。296は，上げ底気味の平底から直線的に外方へ立ちあがり口唇部は丸くおさめる。底部接合部には指頭圧痕を残す。体部内面横方向のハケ調整を施す。外面体部下端に籾圧痕を認める。297は環状の底部を成形し，その中に粘土を充塡している。底部より直線的に外方へ立ちあがる。内面下半にハケ調整を施す。298～302は，鉢である。口縁部は「く」の字状に外反する。298は，口縁部及び上胴部内・外面共にヨコ方向のなで調整を施す。口縁部内面は下地にヨコ方向のハケ調整を残す。胴部外面は右下りのハケ調整，胴部内面は右下りの木理の粗いハケ調整を施す。299は，口唇部は面をなす。外面不定方向のヘラ磨きを施す。300は，口唇部は僅かに凹む。胴部外面上半は右下りのハケ調整。下半は縦方向のヘラ磨きを施す。胴部内面上半には指頭圧痕が顕著であり下半はヘラ磨きを施す。内・外面共に煤けている。301は，底部欠損，僅かに内湾気味に立ちあがり口縁部は直立気味である。口唇部は強いヨコなで調整によって凹んでいる。体部外面は剝離が著しいがハケ調整の後ヘラ磨きを施した面が残ることから全面に及んでいたと思われる。内面は，放射状のヘラ磨きを施す。302は，底部から僅かに内湾気味に立ちあがり，上胴部で強く内側にカーブし，口縁部は僅かに外反する。口唇部は幅広い面をなす。口縁部下4.5cm内外はヨコ方向のヘラ磨き，胴部外面は縦方向のヘラ磨き，内面にも底部から放射状のヘラ磨きがあるが磨耗のため十分観察できない。底部内面に腐食物が付着している。303～306は高杯である。303は，口縁部及び脚部欠損，外面は放射状のヘラ磨き，内面は放射状のハケ調整を施す。304～306は，浅い椀状の杯部になめらかに外反する脚部を有し，口唇部は丸くおさめる。脚端部は欠損。304は，口縁部外面に2条の凹線を施す。脚裾に2条のヘラ描き沈線を施す。脚内面にしぼり目を残す。杯部及び脚部外面は丁寧な放射条のヘラ磨きを施す。杯部内面にヨコ方向のハケ調整を施す。305は，杯部外面もヘラ磨きがあったと考えられるが，器表の剝離の為に観察できない。杯部内面は，ヨコ方向の木理の粗いハケの上を放射線状に丁寧なヘラ磨を施す。杯部内面丹塗りを施す。306は，脚を杯部に差し込む，口縁部外面はヨコなで，杯部下半に縦方向のヘラ磨きを部分的に施す。杯部内面は，不定方向のハケ調整を施す。内・外面共にオリーブ黒色を呈す。307～312は，甕である。307・308は上げ底状の平底から斜め外方に直線的に立ちあがる。307は，外面ハケ調整，胴部内面は下から上方向のヘラ削りを施す。308は，外面縦方向のハケ調整を施す。胴部下端から底部にかけて黒斑を認める。309～312は，「く」の字状に外反する口縁部を有し，口唇部はヨコ方向の強いなでにより凹状をなす。309は，胴部内面は頸部まで右から左方向のヘラ削りを施す。310は，胴部外面を縦方向のハケ調整を施し叩き目を消している。胴部内面の上胴部は右から左方向，中位以下は下から上方向の粗いヘラ削りを頸部まで施す。311は，胴部外面をハケ調整の後丁寧になで調整を施す。口縁部内・外面はヨコ方向の強いなで調整を施す。312は，上胴部に最大径を有す。胴部外面下半は縦方向のハケ調整，上半部は叩きを施し，上部は水平方向に，下部は右上に施す。胴部上端，頸部外面はハケ調整を施す。313～320は壺

である。313は，底部から内湾気味に立ちあがり胴部中位に最大径を有す。胴頸間に僅かに凹みをもつ。頸部は内傾して直線的に立ちあがり口縁部は緩く外反し，口唇部は丸くおさめる。胴部外面ハケ調整胴部内面の上位は指なで，中位に左方向のヘラ削りを施す。口縁部外面はハケ調整の上をヘラ磨きしていたと考えられる。314は，平底の底部から内湾気味に立ちあがり，胴部中位に最大径を有すと考えられる。頸部は直線的に立ちあがり，口縁部は外方に屈曲する。胴部外面は剝離が著しいが縦方向のヘラ磨きがみられ頸部は縦方向のハケ調整，口縁部は内・外面共ヨコなで調整を施す。胴部内面は左方向のヘラ削りを施す。口唇部は丸くおさめる。315は，ＳＴ３－ＳＫ１から出土したが胴部以下欠損。頸部から緩やかに外反する口縁部を有す。口唇部は面を持つ。口縁部外面はヨコ方向のなで，頸部外面は縦方向のハケ調整を施す。頸部内面は右下りのハケ調整を施す。316は，口縁部である。水平に開き口唇部は上下に大きく拡張し，貝殻腹縁による圧痕文を巡らし，その上から５条の擬凹線文を配す。上端面には刺突文を巡らす。317は，突出する平底の底部から斜上外方に立ちあがる。胴部外面は細い木理により縦方向のハケ調整，内面は左下りの粗いハケ調整を施す。318は，胴部下半外面に縦方向のハケ調整後ヘラ磨きを施す。突出した底部外面及び内面に指頭圧痕を残す。319は，底部より内湾して立ちあがり球形を呈す。胴部下半外面にヘラ磨きを施す。320は，上げ底状の底部から外方に直線的に立ちあがる。胴部外面は放射状のハケ調整を丁寧に施す。胴部外面は，下から上方向に粗い木理のハケ調整を施す。胴部外面は煤ける。321は，不明鉄器である。322は，鉄鏃と考えられる。323は鏃である。324・325は不明鉄器であるが，Ｕ字形を呈し，腕飾りの可能性が考えられる。

壺棺墓

壺棺１（Fig 66－326～328）326は下壺である。最大径を上胴部に有し，肩が張り出している。外面は叩き→ハケ→なで調整の順で仕上げている。叩きの方向は，上胴部は水平，中～上位左上りである。底部は欠損しているが，僅かに平底を留めるものであろう。なお口縁部は意識的に欠損したものと考えられる。327は，326を留める様に破片が分散して置かれた状態で検出した。平底から内湾して立ちあがる。胴部下半外面は目の粗い叩きの上をハケ調整，内面は強いなで調整を施す。328は，326の上壺として置かれた状態で検出した。内湾気味に立ちあがり，口縁部は直線的に外反，内面に陵をなす口唇部は外傾した面を持つ。口縁部外面は縦方向，内面ヨコ方向のハケ調整。胴部外面は叩きの上をハケ調整。上半は右上り中位以下は水平方向の叩きを施す。胴部内面は，上部と下部にハケ調整を施し，他はなで消す。胴部中位に大きな黒斑を認める。

壺棺２（Fig 66－329・330）329は，平底の底部から内湾して立ちあがる。最大径を胴部中位に有す。胴部外面は，水平方向及び右下りの叩き調整の後にハケ調整を施す。ハケ原体に木理の粗・密の２種を認める。内面は，木理の粗い原体によるハケ調整を施す。330は，329に重なって検出した。胴部中位に最大径を有し，なめらかなカーブを描いて内湾する。口縁部は「く」

の字状に外反し，口唇部は丸くおさめる。外面は口縁外面まで叩きを施す。内面の調整は器表の粗れによって十分観察できないが下位にハケ調整を施す。

(2) 古墳時代

今回の調査で出土した古墳時代の遺物には，土師器，須恵器，土製品，鉄器がある。以下遺構から出土した遺物の概要を述べることにする。

竪穴住居

ＳＴ１（Fig 66－331～341）331は，土師器高杯の脚である。脚は「ハ」の字状に外方に張り出す。外面は指頭で押圧後部分的に縦方向のハケ調整を施す。内面の上半は縦方向，下半はヨコ方向のハケ調整を施す。332～334は，土師器甕である。口縁部は緩やかに外反し，口唇部は丸くおさめる。332の胴部内面は，指頭で押圧した後，縦方向の強いハケ調整を施す。333・334は，ヘラ削りを施す。胎土は0.5～２㎜の砂粒を多く含む。335・336は，土師器甕である。335は，口縁部は「く」の字状に外反し，口縁端部外面は強いヨコなでにより凹状をなす。口唇部は丸くおさめる。336は直線的に立ちあがり，口縁部は外方に屈曲する。頸部から胴部にかけて外面は右下りのハケ調整，胴部内面は強い下から上に左上りのヘラ削を施す。337は，須恵器壺である。口縁部は外反して立ちあがり，口縁端部は上下に拡張し，口唇部は丸くおさめる。338は，須恵器杯である。立ちあがりは，外反気味にやや内傾し，端部は丸くおさめる。受部はヨコなで調整を施し凹む。端部は丸くおさめる。底部外面は逆時計まわりのヘラ削りを施す。339は，土師器土錘である。粘土紐を切断して両端にそれぞれ１孔を穿つと考えられる。340は，土師器把手である。体部内面に縦方向のヘラ削りを施す。外面は煤ける。341は鉄鎌である。全長8.0cm，全幅3.0cm，全厚0.8cmを測る。

ＳＴ２（Fig 67－342～352）342・343は須恵器杯蓋である。口唇部は丸くおさめる。頂部外面は右方向のヘラ削り，内面はヨコなで調整の後一定方向のなで調整を施す。342は，口縁端部内面ににぶい段を有す。頂部外面左方向のヘラ削りの後ヨコなで調整を施す。頂部内面に青海波文を残す。344・345は，須恵器杯身である。僅かに内湾しながら外方に延び受け端部は丸くおさめる。立ちあがりは，外反気味に内傾し，端部は丸くおさめる。内・外面共ヨコなで調整を施す。346・347は，土師器甕である。胴部は内湾気味に立ちあがり，口縁部は外方に屈曲する。口唇部は外傾して面をなす。口縁端部内面は粘土帯を貼付し，指頭で押圧した後，ヨコ方向左下りのハケ調整を施す。胴部内面に粘土接合痕を残す。348は，須恵器甕である。口縁部は丸みをもって外反する。口縁端部は肥厚する。口縁部内・外面共にヨコなで調整を施す。胴部内面に青海波文が残る。349は，土師器甕である。口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸くおさめる。胴部内面は不定方向の粗い木理のハケ調整を施す。350は，土師器鉢である。口縁部は「く」の字状に外反し，口唇部は丸くおさめる。内面は粗雑な不定方向のハケ調整を施す。胎土に藁状のものが混和する。351は，土師器把手である。352は，土錘である。

ＳＴ４（Fig 67－353～362）353・354は，須恵器杯蓋である。頂部外面はヘラ削りを施す。

口縁部内面に僅かに段を有す。頂部と立ちあがりの境外面に弱い段を有す。355・356は須恵器杯身である。内湾気味に立ちあがり，受け端部は丸くおさめる。立ちあがりは外反気味に内傾し端部は丸くおさめる。底部外面左方向のヘラ削り。357は土師器甕である半球状の底部を有す。外面は不定方向のハケ調整を施す。内面には指頭圧痕が残る。358は，須恵器提瓶である。口縁部及び底部欠損。肩部に認められる把手は先端部は欠損しているが鍵形の突起が付けられる。359は，土師器壺底部である。底部外面端部に粘土帯接合痕を残す。平底の底部から斜め上方に外反して立ちあがる。内・外面共に器表の剥離が著しく調整の観察は不可能であるが，外面にハケ状原体の圧痕を認める。360は，須恵器甕である。頸部は，胴部上端から強く屈曲し，一旦直線的に外方に立ち上がった後僅かに外反する。口縁部は，粘土帯接合部より上位で外方に肥厚する。口縁部内面は，強いヨコなで調整により僅かに跳ね上がり口縁状を呈す。上胴部外面は，叩きの上を横方向のハケ調整を施す。上胴部内面に青海波文を残す。361は，土師器把手である。362は，石製品である。カマドに直立して検出した。下半は火を受けたため紅変しており，煤けていることから支脚として用いられたと考えられる。

掘立柱建物

ＳＢ１（Fig 68－363）363は，須恵器甕口縁部である。緩やかに外反する。口縁端部は外面に折り返して貼付け，内・外面共ヨコなで調整を施す。

ＳＢ４（Fig 68－364・365）364は須恵器杯身である。体部は僅かに内湾しながら外方に立ちあがり受端部は丸くおさめる。立ちあがりは僅かに外反して内傾し，端部は丸くおさめる。内・外面共ヨコなで調整を施す。365は，須恵器甕である。口縁部は漏斗状に外反し，口唇部は僅かに凹状を呈する面をなし下端に沈線を配す。

柵列

ＳＡ４（Fig 68－367）367は，須恵器杯身である。受端部は丸くおさめる。立ちあがりは外反気味に内傾する。

柱穴

Ｐ73（Fig 68－366）366は，須恵器杯身である。体部は内湾気味に外方に立ちあがり受端部は丸くおさめる。立ちあがりは僅かに外反して内傾し，端部は丸くおさめる。内・外面共ヨコなで調整を施す。

(3) 奈良時代～中世

掘立柱建物

ＳＢ２（Fig 68－368）368は，須恵器高台付椀である。外方に張り出す高台を有し，畳付けは段状を呈す。高台脇から丸く内湾して立ちあがる。体部は内・外面共粗いヨコなで調整を施す。

柱穴

Ｐ231（Fig 68－369）369は，須恵器高台付杯で墨書土器である。外方にやや踏んばった高

台を底部外端に貼付け，体部は内湾気味に上方に立ちあがる。底部外面に「水」の墨書を認める。

土坑

ＳＫ４（Fig 68－370・371）370・371は，土師器小杯である。底部外面に回転糸切り痕を認める。口唇部は丸くおさめる。370は，体部外面に371は体部内面にロクロ目が残る。

ＳＫ５（Fig 68－372）372は，土師器皿である。底部から直線的に上外方に立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。底部外面は凹む。

ＳＫ６（Fig 68－373～377）373～375は，土師器皿である。373は体部は短く，平底から斜め上方へ外反し，口唇部は丸くおさめる。口縁部をつまんで強いヨコなで調整を施す。底部ヘラ切り痕を認める。374は完形で出土した。底部ヘラ切り痕を認める。平底から斜め上方に外反して立ちあがる。口唇部は丸くおさめる。底部内面に粘土巻き上げ痕が残る。375は，平底から体部は緩やかに外反し口縁端部は丸くおさめる。底部ヘラ切り痕を認める。376は，土師器杯である。平底から上外方に立ちあがる。体部外面にヨコなで調整を施す。底部外面ヘラ切り痕を認める。377は，土師器椀である。内湾気味に立ちあがる。体部内面にヨコ方向のヘラ磨きを施す。搬入品と考えられる。

性格不明遺構

ＳＸ１（Fig 68－378・379）ＳＸ１は８世紀代と考えられるが，378・379の古い物が混じる。378は，須恵器壺底部である。平底から内湾気味に立ちあがる。内・外面共ヨコなで調整を施す。底部外面ヘラ切り痕を認める。379は，須恵器高杯脚である。裾部は水平に屈曲し，端部は上下に拡張し，端面は凹面をなす。

溝

ＳＤ３（Fig 68－380）380は，須恵器壺である。直立する口縁部を有す。口縁部は内方に折り返したのちつまんで強いなで調整を施す。粘土接合帯を認める。口唇部は面をなす。

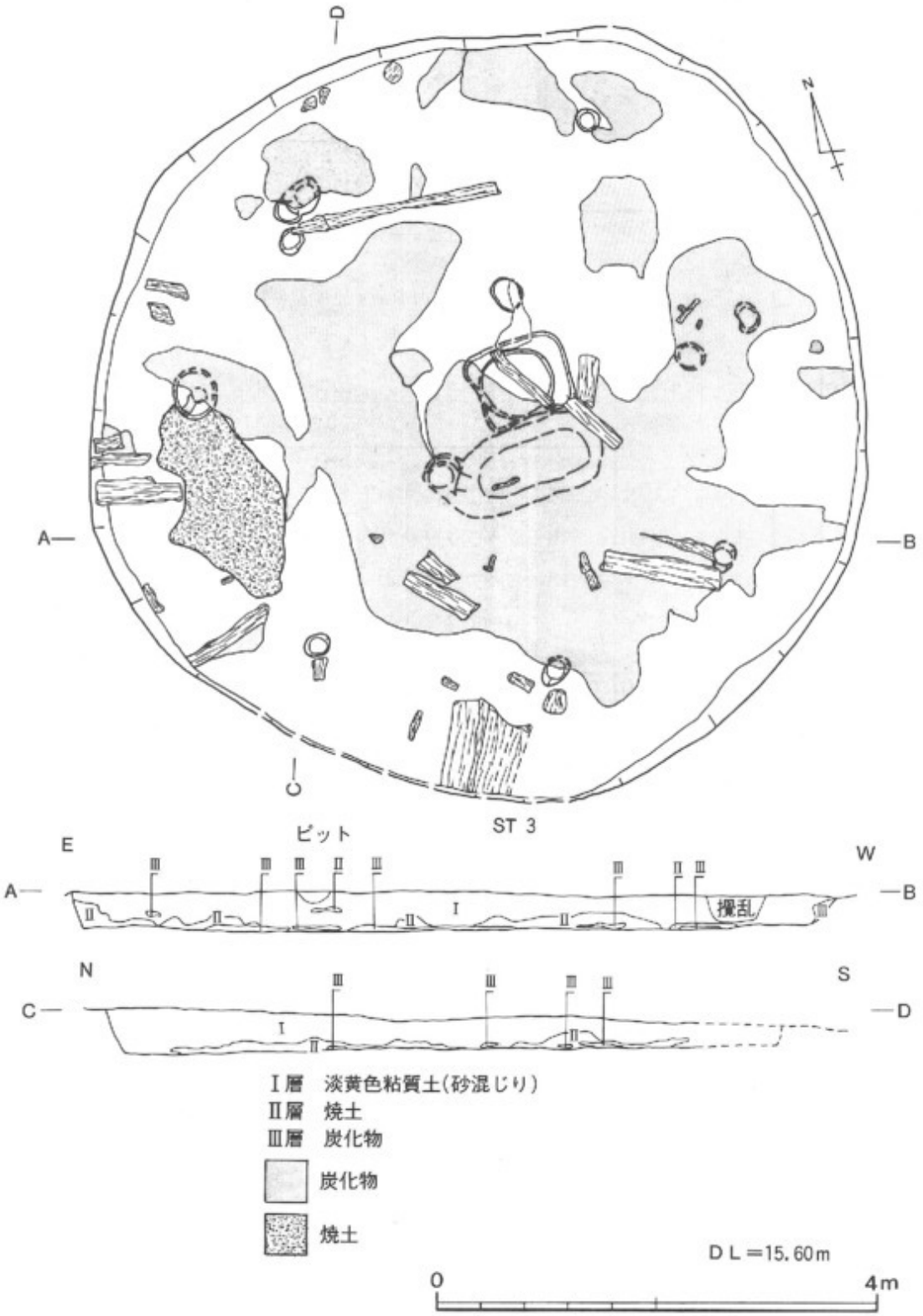


Fig 46　E区　ST 3　炭化物・焼土検出状態実測図

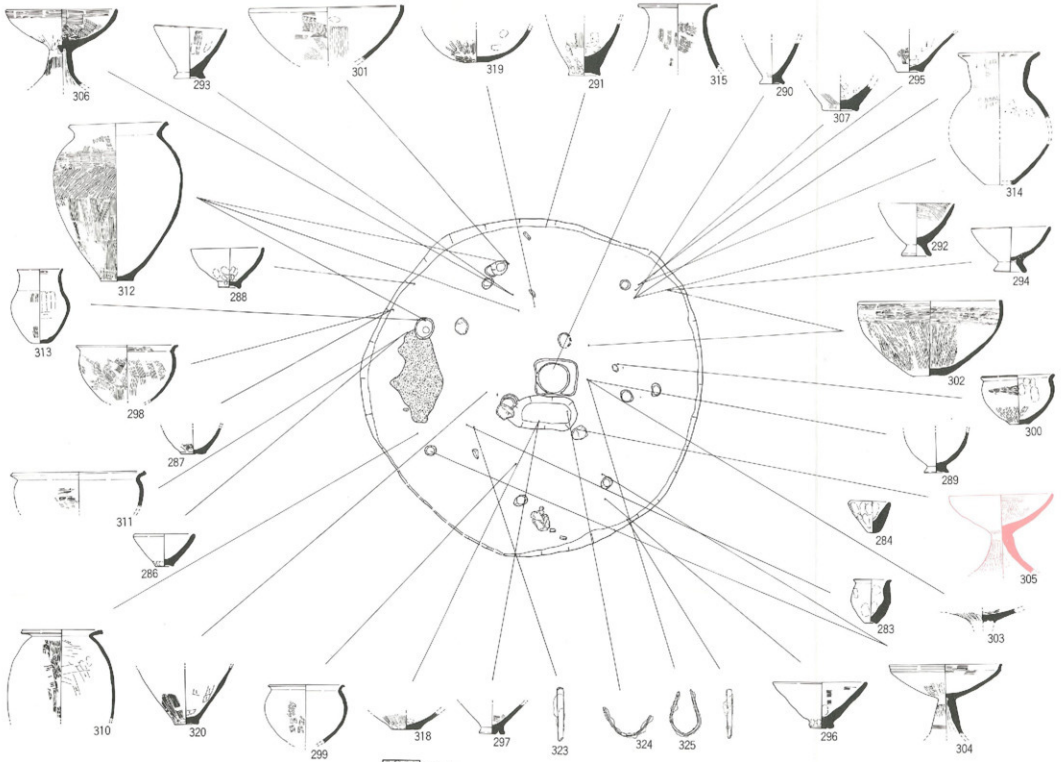


Fig 47　E区　ST 3　遺物出土位置図（縮尺不定）

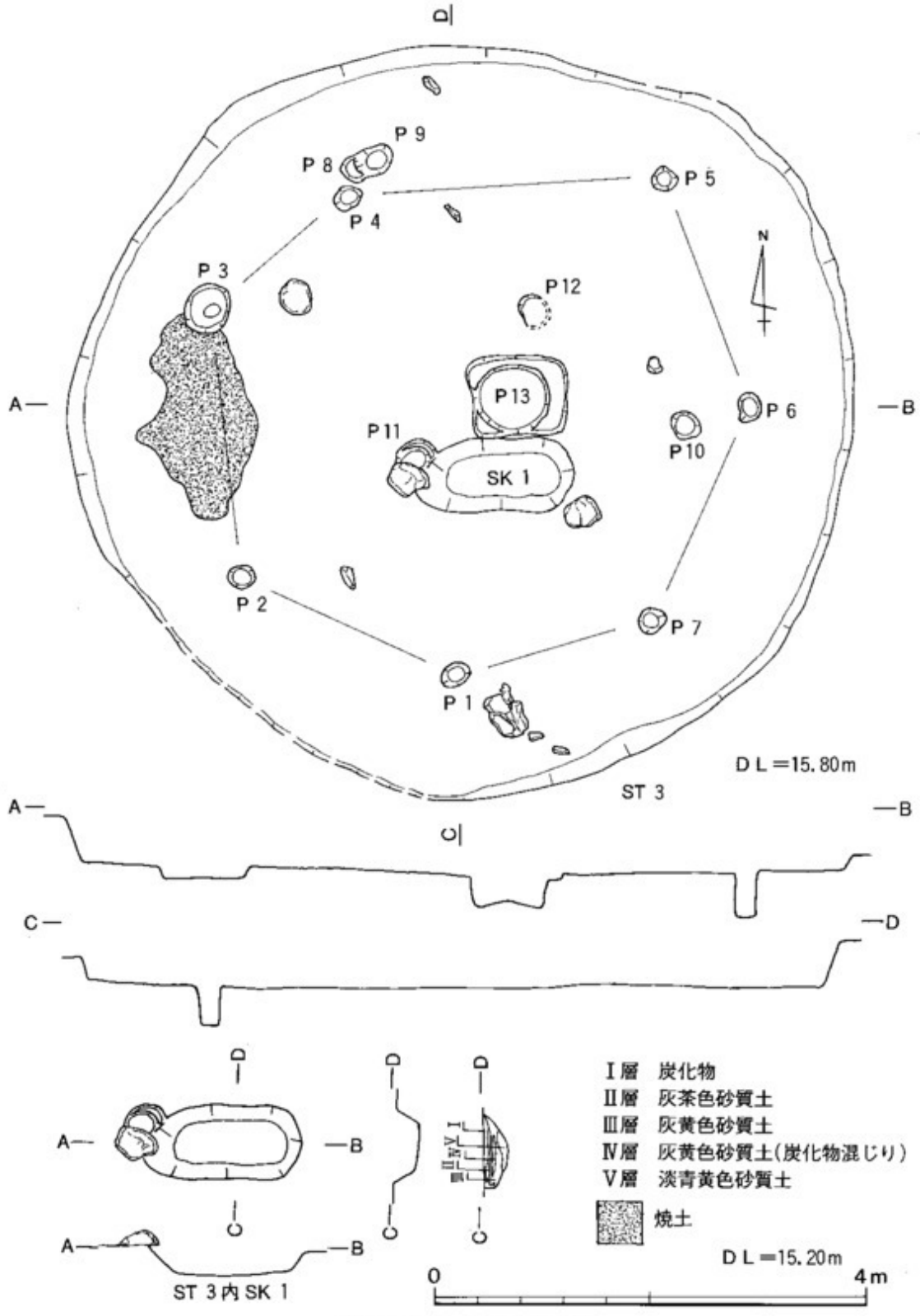


Fig 48 E区 ST 3 実測図

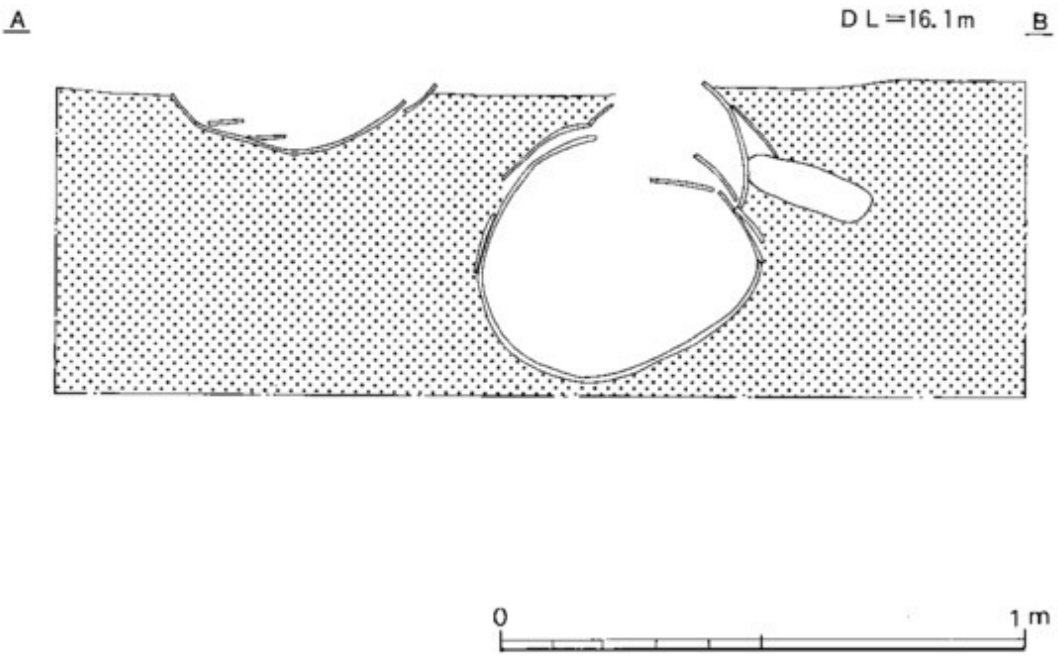


Fig 49　F区　壺棺1～2実測図

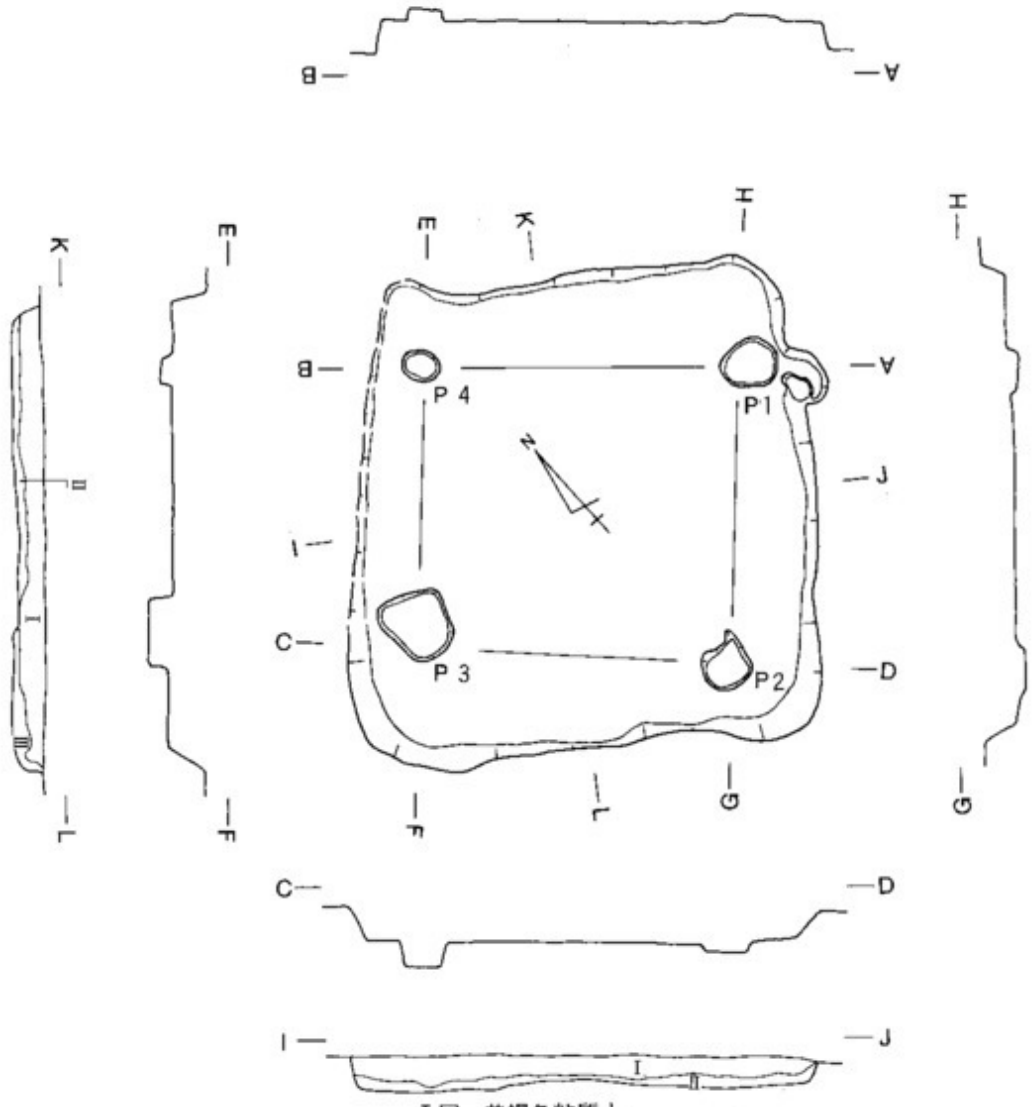
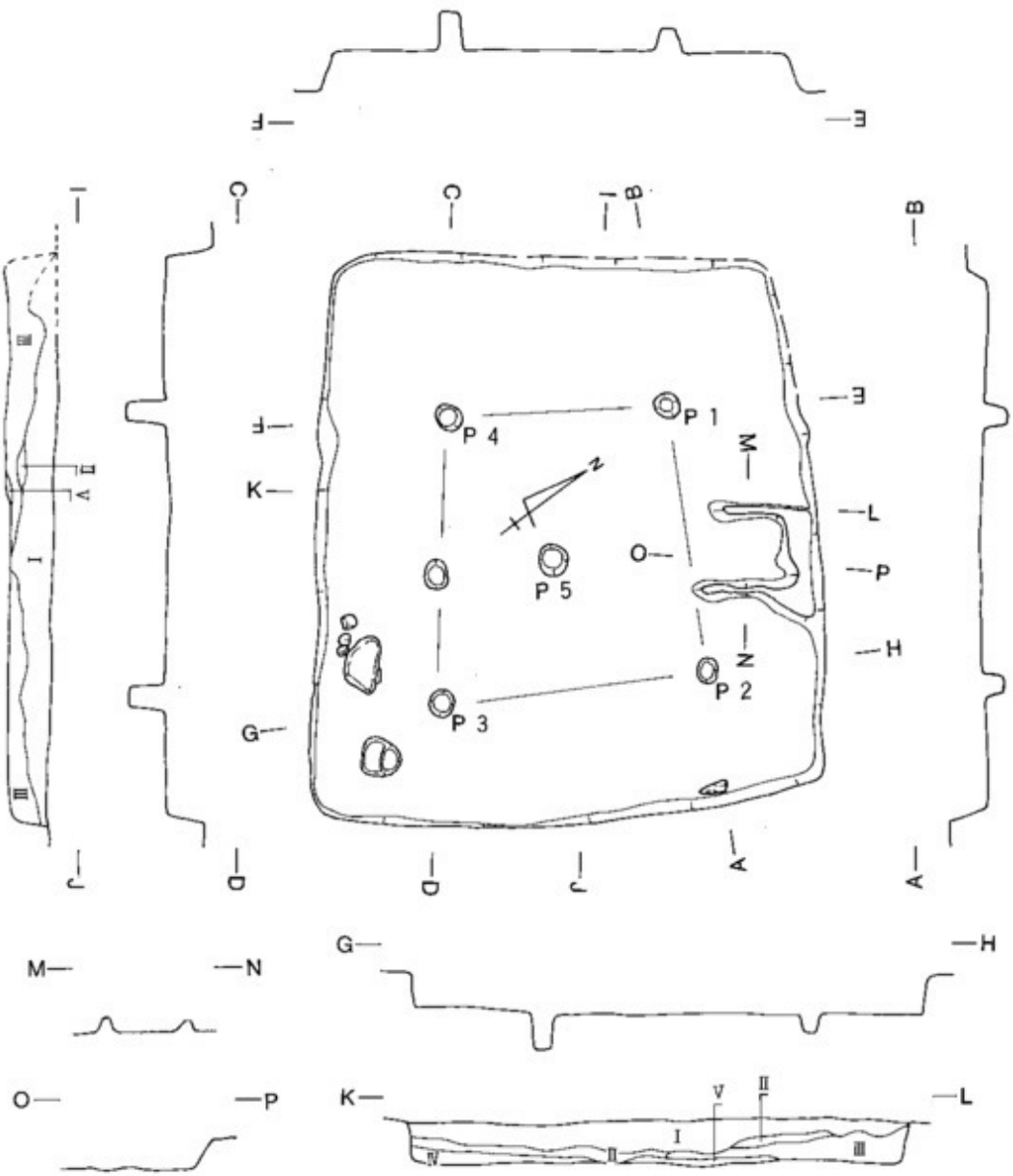


Fig 50　F区　ST 1　実測図



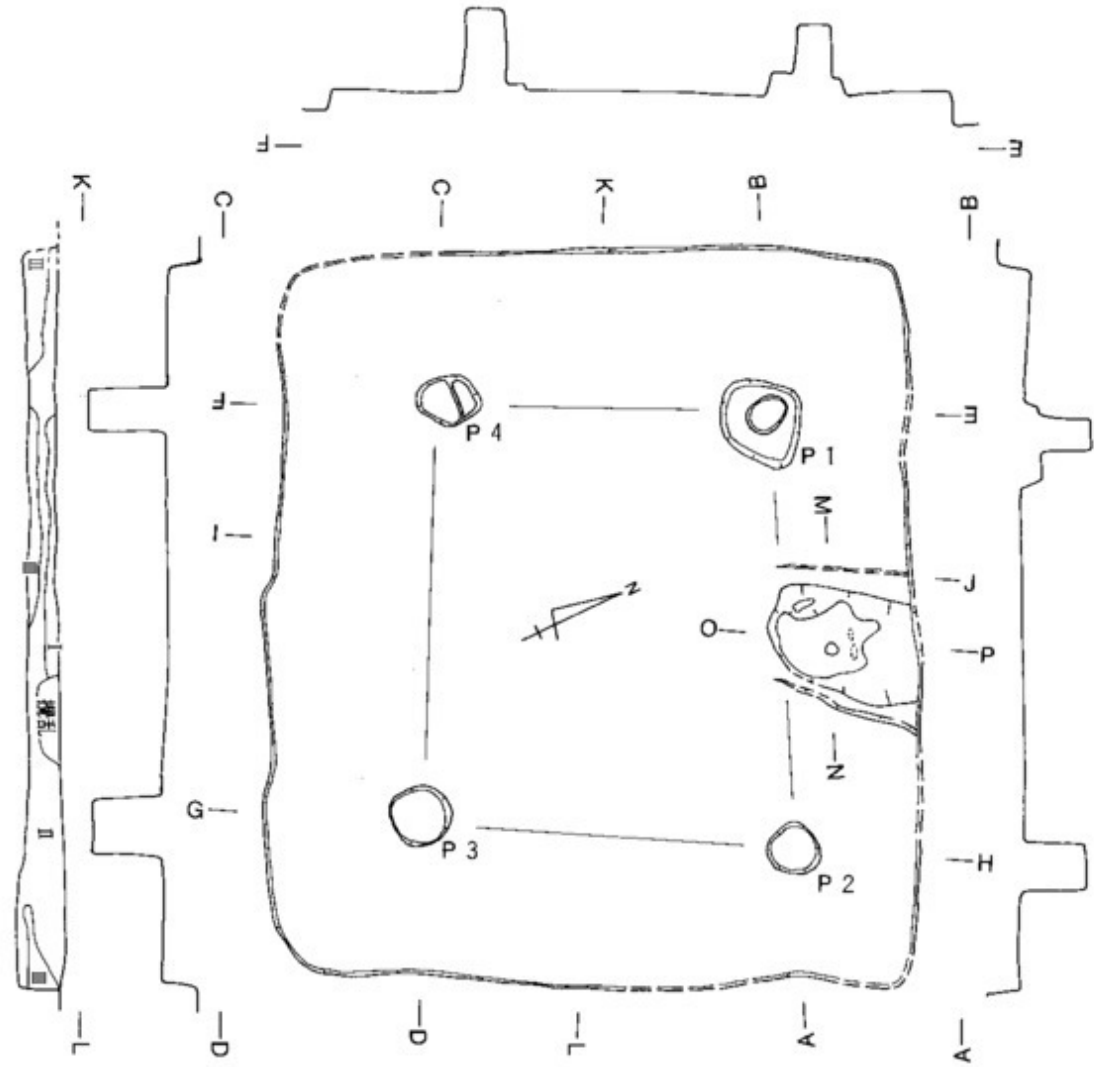
Ⅰ層　淡黄褐色粘質土
Ⅱ層　淡黄色粘質土(灰黒色粘質土混じり)
Ⅲ層　灰黄色粘質土
Ⅳ層　淡黄灰色粘質土(砂混じり)
Ⅴ層　淡黄色粘質土(砂混じり)

ST 2

DL＝16.20m

0　4m

Fig 51　F区　ST 2　実測図



Ⅰ層　淡黄褐色粘質土
Ⅱ層　淡黄灰色粘質土
Ⅲ層　淡黄黒色粘質土

DL＝15.80m

0　4m

Fig 52　E区　ST 4　実測図

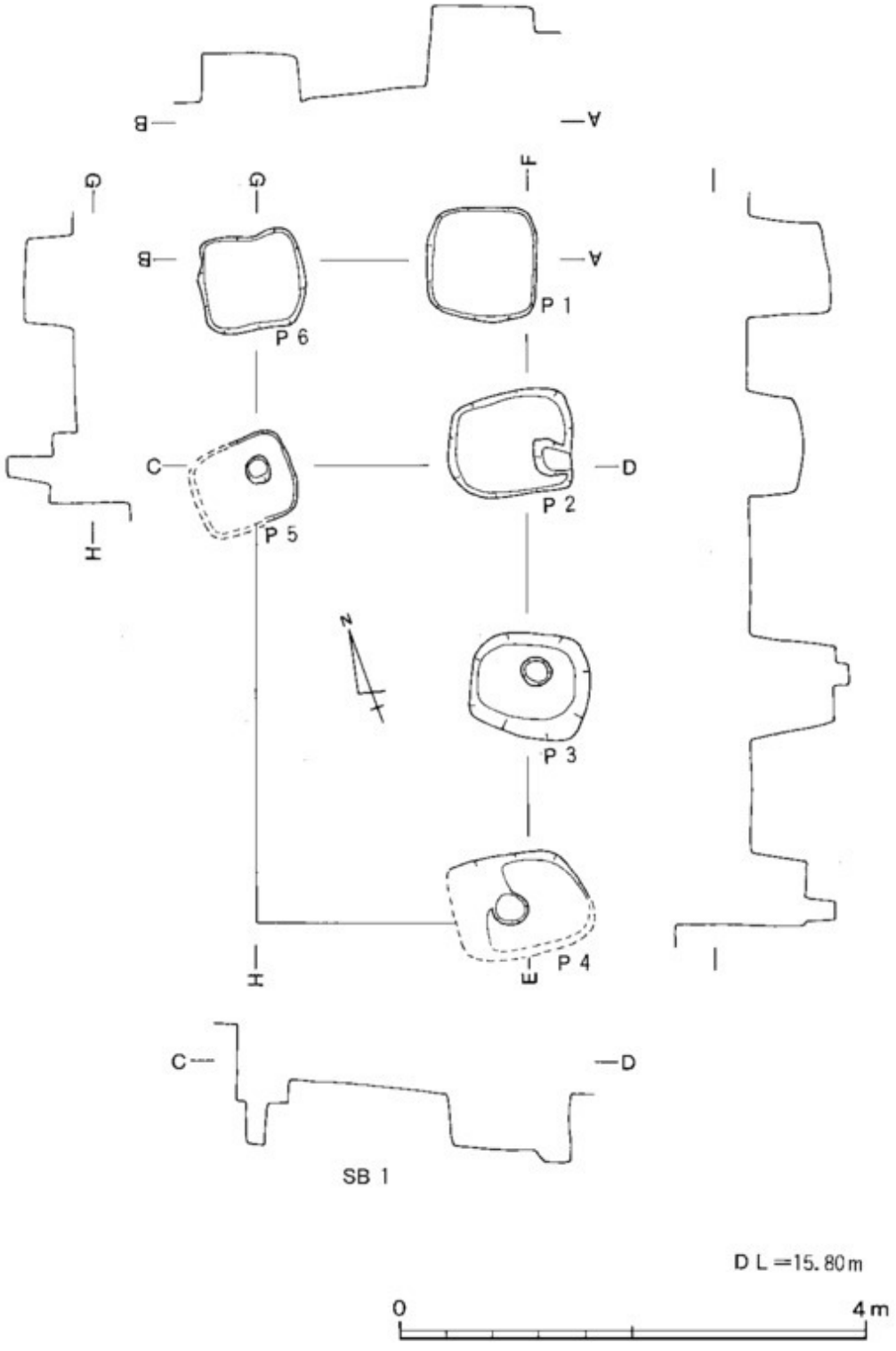
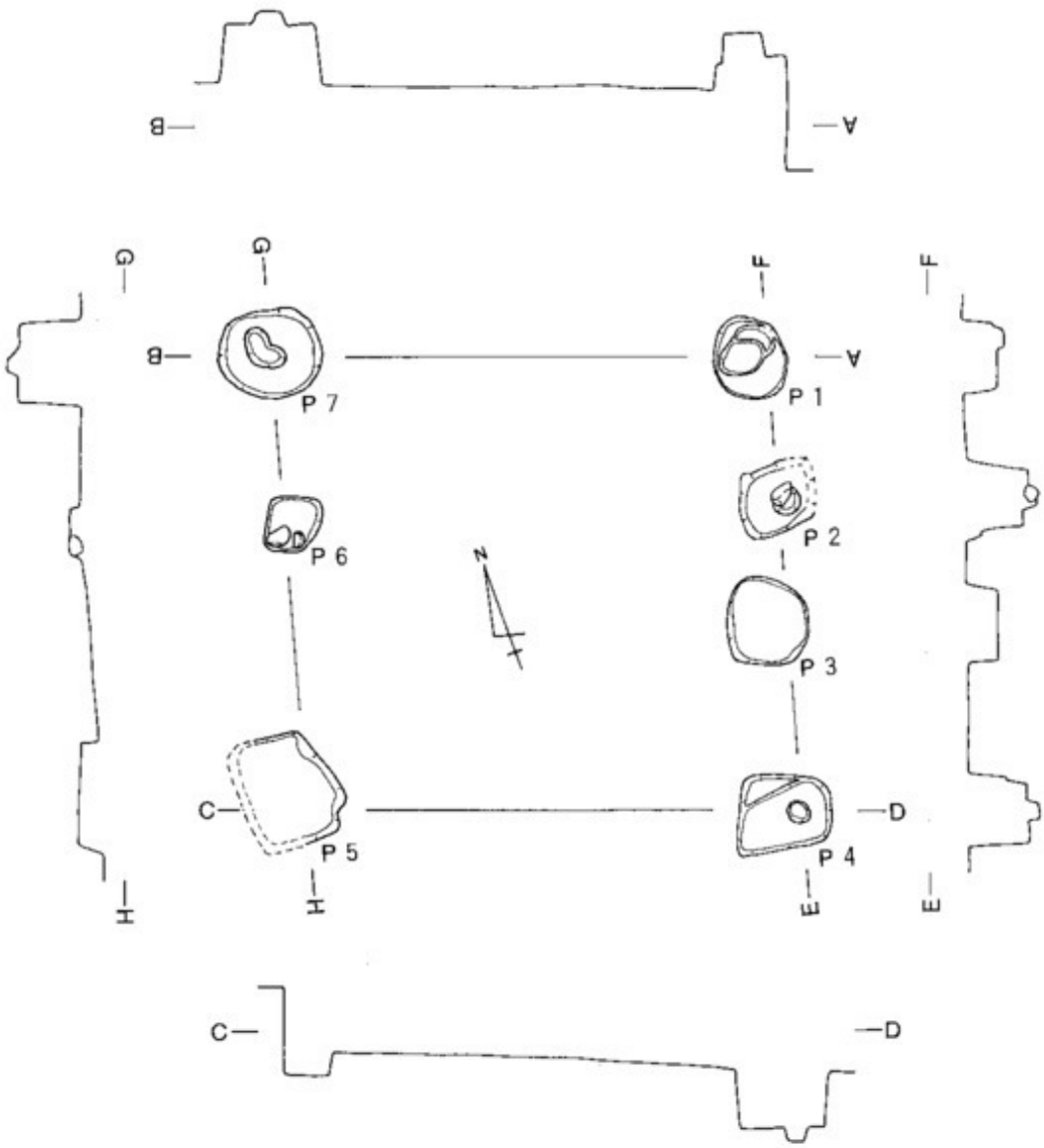


Fig 53　E区　SB 1　実測図



SB 2

D L＝15.80m

0 4m

Fig 54　E区　SB 2　実測図

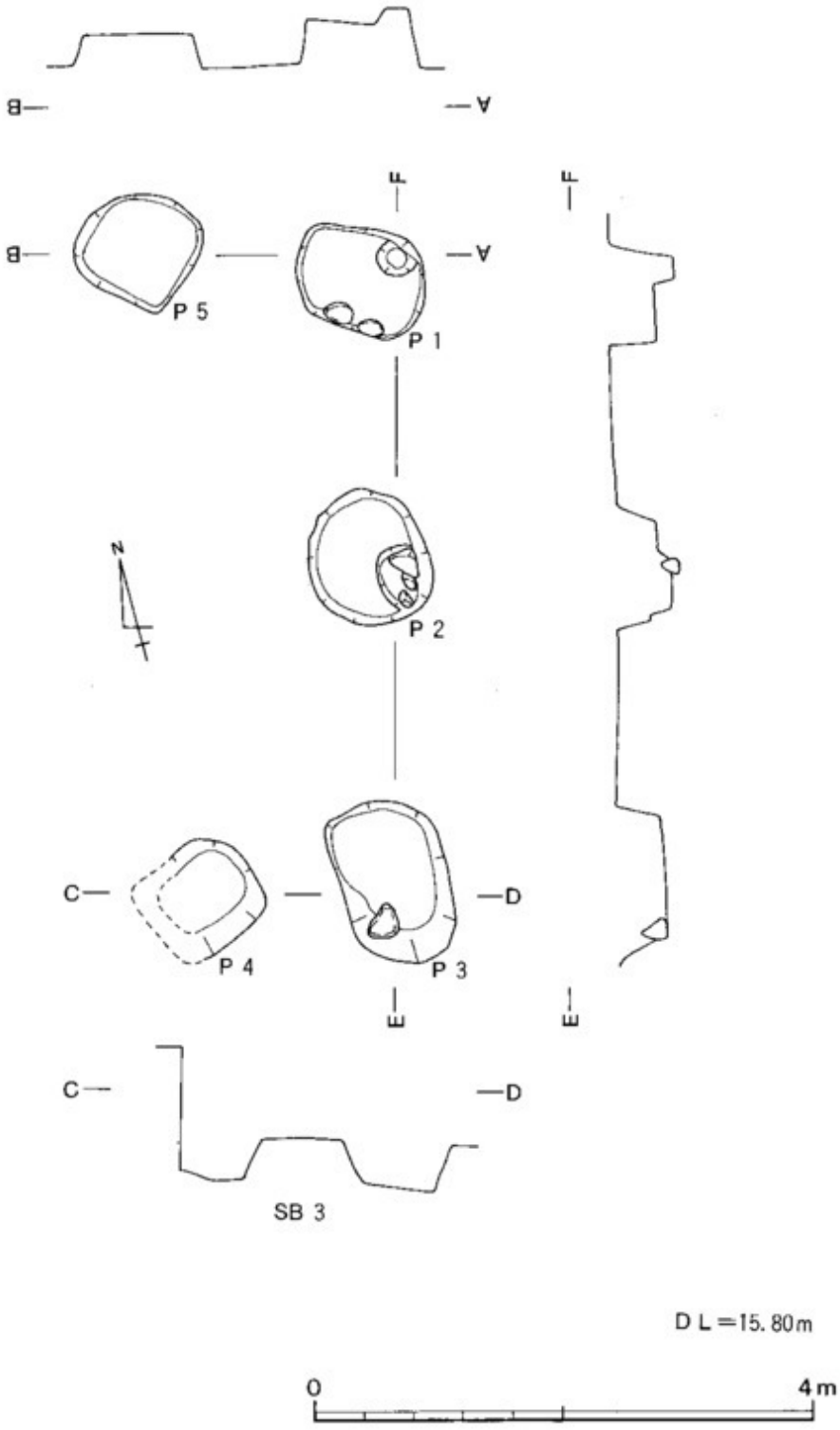


Fig 55　E区　SB 3　実測図

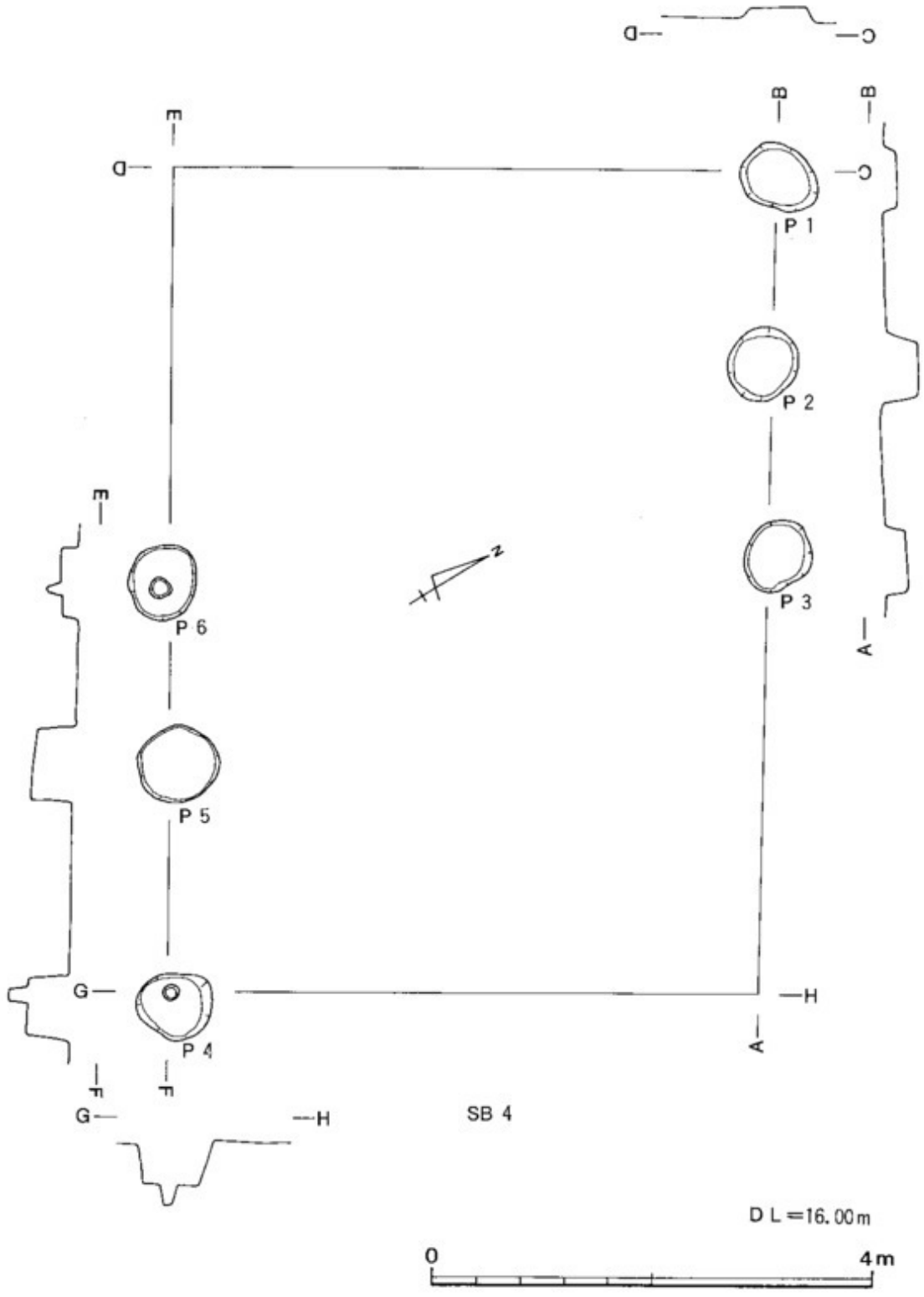


Fig 56　E区　SB 4　実測図

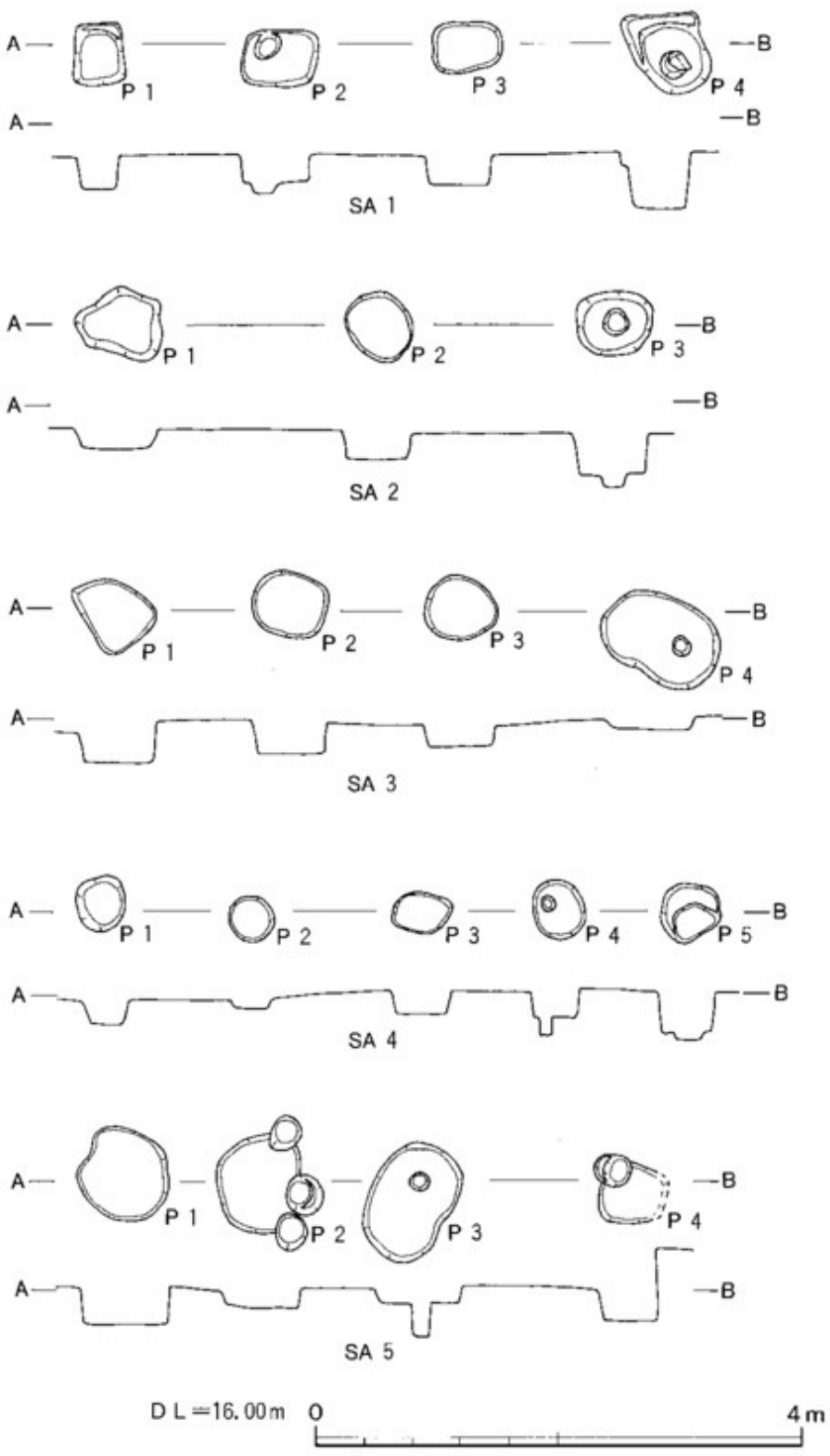


Fig 57　E・F区　SA 1～5　実測図

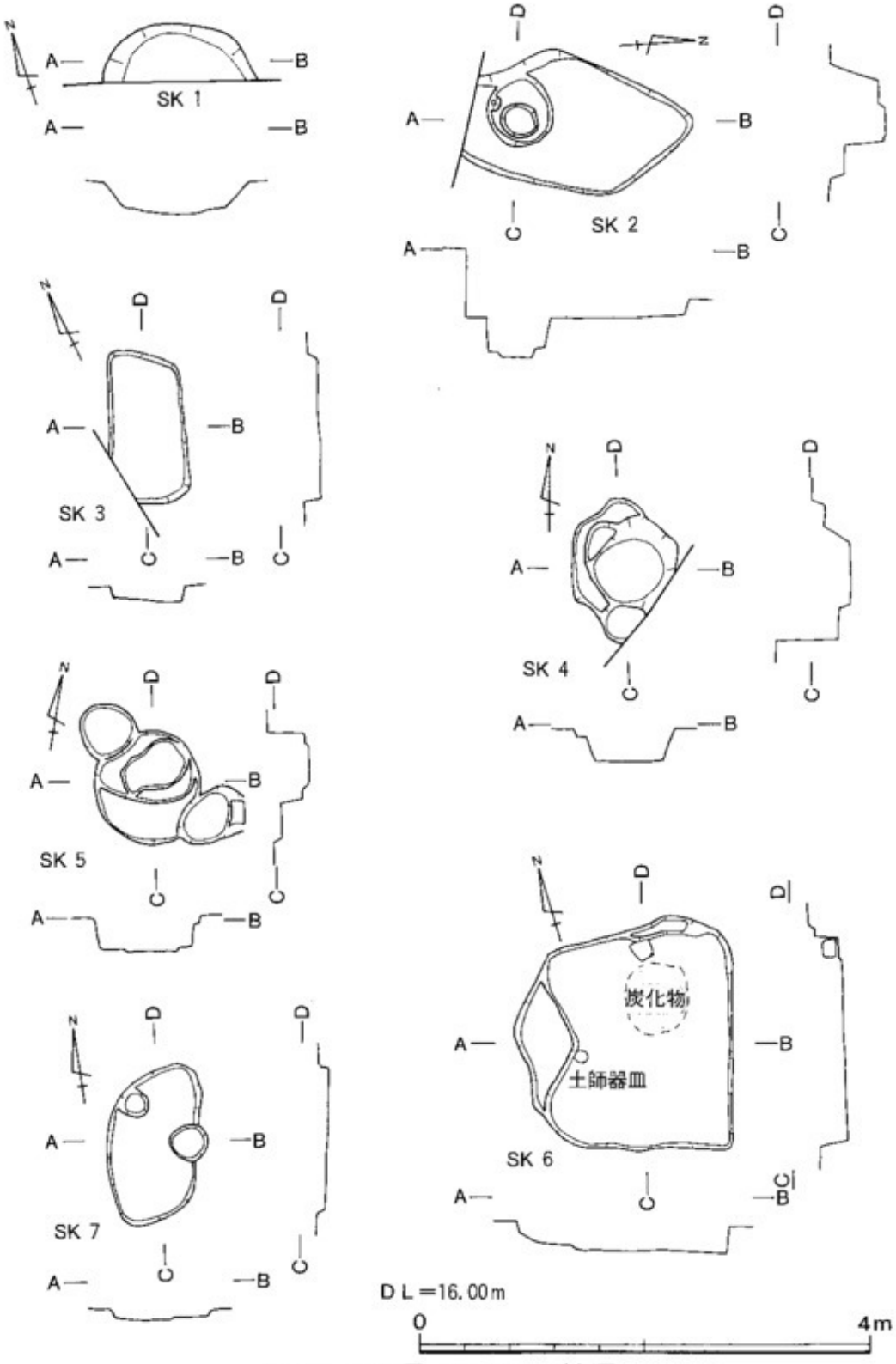


Fig 58　E・F区　SK 1～7　実測図

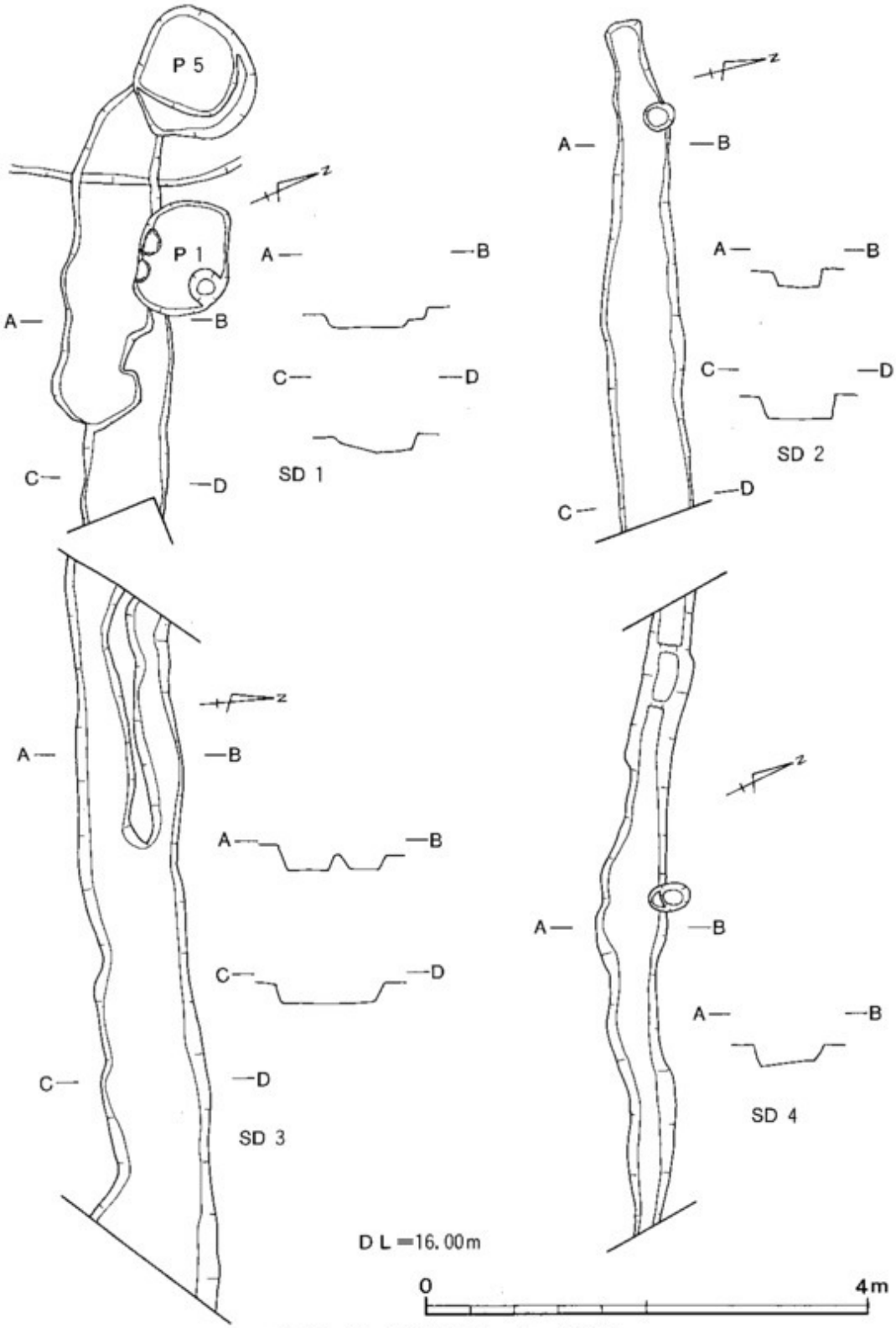


Fig 59　E・F区　SD 1～4　実測図

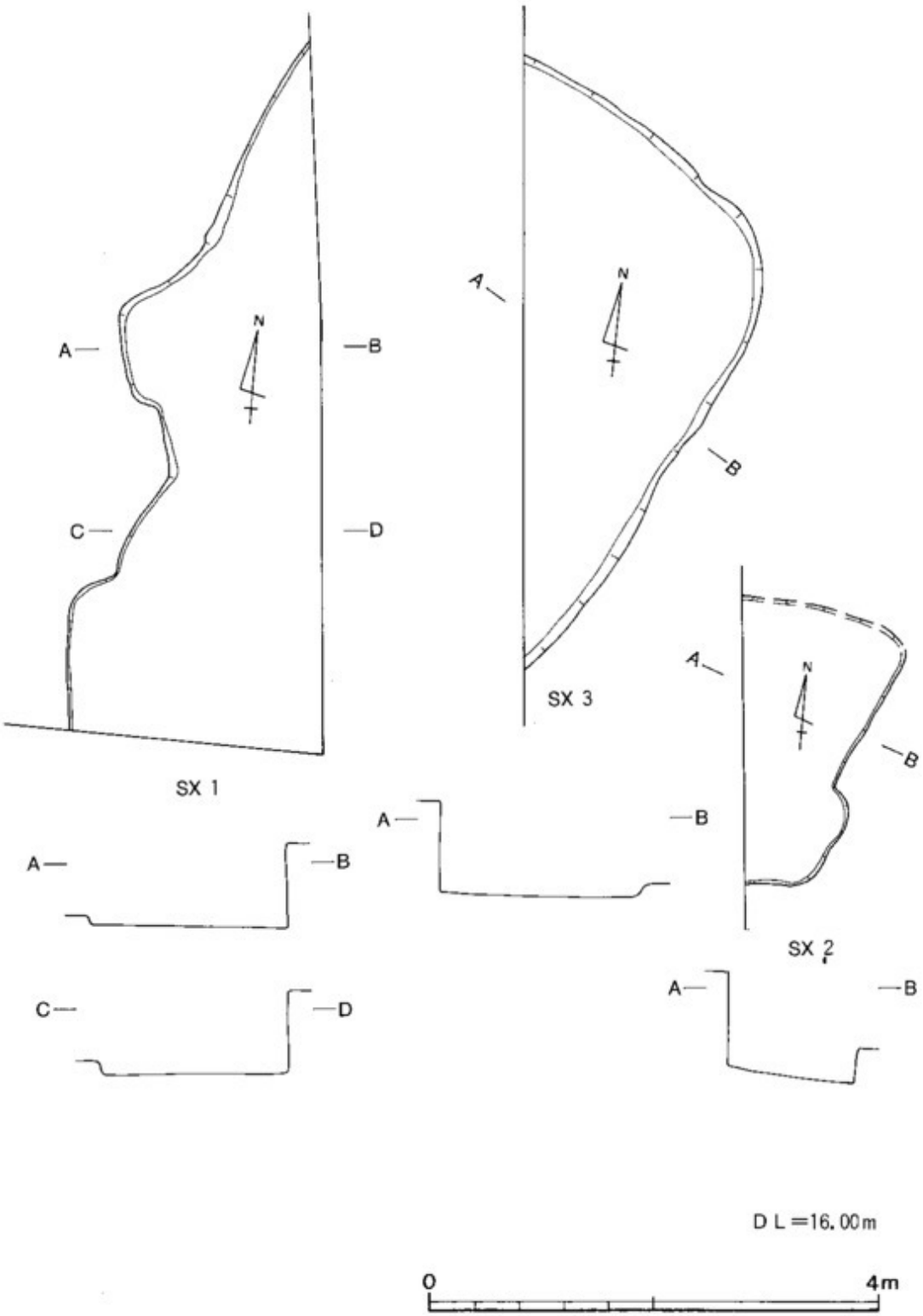


Fig 60　E区　SX 1～3　実測図

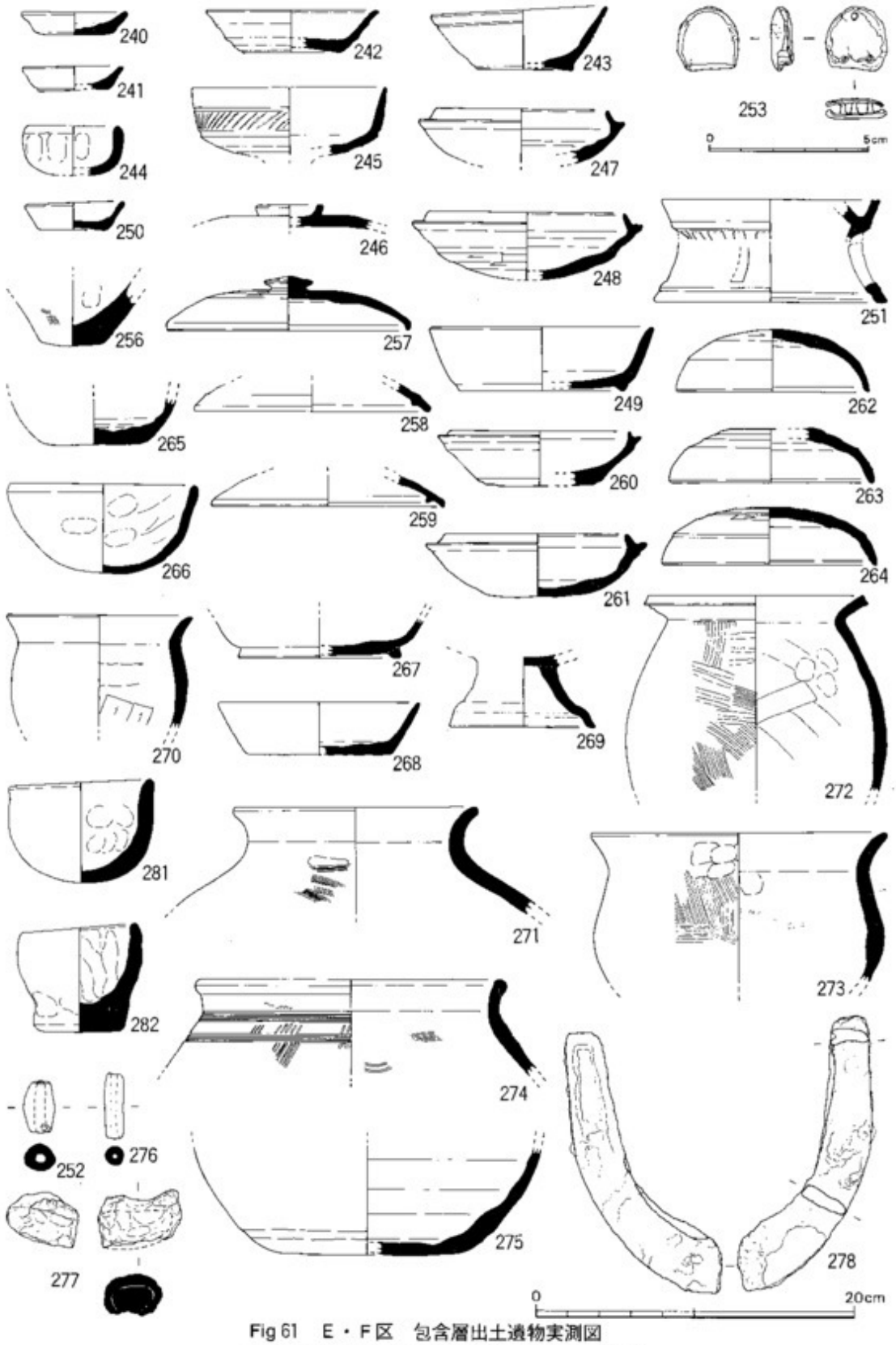
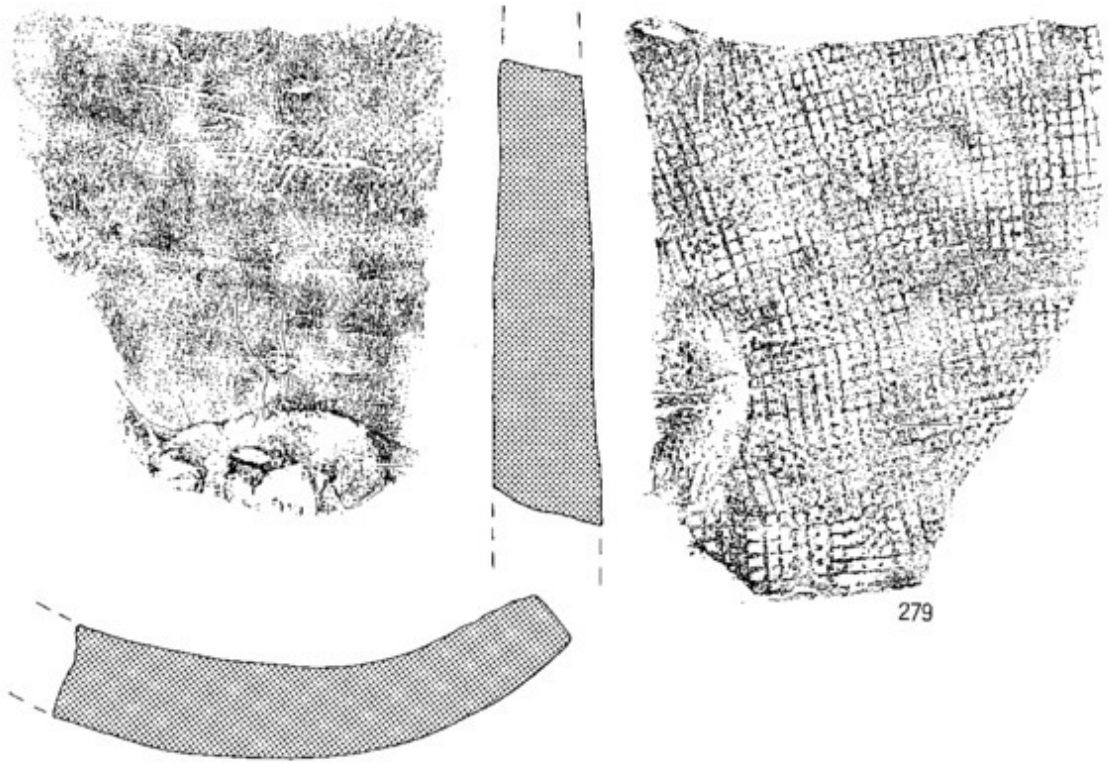
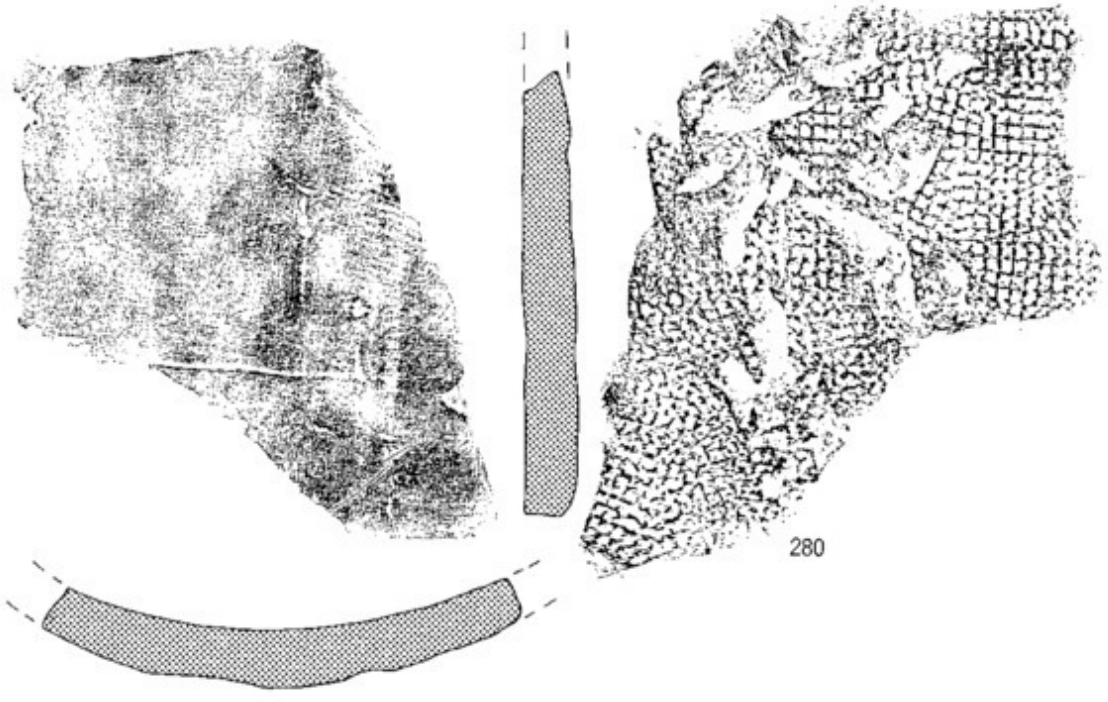


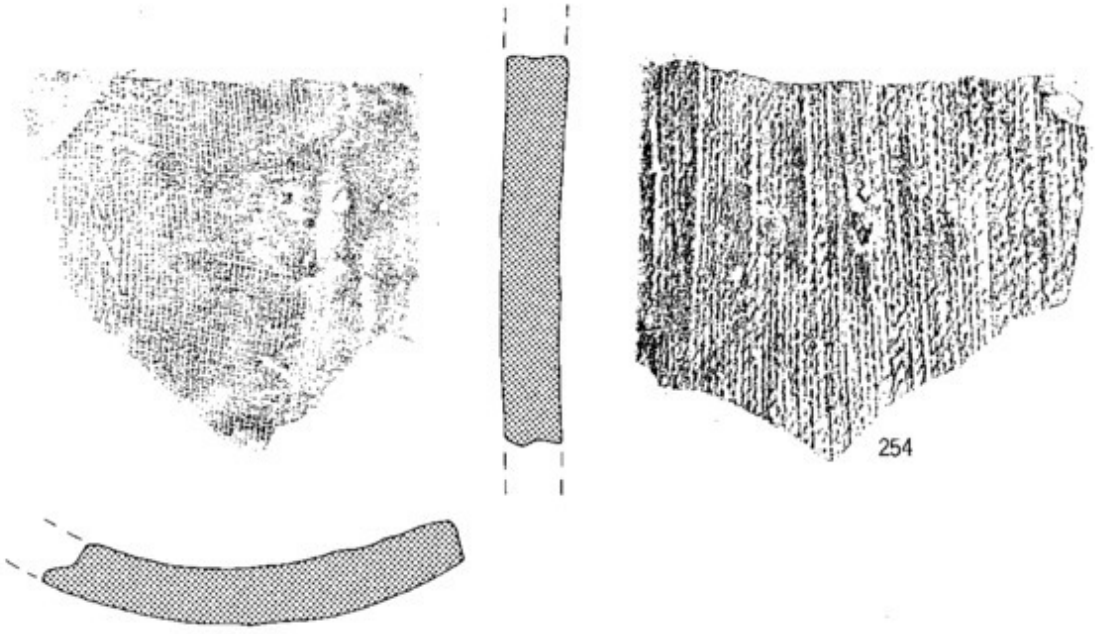
Fig 61　E・F区　包含層出土遺物実測図
（Ⅲ層240～253，Ⅳ層257～278，Ⅴ層281・282）

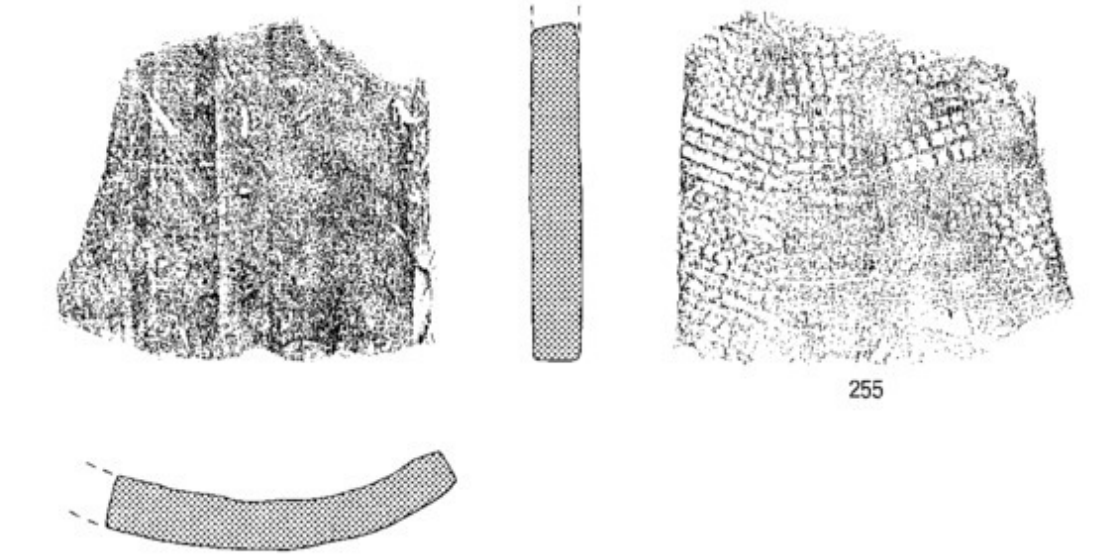




0 20cm

Fig 62　E区　包含層出土遺物実測図
（Ⅳ層　279・280）





0 20cm

Fig 63　E区　包含層出土遺物実測図
（Ⅲ層254・255）

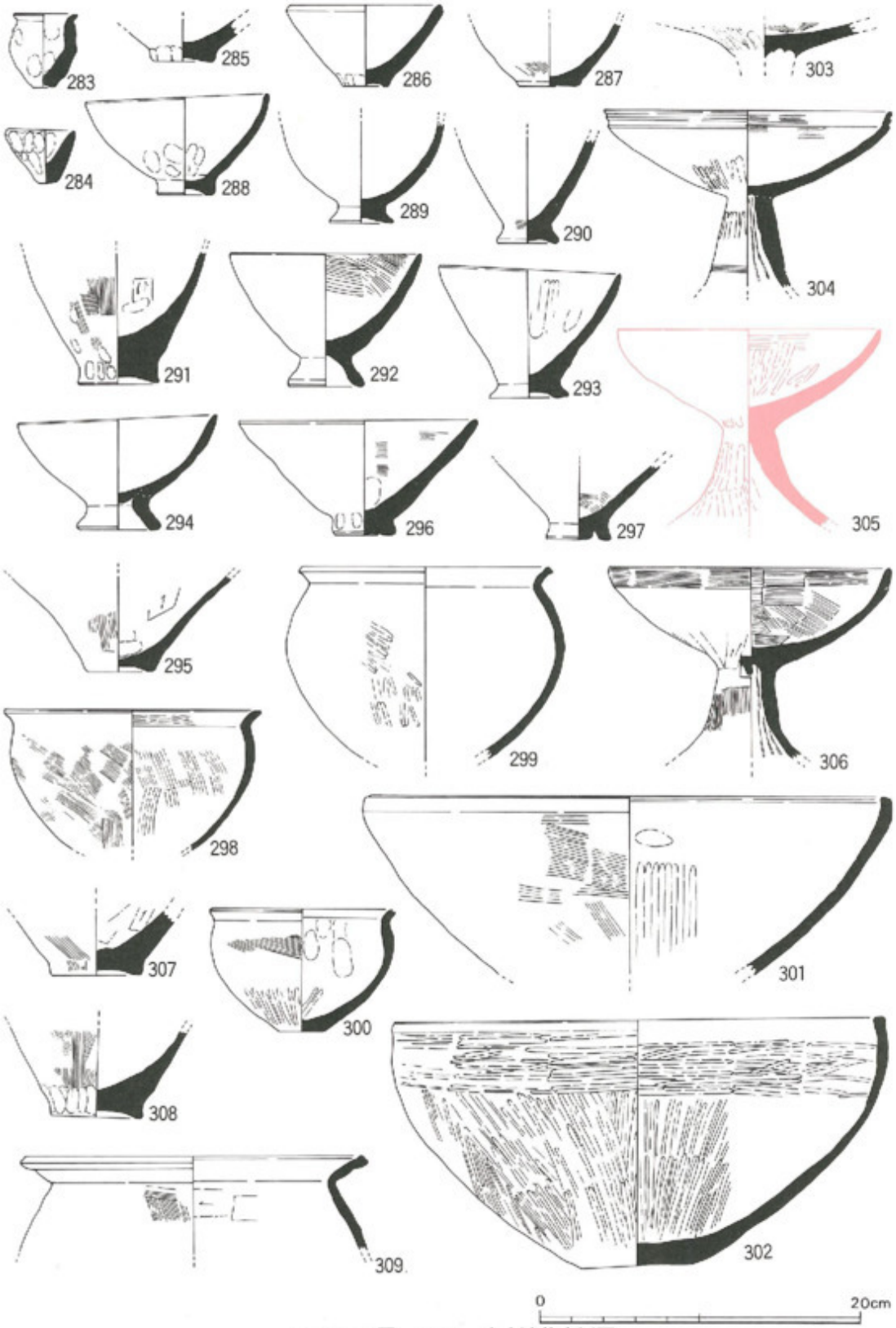


Fig 64　E区　ST 3　出土遺物実測図
（ST 3 ：283～309）

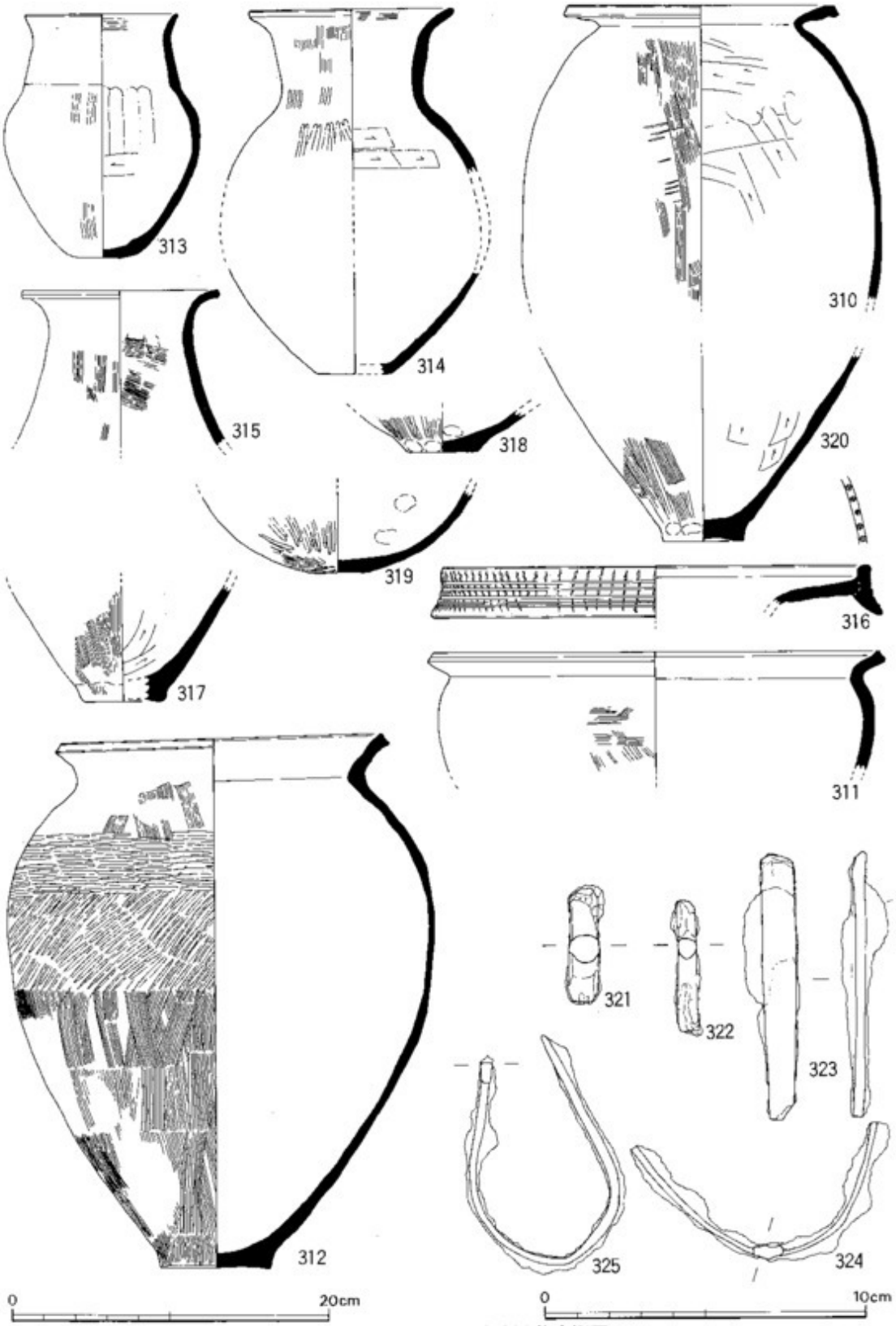


Fig 65　E区　ST 3　出土遺物実測図
（ST 3 ：310～325）

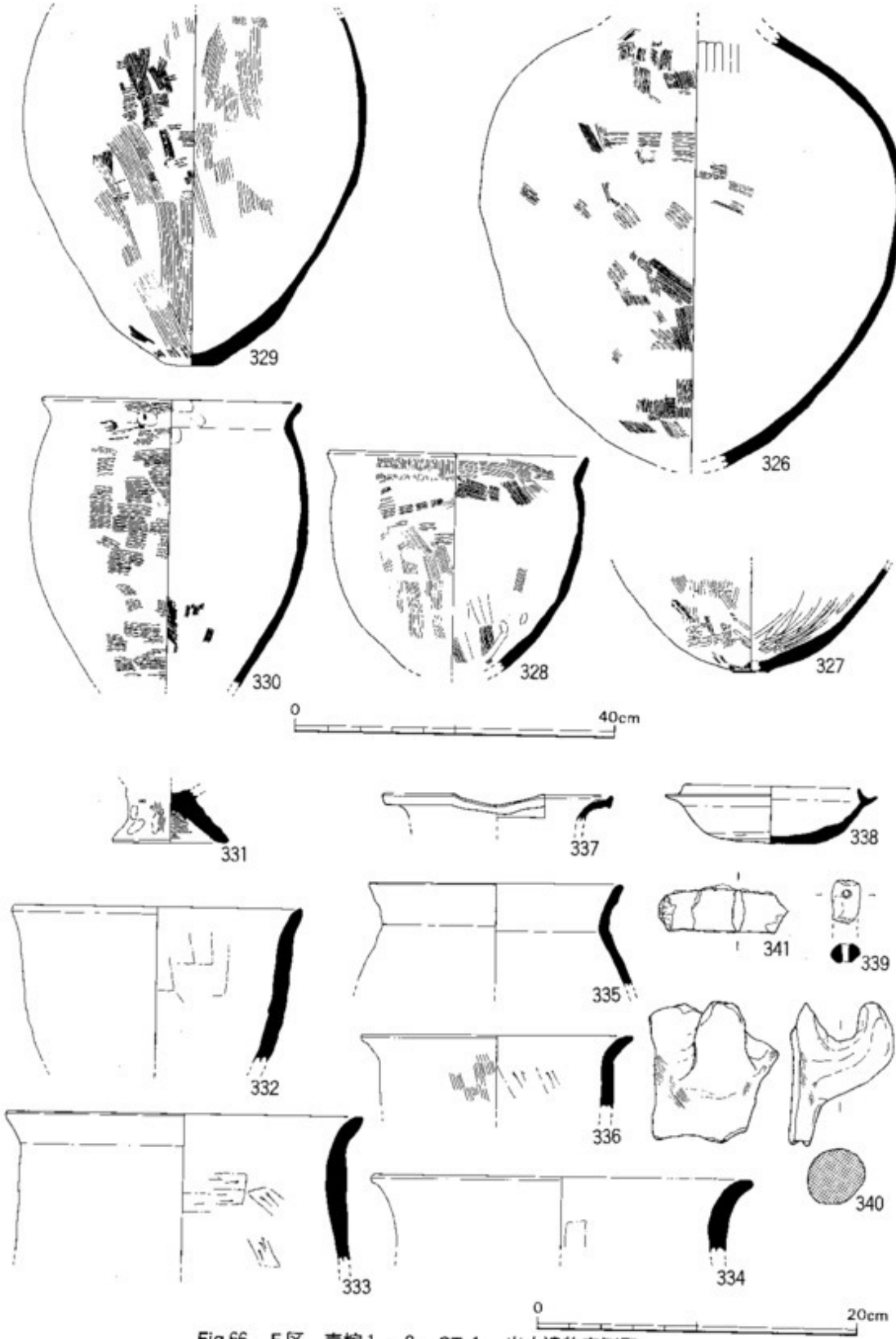


Fig 66　F区　壺棺1・2，ST 1　出土遺物実測図
（壺棺1：326～328，壺棺2：329・330，ST 1：331～341）

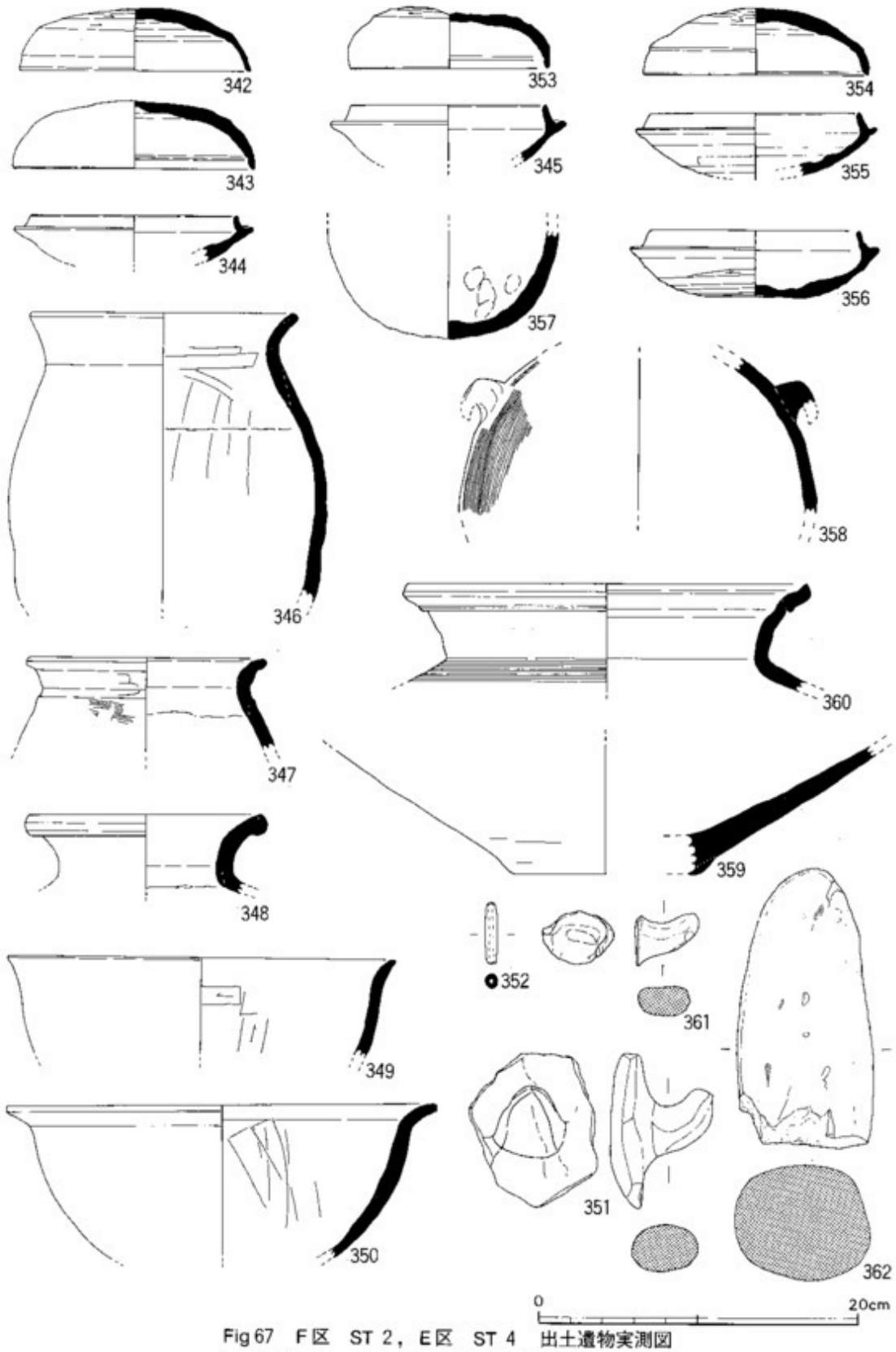


Fig 67　F区　ST 2，E区　ST 4　出土遺物実測図
（ST 2：342～352，ST 4：353～362）

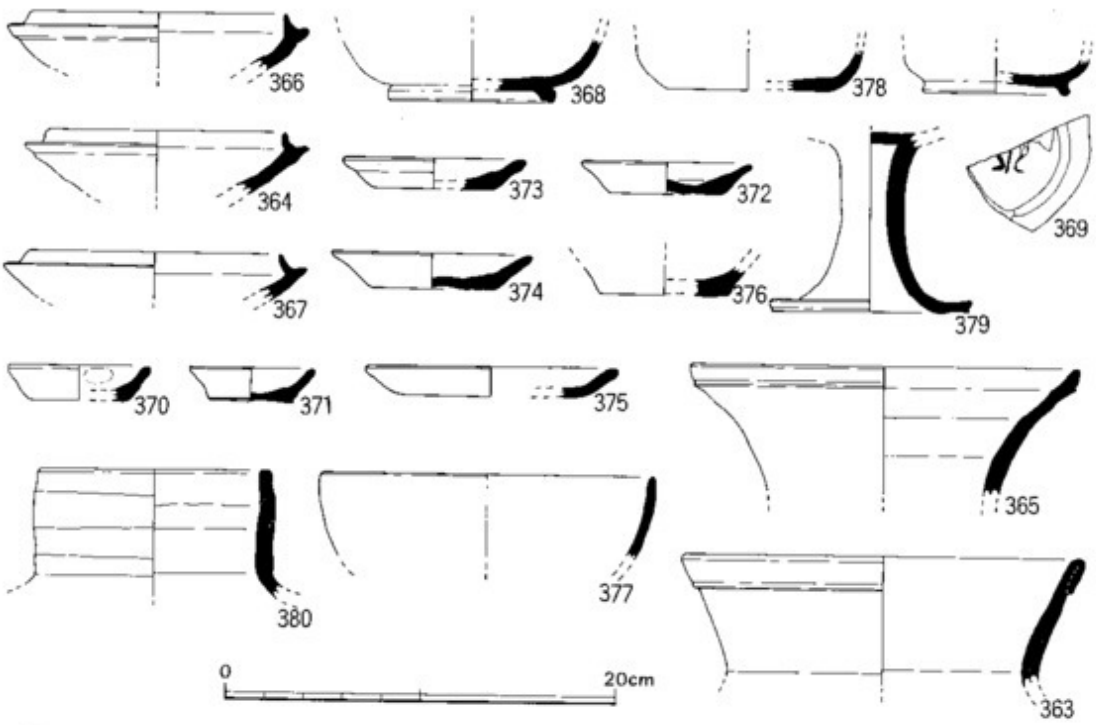


Fig 68　E・F区　SB 1・2・4，SA 4，P231，P73，SK 4～6，SX 1，SD 3　出土遺物実測図
（SB 1：363，SB 2：368，SB 4：364・365，P73：366，SA 4：367，P231：369，
SK 4：370・371，SK 5：372，SK 6：373～377，SX 1：378，SD 3：380）

第Ⅸ章　総　　括

第1節　弥生時代

1　遺　　物

今次調査で明らかとなった弥生時代の遺構は，C区ST 6・SK 5・SK 7・SK 8，D区SK 7・SD 3・SD 4，E区ST 3，F区壺棺墓を挙げることができる。これらは出土土器からすべて後期に属するものであり，ここでは比較的まとまった資料を得ることができたST 3・6，SK 5・7・8，SD 3・4の土器についての考察を述べるものである。これら諸遺構出土の土器は，その形態から非連続する前後二時期に分けることができる。すなわちST 3とそれ以外の土器にである。

(1)　ST 3出土の土器

焼失竪穴住居から出土した一括資料であり，復元完形土器を多く含んでいる。これらは土器編年を進める上での基準資料として有効であるのみならず，床面に散在する多くの土器は，竪穴住居で使用された土器の量や組成，生活様式を復元する上で多くの情報を与えてくれる。

ST 3の土器組成は，壺4点，甕3点，鉢11点以上，高杯4点，手捏土器2点であり，鉢が全体の5割を占めるところに特徴が認められる。以下これらの土器の編年的位置付けを行うために，各器種ごとにその特徴を見ることにする。甕は，上胴部に最大径を有し口縁部が「く」の字状に外反する312と，胴部中位に最大径を有し口縁部が水平に近く外反する309・310の2つのタイプがある。前者は上胴部に叩き目を残し，叩き目の主軸方向の違いからいわゆる「分割成形」(1)の痕跡を明瞭にとどめるものであり，しかも「粘土紐巻き上げを2・3度重ね，そのたびにタタキメを施し，胴の上半部までの成形を行う」胴部成形A手法(2)である。後者は，叩き後丁寧にハケ調整を施し，内面は頸部直下までヘラ削りが見られる。当地方においては，後期初めを除くと内面ヘラ削りはほとんど認められず，上述した型態とも相俟って他域からの影響を考えねばならないが，その第一候補として黒谷川郡頭遺跡溝1出土の甕B類(3)を挙げることができる。後述する壺と合わせて阿波地方との関連が窺える資料である。壺で注目すべきは313・314である。このタイプは，本県では見られなかったものであり黒谷川郡頭遺跡溝15出土の壺(4)（Fig 12－15）と近似する。最も多く出土した鉢は，法量から3つのタイプに分けることができる。すなわち口径30cm前後の大型のもの301・302・311，15cm前後の中型のもの298・299，10～12cmの小型のもの288・292～296・300である。最も多くを占める小型鉢は，その帰属概念は別として佐原氏の言う「形・大きさ（口径12cm・高さ10cm・容量0.5ℓ内外）とも揃い個体数も多い」(5)小鉢に比定することができる。高杯は4例出土しており，杯部が椀状304～306と図示し得なかったが稜をなして屈曲外反するものがある。全体形のわかる前者はすべて脚部と杯部を分割成形している。また丹塗り305と黒色磨研の306が存在するのは，手捏土器の出土と共に興味深い。

以上の特徴からＳＴ３の時期を決定しなければならない。本県における弥生後期の土器編年は，田村遺跡群・田中地区の調査以来五期区分(6)が可能となっており，ＳＴ３出土土器は叩き技法の顕在化しはじめる後期中葉＝田中地区ＳＴ５より少し新しい時期に求めることができる。すなわち田中地区のＳＴ５は，ＳＴ３に対して，長頸壺が多くを占めていること（壺の３割強）や小型鉢が顕在化していないことなど古い要素を持っている。また出土土器の中で壺の占める割合がＳＴ５では４割，ＳＴ３では３割未満という組成の変化からも裏付けられる。

次に四国の他地域との併行関係を求めると上述した甕・壺の存在から，徳島平野の後期後半とされる黒谷川Ⅰ式に該当させることができる。ただ徳島平野において小型鉢が盛行を見せるのは，庄内式前半に位置付けられる黒谷川Ⅱ式の段階であり，ＳＴ３の現象とは異なる傾向にある。しかしこの差違は，Ⅰ式の検討資料が竪穴住居址ではなく，すべて溝出土の土器であるという資料の性格の違いに起因するものと考えられる。また吉備地方との関係では，高杯304の存在から高橋護氏の編年による上東式新２期(7)（Ⅷ－ｂ期(8)）に該当させることが可能である。南四国中期末の弥生土器は，吉備一色である(9)ことを述べたが，304と壺316を除いてその影響が全く見られないところにも当該期の特徴がある。畿内との関係では，第Ⅴ様式後半の古い時期とされる後期３(10)，すなわち亀井・城山遺跡のＳＤ3041(11)や上六万寺遺跡の土器に併行関係を求めることができよう。しかしながら上六万時期においては，口縁部叩き出しが盛行するとされる(12)が，南四国においては，かかる技法や二重口縁壺はまだ登場して来ない。

以上ＳＴ３出土の土器についての特徴や編年的位置付け及び他地域との併行関係について述べたが，最も注目すべき特徴は上述したように小型鉢が他の器種を飛躍的に凌駕するという点にあり，この現象は当地方の後期土器の変遷の中で一つの画期をなすものである。多量の小型鉢と小量の大型鉢のセット関係は，当時の食生活の様相を豊かに再現させてくれるし，更には社会発展の諸段階を追求するための諸前提の一つである共有・占有・所有の問題を解明する有効な手掛りとなる資料である。

(2) ＳＴ６，ＳＫ５・７・８，ＳＤ３・４出土の土器

これら諸遺構出土の土器は，その型態や叩き技法の普遍化等からほぼ同一時期の資料として把握することが可能である。南四国の土器編年で言えば，岡本健児氏が「叩き技法が本格的に定着しその全盛」(13)を迎えるとしたヒビノキⅡ式(14)，すなわち後期末に位置付けられるものである。先ず土器組成(15)を見ると，甕114点（65.9％），壺11点（6.3％），鉢45点（26％），その他３点（1.7％）である。以下器種ごとに特徴を観ると，甕は，総じて砲弾型を呈し口縁部は外反する。完形品に恵まれず成形手法を必ずしも明瞭には観察し得ないが，221・222・227は叩き目の主軸方向の変化から分割成形Ｂ手法(16)の痕跡が見られる。また220は上半部に叩きの不連続があるが，他のものは成形第一段階後体部を一息に叩き上げている。しかもそれは口縁部にまで及ぶものが多く，出土土器の91.2％まで「口縁部叩き出し手法」が占め，上胴部の上に新たに粘土帯を接合させて口縁部成形するものは１割にも満たない。叩きの主軸方向は，

第一段階の下胴部が右上り，それより上は水平方向が最も多く，次いで右上りであり右下りも少量見られる。正確な法量を出すことは不可能であるが，口径は14～16cmに納まる比較的小型のタイプが５割以上を占める。底部は，平底が９割，丸底・尖底は１割未満である。鉢は，全体の中では26％と決して多い数ではないが，ＳＴ６に限って見ると５割強を示しており，先述のＳＴ３から継起的に続く現象として理解することができよう。鉢にも叩きが多用されるが，ここでは法量に注目したい。すなわち口径13～17cm，器高５～８cmに納まるタイプが８割を占めており，甕以上に定型化の進展が認められる。しかしＳＴ３で指摘した大型と小型の関係は崩れていない。壺は，無文の198・201と飾られた39・40・76～79の二者があり，前者は当該期普遍的に存在するＡ類(17)である。後者は，やや大振りのものが目立つ。

以上今次調査出土のヒビノキⅡ式土器について述べたが，定型・小型化した甕・鉢，長頸壺の欠落等に見られる壺の激減，すでに述べた叩き技法の盛行等を特徴として確認することができる。この現象は，ＳＴ６段階に始まった土器変革の到達点として認識すべきである。県下で当該期の一括資料を出土する遺跡は，ひびのき遺跡(18)（ＤⅠ・ＤⅢ住居）・林田遺跡(19)（ＳＴ２）・五軒屋敷遺跡(20)（ＳＴ１）・十万遺跡(21)（ＳＴ４）など多くの諸例を挙げることができる。これらの諸遺跡は，洪積台地や山間の中小平野に立地するものであり，ヒビノキⅡ式の段階に至って，それまで継続的に営まれてきた拠点的大集落から拡散移動したものと考えられる。土器の変化と集落の変化は，同一事象の諸則面として統一的に把握すべきものであり，かかる変革は言うまでもなく南四国における弥生時代から古墳時代への移行の中で生じた現象であり，重要な歴史的意義を有する。

県下において，「統率下された土器製作の専業集団により……河内中央部の丘陵地寄りの地域」(22)で製作されたと推定される庄内式土器は未発見であり，ヒビノキⅡ式の次に位置付けられるヒビノキⅢ式(23)には，明らかに布留式土器が散見される。その例としてヒビノキ遺跡Ａ住居址床面出土の小型器台（第１図11）や五軒屋敷遺跡ＳＴ２の小型丸底・甕（第28図－167・第30図－209）などを挙げることができる。従ってヒビノキⅡ式は，布留式土器に先行する時期比定がなされる。冒頭で触れたように，岡本健児氏はヒビノキⅡ式を庄内式併行として把握し，弥生後期末に位置付けている。この見解について，時期的矛盾は全く生じないが，私見では，ヒビノキⅡ式土器を後期土器一般の中に解消するよりも，上述した変革期の歴史的意義と地域的特徴を鮮明にするために「伝統的第Ⅴ様式」(24)の呼称を採用したい。すなわちヒビノキⅡ式土器は，土器組成の急変・定型化という大きな変化を指向しながらも，叩き技法は第Ⅴ様式の伝統と発展の中で生じたものであり，また内面ヘラ削りの皆無や平底の一般的存在から裏付けられる。更にＣ区出土の装飾壺は，酒井氏が「過渡期Ⅱ」(25)で確立したとする櫛描波状文・円形浮文等によって示される「パターン化」した壺に該当させることができる。今後の課題の一つは，県下における伝統的第Ⅴ様式の諸段階の設定であるが，これはヒビノキⅡ式土器と検出遺構の分析をとおして可能となるであろう。これについては近い将来に期したい。

2 遺　　構

弥生時代に属する遺構は，すでに見たように竪穴住居２棟（ＳＴ３・６），土坑４基（Ｃ区ＳＫ５・７・８，Ｄ区ＳＫ７），溝２条（Ｄ区ＳＤ３・４），壺棺墓２基である。これらを先に検討した土器によってⅠ期とⅡ期に分けて，深渕地区の弥生時代の変遷を描いて見たい。

Ⅰ期

ＳＴ３，Ｄ区ＳＫ７を挙げることができる。深渕遺跡において明確なかたちで人々の生活が始まった時期である。ＳＴ３は，床面積40㎡を測る円形竪穴住居であり，南四国における当該期の一般的な型態・面積とすることができよう。丹塗りと黒色磨研の高杯のセット，手捏土器から祭祀的な性格を窺うことも可能である。ＳＫ７は全体形が不明であり，出土土器も少なく性格は不明である。調査区が極めて限定されているために他の遺構を検出することができなかったが，周辺の地形から判断して，当該期の竪穴住居や土坑が他にも存在することは容易に考えられる。

Ⅱ期

ＳＴ６，Ｃ区ＳＫ５・７・８，Ｄ区ＳＤ３・４，壺棺の時期である。竪穴住居は隅丸方形に変化しそれと共に四本主柱となる。南四国の竪穴住居の平面プランは，ヒビノキⅠ式の段階までは円形が一般的であり，ヒビノキⅡ式になると不整円形・隅丸方形が出現し，方形住居に統合されていく。ヒビノキⅡ式期は，先に触れた土器・遺跡立地のみならず竪穴住居の構造にも大きな変化を及ぼしている。

ＳＫ７・８は，装飾壺がまとまって出土しておりＳＫ８の手捏土器と共に祭祀的性格を有する土坑であろう。壺棺について見れば，ＳＴ６から65ｍ，ＳＫ７・８から55ｍ北という位置関係から，集落内あるいは集落と隣接して墓域が営まれていたことが考えられる。この場合壺棺の大きさからして小児用と解釈すべきであり，居住空間と墓とが極めて近いと言うことは被葬者との関係を考慮に入れなければならない。居住区と墓との距離で言えば，五軒屋敷遺跡においても同様のことが言えるが，ここでも被葬者は小児を想定しなければならない。香川県彼ノ宗遺跡においても小児用壺棺に限って同様の現象が見られる(26)。これは子供に対して，成人とは墓域を違えるとう特別の感覚が，共同体規制の中で生じてたものと考えられる。かかる現象は，南四国において前期初頭には見られたが，以後当該期までの間に検出例はない。墓制を考えるうえで興味ある現象である。

Ｄ区ＳＤ３・４は，トレンチ調査でかかったものであり溝の性格を明らかにすることはできないが，集落内を縦走する小溝としておこう。

以上弥生時代の遺構については極く簡単所見を述べた。Ⅰ期とⅡ期の間の時間的空白を今次調査の資料で埋めることはできなかったが，これは集落経営における断絶と見るよりも，調査面積の制約による未発見という立場を取りたい。しかしⅡ期以降すなわちＳＤ３・４に多量の土器が捨てられた後は，古墳時代後期まで集落経営はなかったと考える。当遺跡の弥生集落は，

古墳時代に向っての胎動が始まり出した後期後半頃に成立し，最も振幅の激しかった終末期にかけて営まれたものとすることができよう。(出原恵三)

第2節　古墳時代

1　遺　　物

今回の調査で出土した古墳時代の遺物は，須恵器などから6世紀中頃～6世紀後半段階のものである。ここでは，比較的まとまって出土をみたＳＴ1・2・4・5の土器を中心に若干の比較検討を行いたい。

弥生時代の竪穴住居からの遺物に比べ少量であるが，おもに土師器，須恵器が出土した。土師器では甕・甑が，須恵器では杯蓋・杯身が多くみられた。特にカマドを有するＳＴ2・4においては，カマド周辺の床面より土師器甕・鉢が出土し，カマドから離れた床面からは，須恵器が出土している。カマド内からは，一部紅色化した土師器甕の底部（357）がみられ，同カマドで使用された可能性が強い。

ＳＴ1・2・5から出土した土師器甑には，口縁部が直立するもの（106）と外反するもの（96・332～334・349）がある。本県での甑の出土例は僅少であるが，古津賀遺跡(27)においては，口縁部が直立しておわるものをＡ類，僅かに外反するものをＢ類としている。ＳＴ1・2・5の出土例は，この両タイプを有しているが，古津賀Ｂ類よりも外反が強いものであり，両者の差異は，時間的な先後関係によるものと考えられる。

ＳＴ1・2・4・5から出土した須恵器杯蓋及び杯身は，その形態から時期的に大きく2つに分けることができる。ＳＴ4・5の杯蓋（353・354・88）は，つくりが大振りで，天井部のヘラ削りが中心部からかなり広く行われ，端部の調整も丁寧である。なお89～91は，一見すると新しくみられるが，天井部の削りは，同様に広く施されている。高杯（92）や他の杯身なども考慮に入れて，おおよそＴＫ10(28)に比定することができよう。これに対し，ＳＴ1・2出土の杯身（338・344）は，前者に比べて小振りで，立ち上がりも弱く，調整も粗雑であることなどから，おおよそＴＫ43(28)に比定することができよう。

また，ＳＴ1から鉄鎌（341），ＳＫ4から滑石製紡錘車（113）が出土している。本県での鉄鎌の出土例は僅少であるが，具同中山遺跡群(27)では，刃先の遺存するものが包含層より出土している。今回の調査では，住居内からみられた。同鉄鎌は，具同中山遺跡群のものより幅が狭い。滑石製紡錘車は，断面は台形状を呈し，側面には8個の格子入り鋸歯文を施文している。江浦洋氏の分類(29)によれば，形態，文様からＩＬ類に属するものであり，6世紀代に比定されよう。本県では，上記の古津賀遺跡から類似のものがみられるが，県東部においては初めての出土である。石材は同じ滑石製を呈すが，色彩が異なり，産地など今後の検討課題である。

2　遺　　構

当遺跡で検出した古墳時代の遺構は，竪穴住居4棟，掘立柱建物5棟，柵列2列，土坑3基，

溝7条，性格不明のもの1基等である。建物の柱穴の切り合い関係，埋土，出土遺物等によって，6世紀中頃～後半，6世紀後半，6世紀後半～7世紀初頭，7世紀代の4期が考えられる。ここでは，遺構の流れを，この順序でⅠ期～Ⅳ期に区分し，各期に展開した遺構の性格について若干の考察を行いたい。

Ⅰ期（6世紀中頃～後半）：ＳＴ4・5を挙げることができる。ＳＴ4は，弥生の住居（ＳＴ3）を切る大型住居で，ほぼ北側にカマドを有する。このカマドは，住居の壁を越えることなく，内側に馬蹄形に構築され，伊崎俊秋氏の分類(30)によれば，比較的初期形態を示すⅠ類に属す。中央部には，支脚として使用されたと考えられる石製品（362）が残存していた。ＳＴ5は，同様に弥生の住居（ＳＴ6）を切る。Ｐ1～5を主柱穴とする5本柱構造と推測されるが，Ｐ4に近接して同規模の柱穴があり，建て替えの可能性がある。

Ⅱ期（6世紀後半）：ＳＴ1・2，Ｃ－ａ区のＳＢ1，ＳＫ2・3・4，ＳＤ1・2・3・4，ＳＸ1，Ｃ－ｂ区のＳＢ2，ＳＡ1，ＳＤ6を該当させることができる。ＳＴ1・2は，主軸方向がＮ－41°－Ｅの同一方向を示し，その位置も著しく近接していないことなどから同時期に営まれていた可能性が強い。前者はカマドが構築されていないのに対し，後者はカマドを有す。カマドの位置は，ＳＴ4と同様ほぼ北側にあり，当該期にみられる一般的な例と共通している。燃焼部の幅は，ＳＴ4のものより30㎝狭くなっているが，左右袖部の残りが比較的よい。形態は，ＳＴ4のカマドと同類型の非突出型を呈す。ＳＴ5の北東寄りにはＳＢ1（Ｃ－ａ区）が，南東寄りにはＳＢ2（Ｃ－ｂ区）が併存する。このＳＢ2の東西の柱筋北側に平行してＳＡ1が，南北の柱筋西側に平行してＳＤ6が存すが，いずれも先後関係は不明である。Ｃ－ａ区のＳＤ1～4は，それぞれの切り合い関係が認められず，同一のものと想定される。各溝の埋土に河原石が混じるが，これらは溝を廃棄した折に投げ込んだものと考えられる。またＳＴ5に近接するＳＸ1は，ＳＴ5に伴う何らかの貯蔵用の小竪穴ではないだろうか。

Ⅲ期（6世紀後半～7世紀初頭）：Ｅ区のＳＢ1・4，Ｆ区のＳＡ4が該当する。この時期は，当遺跡における古墳時代の転換期といえよう。すなわち，Ⅰ期及びⅡ期でみられた竪穴住居から掘立柱建物中心へと住居形態が移行する時期である。ＳＢ1の柱穴は，隅丸方形の平面プランを有し，一辺が90～106㎝の大きなものである。主軸方向は次期のＳＢ3と僅かに4°差で，ほぼ平行となり規格性を持って整然と建てられている。また北部には，柱穴の一辺が65㎝前後を測る東西棟が位置し，ＳＢ1・3に対して，ほぼ直角である。

Ⅳ期（7世紀代）：出土遺物等よりⅢ期と明確に区分できないが，Ｅ区のＳＢ3，ＳＤ1・2を挙げておきたい。ＳＤ1は，ＳＢ3の北東コーナーの柱穴（Ｐ1）によって切られているが，先後関係は不明である。

以上，古墳時代をⅣ期に分けて述べてきたが，各遺構が近接しており，それぞれ関係を持ちながら営まれていた可能性がある。住居においては，Ⅰ期及びⅡ期に竪穴住居が主流を示していたが，Ⅱ期からⅢ期に掘立柱建物が出現し，Ⅳ期に竪穴住居は全く消滅する。なかでも6世

紀後半（ここではⅡ期）に，両者が併存する実例を検出したものは，県内では初めてのことであり，そのことが階層差によるものか，建物の機能上の違いによるものか明確にしえないが，古墳時代の社会を知る上で貴重な資料となろう。（吉原達生）

第3節　奈良時代～平安時代

1　遺　　物

遺構からの遺物検出は少ないが，包含層から貴重な遺物が多く検出された。ここでは遺跡の性格を考える上で極めて重要と思われる遺物についてのみ検討を行いたい。

まず帯金具である銙尾は裏金を伴って出土した。『日本後紀』延暦15（796）年に銅銙帯が禁じられて以降，平安時代には，その代わりに白五帯等各種の帯や雑石腰帯が用いられるが，大同2（807）年から弘仁元（810）年に至る4年間は雑石腰帯のみが禁止され銅銙帯に復する。弘仁元（810）年には銅銙帯の代わりに雑石腰帯を使用することが確立した(31)。従って本遺跡出土の銙尾は下限を弘仁元（810）年とすることができる。銅銙はおよそ1寸5分を基準として位階の格差が存在することが知られており，『奈良国立文化財研究所学報第23冊』の銅銙帯の分類によれば，本遺跡出土のものは「少初位」の位階に比定することができる。(32)『正倉院文書』の中に吾川郡(33)の郡司で擬少領が無位(34)であるとの記録がある。本遺跡出土の銙尾の所有者は少領クラスの身分を持っていた可能性がある(35)。

二彩陶器は5点出土したが，いづれも正倉院御物の二彩陶器と胎土，施釉とも同じものであり(36)，当然のことながら官窯産のものと考えられる。又緑釉陶器は7点と少ないが，6点は9世紀中～後頃の洛北産(37)のものであり，1点は8世紀の三彩陶器系(38)のものである。

墨書土器及び刻書土器と共に円面硯，風字硯が出土し，8世紀代～9世紀代に比定できる。

本遺跡からは，コンテナ箱に8個の布目瓦が出土し，合わせてスサの混入した窯壁片が数点出土した。瓦は時期の幅があり，上限は白鳳期，下限は平安時代を考えることができる。瓦の中には窯壁片が附着したもの，全く磨耗していないもの，生焼けで紅く変色しているもの等が混入する。瓦はD，E，C－a～C－c区から出土したが大半はE区，C－b区，C－c区からであり，出土する範囲が限られているように思われる。これらのことから窯跡が所在する可能性が強く，しかも瓦窯跡と考えられる(39)。

2　遺　　構

本遺跡で検出した奈良時代～平安時代の遺構は，掘立柱建物2棟（E区－SB2，C－a区－SB3），柵列2列（E区－SA1，F区－SA3），土坑1基（F区－SK6），溝2条（B区－SD1，C－a区－SD7）である。遺構は，遺物，埋土から2時期に分けることができる。8世紀代のものはE区－SB2，SA1，F区－SA3，C－b区－SD7である。9世紀代～10世紀代のものはC－a区－SB3，F区－SK6，B区－SD1である。

SK6は出土遺物から10世紀代に比定できると考えられ，床面の円形に広がる炭化物等から何らかの工房址と考えられる。

遺構はトレンチ調査であり調査区が限られているため，本遺跡の性格を裏付けるものは検出できなかった。C－a区－SD7は二彩陶器と瓦等が共伴して出土したが，いわゆる溝の開始期を示すものと考えられ，その性格は不明である。

3 ま と め

本遺跡の出土遺物から，特に8世紀代に居住者が直接間接に中央官衙又は地方官衙に関係したと考えられ，本遺跡の周辺の香美郡衙推定地と考えられる土佐山田町大領遺跡，南国市土佐国府跡(40)，官衙跡と考えられる野市町曽我遺跡(41)，豪族の館を検出した香我美町十万遺跡(42)との関連が注目される。なお瓦窯に関連して，本遺跡出土の瓦が県内の他の遺跡での発見例がなく，古物部川を利用して製産した瓦を畿内方面に送っていたのではなかろうか。本遺跡から北東方向約1kmの河岸段丘上の亀山古窯跡の瓦が，平安京大極殿，法勝寺に使用された(43)ことは先述したところであるが，この地を含む周辺が中央と密接な関係を持った始まりは，本遺跡が営まれたころと考えてもよいのでなかろうか。C－b区－SD7からは二彩陶器と瓦等が共伴して出土しており，瓦窯の初源を8世紀代と考えることもできる。また瓦窯は東側の河岸段丘の下は旧河道であるなどの立地条件から登窯ではなく平窯の可能性も存在する。なお本遺跡は南北約4kmに及ぶ広い範囲をもつため，今後は研究上の便宜から瓦窯の所在すると考えられる範囲を特に小字を用いて「殿の内瓦窯跡」と呼称したい。

鉈尾や二彩陶器等の官衙関連遺物と瓦窯との関係等多くの問題点を投げかけた本遺跡であるが，詳しい性格については現時点では不明といわざるをえない。今後土佐国の官衙跡と瓦窯跡の動態と実態の比較の中で検討する必要があり今後の研究課題でもある。（高橋啓明）

註

(1) 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第20巻4　1974年

(2) 〃　「畿内第五様式における土器の変革」『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集　1982年

(3) 菅原康夫『黒谷川郡頭遺跡Ⅰ』徳島県教育委員会　1986年

(4) 〃『　〃　Ⅱ』　〃　1987年

(5) 佐原真「土器の用途と製作」『日本考古学を学ぶ(2)』　1979年

(6) 出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（山側進入灯設置区域）報告書』高知県教育委員会　1986年

(7) 高橋護「上東式土器の細分編年基準」『岡山県立博物館研究報告』第7号　1986年

(8) 〃「弥生土器」（山陽）考古学ジャーナル　1980年

(9) 出原恵三「南四国における弥生中期土器の展開」『遺跡』第31号　1988年

(10) 清原弘美「亀井遺跡出土第Ⅴ様式土器について」『亀井・城山』大阪文化財センター　1980年

(11) 広瀬和雄「弥生土器の編年と二，三の問題」『亀井（その2）』大阪文化財センター　1986年

(12) 井藤暁子「近畿第Ⅴ様式土器」『弥生土器Ⅰ』 1983年

(13) 岡本健児「南四国における叩目のある弥生土器と土師器」『森貞次郎博士古稀記念・古文化論集』下 1982年

(14) 岡本健児・広田典夫『高知県ひびのき遺跡』高知県土佐山田町教育委員会 1977年

(15) 完形品が少ないために正確な数値を求めることができない。各器種の点数は口縁部の破片点数である。

(16) (2)に同じ

(17) (13)に同じ

(18) (14)に同じ

(19) 森田尚宏『高知県土佐山田町林田遺跡』土佐山田町教育委員会 1985年

(20) 角谷和男『五軒屋敷遺跡調査報告書』高知県教育委員会 1984年

(21) 高橋啓明・出原恵三・吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』高知県香美郡香我美町教育委員会 1988年

(22) 酒井龍一「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕」『考古学研究』24巻2号 1977年

(23) (14)に同じ

(24) 酒井龍一「和泉における弥生式～土師式土器の移行過程について」『上町遺跡発掘調査概要』和泉市教育委員会 1975年

(25) 酒井龍一「和泉に於ける〈伝統的第Ⅴ様式〉に関する覚え書き―豊中遺跡出土遺物の整理をして―」『豊中・古池遺跡発掘調査概報』Ⅲ 1976年

(26) 笹川龍一『彼ノ宗遺跡』善通寺市文化財保護協会 1985年

(27) 出原恵三・廣田佳久・松田直則『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ 古津賀遺跡・具同中山遺跡群』高知県教育委員会 1988年

(28) 田辺昭三『須恵器大成』 1981年

(29) 鍬柄俊夫・江浦洋 他『太井遺跡その2―調査の概要―』大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1987年

(30) 木下修・宮田浩之・伊崎俊秋「甘木市所在塔ノ上遺跡の調査」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告―9―』 1987年

(31) 阿部義平「銙帯の官位制について」『東北考古学の諸問題』 1976年，斎藤忠編集『日本考古学論集』2 1986年所収

(32) 佐藤興治『平城宮発掘調査報告書Ⅵ』奈良国立文化財研究所学報23冊 1974年

(33) 『倭名類聚鈔』によれば，土佐国には，幡多郡，高岡郡，吾川郡，長岡郡，土佐郡，香美郡，安芸郡の7郡43郷があったことが記載されている。

(34) 石田茂作「正倉院御物の銘識に現はれた人々」『奈良時代文化雑攷』 1944年，秦勝國方の項に，南倉の大幡残欠に「土佐國吾川郡桑原郷郷戸主……調施……天平勝寶七歳十月……郡司擬少領

死位秦勝國方」とある。

(35) 大分県歴史資料館佐藤興治氏の御教示による。

(36) 京都市埋蔵文化財研究所平尾政幸氏の御教示による。

(37) (36)に同じ

(38) (36)に同じ

(39) 高知県文化財保護審議会会長岡本健児氏，東京大学遺跡調査室助教授寺島孝一氏の御教示による。

(40) 廣田佳久・森田尚宏　他『土佐国衙跡発掘調査報告書』第1～8集，高知県教育委員会，南国市教育委員会　1980～1987年

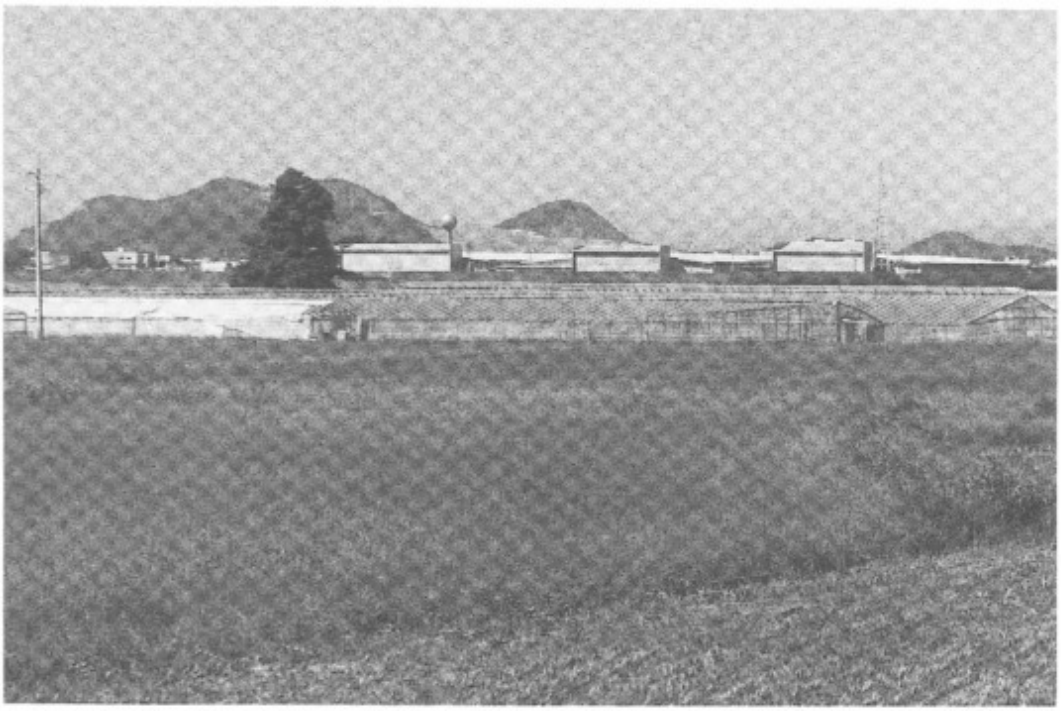
(41) 高橋啓明・吉原達生『曽我遺跡発掘調査報告書』高知県野市町教育委員会　1989年

(42) (21)に同じ

(43) 大石良材・朧谷寿・谷口俊治・鈴木忠司『平安宮推定大殿跡調査報告書』　1983年

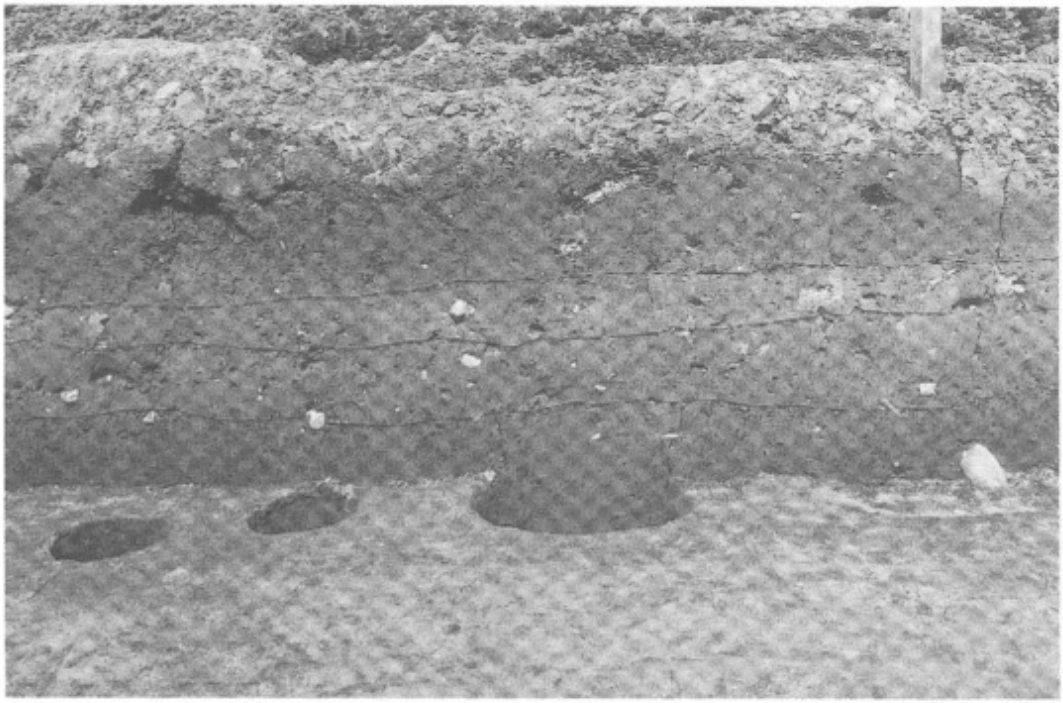
図　　版

調査前全景(南より)

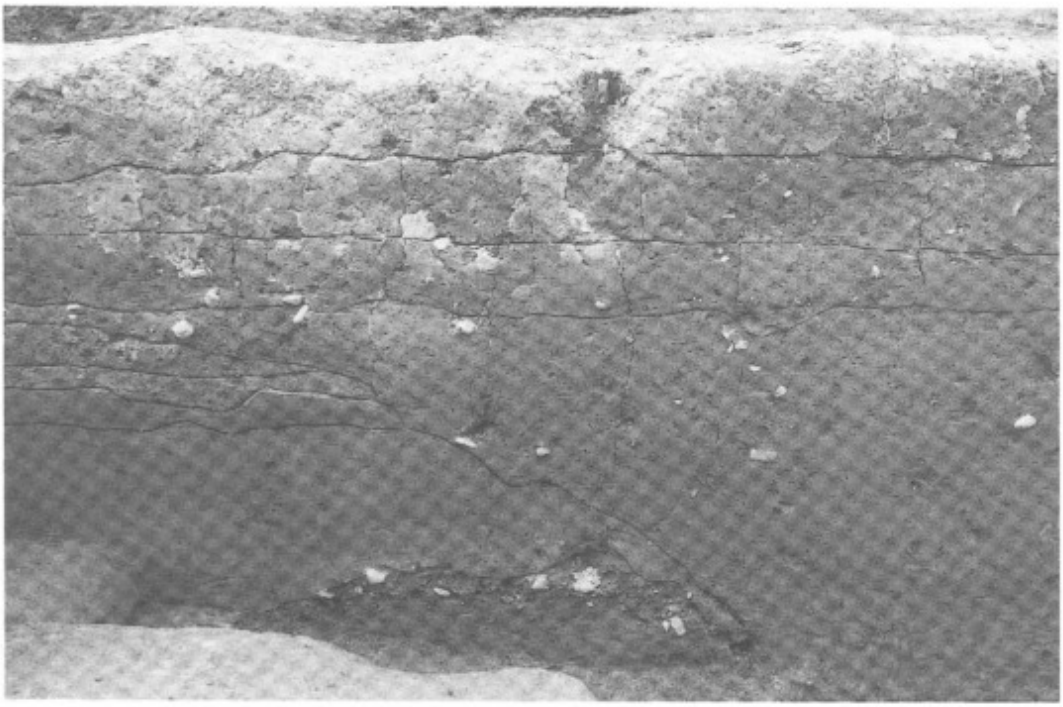


調査前全景(南西方向より)

PL 2

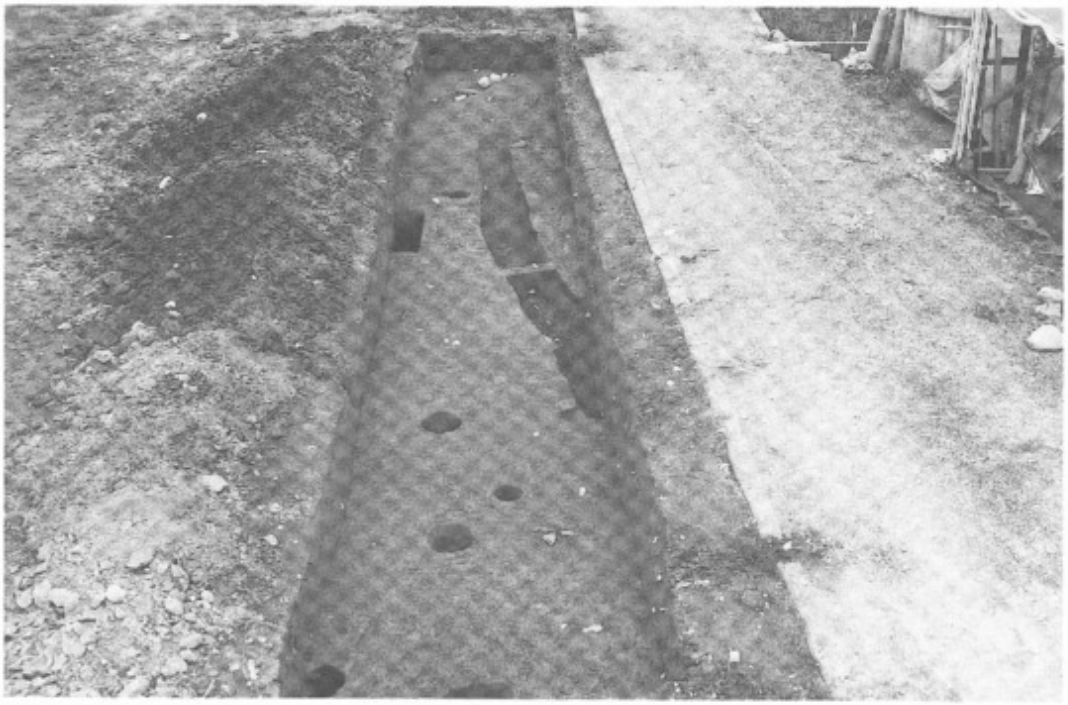


C－a区　東壁セクション



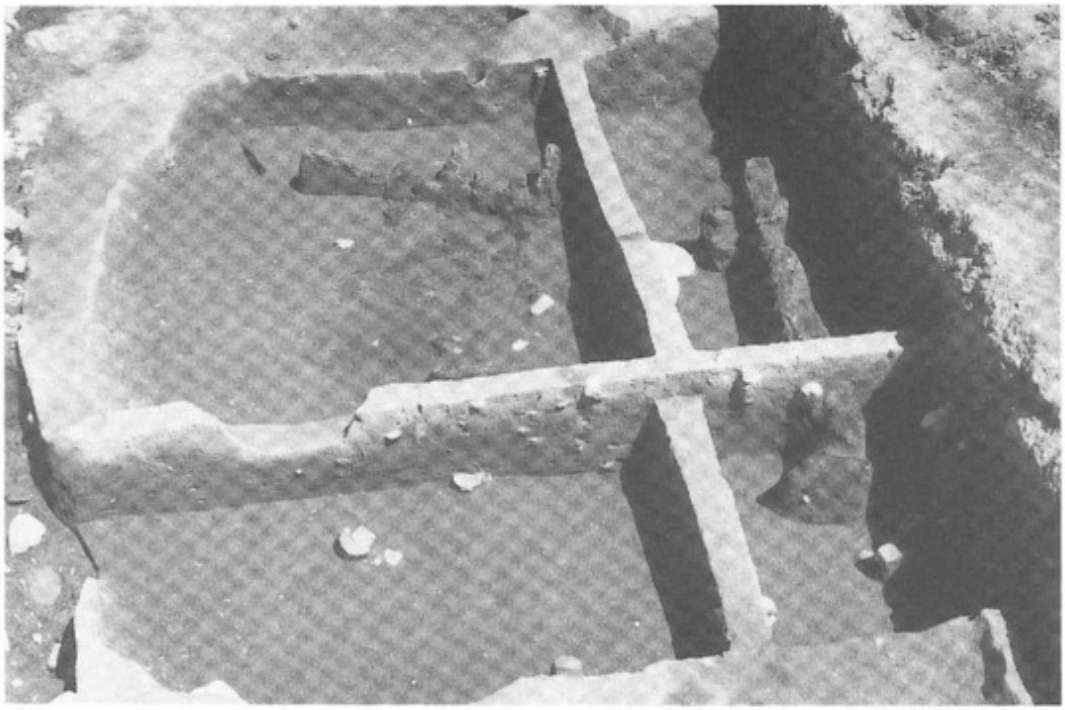
C－b区　北壁セクション

C－a区　遺構検出状態(南から)

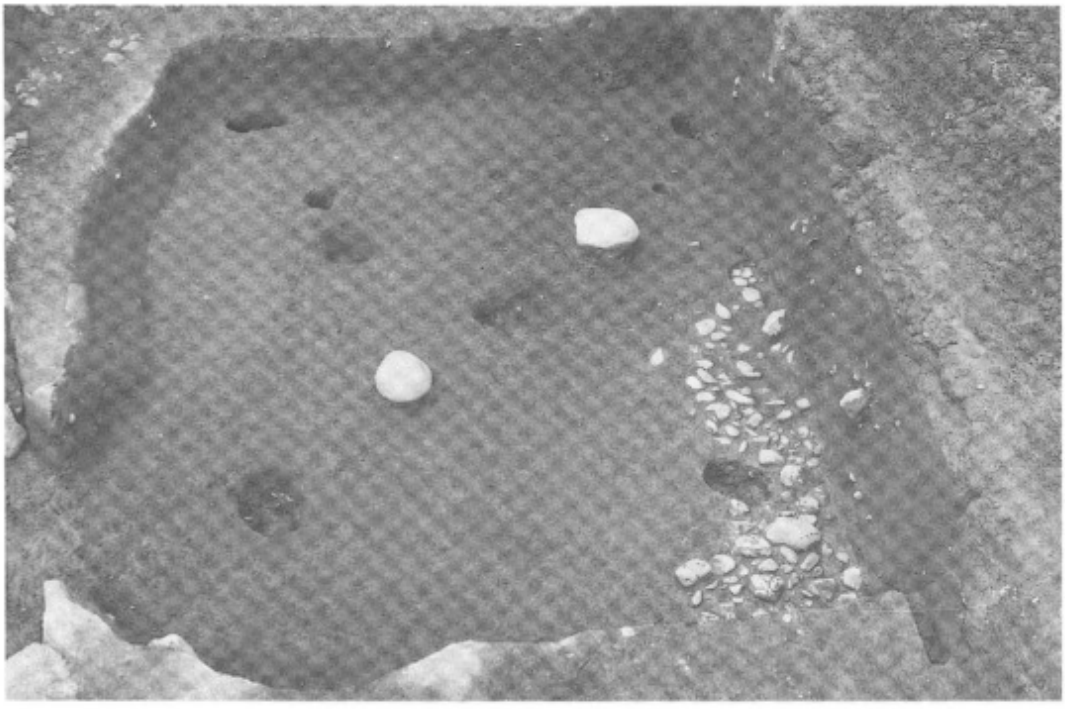


C－c区　完掘状態(西から)

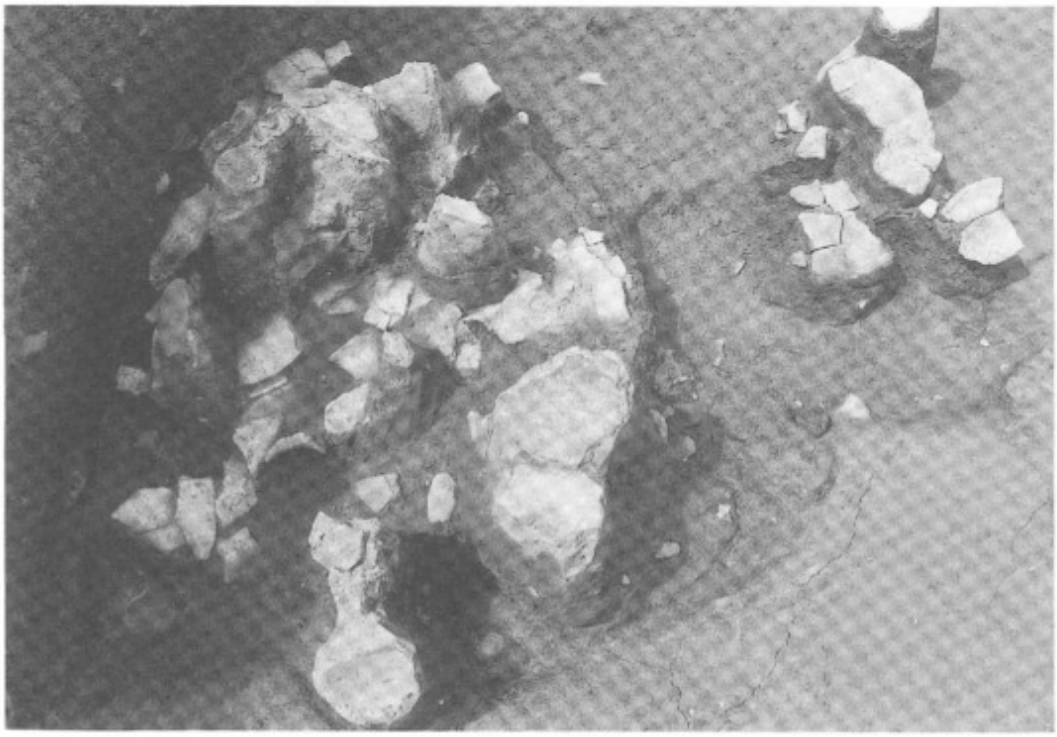
PL 4

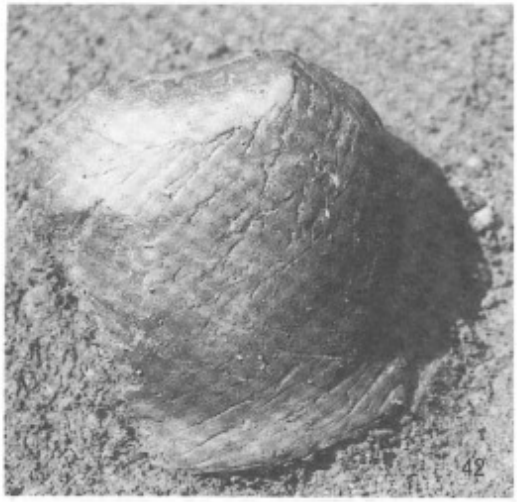


C－a区　ST 6　炭化物出土状態(南から)



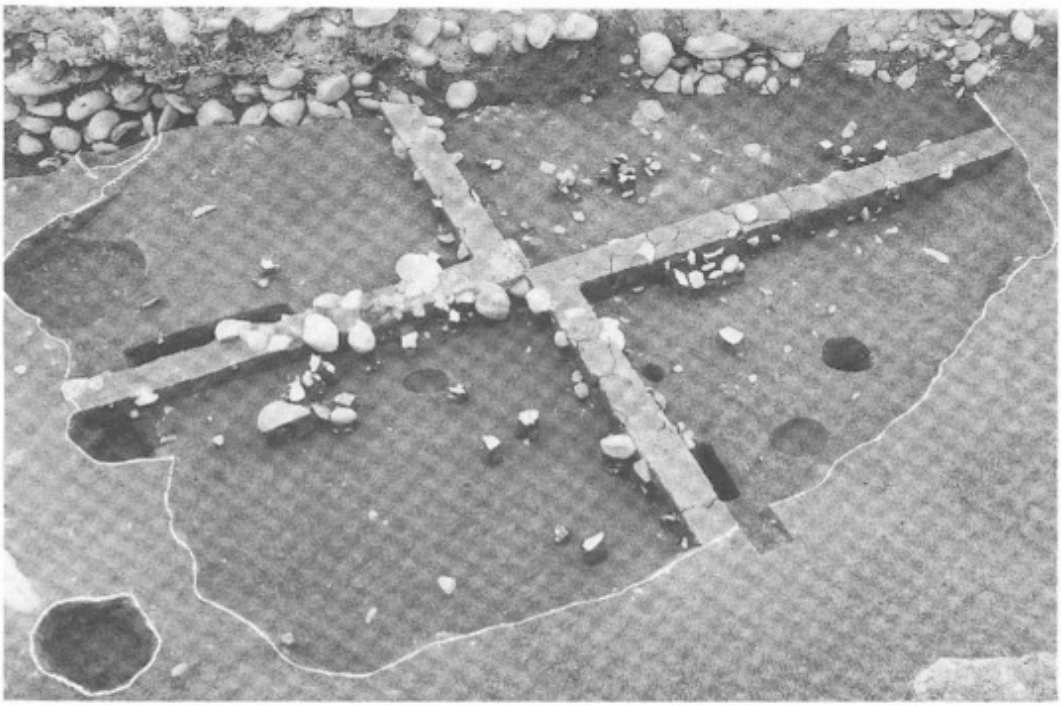
C－a区　ST 6　完掘状態(南から)



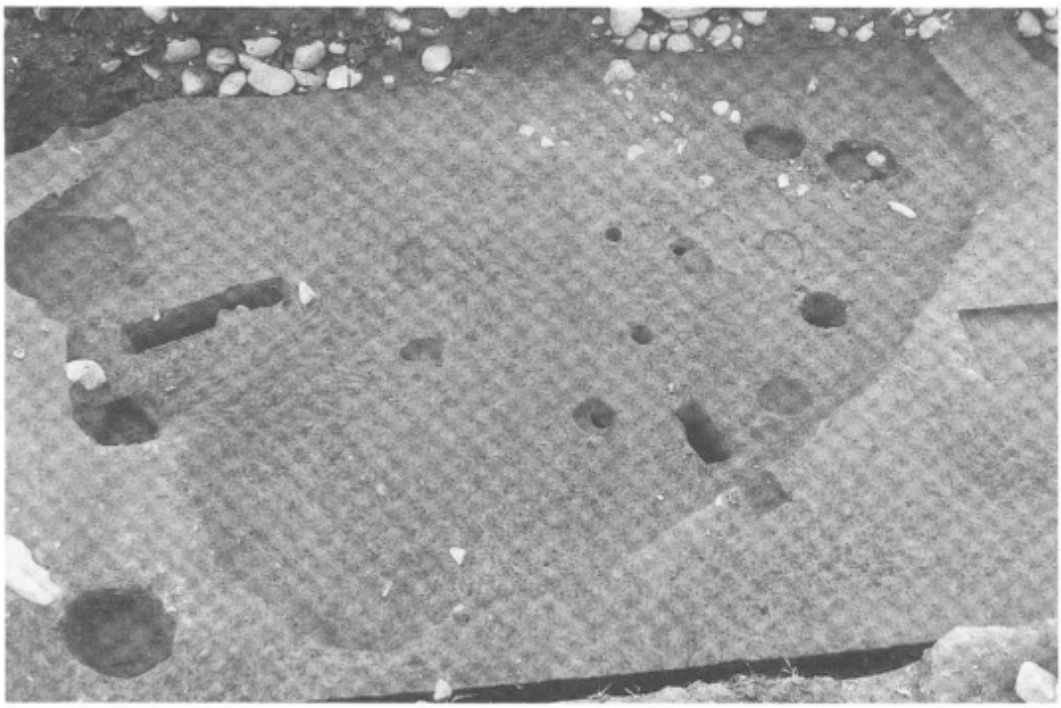


C－a区　ST 6　遺物出土状態

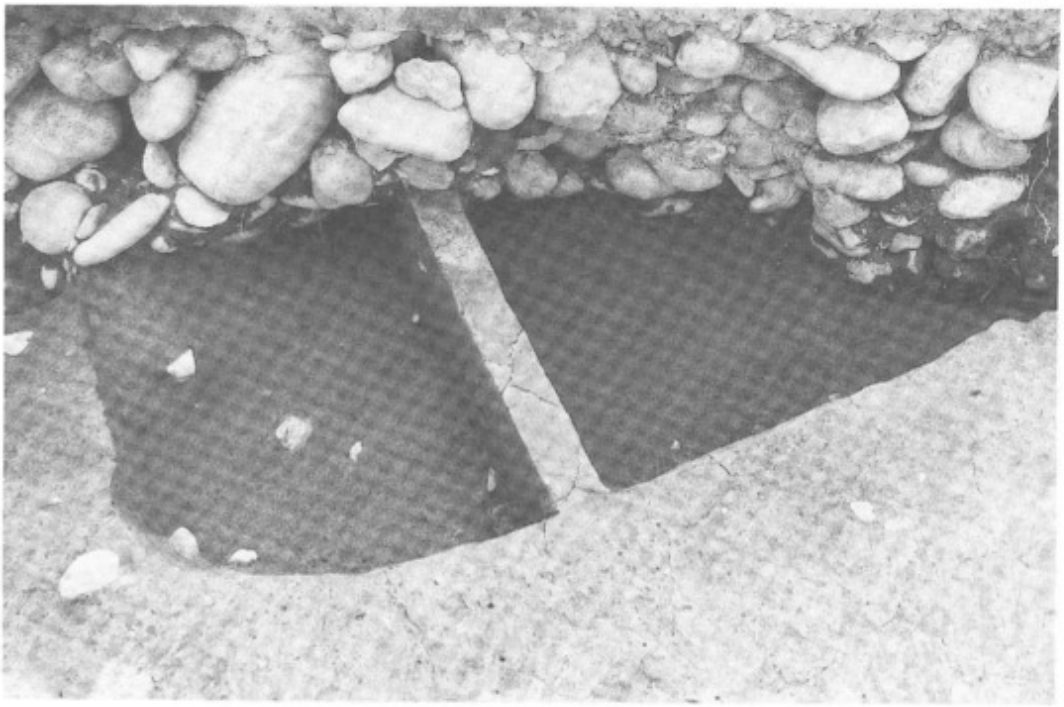
PL 6



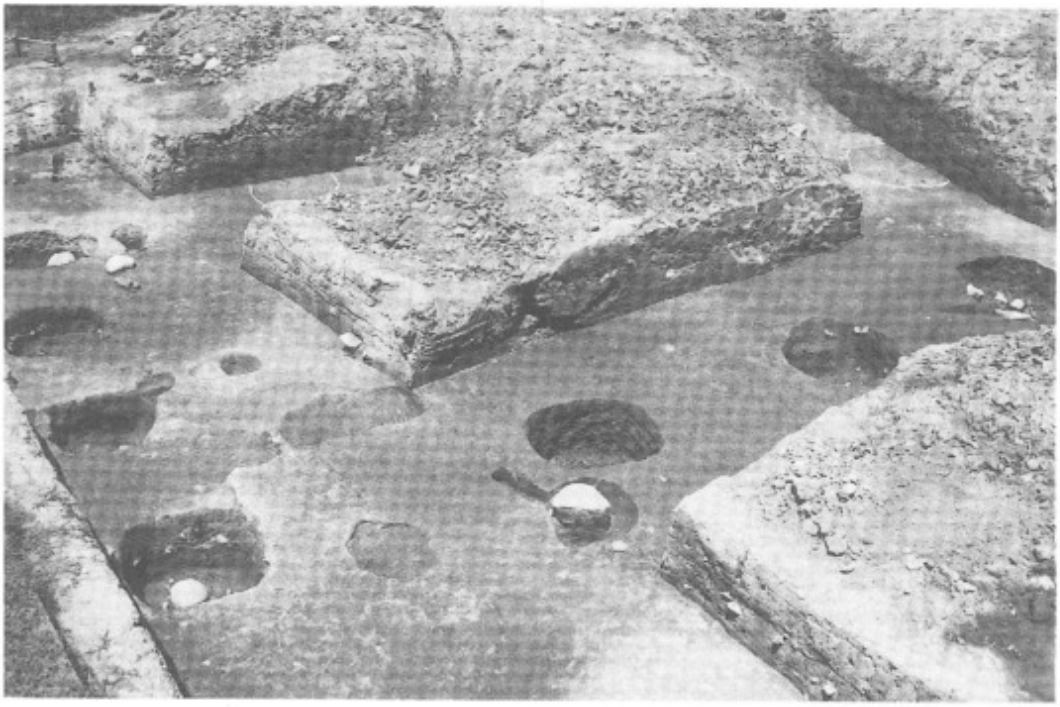
C－a区　ST 5　遺物出土状態(東から)



C－a区　ST 5　完掘状態(東から)

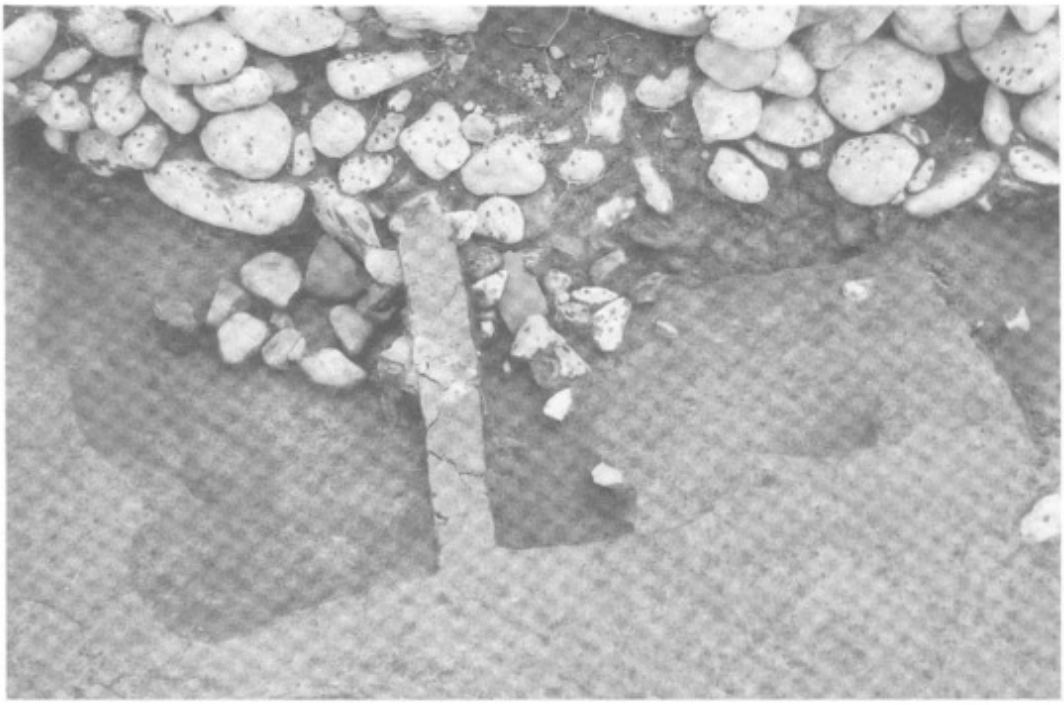


C－a区　SK 5　完掘状態(東から)

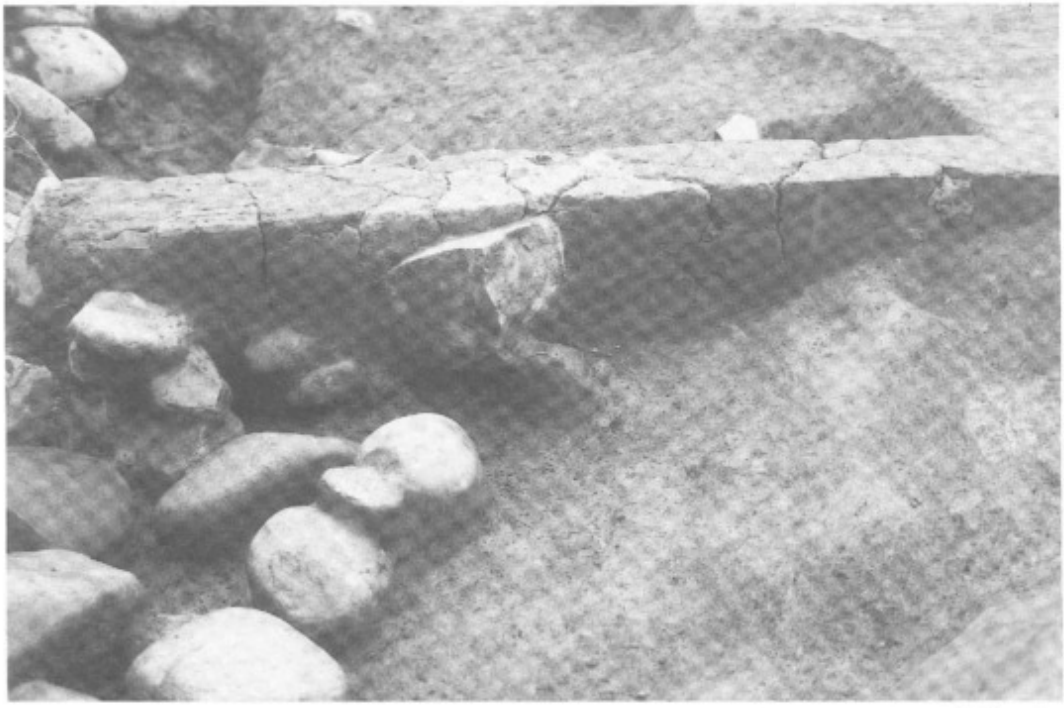


C－b区　SB 2　完掘状態(南東から)

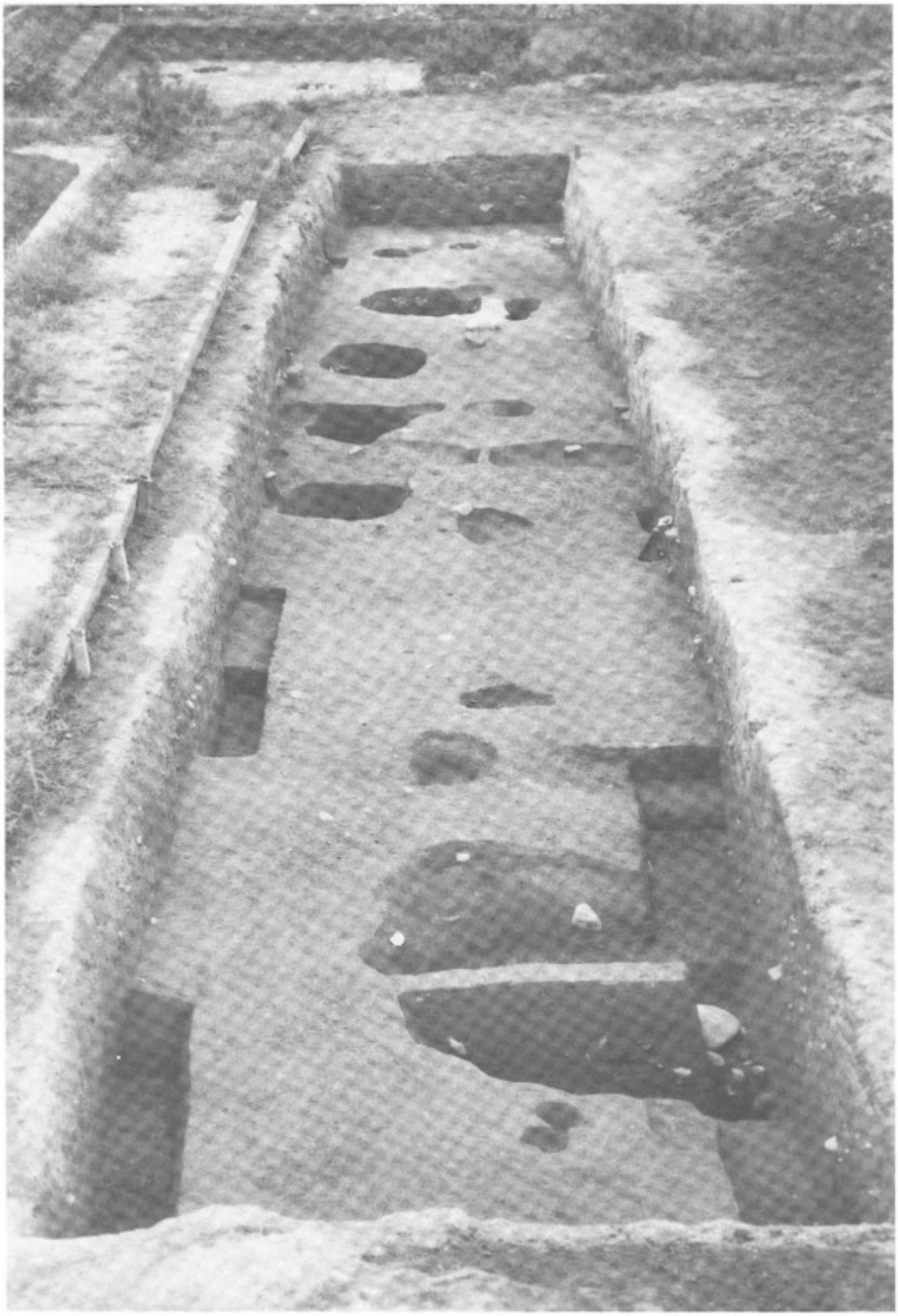
PL 8



C－a区　SK 4　完掘状態(東から)

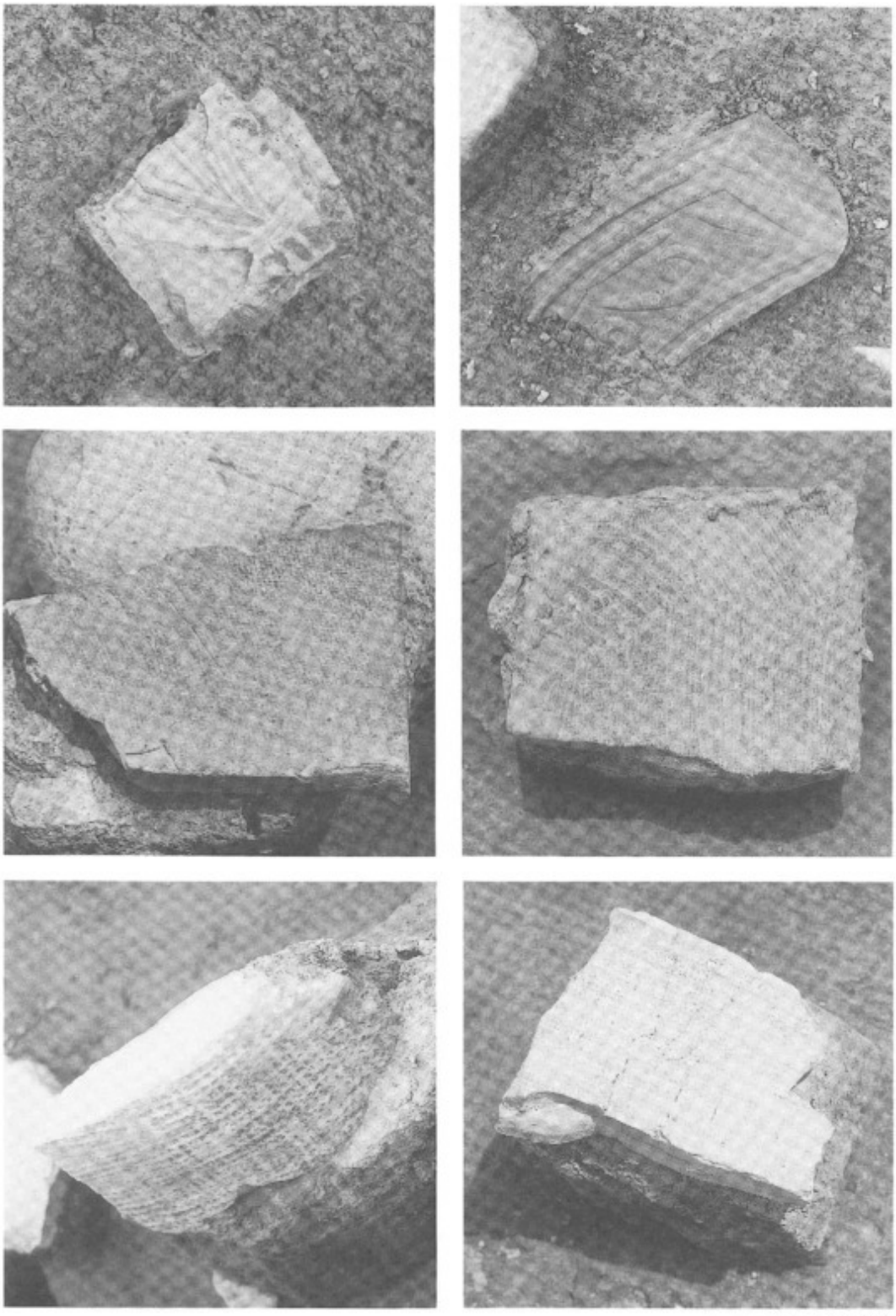


C－a区　SK 4　セクション

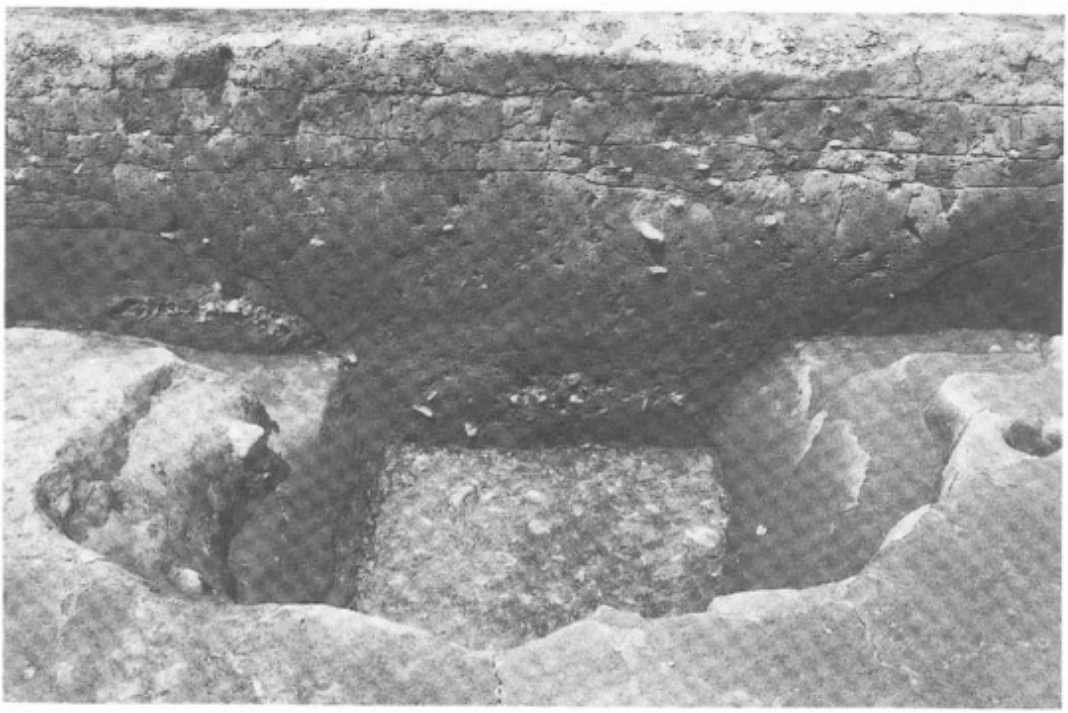


C－b区　完掘状態(東から)

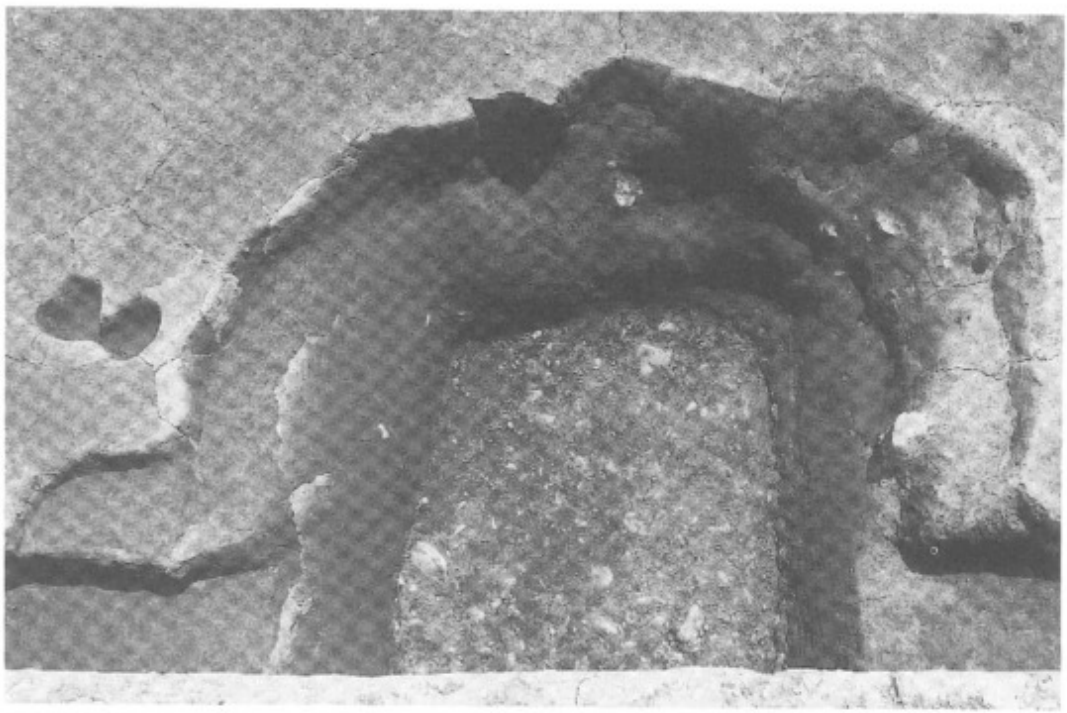
PL10



C－b区　瓦出土状態

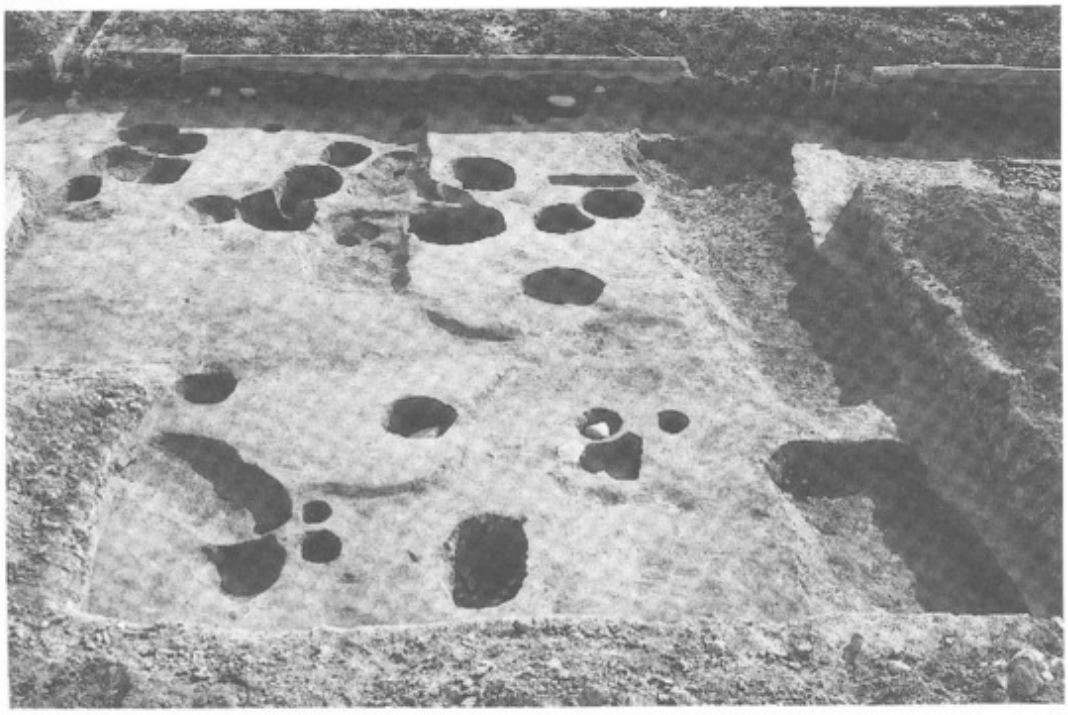


（南から）

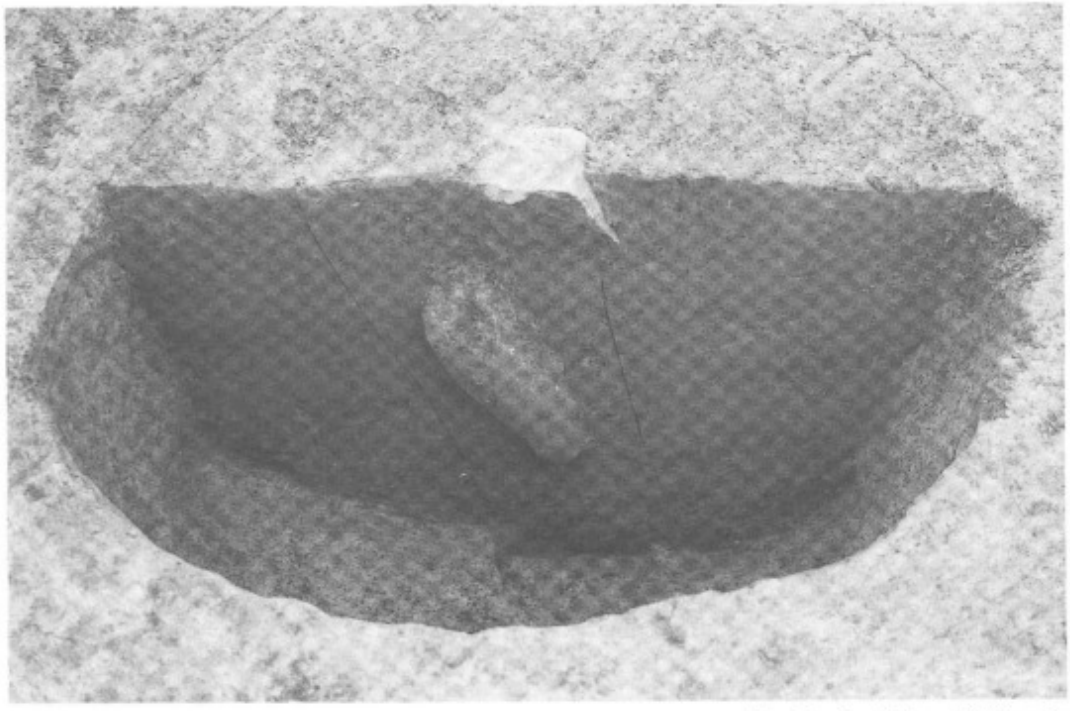


C－b区　SD 7　完掘状態

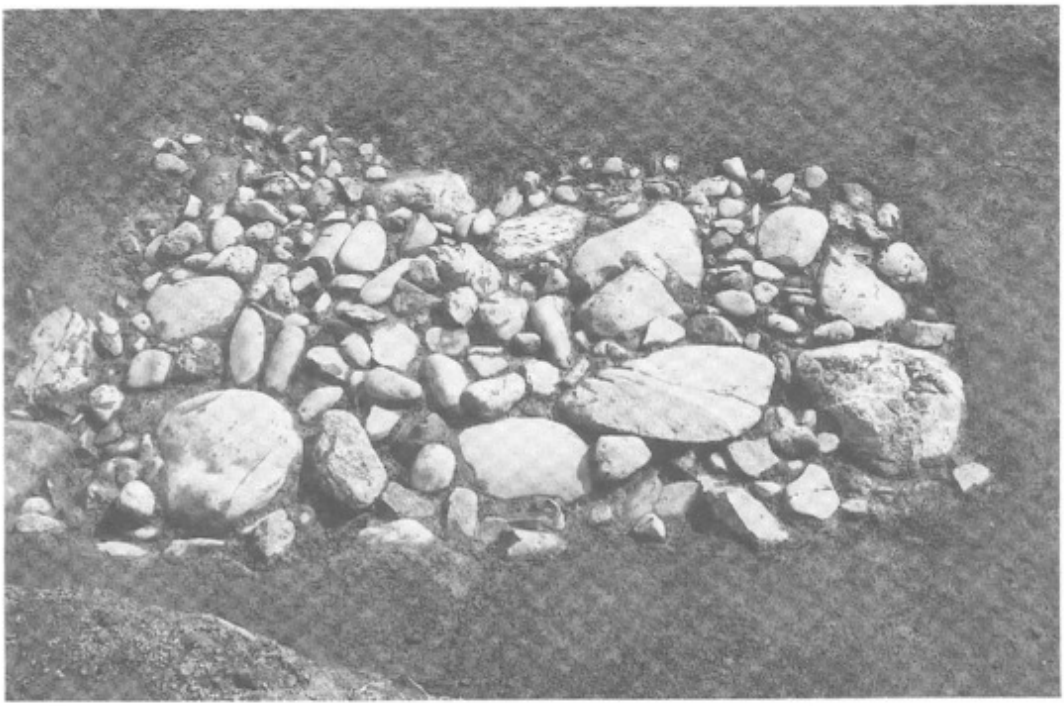
PL12



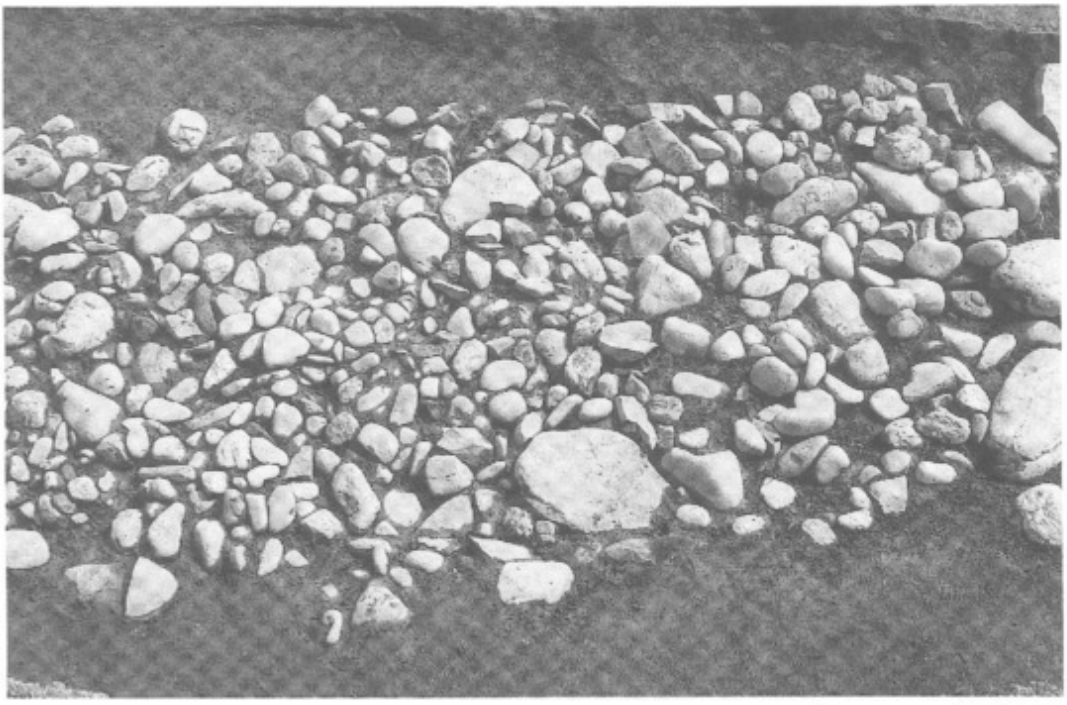
D区　拡張区完掘状態(北から)



D区　SB 1－P 5　セクション



D区　SK12　礫検出状態



D区　SK 9　礫検出状態